

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（33）

— 南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業報告書Ⅳ —

（伊集院ⅠC～市来ⅠC）

いま ざと  
**今 里 遺 跡**

（日置郡東市来町）

2002年9月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

# 序 文

この報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に先立って、平成9年度に実施した今里遺跡の埋蔵文化財発掘調査の記録です。

今里遺跡は、日置郡東市来町湯田の遠見番山麓の丘陵地帯に位置し、往時は参勤交代の道として賑わった旧街道が傍らを通り、また、近隣には向楯城跡や市ノ原遺跡があるなど、往古からの人々の活動が色濃く残るところです。

今回の調査では、旧石器時代・縄文時代・古墳時代の遺物が数多く発見されました。

なかでも、旧石器時代細石刃文化期の遺物は、南九州の後期旧石器文化終末期の移り変わりを知る上で注目されている資料です。

本書が、南九州の歴史研究及び文化財保護のために一役を担うことができれば幸いです。

終わりに、この発掘調査にご協力をいただいた関係各位の皆様をはじめ、発掘調査に参加された地元の皆様に心から感謝いたします。

平成14年9月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 井 上 明 文

## 報告書抄録

ふりがな	いまごと いせき							
書名	今里遺跡							
副書名	南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	IV							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第33集							
編著者名	橋口 勝嗣							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1 Tel.0995-48-5811							
発行年月日	西暦 2002年 9月							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ′ ″	° / ′ ″			
いまごと いせき 今里遺跡	かごしまけんひおきぐん 鹿児島県日置郡 ひがしいちきちょうおおあざいざくだ 東市来町大字伊作田 こあざいまごと 小字今里	46-302	29-75	31° 39′ 67″	130° 20′ 23″	確認調査 19961101 ～ 19961130 全面調査 19970421 ～ 19971204	14,000m <sup>2</sup>	南九州西 回り自動 車道鹿児 島道路建 設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
今里遺跡		旧石器時代		ナイフ形石器 剥片 細石刃 細石刃核等				
		縄文時代早期	V層 集石3基	前平式土器 押型文土器 石鏃 磨石 石斧 剥片 石核等				
		縄文時代前期		深浦式土器	Ⅲ層 集石1基 (詳細時期不明)			
		縄文時代中期		春日式土器				
		縄文時代後期		出水式土器				
		縄文時代晩期		上加世田式土器 黒川式土器				
		古墳時代		成川式土器				
		奈良時代以降		土師器 須恵器 青磁				



第1图 今里遺跡周辺地形図

## 例 言

1. 本報告書は、南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴う今里遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡は鹿児島県日置郡東市来町に所在し、県遺跡台帳の東市来町「29 - 75」に該当する。
3. 発掘調査は、建設省九州地方建設局（現 国土交通省九州地方整備局）鹿児島国道工事事務所からの受託事業として鹿児島県教育委員会が実施した。
4. 発掘調査は、平成9年4月21日から平成9年12月4日まで実施した。整理作業は平成11～13年度に実施した。
5. 本書の遺物番号は本文、挿図、図版すべて一致する。
6. 挿図の縮尺は図ごとに示している。
7. 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
8. 現地調査に関する実測および写真撮影は、調査担当者（湯之前尚・橋口勝嗣）で行った。  
本書の編集は橋口勝嗣が行った。本書の執筆は、旧石器時代ナイフ形石器・細石刃を牛ノ濱修が、細石刃核を中原一成・宮田栄二が担当し、その他は橋口が担当した。
9. 石器実測は一部を埋蔵文化財サポートシステム鹿児島支店・文化財環境整備研究所に委託し、残りを牛ノ濱修が行った。その他の実測・トレースは埋蔵文化財センター整理作業員が行い、橋口が監修した。
10. 遺物写真の撮影は、鶴田静彦・福永修一・横手浩二郎が行った。
11. 本書の編集は鹿児島県立埋蔵文化財センターで行い、橋口勝嗣が担当した。
12. 出土遺物は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用を行う。

# 本文目次

序文	
報告書抄録	
例言	
第I章 はじめに	
第1節 調査に至るまでの経過	2
第2節 確認調査の経過と概要	2
第II章 発掘調査	
第1節 調査に至るまでの経緯と経過	6
第2節 調査の組織	6
第3節 調査の経過	8
第III章 遺跡の位置および環境	
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	9
第3節 周辺の遺跡	9
第IV章 遺跡の層位	14
第V章 調査の概要	19
第1節 旧石器時代の調査	
1 調査の概要	20
2 遺物	
(1) ナイフ形石器文化期	23
(2) 細石刃	31
(3) 細石刃核	49
第2節 縄文時代の調査	
1 調査の概要	67
2 遺構	72
3 遺物	
(1) 土器	76
(2) 石器	88
第3節 弥生時代～古墳時代の調査	
1 調査の概要	107
2 遺物	107
第4節 古代～近世の調査	
1 調査の概要	120
2 遺物	120
第VI章 まとめ	124

## 表 目 次

第 1 表	南九州西回り自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表	5
第 2 表	周辺遺跡地名表	13
第 3 表	尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・スクレイパー観察表	30
第 4 表	細石刃観察表 (1)	42
第 5 表	細石刃観察表 (2)	43
第 6 表	細石刃観察表 (3)	44
第 7 表	細石刃観察表 (4)	45
第 8 表	細石刃観察表 (5)	46
第 9 表	細石刃観察表 (6)	47
第 10 表	細石刃観察表 (7)	48
第 11 表	細石刃核観察表 (1)	65
第 12 表	細石刃核観察表 (2)	66
第 13 表	縄文土器観察表 (1)	86
第 14 表	縄文土器観察表 (2)	87
第 15 表	石鏃観察表 (1)	94
第 16 表	石鏃観察表 (2)	95
第 17 表	石斧・石匙・磨石・敲石観察表	106
第 18 表	古墳時代の土器観察表 (1)	118
第 19 表	古墳時代の土器観察表 (2)	119
第 20 表	古代～近世の遺物観察表	123

## 挿 図 目 次

第 1 図	今里遺跡周辺地形図	
第 2 図	南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院 IC～市来 IC 間）遺跡位置図	1
第 3 図	今里遺跡位置図	11
第 4 図	今里遺跡周辺遺跡分布図	12
第 5 図	土層模式図	14
第 6 図	第 0 地点 土層断面図	15
第 7 図	第 1 地点 土層断面図	16
第 8 図	第 2 地点 土層断面図	17
第 9 図	第 3 地点 土層断面図	18
第 10 図	平成 8 年度確認調査トレンチ配置図	19
第 11 図	平成 9 年度トレンチ配置図	20
第 12 図	調査範囲グリッド図	21
第 13 図	第 0 地点 VII 層地形図	22
第 14 図	第 1 地点 VII 層地形図	22
第 15 図	旧石器時代遺物出土状況①（尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・スクレイパー）	25
第 16 図	旧石器時代遺物出土状況②（VI・VII 層石器石材別）	26
第 17 図	尖頭器（1）	27
第 18 図	尖頭器・ナイフ形石器（2）	28
第 19 図	台形石器・スクレイパー（3）	29
第 20 図	スクレイパー（4）	30
第 21 図	旧石器時代遺物出土状況③（細石刃）	32
第 22 図	細石刃（1）	33
第 23 図	細石刃（2）	34
第 24 図	細石刃（3）	35
第 25 図	細石刃（4）	36
第 26 図	細石刃（5）	37
第 27 図	細石刃（6）	38
第 28 図	細石刃（7）	39
第 29 図	細石刃（8）	39
第 30 図	細石刃（9）	40
第 31 図	調整剥片	41
第 32 図	旧石器時代遺物出土状況④（細石刃核）	54
第 33 図	細石刃核分類模式図	55
第 34 図	細石刃核（1）	56
第 35 図	細石刃核（2）	57

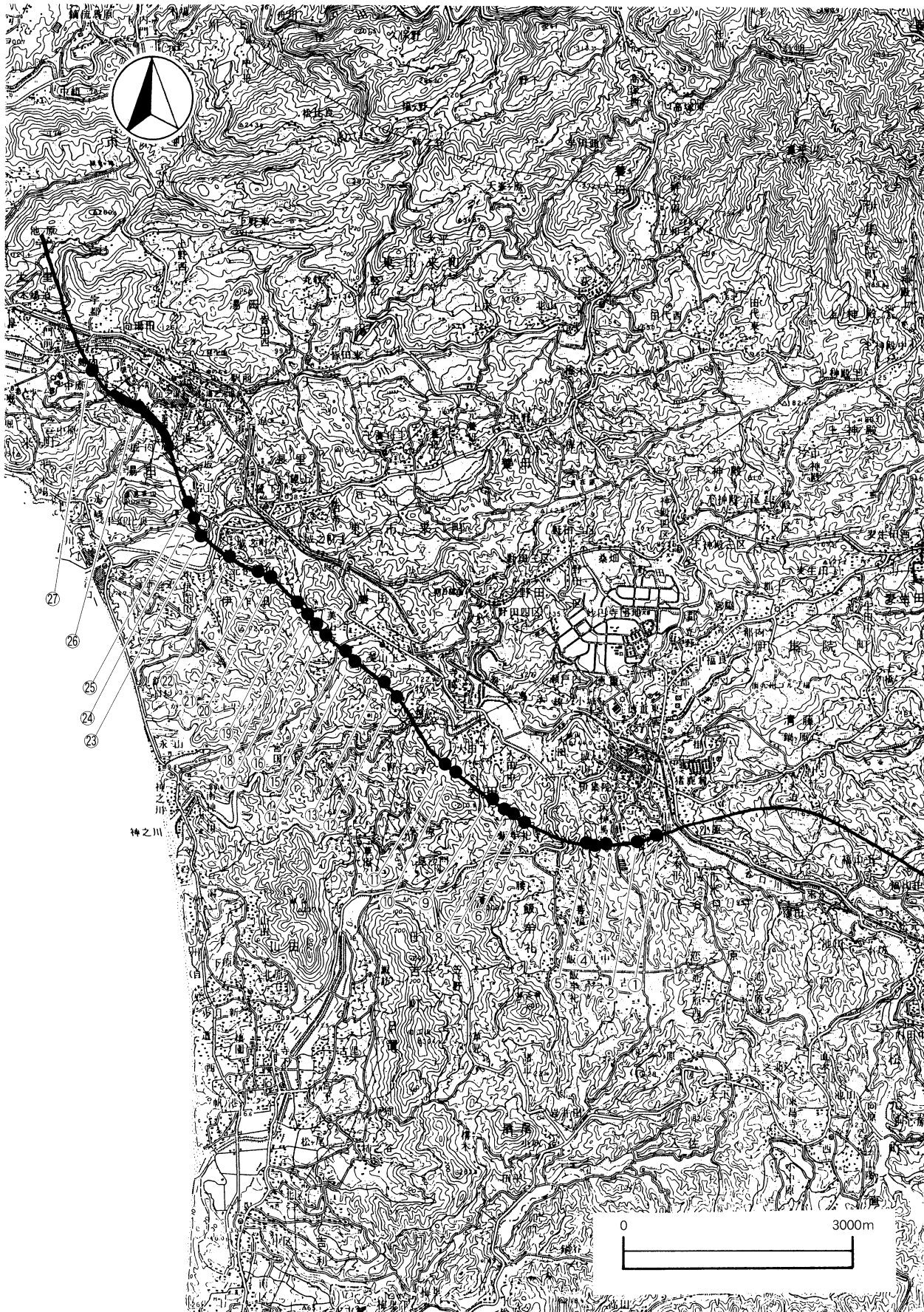


第 36 図	細石刃核 (3)	58
第 37 図	細石刃核 (4)	59
第 38 図	細石刃核 (5)	60
第 39 図	細石刃核 (6)	61
第 40 図	細石刃核 (7)	62
第 41 図	細石刃核 (8)	63
第 42 図	細石刃核・削片・石核 (9)	64
第 43 図	調査範囲内 表土直下シラス露出範囲	67
第 44 図	第 0 地点 III層地形図	67
第 45 図	第 1 地点 IV層地形図	68
第 46 図	第 2 地点 III層地形図	69
第 47 図	第 2 地点 III層地形図	70
第 48 図	第 3 地点 III層地形図	71
第 49 図	1号集石検出状況	72
第 50 図	2号集石検出状況	73
第 51 図	3号集石検出状況	74
第 52 図	4号集石検出状況	75
第 53 図	縄文晩期土器赤色顔料 1500 倍拡大写真	79
第 54 図	縄文時代土器出土状況	80・81
第 55 図	縄文土器 (1)	82
第 56 図	縄文土器 (2)	83
第 57 図	縄文土器 (3)	84
第 58 図	縄文土器 (4)	85
第 59 図	縄文時代の石器 (1)	88
第 60 図	縄文時代の石器 (2)	89
第 61 図	縄文時代の石器 (3)	91
第 62 図	縄文時代の石器 (4)	92
第 63 図	縄文時代の石器出土状況① (石鏃)	93
第 64 図	縄文時代の石器出土状況② (石斧・石匙・磨石・敲石)	98
第 65 図	縄文時代の石器 (5)	99
第 66 図	縄文時代の石器 (6)	100
第 67 図	縄文時代の石器 (7)	101
第 68 図	縄文時代の石器 (8)	102
第 69 図	縄文時代の石器 (9)	103
第 70 図	縄文時代の石器 (10)	104
第 71 図	縄文時代の石器 (11)	105
第 72 図	古墳時代の土器出土状況①	111

第 73 図	古墳時代の土器出土状況②	112・113
第 74 図	古墳時代の土器 (1)	114
第 75 図	古墳時代の土器 (2)	115
第 76 図	古墳時代の土器 (3)	116
第 77 図	古墳時代の土器 (4)	117
第 78 図	古墳時代の土器 (5)	118
第 79 図	古代～近世の遺物	122

## 図 版 目 次

図版 1	遺跡遠景・第 0 地点全景・第 1 地点全景	127
図版 2	土層断面	128
図版 3	1 号集石検出状況・2 号集石検出状況・3 号集石検出状況	129
図版 4	4 号集石検出状況・尖頭器出土状況・岩本式土器出土状況	130
図版 5	石鏃出土状況・成川式土器出土状況・第 0 地点発掘作業状況	131
図版 6	第 1 地点発掘作業状況・第 0 地点トータルステーションシステムによる遺物出土状況実測・第 0 地点旧石器時代遺物出土状況	132
図版 7	第 0 地点縄文時代遺物出土状況・第 1 地点旧石器時代遺物出土状況・第 1 地点縄文時代遺物出土状況	133
図版 8	第 2 地点縄文時代遺物出土状況・第 3 地点 II 層遺物出土状況・第 3 地点シラス露出状況	134
図版 9	旧石器時代の石器(尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・スクレイパー)	135
図版 10	細石刃核 (1)	136
図版 11	細石刃核 (2)	137
図版 12	縄文時代早期の土器 (1)	138
図版 13	縄文時代早期の土器 (2)	139
図版 14	縄文時代中期・後期の土器	140
図版 15	縄文時代晩期の土器	141
図版 16	縄文時代の石鏃	142
図版 17	縄文時代の石器(石斧・スクレイパー・石匙)	143
図版 18	縄文時代の石器(磨石・敲石・凹石・石皿)	144
図版 19	古墳時代の土器 (1)	145
図版 20	古墳時代の土器 (2)	146



第2図 南九州西回り自動車道鹿児島道路（伊集院IC～市来IC間）遺跡位置図

# 第 I 章 はじめに

## 第1節 調査に至るまでの経過(鹿児島道路伊集院IC～市来IC間)

建設省九州地方建設局(省庁再編により平成13年1月より国土交通省九州地方整備局に改称)は、鹿児島～市来間に南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設を計画し、事業区内の埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化課(組織改革により平成8年度より文化財課に改称)に照会した。この計画に従い、鹿児島県立埋蔵文化財センターが平成3年6月に伊集院IC～市来IC間の埋蔵文化財の分布調査を実施したところ、当該事業区間内に27か所の遺物散布地および確認調査の必要な地点が存在することが判明した。

事業区間内の埋蔵文化財の取り扱いについては、建設省鹿児島国道工事事務所と文化課(当時)との協議に基づき、鹿児島国道工事事務所と鹿児島県知事の間で委託契約が結ばれ、埋蔵文化財の確認調査・緊急発掘調査が実施されることになった。

これを受け、平成8年から平成12年にかけて各遺跡の確認調査および緊急発掘調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることになった。発掘調査は鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

なお、事業区間内の確認調査の経過と概要については、以下のとおりである。

## 第2節 確認調査の経過と概要

- 1 一ノ谷 鹿児島道路実施計画図のセンターライン STA535 と STA540 を結ぶ線を基準に、 $1.5 \times 1.5\text{m}$ 、 $3 \times 6\text{m}$ 、 $3 \times 40\text{m}$  のトレンチを各1か所ずつ設定して確認調査を実施した。その結果、近世から近代にかけての掘立柱建物跡などの遺構や遺物が検出された。調査面積は $1,250\text{m}^2$ 、標高は約90～95mである。
- 2 永迫平 SAT510 と STA520 を結ぶ線を基準に、台地上に $2 \times 3\text{m}$ のトレンチ16か所を設定して確認調査を実施した。その結果、旧石器時代ナイフ形石器文化期、縄文時代早期・後期・晩期、平安時代、中世、近世の遺物が出土した。調査面積は約 $14,000\text{m}^2$ 、標高は約150mである。
- 3 下永迫B 両側を谷に挟まれた舌状の台地に位置し、標高は約120～130mである。 $1 \times 10\text{m}$ のトレンチを1か所設定して確認調査を実施した。その結果、表層下はシラス層が露出し、遺物包含層は残存せず、遺物も検出されなかった。
- 4 下永迫A 2つのやせ尾根に挟まれた谷地に位置し、標高は約85～110mである。SAT495 と STA500 を結ぶ線を基準に $37 \times 2\text{m}$ のトレンチを1か所、 $2 \times 1\text{m}$ のトレンチを1か所設定して確認調査を実施結果、古代から中世にかけての遺物が出土し溝状遺構・焼土域等が検出された。調査面積は $2,000\text{m}^2$ である。
- 5 柳原 棚田状の傾斜地に位置し、標高は約90～110mである。地形等を考慮して $19 \times 2\text{m}$ のトレンチを1か所、 $13 \times 2\text{m}$ のトレンチを1か所、 $7 \times 2\text{m}$ のトレンチを2か所、 $1 \times 1\text{m}$ のトレンチを6か所設定して確認調査を実施し結果、古代から中世にかけての遺物が出土した。調査面積は $6,000\text{m}^2$ である。
- 6 道祖瀬戸 標高約110～115mの台地端の傾斜面に位置する。地形等を考慮して $1 \times 2\text{m}$ の

- トレンチを2か所，1×1mのトレンチを1か所設定して確認調査を実施した結果，表層下はシラスであり，遺物包含層は残存せず，遺構も検出されなかった。
- 7 狩待迫 台地から谷に向かう標高約110～115mの迫状の地形に位置する。地形等を考慮して1×1mのトレンチを2か所，1×2mのトレンチを3か所設定して確認調査を実施した。その結果，表層下はシラスであり，遺物包含層は残存せず，遺構も検出されなかった。
  - 8 上山路山 標高約125～133mの台地端の緩傾斜地に位置する。2×3mを基本とするトレンチを9か所設定して確認調査を実施した。その結果，旧石器時代細石刃文化期・縄文時代早期・後期，弥生時代中期の遺物が出土した。調査面積は6,000㎡である。
  - 9 木場田 標高約95～105mのやせ尾根状の台地先端部に位置する。確認調査の結果，表層下はシラスであり，遺物包含層は残存せず，遺構も検出されなかった。
  - 10 敷田尾 台地から西側へ延びる標高約80～110mの緩傾斜面に位置する。2×3mのトレンチを13か所設定して確認調査を実施した。その結果，遺物包含層は残存していなかったが，大正年間まで利用されていたと思われる古道が検出された。
  - 11 大田城 標高約120mの台地上に位置する。地形などを考慮して2×3mを基本とするトレンチを7か所設定して確認調査を実施した。その結果，中世の山城跡に関連する遺構や遺物は検出されなかったが，下層から縄文時代早期と旧石器時代細石刃文化期等の遺物が出土した。調査面積は4,000㎡である。
  - 12 堂ノ上 詳細分布および試掘調査の結果，表層下はシラスであり，遺物包含層は残存しておらず，遺構も検出されなかった。
  - 13 栢ヶ丸 詳細分布および試掘調査の結果，表層下はシラスであり，遺物包含層は残存しておらず，遺構も検出されなかった。
  - 14 小谷口 標高約50～80mの播鉢状の谷地形に位置する。堂平窯跡に隣接することから，新たな窯の存在が予想されたが，詳細分布および試掘調査の結果，遺物包含層は残存せず，遺構も検出されなかった。
  - 15 堂平窯 標高約70～90mの台地端の傾斜面に位置する。2×1mのトレンチを1か所，1×1mのトレンチを1か所設定して確認調査を実施した。その結果，物原と思われる陶器類の堆積層が確認され，窯の存在が明らかとなった。調査面積は3,500㎡である。
  - 16 池之頭 尾根状の台地および隣接する平坦部からなり，標高は約80～100mである。2×4mのトレンチを3か所，2×2mのトレンチを1か所設定して確認調査を実施した。その結果，古墳時代の遺物が出土した。調査面積は約7,500㎡である。
  - 17 雪山 STA245とSTA250を結ぶ線を基準に，2×10mのトレンチを1か所，2×16mのトレンチを1か所設定して確認調査を実施した。その結果，旧石器時代・縄文時代早期・中期・後期の遺物と近世から古代にかけてのものと思われる遺構や遺物が発見された。標高は約95m，調査面積は2,700㎡である。

- 18 猿 引 標高約 110～115 mの馬の背状の尾根に位置する。地形等を考慮して 2.4 × 24 m・2.4 × 18 m・2.4 × 11 m・1.5 × 11 mのトレンチを 1 か所ずつ設定して確認調査を実施した。その結果、旧石器時代ナイフ形石器文化期の礫群や遺物、同細石刃文化期の遺物等が出土した。調査面積は 800 m<sup>2</sup>である。
- 19 前山ノ口 山地から北側へ延びる標高約 60～80 mの傾斜面に位置する。地形等を考慮し、2 × 3 mのトレンチを 3 か所設定して確認調査を実施したが、表層下はシラスであり、遺物包含層は残存せず、遺構も検出されなかった。
- 20 日ノ出落シ 標高約 60～70 mの舌状台地の先端部に位置する。地形等を考慮し、2 × 3 mのトレンチを 4 か所、2 × 2 mのトレンチを 1 か所設定して確認調査を実施したが遺物包含層は削平されており、遺構も検出されなかった。
- 21 犬ヶ原 標高約 66 mの独立丘陵に位置する。谷部に 2 × 3 mのトレンチを 3 か所、台地上に 1 × 1 mのトレンチを 2 か所、2 × 3 mのトレンチを 3 か所設定して確認調査を実施した。その結果、古代から中世にかけての遺物が出土した。調査面積は 2,000 m<sup>2</sup>である。
- 22 赤 平 台地から南へ延びるやせ尾根に位置し、標高は約 50 mである。2 × 10 mのトレンチを 2 か所、1 × 3 mのトレンチを 1 か所設定して確認調査を実施した。その結果、遺物包含層は削平されていたが、シラス上面でピット 22 基を検出した。調査面積は、250 m<sup>2</sup>である。
- 23 向柵城 標高約 50 mの独立台地上に位置する。2 × 5 mのトレンチを 4 か所、2 × 10 mのトレンチを 1 か所、2 × 30 mのトレンチを 2 か所設定して確認調査を実施した結果、縄文時代早期・後期・平安時代・中世等の遺物や建物跡、溝状遺構、鍛冶炉等が検出された。調査面積は 4,000 m<sup>2</sup>である。
- 24 堂園平 舌状台地の平坦部に位置し、標高は約 53 mである。2 × 5 mのトレンチを 6 か所設定し、確認調査を実施した。その結果、旧石器時代、縄文時代早期・前期・後期、平安時代、中世の遺物が出土した。調査面積は 2,000 m<sup>2</sup>である。
- 25 今 里 標高約 65 mの台地端の傾斜地に位置する。地形等を考慮して 2 × 5 mのトレンチを 11 か所、2 × 4 mのトレンチを 1 か所設定して確認調査を実施した。その結果、縄文時代早期・晩期、古墳時代などの遺物が出土した。調査面積は 14,000 m<sup>2</sup> である。
- 26 市ノ原 標高約 40～65 mの台地西側に位置する。遺跡範囲が広く、長距離に及ぶため、2 × 4 mのトレンチを 64 か所設定して確認調査を実施した。その結果、旧石器時代、縄文時代早期・前期・中期、弥生時代、古墳時代、平安時代、中世、近世など各時代の遺物が多量に出土した。調査面積は 62,000 m<sup>2</sup> である。
- 27 上ノ原 標高約 40 mの台地上の平坦面に位置する。地形などを考慮して、2 × 4 mのトレンチを 4 か所設定して確認調査を実施した。その結果、縄文時代早期、古墳時代、古代、中世の遺物が出土した。調査面積は 2,000 m<sup>2</sup> である。

第1表 南九州西回り自動車道路（伊集院IC～市来IC間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	時代	概要	備考
1	一ノ谷	伊集院町下谷口	確認 全面 H 8. 10 H 8. 10～11	1,250㎡	中世 近世	掘立柱建物跡・土坑・陶磁器類 (本平遺跡から改称)	センター報告書 (31)
2	永迫平	伊集院町下谷口	確認 全面 H 8. 10～12 H 8. 12～H 9. 3 H 9. 4～H 10. 3 H 10. 5～7	14,000㎡	旧石器時代ナイフ形石器文化期 旧石器時代細石器文化期 縄文時代早期・後期・晩期 古代～近世	礫群・剥片尖頭器・ナイフ形石器・台形石器 細石刃 竪穴住居跡・集石・連穴土坑・土坑・前平 ・土師器・青磁土坑・集石・土師器・ 須恵器・青磁・白磁	
3	下永迫B	伊集院町下谷口	確認 全面 H 9. 10	10㎡			
4	下永迫A	伊集院町下谷口	確認 全面 H 9. 10 H 10. 5～7	2,600㎡	古代 中世		
5	柳原	伊集院町下谷口	確認 全面 H 9. 11 H 10. 7～10	6,000㎡	古代～中世 中世～近代	土坑・焼土域 土師器・須恵器・鉄製品 ピット・溝状遺構	
6	道祖瀬戸	伊集院町大田	確認 全面 H 9. 2	5㎡			
7	狩待迫	伊集院町大田	確認 全面 H 9. 1	8㎡			
8	上山路山	伊集院町大田	確認 全面 H 9. 2 H 9. 5～8 H 9. 12～H 10. 3	6,000㎡	旧石器時代 縄文時代早期・後期 弥生・古墳時代	剥片・碎片 集石・道跡・岩木・前平・吉田式土器 成川式土器	
9	木場田	伊集院町大田	確認 全面 H 10. 5	12,5㎡			
10	敷田尾	伊集院町大田	確認 全面 H 10. 6～7	76㎡			
11	大田城	伊集院町大田	確認 全面 H 8. 12 H 9. 1 H 9. 12～H 10. 3	4,000㎡	旧石器時代 縄文時代早期	三稜尖頭器 集石・土坑・前平式土器・石鏃・磨石	
12	堂ノ上	東市来町寺脇	詳細分布				
13	杉ヶ丸	東市来町寺脇	詳細分布				
14	小谷口	東市来町美山	詳細分布				
15	堂平窯	東市来町美山	確認 全面 H 10. 2 H 10. 8. 4～12	3,500㎡	江戸時代	窯・柱穴・粘土溜・土坑 物原 陶器・瓦・窯道具	
16	池之頭	東市来町美山	確認 全面 H 9. 8 H 10. 8～11 H 10. 7～8	7,500㎡	旧石器時代細石器文化期 縄文時代早期・後・晩期 古墳時代	細石刃・細石刃核 集石・前平・吉田・石坂式土器	センター報告書 (32)
17	雪山	東市来町美山	確認 全面 H 12. 6 H 12. 6～8	2,700㎡	縄文時代早期 近世～近代	集石・前平式土器 陶磁器類・窯道具	
18	猿引	東市来町長里	確認 全面 H 12. 5 H 12. 5～6	800㎡	旧石器時代ナイフ形石器文化期 縄文時代前期	礫群 縦長剥片・ナイフ形石器・三稜尖頭器・台 形石器・細石刃	
19	前山ノ口	東市来町伊作田	確認 全面 H 9. 7	18㎡			
20	日/出落	東市来町伊作田	確認 全面 H 9. 2	28㎡			
21	犬ヶ原	東市来町伊作田	確認 全面 H 9. 2 H 10. 6. H 11. 12～H 12. 2	2,000㎡	古代 中世	掘立柱建物跡・鍛冶炉 竪穴建物跡	
22	赤平	東市来町伊作田	確認・全面 H 11. 7	250㎡	古代～中世	ピット・土師器	
23	向栲城	東市来町伊作田	確認 全面 H 8. 11～12 H 9. 4～H 10. 3 H 10. 10～H 11. 3	14,000㎡	縄文時代草創期・早期・後期 古墳時代 中世 近世	打製石鏃 竪穴住居 空堀・帯曲輪・曲輪・堀切・通路状遺構・ 竪穴建物跡・掘立柱建物跡・炉跡・土坑・ 青磁・備前焼	
24	堂園平	東市来町伊作田	確認 全面 H 8. 11～12 H 10. 5～11	2,000㎡	旧石器時代ナイフ形石器文化期 旧石器時代細石器文化期 縄文時代早期・前期・後期 古代	剥片尖頭器・三稜尖頭器・ナイフ形石器・ 台形石器・敲石 礫群・細石刃・細石刃核 集石・吉田・塞ノ神・轟式土器 土坑・炭化物集中域・土師器・須恵器	
25	今里	東市来町伊作田	確認 全面 H 8. 11 H 9. 4～11	14,000㎡	旧石器時代 縄文時代早・前・後・晩期 古墳時代	礫群・細石刃・細石刃核 集石・前平・深浦・出水・黒川式土器 成川式土器	センター報告書 (33)
26	市ノ原	東市来町湯田 ・市来町大里	確認 全面 H 8. 10～12 H 8. 12～H 9. 3 H 9. 4～H 10. 3 H 10. 5～H 11. 3 H 11. 5～7	62,000㎡	旧石器時代ナイフ形石器文化期 旧石器時代細石器文化期 縄文時代早・前・中・後・晩期 弥生時代 古墳時代 古代～中世 近世	礫群・ナイフ形石器・台形石器 細石刃・細石刃核 集石・土器・石器 竪穴住居跡・壺棺墓 竪穴住居跡・土坑 掘立柱建物跡・焼土域・溝・土師器・須恵 器 古道・掘立柱建物跡・鍛冶炉	
27	上ノ原	市来町大里	確認 全面 H 8. 11 H 10. 7～9	2,000㎡	縄文時代早期 古墳時代 古代～中世	集石・土坑・塞ノ神式土器 竪穴・土坑・成川・貝殻 青磁・土師器・須恵器	

## 第Ⅱ章 発掘調査

### 第1節 調査に至るまでの経緯と経過

今里遺跡は、南九州西回り自動車道鹿児島道路の建設計画に先立って実施された分布調査において確認された遺跡である。県教育庁文化課は同事業計画を受け、平成3年6月に分布調査を行い、東市来町伊作田今里地内において遺物の散布を認め、本遺跡の存在を確認している。分布調査の結果は、鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(61)「北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書(Ⅰ)」に報告されている。

その後、平成8年度に遺跡の範囲と性格を把握するため確認調査を実施し、縄文時代および古墳時代の遺物包含層を確認した。この確認調査の結果に基づき、建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所(当時)と県教育庁文化財課は、遺跡の取り扱いについて協議を行い、事業の推進と埋蔵文化財の保護のため緊急発掘調査が行うこととした。全面調査は平成9年4月から平成9年12月にかけて実施した。

### 第2節 調査の組織

(平成8・9年度)

事業主体	建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	吉元 正幸
	〃	次長兼総務課長	尾崎 進
	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋
	〃	調査課長補佐	新東 晃一
	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	池畑 耕一
調査担当者	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	池畑 耕一 (確認調査)
	〃	文化財調査員	西園 勝彦 (確認調査)
	〃	文化財主事	湯之前 尚
	〃	文化財研究員	橋口 勝嗣
調査事務担当	〃	主 査	前屋敷裕徳
	〃	主 査	政倉 孝弘
	〃	主 事	追立ひとみ
現地指導者	別府大学	教 授	橋 昌信
	鹿児島大学	助 教 授	小林 哲夫

(平成11年度)

事業主体	建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課



調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	吉永 和人
調査企画者	〃	次長兼総務課長	黒木 友幸
〃	〃	主任文化財主事兼調査課長	戸崎 勝洋
〃	〃	調査課長補佐	新東 晃一
〃	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	青崎 和憲
報告書作成者	〃	文化財研究員	橋口 勝嗣
報告書作成事務担当	〃	総務係長	有村 貢
〃	〃	主 査	今村孝一郎

(平成 12 年度)

事業主体 建設省九州地方建設局鹿児島国道工事事務所\*

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	井上 明文
調査企画者	〃	次長兼総務課長	黒木 友幸
〃	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東 晃一
〃	〃	調査課長補佐	立神 次郎
〃	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濱 修
報告書作成者	〃	文化財研究員	橋口 勝嗣
報告書作成事務担当	〃	総務係長	有村 貢
〃	〃	主 査	今村孝一郎

\*省庁再編により平成13年 1 月より国土交通省九州地方整備局鹿児島国道工事事務所

(平成 13 年度)

事業主体 国土交通省九州地方整備局鹿児島国道工事事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査責任者	鹿児島県立埋蔵文化財センター	所 長	井上 明文
調査企画者	〃	次長兼総務課長	黒木 友幸
〃	〃	主任文化財主事兼調査課長	新東 晃一
〃	〃	調査課長補佐	立神 次郎
〃	〃	主任文化財主事兼第三調査係長	牛ノ濱 修
報告書作成者	〃	文化財研究員	橋口 勝嗣
報告書作成事務担当	〃	主 査	今村孝一郎

なお、発掘調査中及び整理作業中、次の方々から指導、助言、ご協力をいただいた。記して謝意を表します。(五十音順・敬称略)

池畑耕一・牛ノ濱修・寺原徹・中村和美・中原一成・橋口亘・繁昌正幸・前迫亮一・宮田栄二・八木澤一郎

### 第3節 調査の経過

発掘調査（以下全面調査）は平成9年4月21日～平成9年12月4日までの計134日間実施した。以下、日誌抄で調査の経過を略述する。

4月	1日より作業開始。プレハブ詰所を設置し、発掘機材搬入。 重機を使用して表土剥ぎを行う。第1地点より発掘調査を実施。 第1地点はⅡ層が残存しておらず、圃場整備による削平が著しかった。 Ⅲ層より古墳時代・縄文時代晩期の遺物出土。
5月	5月15～30日まで、松元町教育委員会児之原氏が長期研修生として現場研修。 Ⅵ層より黒曜石剥片出土。作業員追加募集。黒曜石片出土箇所拡張掘り下げ。
6月	6月7日より作業員7名追加。6月13日に第1地点の調査を終了。 第2地点の表土剥ぎ・発掘調査開始。第2地点の排土を第1地点に移動。Ⅲ層より古墳時代の成川式土器出土。 E～G-19区周辺にトレンチを設定した。遺物等の出土状況等から判断して、下層確認調査を実施。
7月	中旬以降第3地点の表土剥ぎ・発掘調査を実施。 第2地点と第3地点の調査を並行して実施。台風8・9号が接近した。特に被害なし。
8月	8月4～7日池之頭遺跡の確認調査実施。台風11号が接近した。特に被害なし。 20m毎にトレンチを設定し、遺物出土地点を拡張。
9月	A～E-27～31区周辺の確認調査を実施。この箇所も道路によって区切られるために便宜上第0地点とした。第2地点と並行してトレンチを設定して掘り下げを実施。 Ⅵ層より細石刃核・細石刃が出土。第0地点の全面調査への移行を決定。 9月9日～19日まで今里遺跡の調査と並行し市ノ原第5地点の確認調査を実施。 9月9日センター所長来跡。台風16号接近、特に被害なし。 9月24日より第0地点の表土剥ぎ・全面調査を実施。 9月29日に第3地点の調査を終了。
10月	第0地点のⅥ層の調査。 10月1日～9日市ノ原第5地点の確認調査を再開・終了。 10月16日より遺物取り上げシステムSITEⅡを導入。
11月	11月20・21日旧石器時代の遺物について橘昌信別府大学教授による現地指導。 11月14日～大田城遺跡の発掘調査のための準備作業。
12月	大田城遺跡発掘調査開始。 今里第0地点の未調査部分の調査を並行して行う。 12月5日地層について小林哲夫鹿児島大学助教授による現地指導。 12月4日第0地点の調査終了

なお、整理作業及び報告書作成作業は平成11～13年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターにおいて実施した。

## 第三章 遺跡の位置及び環境

### 第1節 地理的環境

今里遺跡は、鹿児島県日置郡東市来町伊作田に所在する。遺跡の所在する東市来町は薩摩半島西部に位置する日置郡の北西部にあつて、西は東シナ海に面し、北は市来町、東は樋脇町、南は伊集院町と日吉町に接する。北東部には標高 523 m の重平山や 405 m の中岳、410 m の矢岳が連なっている。江口川や大里川はそれらの山々に源を發して町の中央を流れ、南側の町境を流れる神之川とともに東シナ海に注いでいる。町内の水田は主としてこの三河川の流域に沿って開け、畑地は大部分が火山灰質土壤である丘陵地を中心に広がる。

今里遺跡は、東市来町伊作田の遠見番山の麓の舌状を呈する標高約 83 m の台地に位置している。現況は比較的平坦な台地状の地形を呈するが、近年の削平や盛土があり、旧地形には緩やかな傾斜が存したとみられる。

今里遺跡第1地点は遠見番山自然公園の登り口に位置しており、頂上からは江口浜や東シナ海を望むことができる。遺跡の南側には東西に江口川が流れており、最短で 500 m ほどの距離にあり、河口にあたる江口浜からは直線で約 1.5 km ほどの距離にある。周辺には周知の遺跡も多く、本調査とほぼ同時期に南九州西回り自動車建設に伴い、南東方向に位置する堂園平遺跡、向楯城跡、北側に隣接する市ノ原遺跡の発掘調査が実施された。遺跡の北側には、参勤交代にも使われた九州街道（出水筋）が通り、国道3号線が開通する以前は地域の幹線道路として使用されていたようである。

### 第2節 歴史的環境

本遺跡の所在する東市来町と隣町の市来町は古代においては薩摩国日置郡に属していたと考えられている。東市来町郷土誌によると市来院は宝亀年間（770～780）以降、郡司の大蔵氏一族が支配していた。その後、大蔵氏は鶴丸城に居を構え市来氏と称するようになる。中世、惟宗姓を称した市来氏は島津軍に攻められ滅亡するが、鶴丸城には 1550 年フランシスコ＝ザビエルも立ち寄り布教活動をしたとの記録も残されている。

1592～1598年の文禄・慶長の役で朝鮮に出兵した島津義弘は、帰国に際して朝鮮の陶工を連れ帰ったとされる。この時、大部分の陶工は串木野市島平に上陸したが、のち一部が神之川に到着し、やがて苗代川（美山）に居住し作陶に従事することとなったと伝えられている。これが薩摩焼の発祥とされ、このため町内には窯業関連の遺跡が多数確認されている。

### 第3節 周辺の遺跡

東市来町内の考古学的な調査研究は従来ほとんど手つかずの状況であったが、平成3年度以降の東市来町による県営圃場整備事業・農道整備事業等に伴う発掘調査、平成8年度以降の南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴う調査によって、次第にその様相が明らかにされつつある。ここでは、調査・報告がなされている遺跡を中心にみていきたい。

上二月田遺跡 本遺跡の東約 6 km に位置する。1987 年に発掘調査が行われた。縄文時代後期と考えられている住居跡が 2 基検出されている。遺物には、平楯式・塞ノ神式・深浦式・西平式・黒川式・夜臼式・高橋 I 式土器などがある。

**仮牧段遺跡** 本遺跡の東約6kmに位置する。1990年に県営圃場整備事業に伴い調査が行われた。古墳時代の溝が2条検出されている。縄文時代早期の押型文土器・円筒形条痕文土器や、古墳時代の成川式土器が出土している。

**陣ヶ原遺跡** 本遺跡の南東約5kmに位置する。1991年に広域営農団地農道整備事業（日置2地区）に伴い調査が行われた。古墳・中世・近世の遺跡であるが、確認調査では時期不詳の土坑2基が検出されたのみであった。

**桜原遺跡** 本遺跡の南東約5kmに位置する。1991年、陣ヶ原遺跡の調査中に広域営農団地農道整備事業（日置2地区）区域内で発見され、調査が行われた。縄文時代晩期と考えられている住居跡が1基検出されており、黒川式土器・条痕文土器・刻目凸帯文土器が出土している。古墳時代の成川式土器も出土している。

**柿之迫遺跡（前畑遺跡）** 本遺跡の南約2kmに位置する。1994年に県営中山間地域農村活性化総合整備事業に伴い確認調査が行われた。遺跡付近は上部から長期にわたり流れ込んできたシラス混じりの台地で、同一包含層中から縄文時代晩期から中世にかけての遺物が出土した。

#### **老ノ原遺跡（後庵堀遺跡）**

本遺跡の南約2kmに位置する。1994年に県営中山間地域農村活性化総合整備事業に伴い確認調査が行われた。前畑遺跡とは異なり、土層の堆積状態は良好であるが、成川式土器と須恵器が同一層内から出土しており、成川式土器の下限を考える資料になるとされている。

**伊作田城跡** 本遺跡の南約1.5kmに位置する。伊作田城跡の推定地にはいくつか説があるが、平成3年度に鹿児島県教育委員会文化課によって行われた、北薩・伊佐地区埋蔵文化財分布調査報告書では、本遺跡を伊作田城跡としており、同年9月に東市来町教育委員会から依頼を受け、分布調査を実施した五味克夫氏・三木靖氏と県文化課は、いずれも小字浜ノ丸から柵城に通じる部分の全てが非常によく保存された山城で、南北朝時代のものであるとしている。以上2回の分布調査の結果を基に伊作田城跡の推定地として1994年に県営中山間地域農村活性化総合整備事業に伴い確認調査が行われた。帯曲輪の構築が確認されたほか、古墳時代の遺跡の存在が確認された。

**池之頭遺跡** 本遺跡の南東約4kmに位置する。旧石器時代から、中世までの複合遺跡であるが、主体をなす時代は古墳時代である。狭い尾根上に成川式土器が出土しており、住居跡などの遺構がみられず、手捏ね土器の出土が多いことから、祭祀場などの可能性が指摘されている。

※東市来町内で南九州西回り自動車道に関連して調査が行われた遺跡のうち、報告書が刊行された遺跡は本遺跡以外には池之頭遺跡のみである。  
したがって、詳細については報告書の刊行を待ちたい。

#### 参考文献

東市来町教育委員会「東市来町郷土誌」 1988

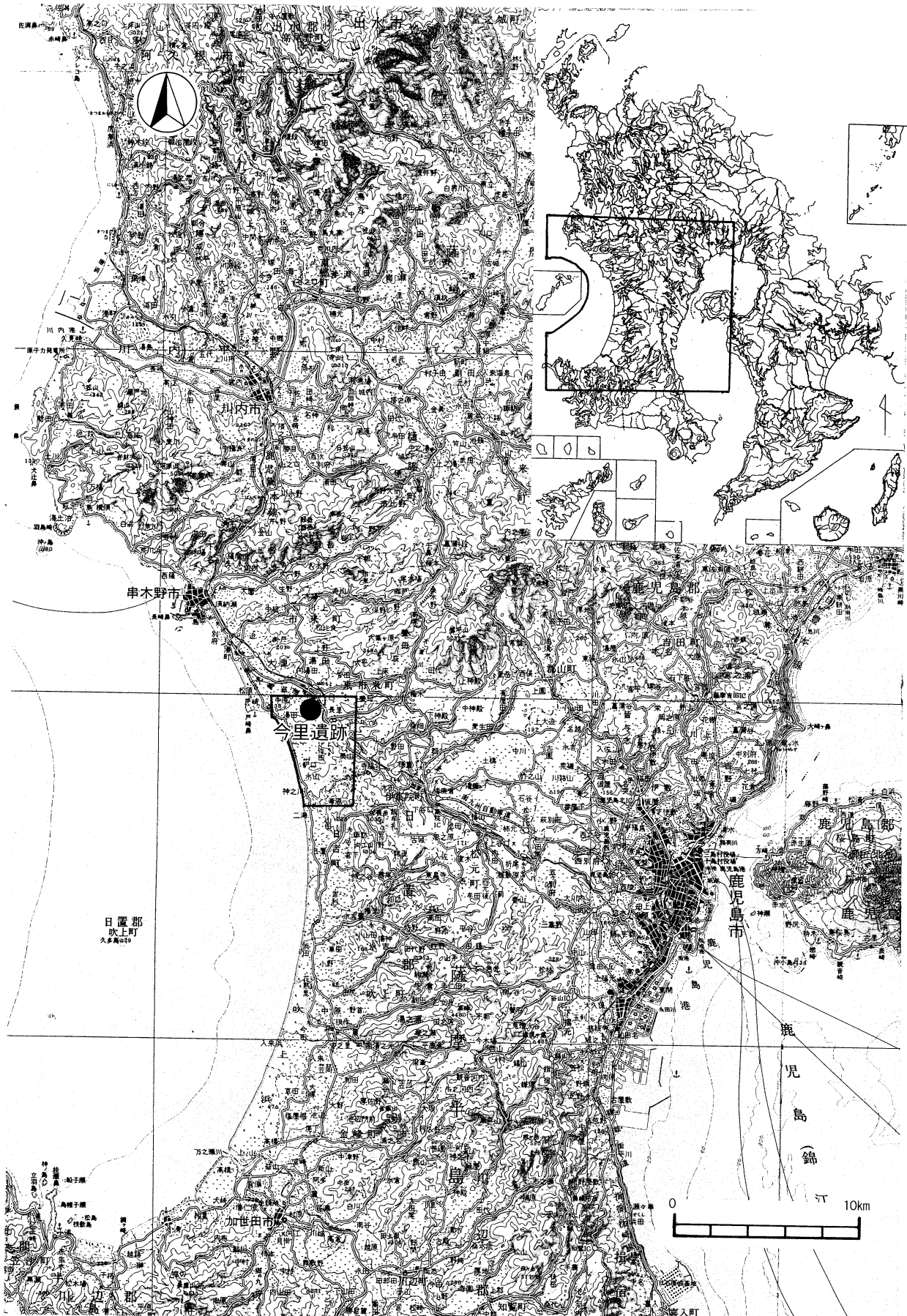
東市来町教育委員会「上二月田遺跡」 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書1 1988

東市来町教育委員会「仮牧段遺跡」 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書2 1991

東市来町教育委員会「陣ヶ原遺跡・桜原遺跡」 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書3 1992

東市来町教育委員会「前畑遺跡・後庵堀遺跡・伊作田城跡」 東市来町埋蔵文化財発掘調査報告書4 1994

鹿児島県立埋蔵文化財センター「池之頭遺跡」 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(32) 2002



第3図 今里遺跡位置図



第4図 今里遺跡周辺遺跡分布図

	遺跡番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等	備考
1	29-3	大日寺跡	長里本寺	山麓	鎌倉	仁王像・墓塔外	
2	29-5	鶴丸城跡	長里鶴丸小学校一帯	山麓	平安～室町	礎石	
3	29-17	平之城	長里字平之城	丘陵平地	南北朝～室町		中世城館跡
4	29-18	伊作田城	伊作田字浜之丸	丘陵平地	南北朝～室町		中世城館跡
5	29-19	古城	長里字古城原	山頂平地		石塁	中世城館跡
6	29-22	柗城	伊作田字柗原	山頂平地			中世城館跡
7	29-23	向柗城	伊作田字上柗	丘陵平地			中世城館跡
8	29-67	市ノ原	湯田上市ノ原ほか	台地	弥生・古墳・中世	土器・土師器・白磁・青磁	H.3北薩・伊佐分布
9	29-68	諏訪原	湯田諏訪原ほか	台地	古墳・中世・近世	土師器・陶器・染付	H.3北薩・伊佐分布
10	29-69	森園平	長里森園平ほか	台地斜面	弥生・古墳・中世	土器・土師器・須恵器	H.3北薩・伊佐分布
11	29-70	浦田	長里浦田(一)ほか	台地	古墳・中世	土師器	H.3北薩・伊佐分布
12	29-72	犬ヶ原	伊作田犬ヶ原(一)ほか	丘陵	中世・近世	土師器・陶器	H.3北薩・伊佐分布
13	29-73	金木山	伊作田金木山ほか	丘陵	古墳・近世	土器・陶器	H.3北薩・伊佐分布
14	29-74	堂園平	伊作田堂園平	丘陵	中世	土師器・染付	H.3北薩・伊佐分布
15	29-75	今里	伊作田今里ほか	台地	旧石器・縄文・古墳・中世・近世	石器・土器・土師器・陶器・磁器	H.3北薩・伊佐分布
16	29-76	老ノ原	伊作田東老ノ原ほか	台地	弥生・古墳・中世	土器・土師器・染付	H.3北薩・伊佐分布
17	29-77	立元原	伊作田立元原ほか	台地	弥生・古墳・中世・近世	土器・土師器・陶器	H.3北薩・伊佐分布
18	29-78	池之平	美山池之平ほか	迫頭	古墳・近世	土器・土師器・陶器	H.3北薩・伊佐分布
19	29-80	原	宮田原ほか	丘陵	弥生・古墳・中世・近世	土器・土師器・陶器	H.3北薩・伊佐分布
20	29-81	馬通	美山馬通ほか	丘陵	弥生・古墳・近世	土器・土師器・陶器	H.3北薩・伊佐分布
21	29-82	力石ヶ原	神之川力石ヶ原ほか	台地	縄文・弥生・古墳・中世	土器・土師器・青磁・陶器	H.3北薩・伊佐分布
22	29-83	浜ノ丸	神之川浜ノ丸	後背砂地	古墳・中世	土師器	H.3北薩・伊佐分布
23	29-84	堂平窯跡2号窯	美山堂平	丘陵斜面	近世	陶器	H.3北薩・伊佐分布
24	29-85	西原持原	養母	台地	古墳・中世		H.8農整分布
25	29-89	赤平	長里	台地			西回り自動車道
26	29-90	猿引	長里	台地			西回り自動車道
27	29-91	雪山	美山	台地			西回り自動車道
28	29-92	池之頭	美山	台地			西回り自動車道
29	29-96	菖蒲河内	江口	台地		土器・青磁	H.11農整分布

第2表 周辺遺跡地名表

## 第IV章 遺跡の層位

調査前の地形は比較的平坦であったが、表土を剥ぎ取ると直下にシラスが露出する部分がある一方、盛土が1mを超える部分もみられた。これは、近年の圃場整備や隣接するクレー射撃場建設等によって削平・盛土が行われたことによる。

旧地形は遠見番山に向かって緩やかな傾斜があったものと推定され、層の堆積状況は、旧地形が緩やかな傾斜面に相当する部分では不安定かつ薄く、比較的平坦で層堆積が安定する場所を中心に遺物が出土する傾向がみられた。

なお、遠見番山の麓に近い第0地点と第1地点周辺の基底面はシラスではなく、砂岩の小片を多く含む層が見られた。これは、第0・1地点の標高がシラスの堆積上面よりわずかに高いため、シラスが堆積しなかったためと考えられる。この砂岩の小片は遠見番山斜面からの岩屑集積物であり、基底面の形成年代を特定することはできなかった。

また、隣接する日置郡伊集院町や松元町付近では、V層下部に相当する層位に「薩摩火山灰」が良好な堆積をみせるが、本遺跡周辺では、ごく部分的に観察されるのみであった。

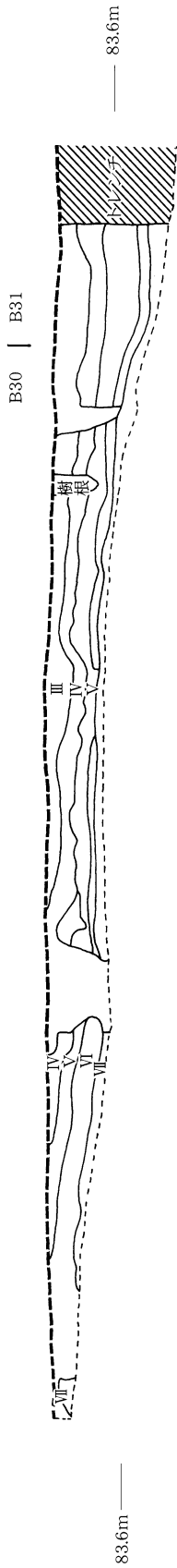
第2地点・第3地点は、圃場整備や畑作によりかなりの遺物包含層が削平されていた。表土を剥ぎ取ると直下にシラスやVII層が露出した部分が多かった。このため、古代以降の遺物包含層であるII層は第3地点のH・I - 13・14・15区周辺に部分的に残存しているのみであった。

I	層	I	現耕作土	
II	層	II	黒色土	古代～中世の遺物包含層，一部のみ残存
III	層	III	黄褐色土	縄文時代前期～晩期・古墳時代の遺物包含層 下部は黄色の火山灰土(アカホヤ火山灰)
IV	層	IV	暗乳褐色土	縄文時代早期の包含層 やや粘質を持つ 下部はやや色が暗い
V	層	V	黒褐色土	下部は「薩摩火山灰」層に相当
VI	層	VI	暗褐色土	旧石器時代細石刃文化期の遺物包含層 粘質が強い 下部は色が明るくなる
VII	層	VII	明褐色土	シラスの2次堆積土 下部は色がやや暗い
VIII	層	VIII	乳白色土	シラス (入戸火砕流堆積物)

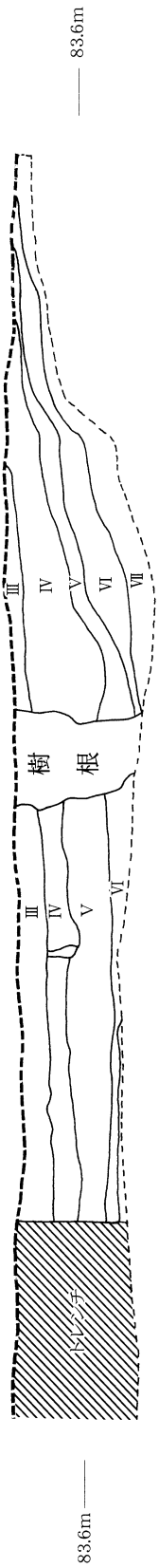
第5図 土層模式図



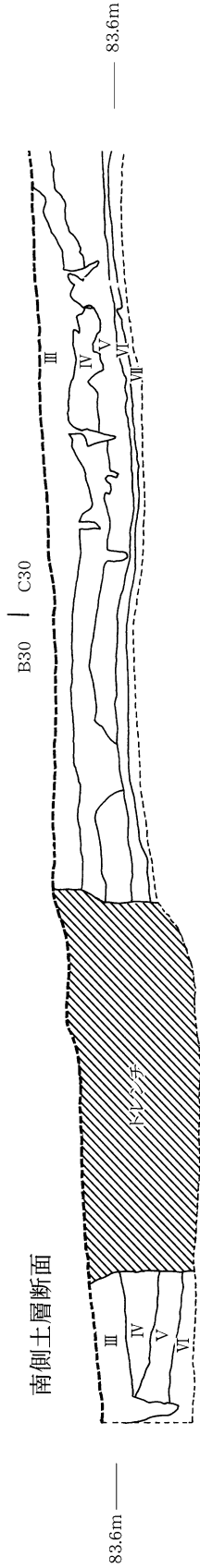
東側土層断面



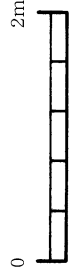
B31 | B32



南側土層断面

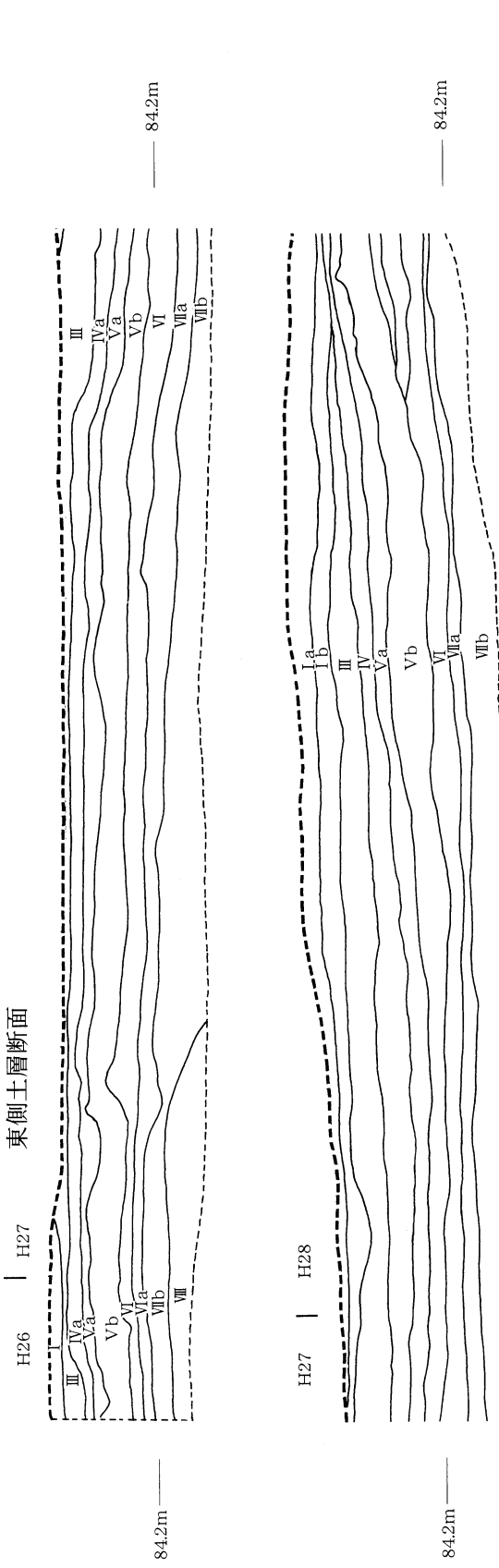


C30

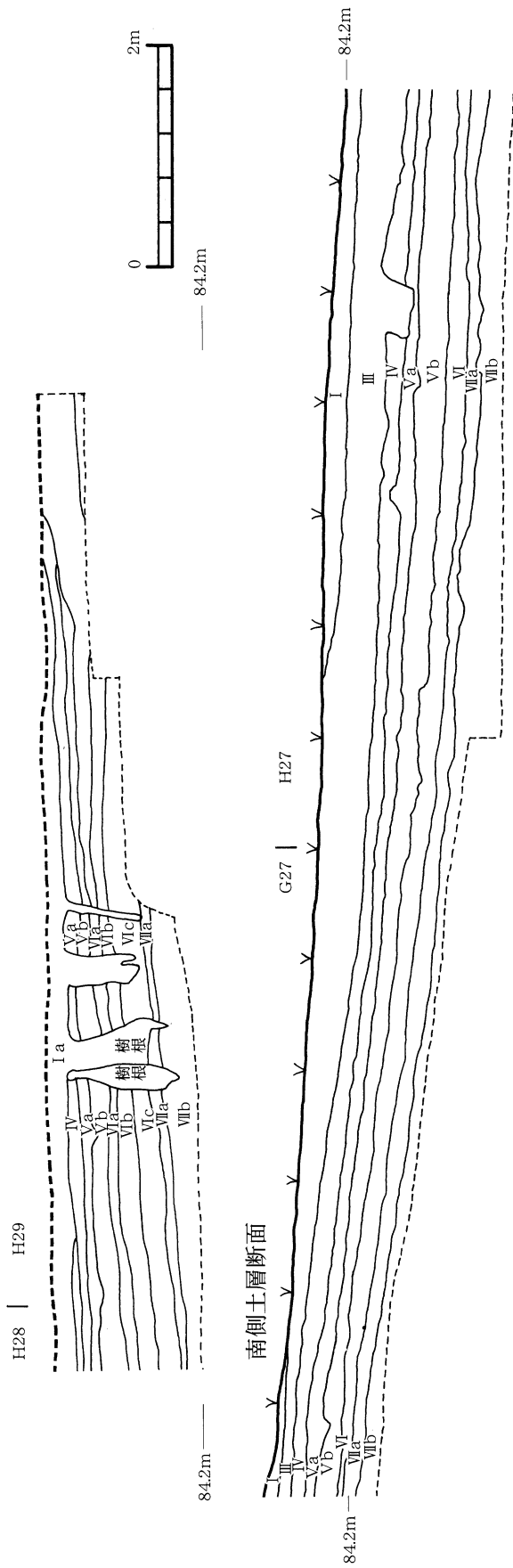


第6図 第0地点 土層断面図

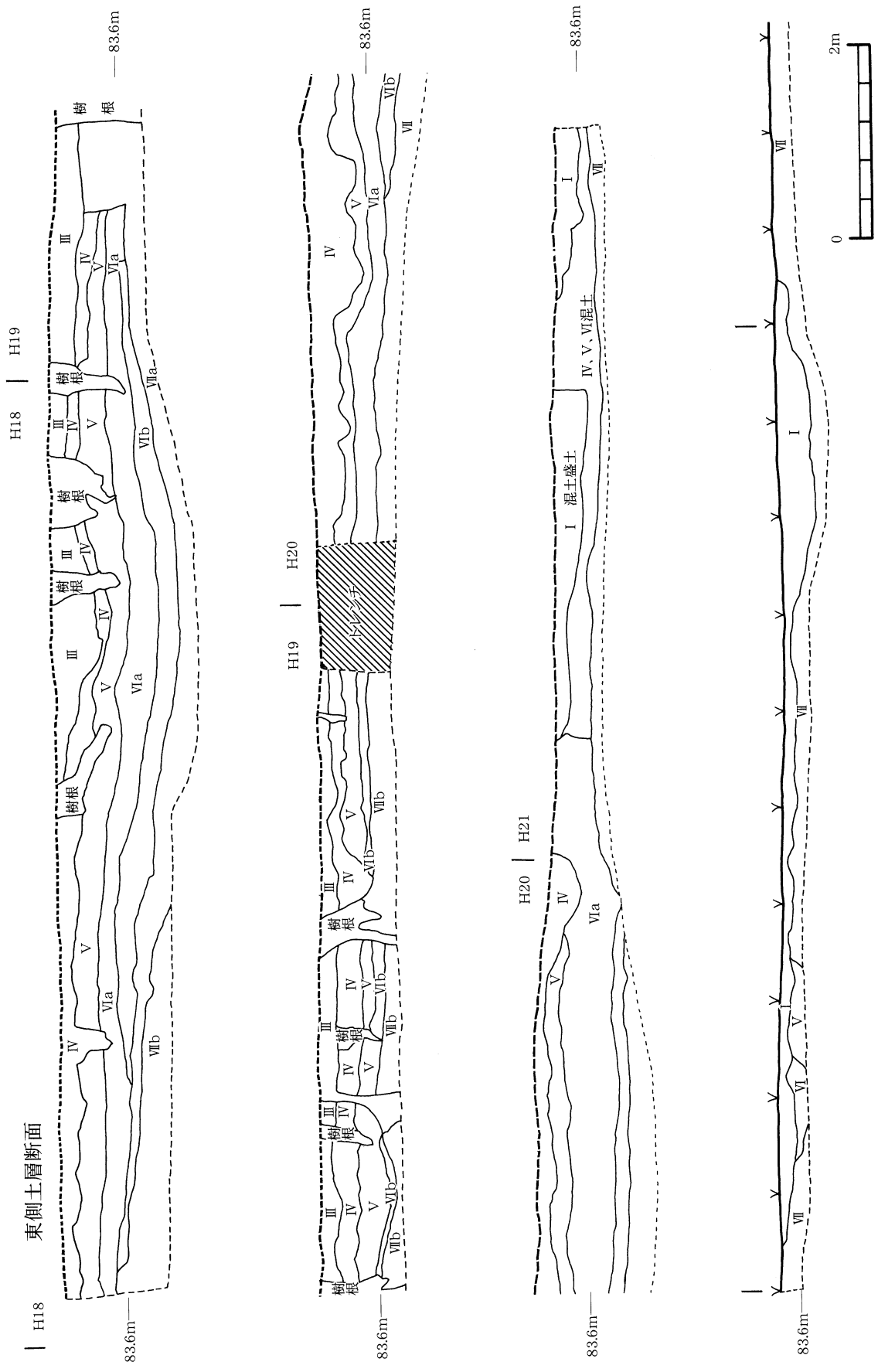
東側土層断面



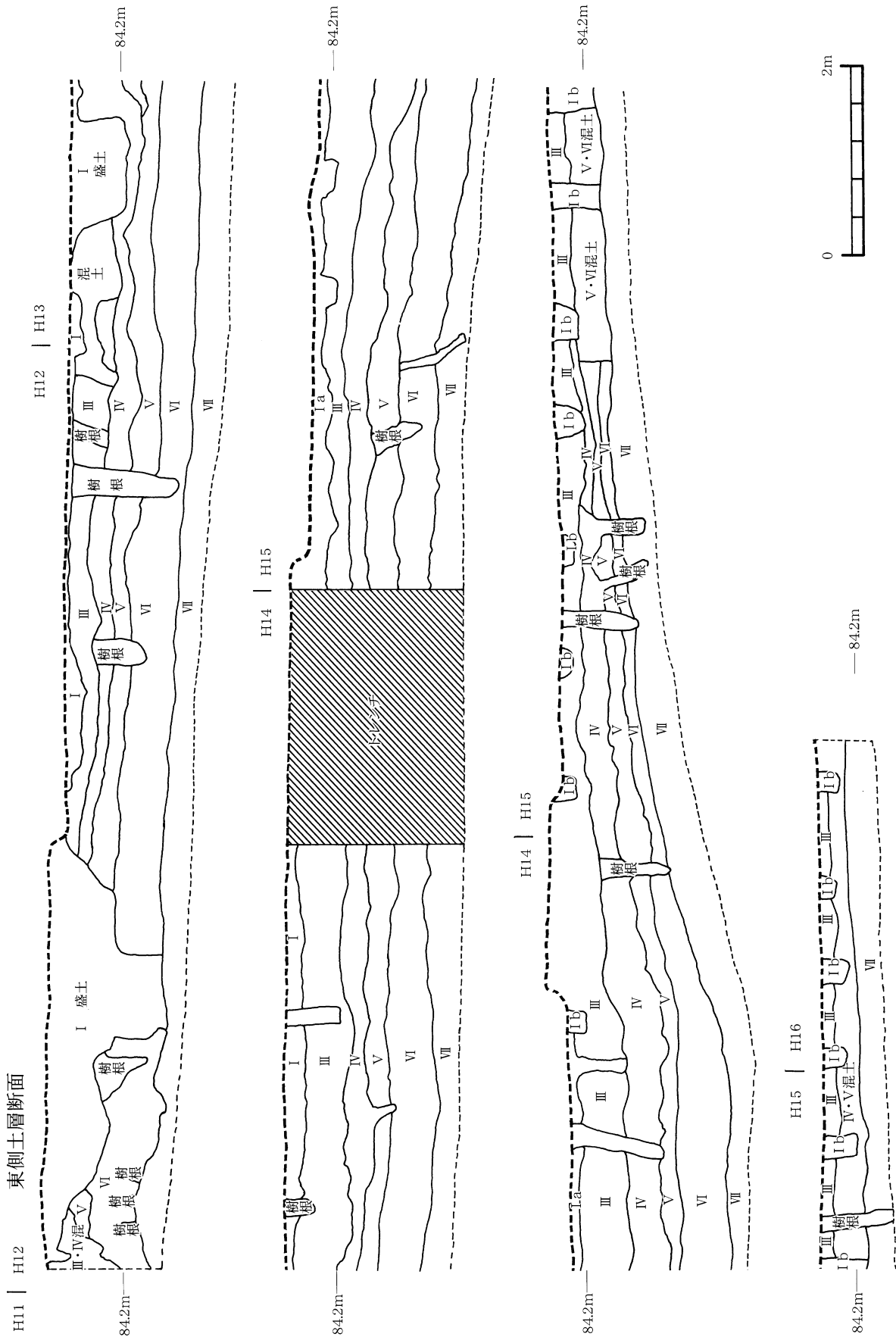
南側土層断面



第7図 第1地点 土層断面図



第8图 第2地点 土層断面图



第9図 第3地点 土層断面図

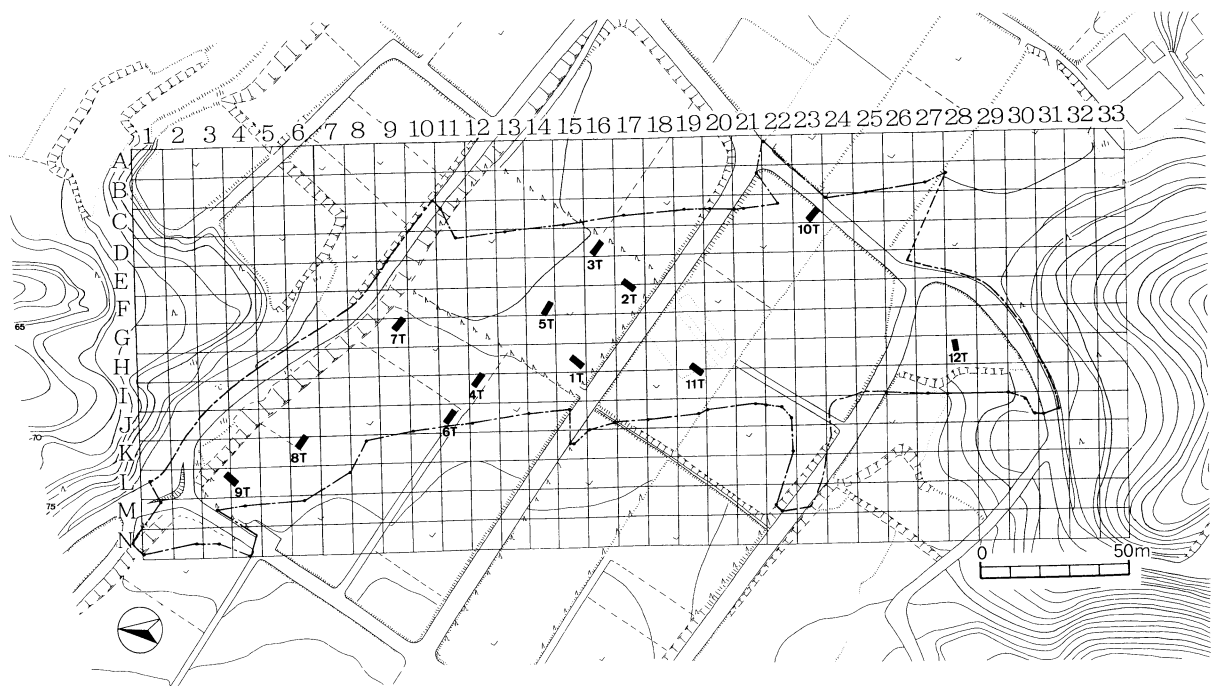
## 第V章 調査の概要

平成8年度の確認調査では、傾斜が緩まり平坦化した部分の12か所にトレンチを設定した。1～11トレンチは2×5m、12トレンチは2×4mの広さを設定した。これらのトレンチのうち2・3・7・9・10トレンチは包含層が削平され、厚さ約40cmの表土の直下はシラスが露出した。1・4・5・6・8・11・12トレンチからは縄文時代早期・晩期、古墳時代、平安時代、中世の土器や石器が出土した。

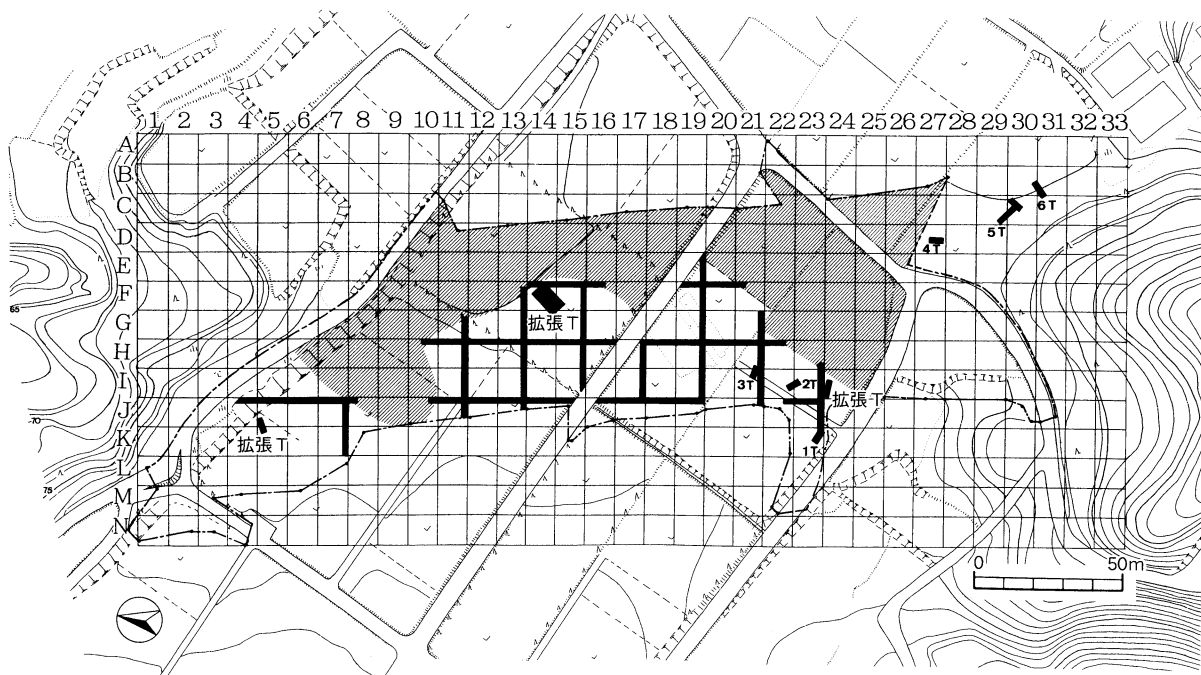
平成9年度の全面調査では、ほぼ東西に走る道路計画線STATION No115杭から西側に40m直行する用地境界杭とその南側20mにある用地境界杭をグリッドの南北ラインとし、北から1・2・3・・・・区とした。また、これに直行して東から西へA・B・C・・・・区とした。各グリッドは一辺が10mである。

調査対象範囲は、道路により3か所に分かれていたので、便宜上これを第1・2・3地点と呼び、第1地点から調査を開始した。確認調査において縄文時代早期及び縄文時代晩期・古墳時代の包含層が確認されていたためⅢ層(縄文時代晩期・古墳時代包含層)調査終了後、Ⅳ層(縄文時代早期包含層)の調査を行ったが、Ⅳ層は少量の遺物が出土したのみであった。このため2・3地点においては、Ⅲ層の調査終了後、Ⅳ層以下については20mおきにグリッド杭に沿って縦・横のトレンチを設定し、遺物が出土した部分ではトレンチを拡張し調査範囲を広げる方法をとった。

第3地点は、当初想定されていたよりも遺物包含層が削平されている面積が大きく、Ⅳ層以下の遺物の出土も少なかった。このため、9月以降、次年度発掘調査予定部分の下層確認調査を繰り上げて実施した。この結果、新たに旧石器時代の遺物包含層を確認したほか、縄文時代早期・晩期及び



第10図 平成8年度確認調査トレンチ配置図



第11図 平成9年度トレンチ配置図

(斜線部分は平成8年度調査により判明したシラス露出部分)

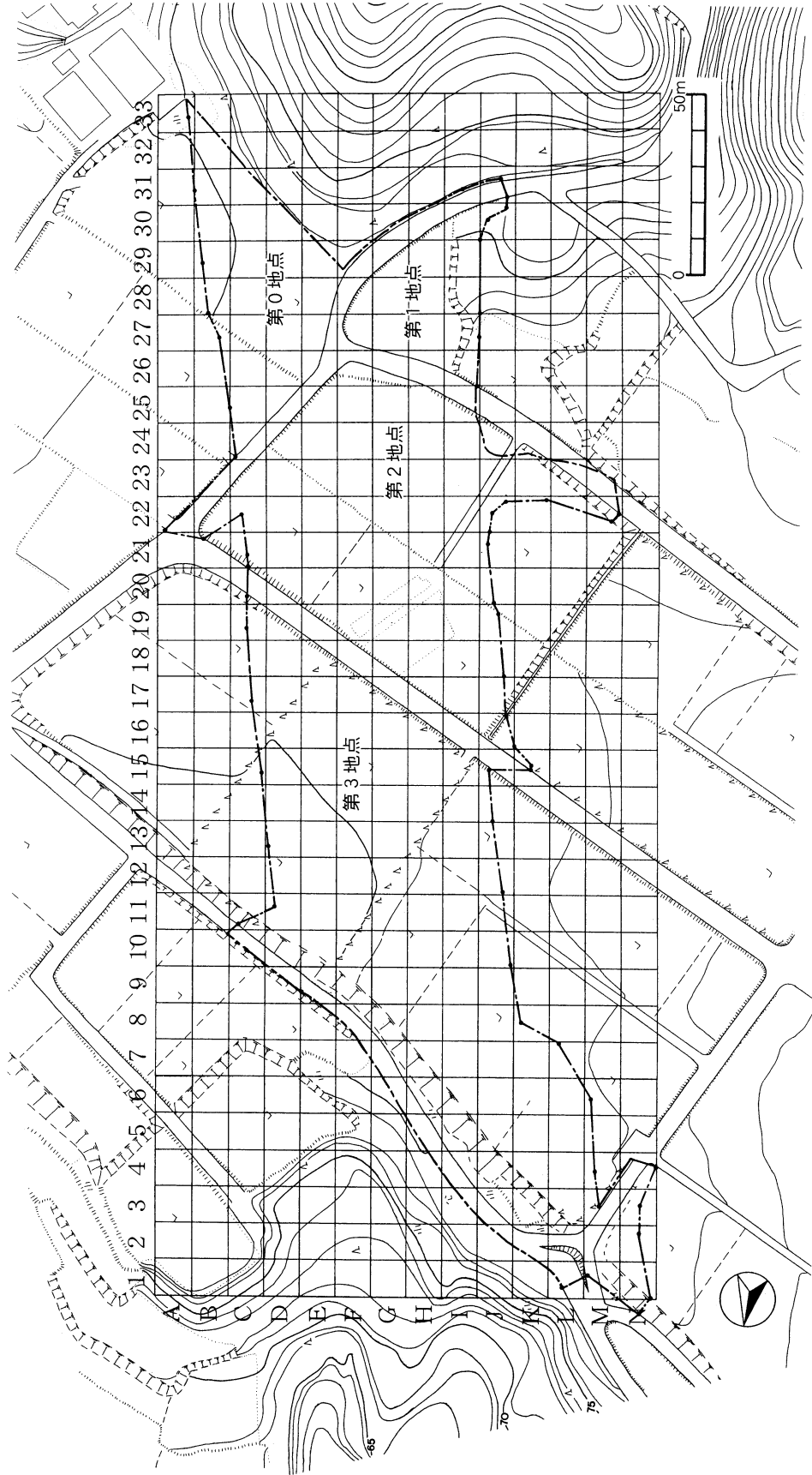
古墳時代の包含層の残存を確認した。対象面積が限られていたため、協議の上、次年度発掘調査予定を繰り上げ、同年今里遺跡第0地点として発掘調査を行った。

## 第1節 旧石器時代の調査

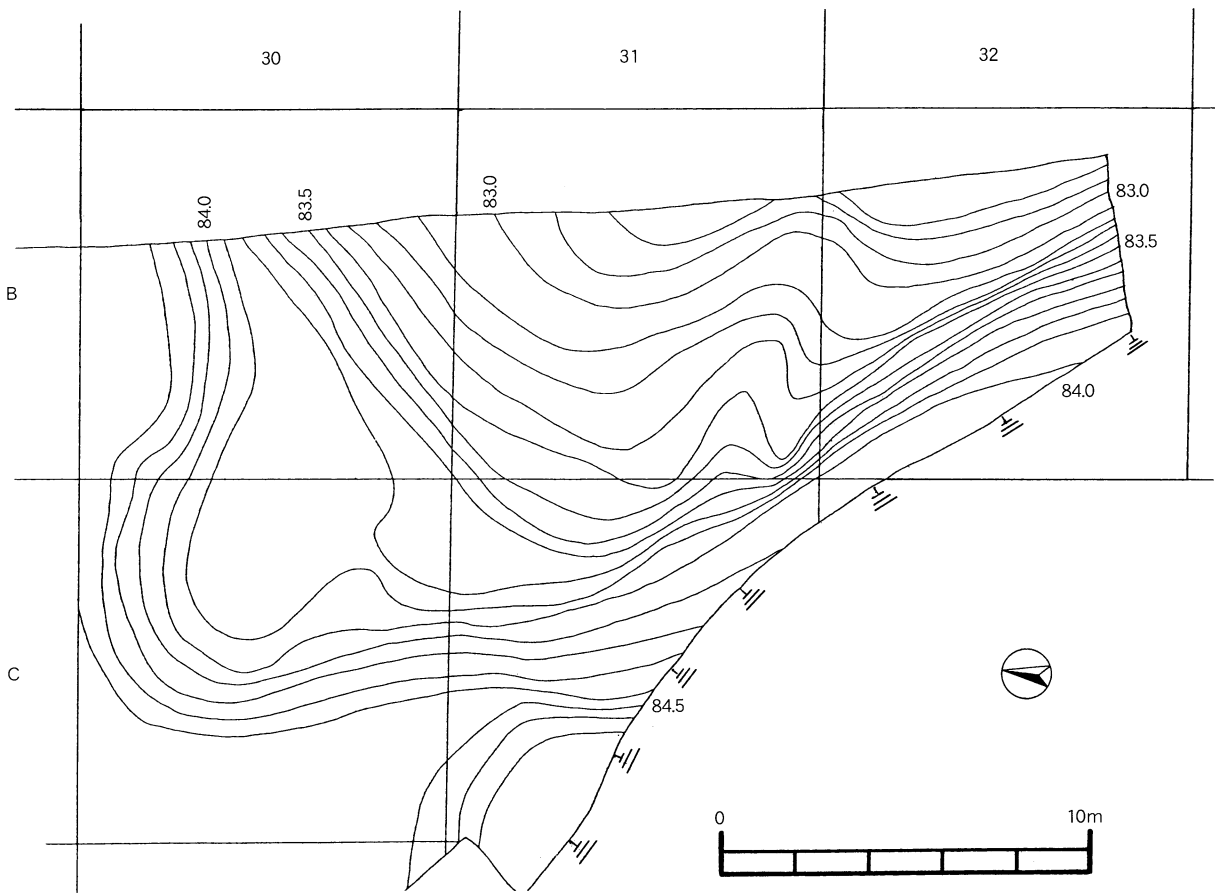
### 1 調査の概要

平成8年度の確認調査では、縄文時代以降の遺物が出土しているのみであった。しかし、第1地点を下層確認のため掘り下げを行ったところ、VI・VII層より後期旧石器時代相当の遺物が出土した。また、第0地点においてはVI・VII層より旧石器時代の遺物がブロック状に出土することが確認された。第2地点と第3地点ではほとんど旧石器時代の遺物の出土は確認できなかった。

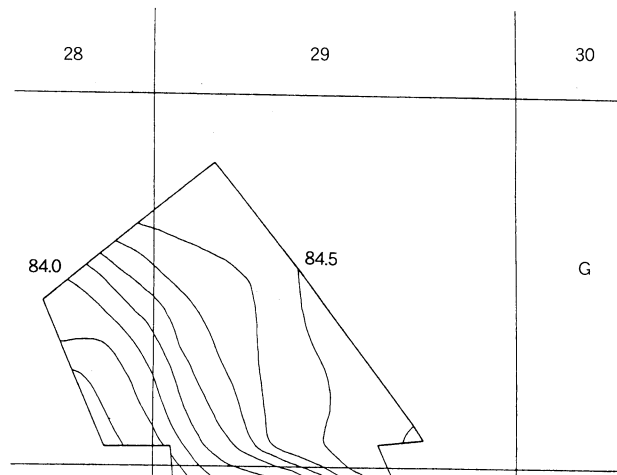
この旧石器時代の遺物が出土した第0地点と第1地点は遠見番山の麓にあたり、第0地点と第1地点とを区切る道路が遠見番山の展望台へと上る道になる。第0地点・第1地点周辺から次第に遠見番山の頂上へ向けて地形が変化し、標高が高くなる。VII層地形図(第13図)から第0地点の南側は傾斜面になるのがわかる。第0地点の出土遺物については南側の斜面からの流れ込みの可能性も考えられたので、斜面の僅かに平坦になっている部分におよそ1.5m四方の小さなトレンチを設定して試掘を試みた。しかし、岩屑集積物(主に砂岩の小片)がすぐに露出し、遺物は全く出土しなかった。



第12図 今里遺跡 調査範囲グリッド図



第13图 第0地点 VII層地形图



第14图 第1地点 VII層地形图



## 2 遺物

### (1) ナイフ形石器文化期

旧石器時代・ナイフ形石器文化期の出土遺物 21 点を図示した。器種は尖頭器、ナイフ形石器、台形石器、スクレイパーの 4 種類が出土した。

#### ① 剥片尖頭器 (第 17 図 1)

1 は流紋岩の縦長剥片を素材とし、基部の両側に抉りを入れ、先端部は欠損している。一側縁部に腹辺部 (主剥離面) より丁寧なブランディングによる二次加工を施している。

#### ② 三稜尖頭器 (第 17 図・第 18 図 2～9)

三稜尖頭器は合計 8 点出土している。

2 は安山岩の厚みのある縦長剥片を素材とし、先端部が欠損しているものである。剥離面と二面の調整剥離のあるもので、剥離はやや粗い二次加工である。

3 は気泡のない良質な腰岳産黒耀石の横長剥片を素材とした剥離面と二面の調整剥離のあるものである。先端部は丁寧なブランディングによる加工を腹辺部から背面と、背面から行っている。基部は片面のみ調整が行われている。

4 は灰色黒耀石の縦長剥片を素材にし、剥離面と二面の調整剥離のあるもので先端部は欠損している。基部付近には丁寧なブランディングを施し、先端部はやや粗い加工を施している。

5 は頁岩製で厚みのある剥片を素材にした大型の尖頭器である。主剥離面から調整加工を施して調整を行っている。基部は背面の稜からも加工し、丁寧な調整を行っている。中央から先端にかけて欠損している。

6 は灰色黒耀石を素材にし、先端部を欠損しているが一部に剥離面をもち、二面に剥離面からの調整剥離のある尖頭器である。断面は四辺形を呈する。

7 は上牛鼻産の黒耀石を素材にした三稜尖頭器の基部である。一面に主要剥離面からの丁寧な調整剥離のあるものである。

8 も上牛鼻産の黒耀石で横剥ぎの厚みのある剥片を素材にした三稜尖頭器で先端部が欠損している。やはり主要剥離面からの調整剥離により整形を行っている。

9 も同様のものであるが調整は荒い。

#### ③ ナイフ形石器 (第 17 図・第 18 図 10～14)

ナイフ形石器は合計 5 点出土している。

10 は上牛鼻産の黒耀石を素材にした切出状のナイフ形石器である。二側縁と基部にブランディングを施している。刃部が一部欠損している。

11 は 10 同様上牛鼻産の黒耀石を素材にした切出状のナイフ形石器であるが、刃部が欠損し基部のみである。背面に平坦剥離が施されている。

12 は灰色黒耀石の厚みのある剥片を素材にしたもので、刃部の一部を欠損している。急角度のブランディングにより整形されている。

13 も灰色黒耀石を素材にした切出状のナイフ形石器である。刃部は欠損しているが片側縁は切断、もう一つの側縁は丁寧なブランディングにより整形されている。

14 は佐賀県の腰岳産の質の良い黒耀石を素材にしたナイフ形石器で、二側縁と基部にブランテ

ィングを施している。刃部が一部欠損しているが、刃部には使用痕が認められる。

#### ④台形石器（第18図・第19図 15～17）

台形石器は合計3点出土している。

15は灰色黒耀石の横長剥片を素材にした台形石器である。剥片を横位に利用し、両側縁はブラントィングにより整形されている。刃部は一部欠損している。

16は気泡の多い三船産の黒耀石を素材にしている。やはり剥片を横位に利用し、両側縁はブラントィングと平行剥離により整形されている。刃部に使用痕が認められる。

17は灰色黒耀石を素材にした台形石器で、やはり両側縁をブラントィングと平行剥離により整形したもので、刃部に使用痕がみられる。

#### ⑤スクレイパー（第19図・第20図 18～21）

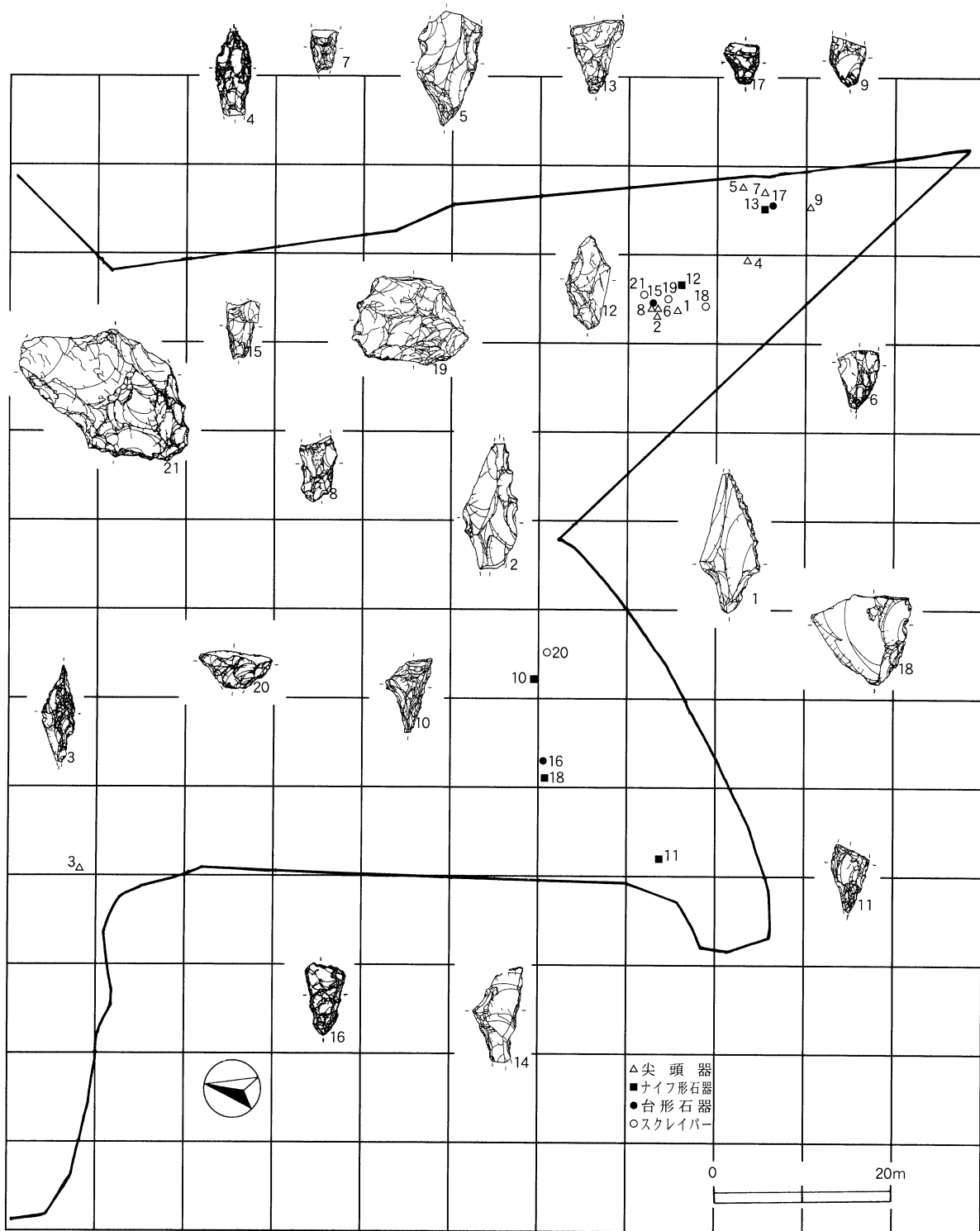
スクレイパーは合計4点出土している。

18は上牛鼻産の黒耀石を素材にしたスクレイパーで、一部欠落がみられるが、側縁部にブラントィングを施し刃部を形成している。

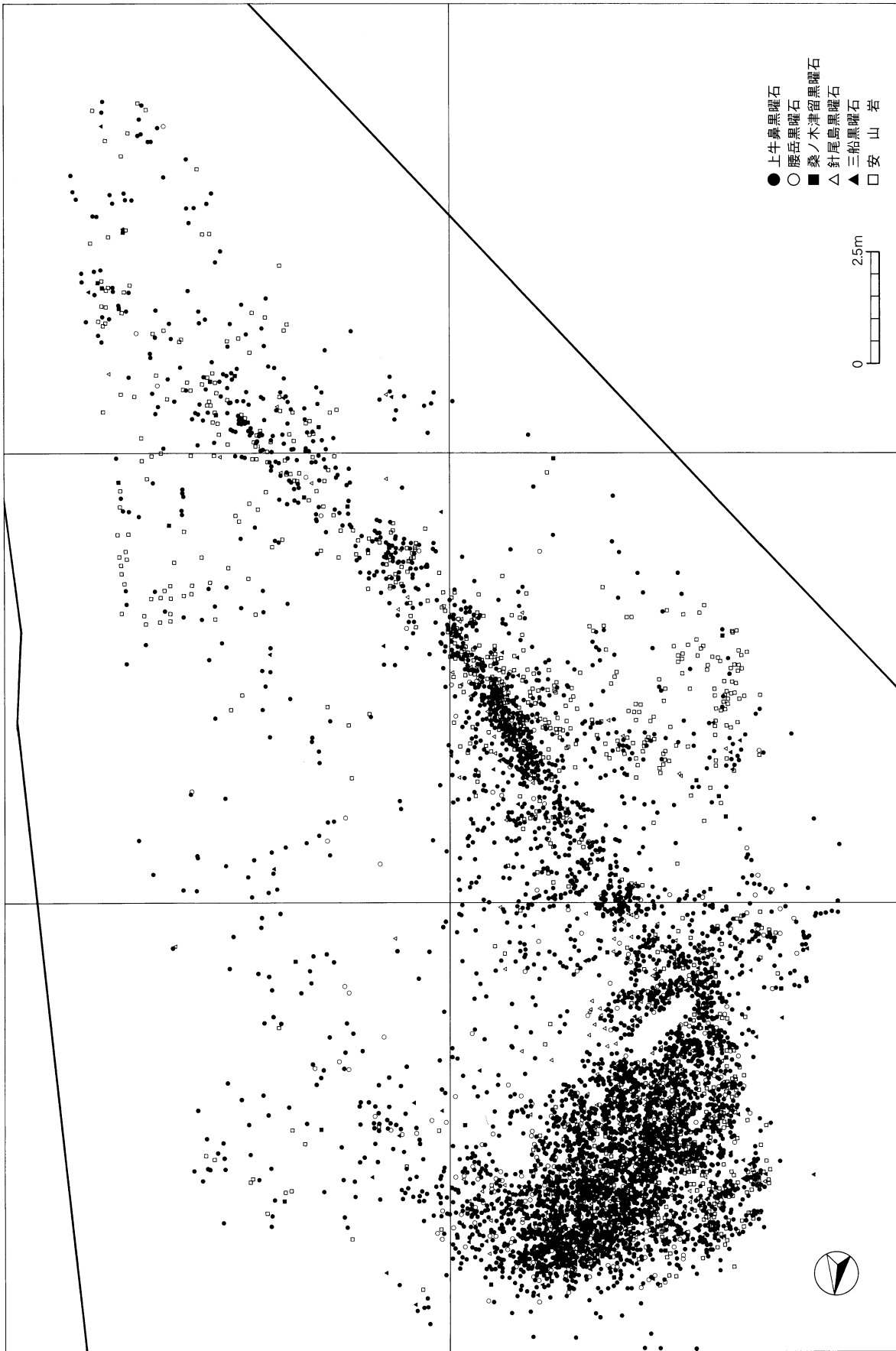
19はチャートの大型剥片を素材にして、側縁部にブラントィングによる刃部が施されている。

20は上牛鼻産黒耀石の横長剥片を素材にしたもので、側縁部の一部にブラントィングを施し刃部を形成している。

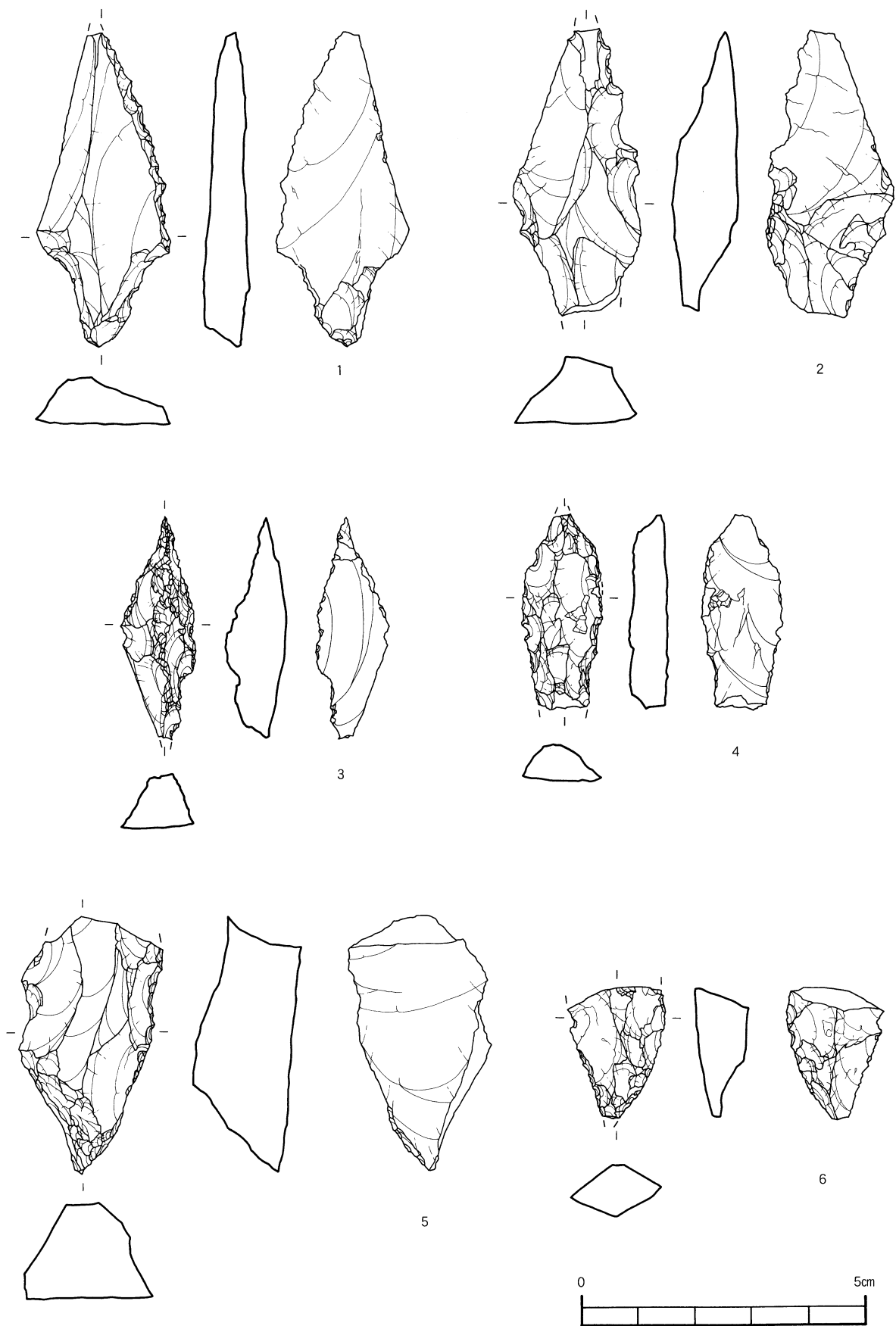
21は灰色黒耀石の大型剥片を素材にしたもので、腹面からのブラントィングにより刃部を形成している。



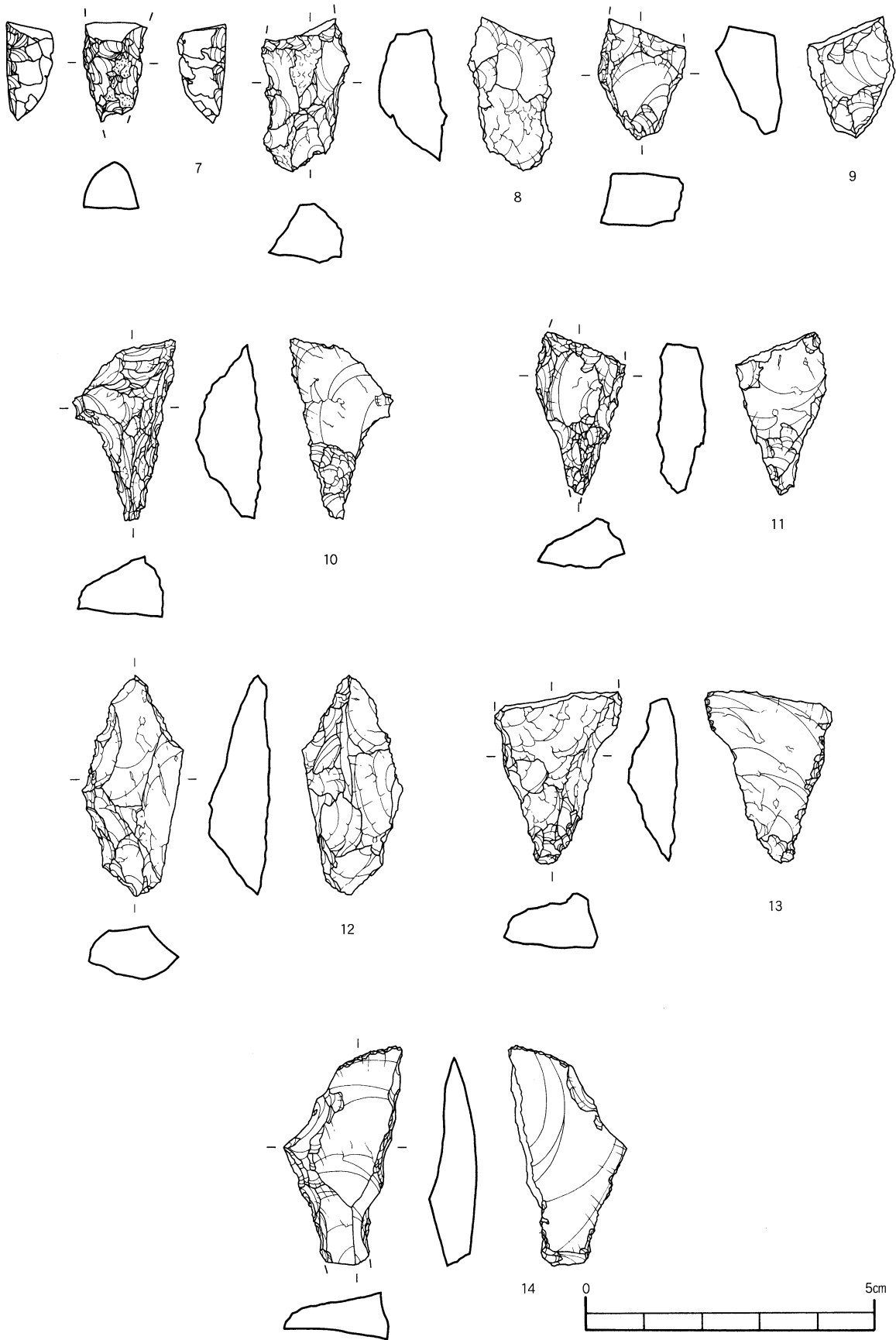
第15図 旧石器時代遺物出土状況① (尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・スクレイパー)



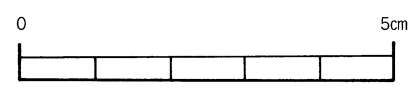
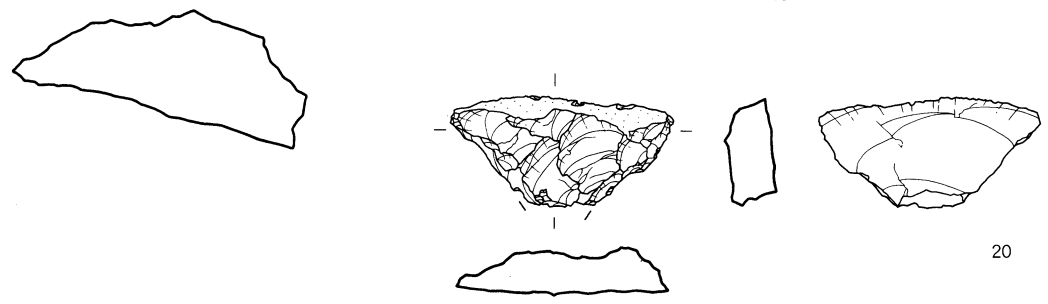
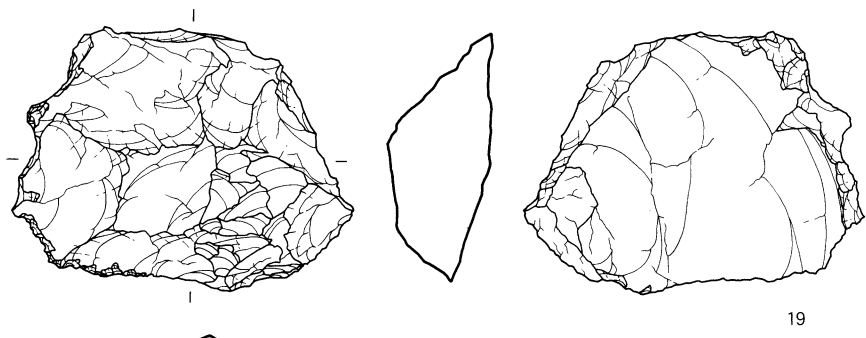
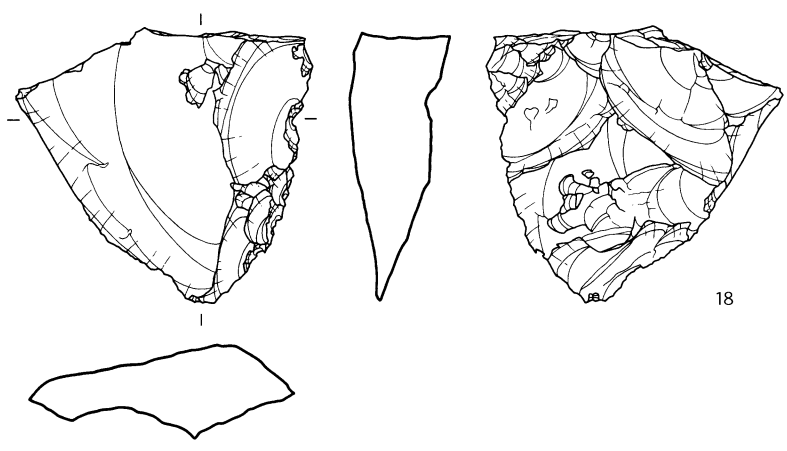
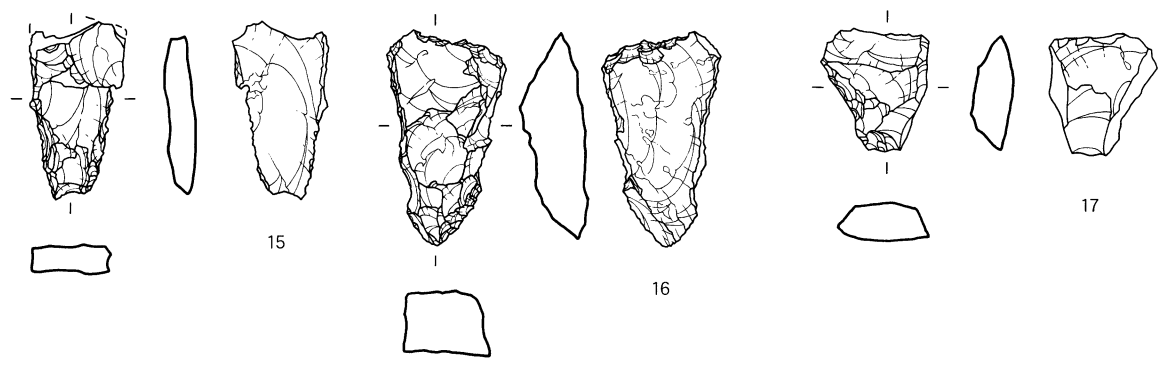
第16図 旧石器時代遺物出土状況② (VI・Ⅷ層石器石材別)



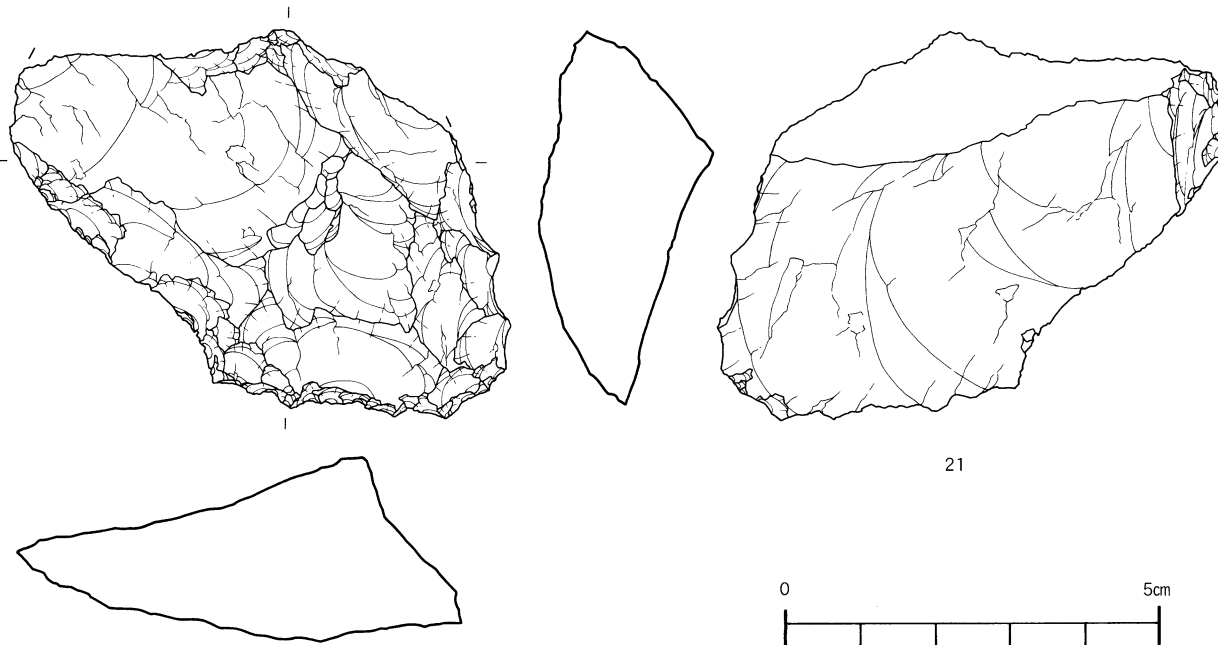
第17図 尖頭器 (1)



第18図 尖頭器・ナイフ形石器 (2)



第19図 台形石器・スクレイパー (3)



第20図 スクレイパー (4)

番号	器種	石材	区	層位	長さ	幅	厚さ	重量	遺物番号
1	尖頭器	流紋岩	C30	VI	5.50	2.35	0.8	9	5555
2	尖頭器	頁岩	C30	VI	5.05	2.25	1.2	11.2	6260
3	尖頭器	腰岳黒曜石	I23	VI	3.90	1.3	1.05	3.6	20672
4	尖頭器	安山岩	C31	VI	3.40	1.045	0.65	402	6700
5	尖頭器	頁岩	B31	IV	4.50	2.55	1.7	19.7	2653
6	尖頭器	安山岩	C30	VI	2.30	1.7	1	2.7	2979
7	尖頭器	上牛鼻黒曜石	B31	VI	1.70	1.1	0.8	1.4	3568
8	尖頭器	上牛鼻黒曜石	C30	VI	2.65	1.55	1.05	3.6	2960
9	尖頭器	上牛鼻黒曜石	B32	III	2.05	1.5	1.1	3.5	2569
10	ナイフ	上牛鼻黒曜石	G28	VI	3.10	1.8	1.15	4	20329
11	ナイフ	上牛鼻黒曜石	I30	VI	2.80	1.55	0.85	3.2	20404
12	ナイフ	安山岩	C30	VI	3.80	1.75	0.9	5.6	6150
13	ナイフ	安山岩	B31	III	2.95	2.2	0.95	4.8	2375
14	ナイフ	腰岳黒曜石	H29	VI	3.80	2.05	0.8	5.2	20512
15	台形石器	安山岩	C30	VI	2.40	1.3	0.45	1.4	2936
16	台形石器	日東黒曜石	H29	IV	2.90	1.6	0.9	3.4	74
17	台形石器	安山岩	B31	III	1.45	1.8	0.65	1.1	2557
18	スクレイパー	上牛鼻黒曜石	C30	VI	3.70	3.95	1.25	13.8	3526
19	スクレイパー	チャート	C30	VI	3.50	4.55	1.9	22.5	5500
20	スクレイパー	上牛鼻黒曜石	G29	VI	1.45	3	0.65	3.1	20257
21	スクレイパー	安山岩	C30	VI	5.15	6.7	2.5	59.6	6296

第3表 尖頭器・ナイフ・台形石器・スクレイパー観察表



## (2) 細石刃

今里遺跡ではVI層を中心に細石刃が325点出土している。石材は黒曜石とハリ質安山岩を素材に用いている。黒曜石は地元の樋脇町上牛鼻産が最も多く、佐賀県腰岳産、長崎県針尾島産、熊本・宮崎・鹿児島県の県境にある桑ノ木津留産、鹿児島市三船産に分けられる。それぞれ個体数は、上牛鼻産211点(65%)、腰岳産60点(19%)、針尾島産22点(7%)、桑ノ木津留産21点(6%)、三船産4点(1%)、ハリ質安山岩7点(2%)である。

細石刃には三部切裁がみられ、打瘤が残っていて身長の高いものを頭部、打瘤が残っていて身長の高いものを頭・中間部とした。中間部は、身長の高短に関係なく打瘤が残ってなく尾部を折断したものである。尾部は短く、反りがあることが多い。全体的に尾部の出土が少なく見えるが、尾部のみで細石刃と断定するのは難しく、碎片のなかに多く含まれている可能性がある。

石材別の部位点数は次の通りである。

上牛鼻産黒曜石 211点

完形品13点(6%)、頭部8点(4%)、頭・中間部80点(38%)、中間部75点(35%)、中間・尾部27点(13%)、尾部8点(4%)

腰岳産黒曜石 60点

頭部2点(3%)、頭・中間部30点(50%)、中間部14点(24%)、中間・尾部12点(20%)、尾部2点(3%)

針尾島産黒曜石 22点

頭・中間部12点(55%)、中間部10点(45%)

桑ノ木津留産黒曜石 21点

完形品1点(5%)、頭部2点(10%)、頭・中間部13点(61%)、中間部3点(14%)、中間・尾部2点(10%)

三船産黒曜石 4点

頭部1点、頭・中間部2点、中間部1点

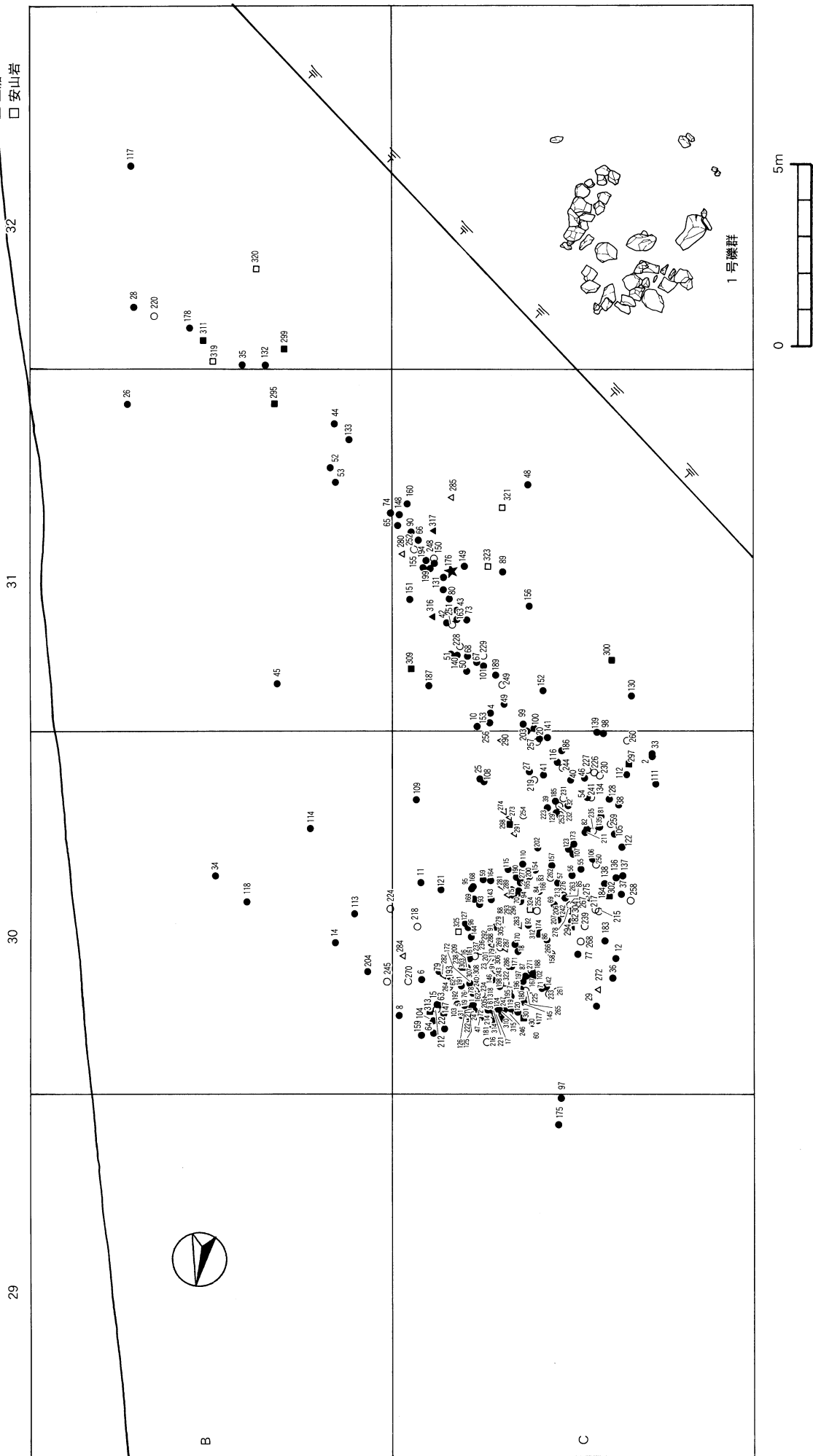
ハリ質安山岩 7点

中間部7点

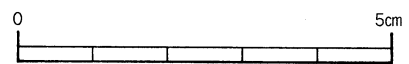
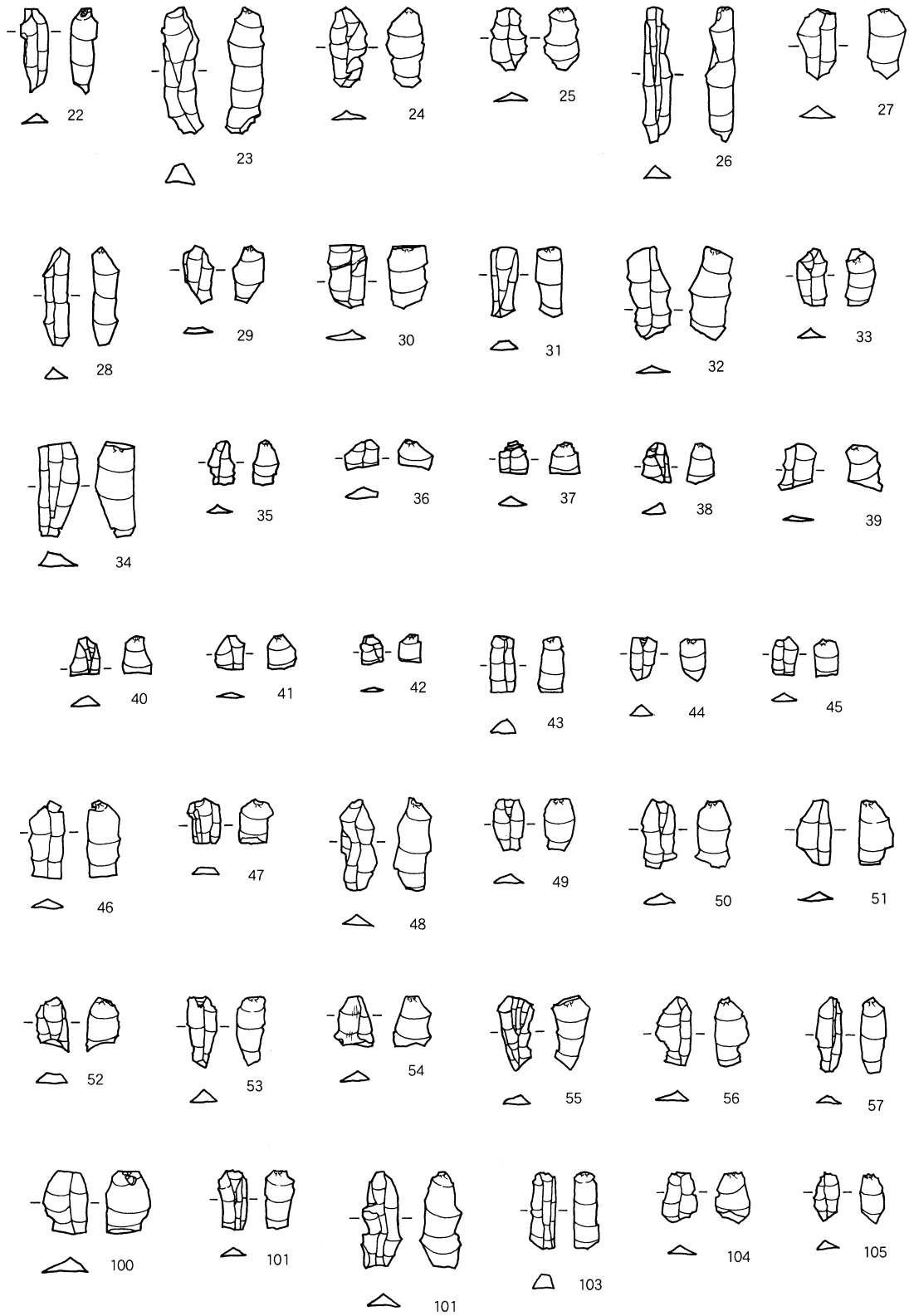
これらの結果から、石材の相違等より形態が異なることがわかる。

刃部を使用による刃こぼれは、あまり顕著でない。幅は、3～9mmの間に大部分が納まるが、4～6mmの幅を持つものが大多数である。

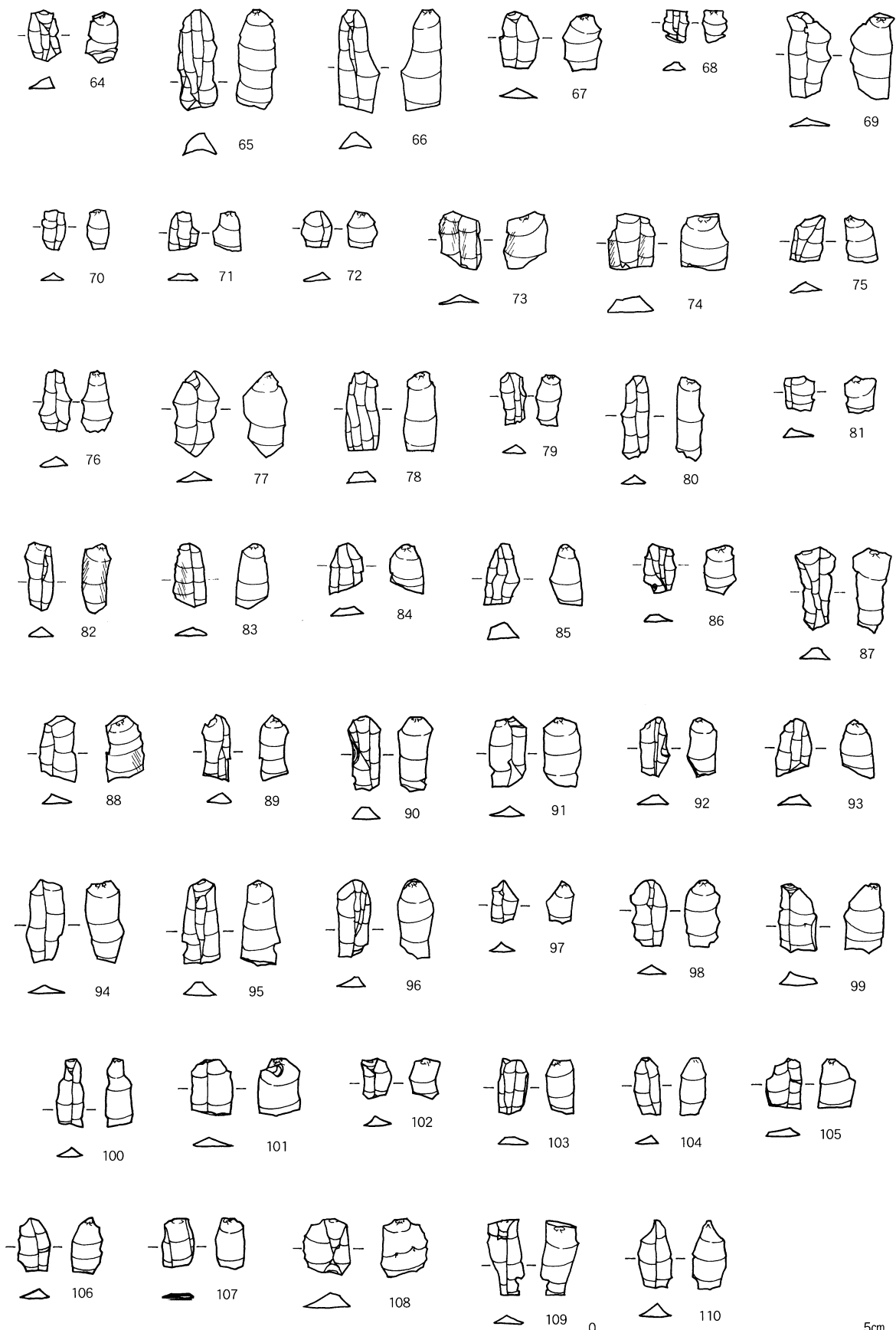
- 上牛鼻
- 腰岳
- △ 針尾 (西北九州)
- 桑ノ木津留
- ▲ 三船
- 安山岩



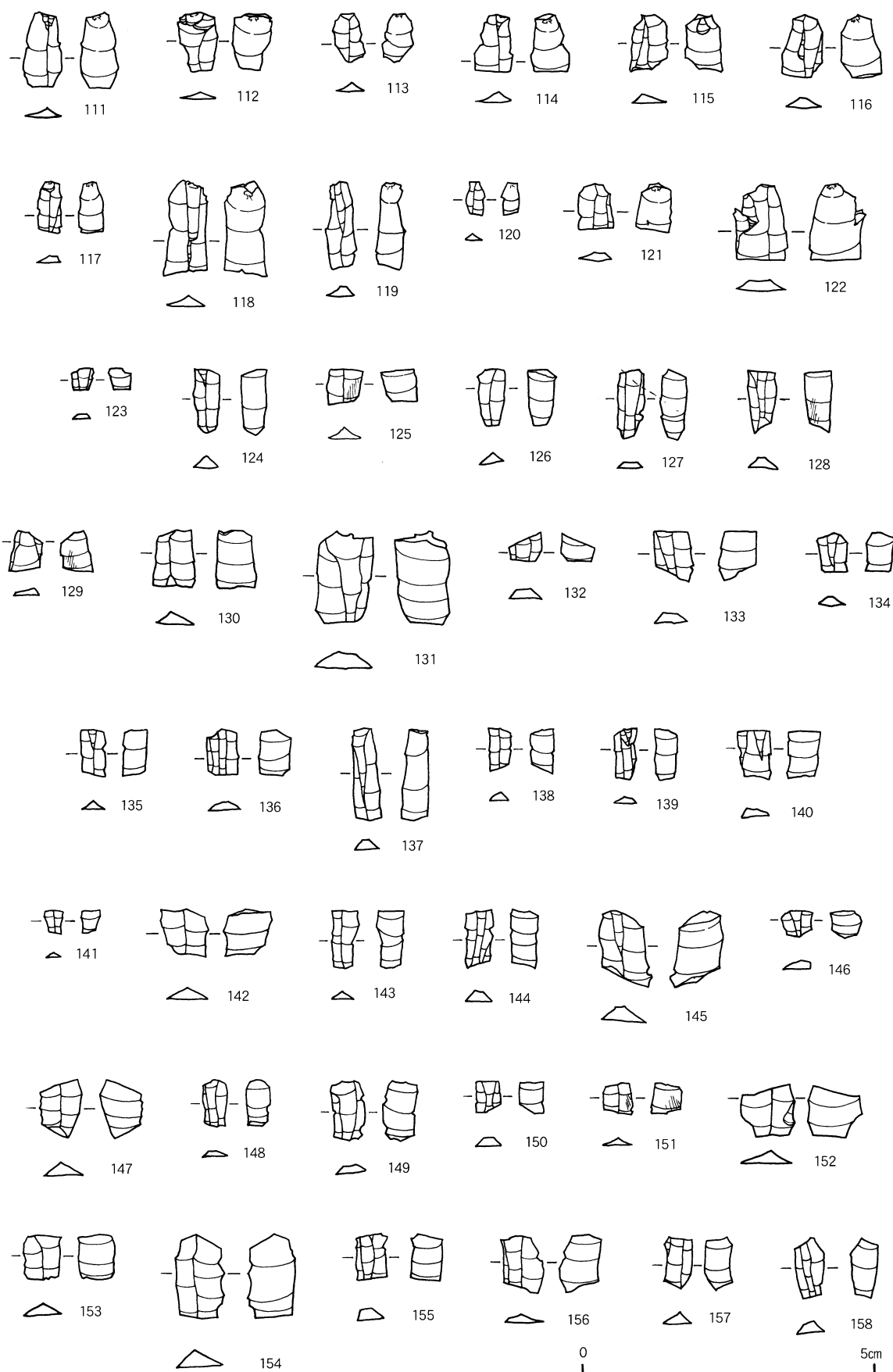
第21図 旧石器時代遺物出土状況③細石刃



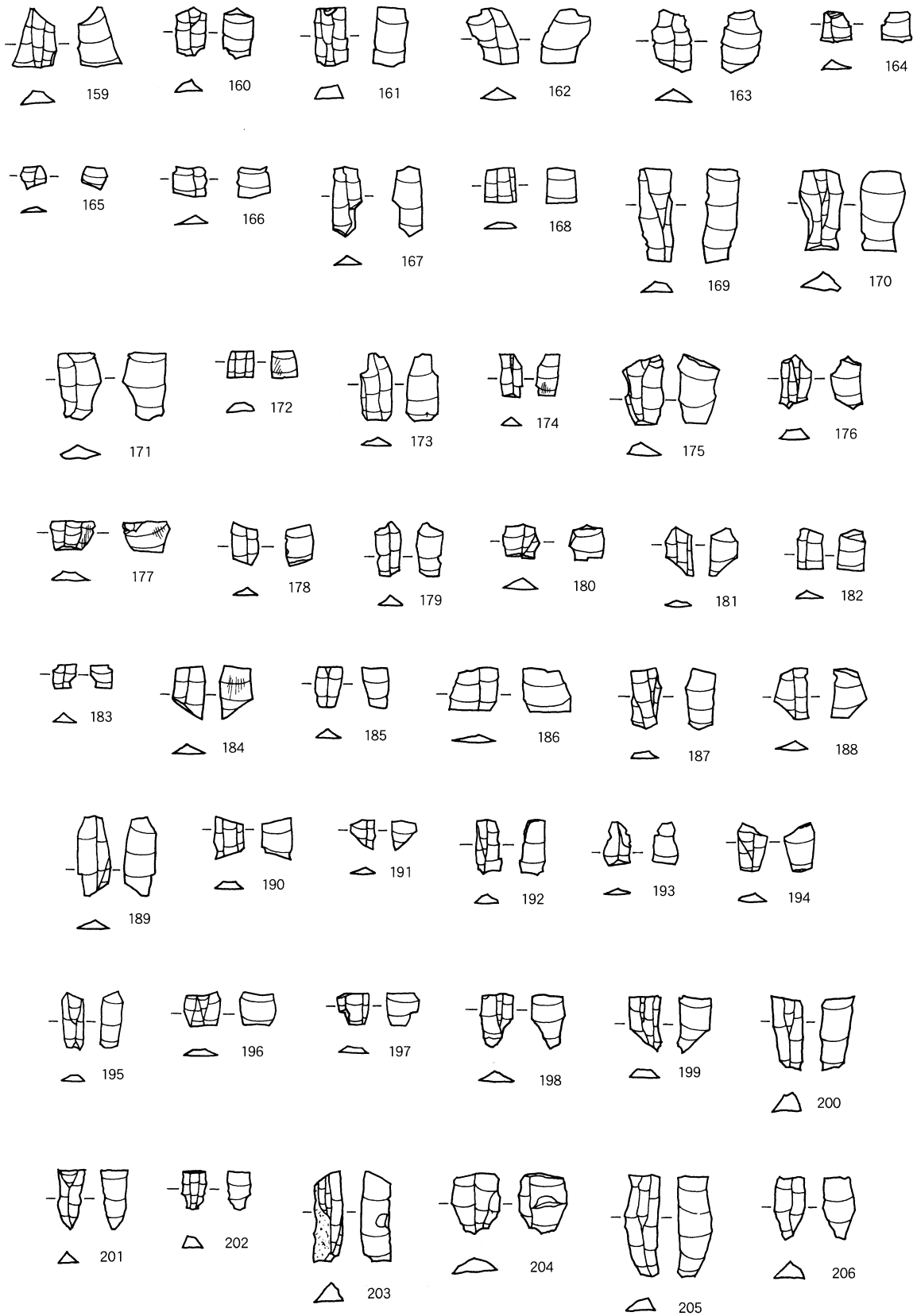
第22図 細石刃 (1)



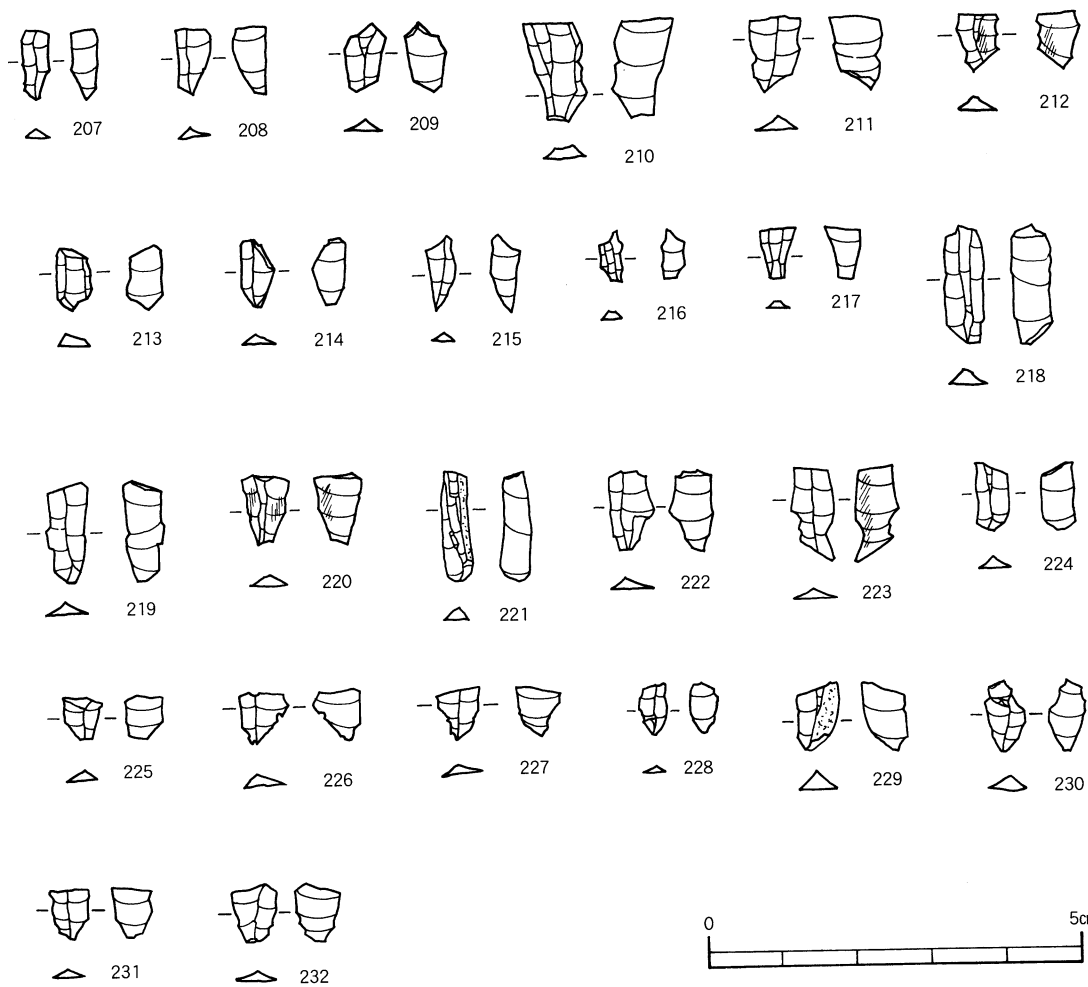
第23図 細石刃 (2)



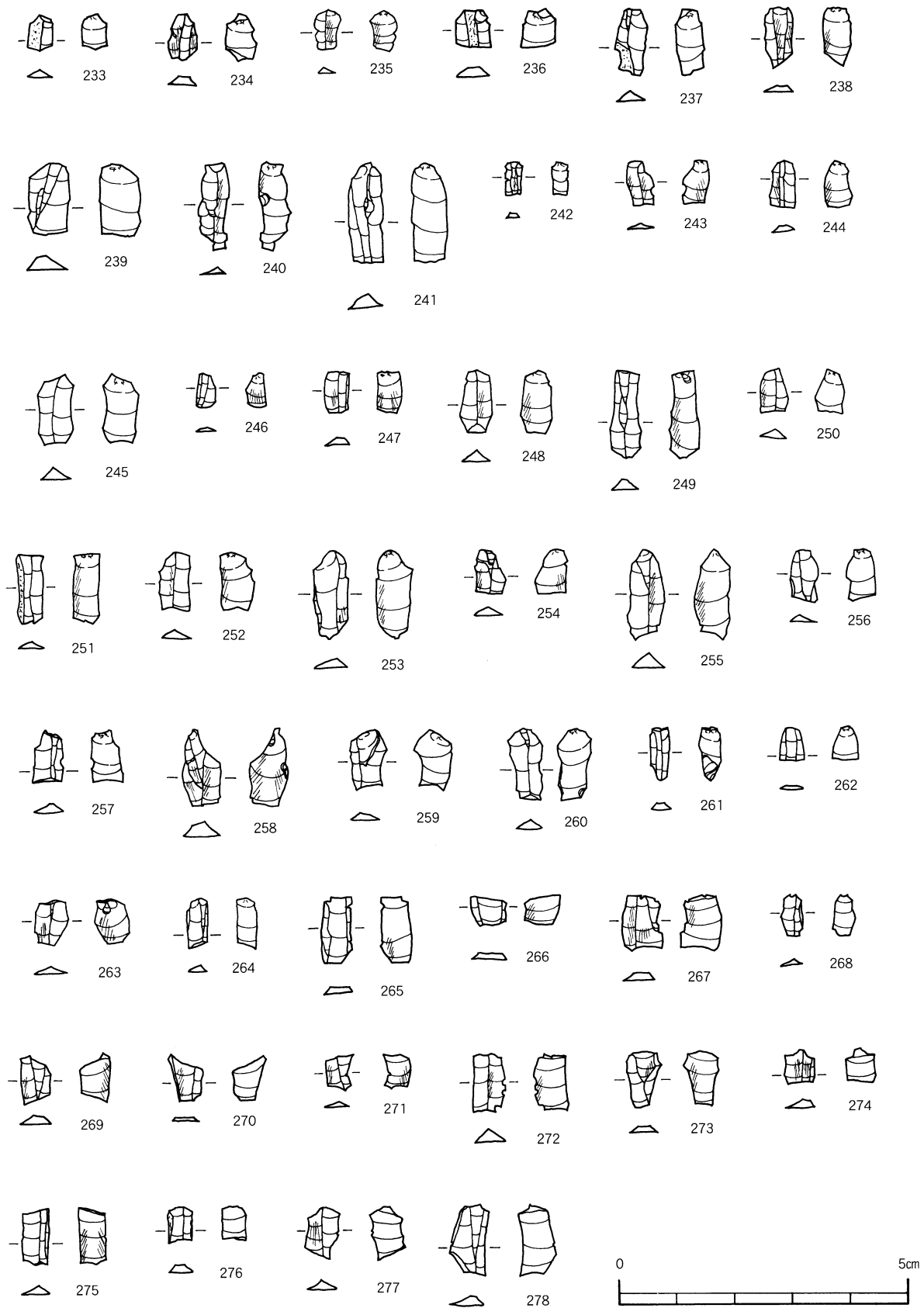
第24図 細石刃 (3)



第25図 細石刃 (4)

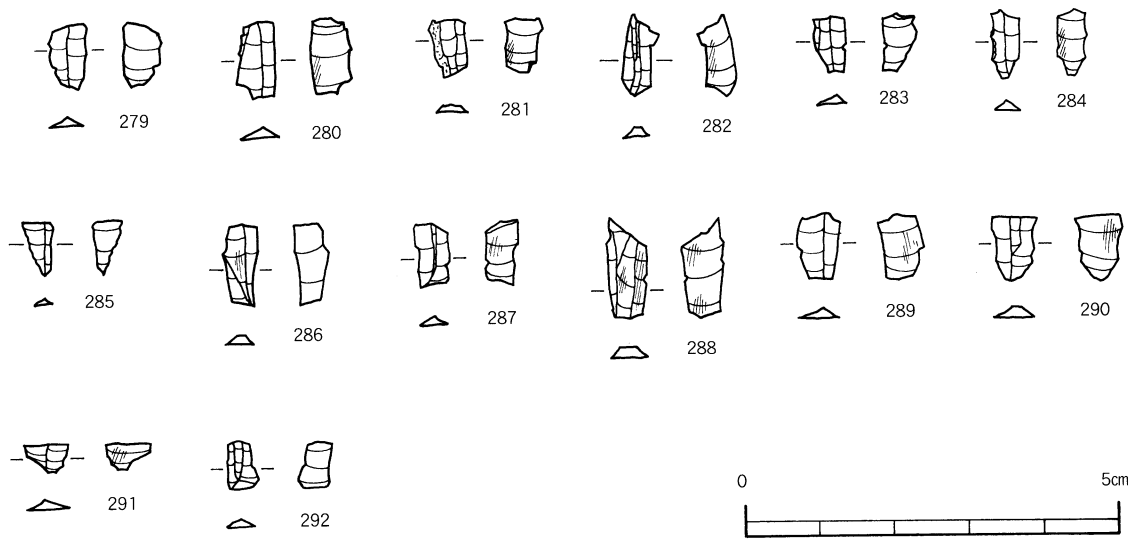


第26図 細石刃 (5)

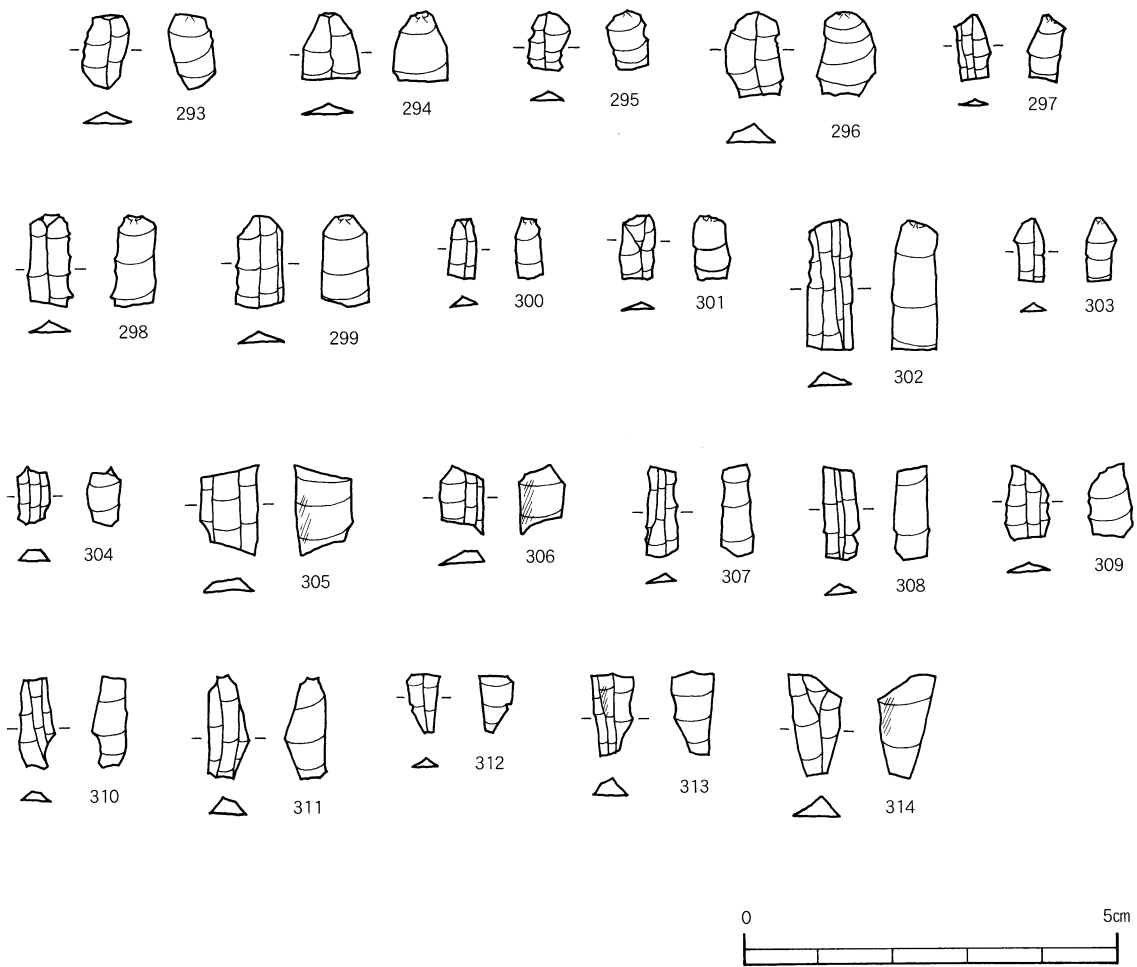


第27図 細石刃 (6)

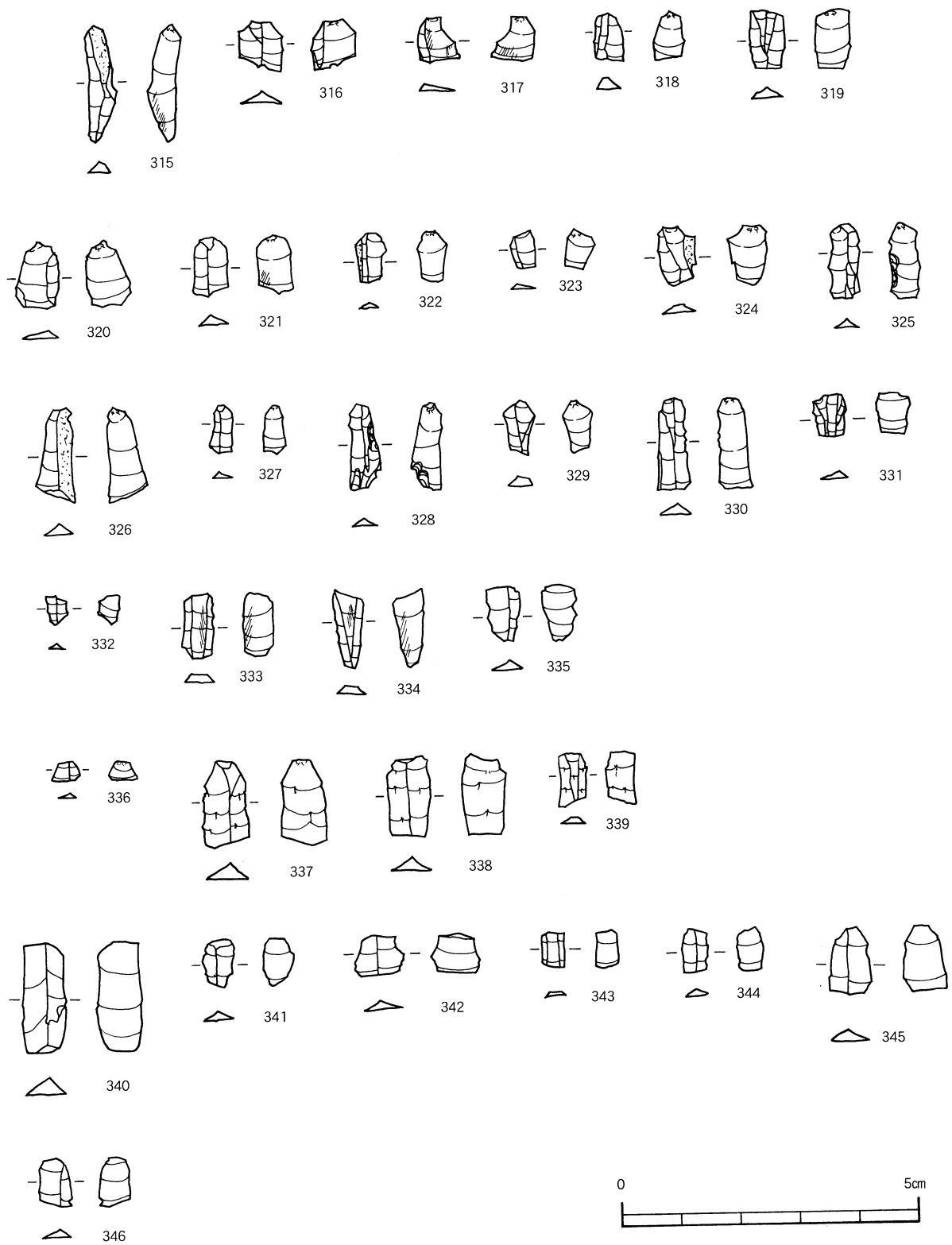




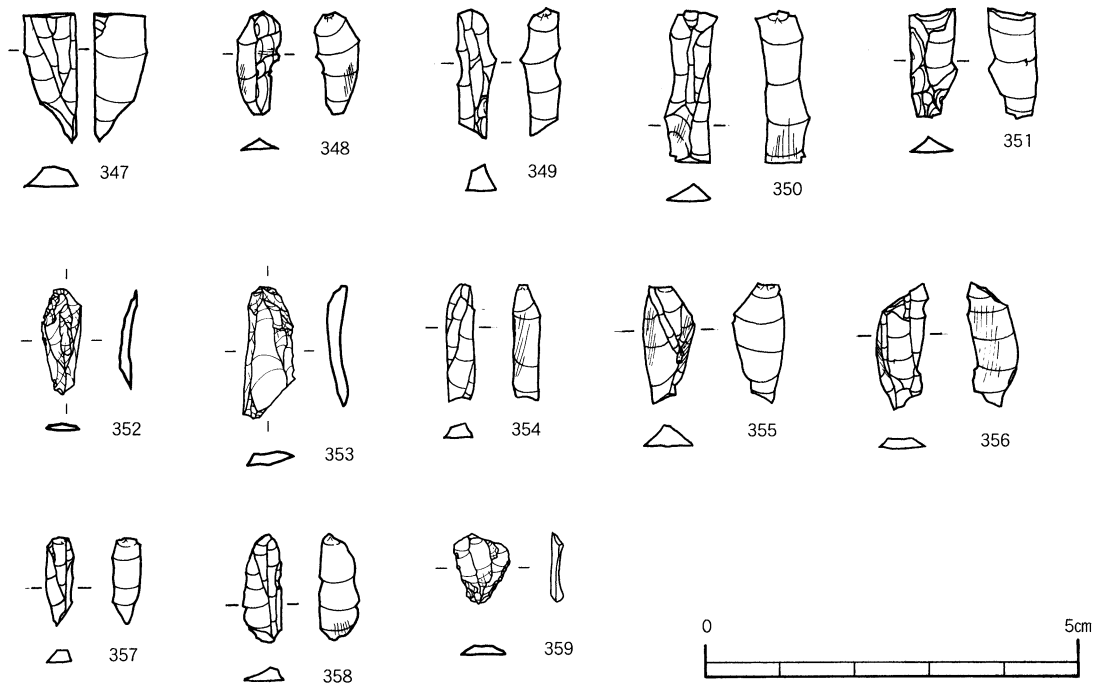
第28図 細石刃 (7)



第29図 細石刃 (8)



第30図 細石刃 (9)



第31図 調整剥片

番号	器種	石材	区	層	部首	長さ	幅	厚さ	重量	注記番号
22	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	完形品	1.40	0.5	0.1	0.08	3141
23	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	完形品	2.10	0.6	0.3	0.30	3496
24	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	完形品	1.30	0.6	0.1	0.09	4257
25	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VI	完形品	1.00	0.6	0.1	0.06	4959
26	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	完形品	2.20	0.5	0.2	0.20	6463
27	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	完形品	1.20	0.6	0.2	0.07	7162
28	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	完形品	1.60	0.4	0.2	0.08	7629
29	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	完形品	0.90	0.5	0.1	0.04	8156
30	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	完形品	1.00	0.6	0.2	0.09	8412
31	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VII	完形品	1.20	0.4	0.2	0.09	8895
32	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VII	完形品	1.50	0.7	0.1	0.12	8614
33	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	完形品	0.90	0.5	0.2	0.07	8706
34	細石刃	上牛鼻黒曜石	I30	VI	完形品	1.50	0.6	0.3	0.23	8756
35	細石刃	上牛鼻黒曜石	B30	VI	頭部	0.70	0.4	0.1	0.03	4134
36	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭部	0.40	0.6	0.2	0.04	4749
37	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭部	0.50	0.5	0.1	0.03	7050
38	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭部	0.60	0.5	0.1	0.04	7102
39	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭部	0.70	0.5	0.2	0.06	7349
40	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭部	0.60	0.5	0.2	0.04	7612
41	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VII	頭部	0.60	0.5	0.1	0.02	8817
42	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VII	頭部	0.50	0.4	0.1	0.01	8922
43	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	0.90	0.4	0.2	0.09	2729
44	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	0.70	0.4	0.1	0.03	2878
45	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	0.60	0.4	0.1	0.03	3147
46	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.30	0.6	0.1	0.09	3391
47	細石刃	上牛鼻黒曜石	B31	VI	頭中部	0.70	0.4	0.1	0.04	3635
48	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.50	0.5	0.2	0.17	3892
49	細石刃	上牛鼻黒曜石	B32	VI	頭中部	0.80	0.5	0.2	0.06	3986
50	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.10	0.5	0.1	0.09	4179
51	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.10	0.5	0.1	0.07	4206
52	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	0.90	0.5	0.2	0.07	4295
53	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.10	0.5	0.2	0.08	4440
54	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	0.80	0.6	0.1	0.06	4488
55	細石刃	上牛鼻黒曜石	B30	VI	頭中部	1.20	0.6	0.1	0.10	4528
56	細石刃	上牛鼻黒曜石	B32	VI	頭中部	1.10	0.6	0.2	0.09	4596
57	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.20	0.4	0.1	0.05	4684
58	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.00	0.7	0.2	0.15	4768
59	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	0.90	0.4	0.1	0.05	4837
60	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.60	0.6	0.2	0.17	4888
61	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.20	0.4	0.2	0.11	4898
62	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	0.80	0.6	0.2	0.60	4903
63	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VI	頭中部	0.70	0.4	0.1	0.03	5106
64	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VI	頭中部	0.90	0.6	0.2	0.09	5110
65	細石刃	上牛鼻黒曜石	B31	VI	頭中部	1.70	0.7	0.3	0.30	5243
66	細石刃	上牛鼻黒曜石	B31	VI	頭中部	1.80	0.7	0.3	0.25	5331
67	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.00	0.7	0.2	0.13	5349
68	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	0.60	0.4	0.1	0.03	5651
69	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VI	頭中部	1.40	0.7	0.2	0.16	5706

第4表 細石刃観察表(1)

番号	器種	石材	区	層	部首	長さ	幅	厚さ	重量	注記番号
70	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VI	頭中部	0.70	0.4	0.2	0.03	5846
71	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VI	頭中部	0.70	0.5	0.1	0.04	5884
72	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VI	頭中部	0.60	0.5	0.1	0.04	5896
73	細石刃	上牛鼻黒曜石	B31	VII	頭中部	1.00	0.8	0.1	0.09	5978
74	細石刃	上牛鼻黒曜石	B31	VII	頭中部	1.00	0.8	0.2	0.24	5983
75	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	0.80	0.5	0.1	0.07	6064
76	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.10	0.5	0.2	0.09	6110
77	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.50	0.8	0.2	0.20	6114
78	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.40	0.6	0.2	0.16	6127
79	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	0.90	0.4	0.2	0.08	6163
80	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.50	0.5	0.1	0.09	6343
81	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	0.60	0.5	0.1	0.05	6392
82	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.10	0.4	0.2	0.10	6407
83	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.10	0.6	0.1	0.08	6438
84	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	0.90	0.6	0.1	0.09	6519
85	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.10	0.5	0.2	0.12	6522
86	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VI	頭中部	0.80	0.6	0.1	0.06	6575
87	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VI	頭中部	1.40	0.7	0.2	0.19	6603
88	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VI	頭中部	1.20	0.6	0.2	0.19	6796
89	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VI	頭中部	1.20	0.5	0.2	0.09	6799
90	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.30	0.6	0.2	0.15	6948
91	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.20	0.6	0.2	0.15	6964
92	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.00	0.5	0.1	0.07	7007
93	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.00	0.6	0.2	0.10	7118
94	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VI	頭中部	1.40	0.6	0.1	0.11	7278
95	細石刃	上牛鼻黒曜石	B31	VI	頭中部	1.40	0.6	0.2	0.18	7291
96	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.30	0.6	0.1	0.13	7406
97	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	0.70	0.4	0.2	0.05	7434
98	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.10	0.6	0.1	0.07	7553
99	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.20	0.7	0.2	0.16	7615
100	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.20	0.5	0.2	0.07	7635
101	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VII	頭中部	1.00	0.7	0.2	0.12	7676
102	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VII	頭中部	0.70	0.5	0.1	0.05	7780
103	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VII	頭中部	0.90	0.5	0.1	0.08	7781
104	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VII	頭中部	1.10	0.5	0.1	0.06	7817
105	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	0.90	0.6	0.2	0.07	7829
106	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	0.90	0.6	0.1	0.07	7852
107	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	0.90	0.6	0.1	0.05	7914
108	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.00	0.8	0.2	0.16	7967
109	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.30	0.6	0.2	0.13	8054
110	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VII	頭中部	1.20	0.6	0.2	0.12	8189
111	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VII	頭中部	1.30	0.7	0.2	0.12	8202
112	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.00	0.7	0.1	0.08	8449
113	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	0.80	0.5	0.1	0.06	8457
114	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.00	0.6	0.2	0.11	8469
115	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.00	0.6	0.2	0.10	8524
116	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VII	頭中部	1.10	0.7	0.2	0.14	8599
117	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VII	頭中部	0.90	0.4	0.1	0.04	8603

第5表 細石刃観察表(2)

番号	器種	石材	区	層	部首	長さ	幅	厚さ	重量	注記番号
118	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VII	頭中部	1.60	0.7	0.2	0.21	8651
119	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	頭中部	1.50	0.5	0.2	0.11	8803
120	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VII	頭中部	0.60	0.3	0.1	0.02	8867
121	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VII	頭中部	0.80	0.6	0.1	0.06	8892
122	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VII	頭中部	1.30	0.9	0.2	0.27	8933
123	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.40	0.4	0.1	0.01	2890
124	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	1.10	0.5	0.2	0.09	3168
125	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.60	0.6	0.2	0.07	3172
126	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	1.00	0.5	0.2	0.08	3272
127	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	1.20	0.5	0.2	0.08	3290
128	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	1.10	0.5	0.2	0.11	3305
129	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.70	0.5	0.1	0.04	3392
130	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	1.00	0.8	0.2	0.14	3414
131	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	1.60	1	0.3	0.48	3430
132	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.50	0.6	0.2	0.04	3484
133	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.90	0.7	0.2	0.10	3511
134	細石刃	上牛鼻黒曜石	B30	VI	中間部	0.70	0.5	0.2	0.05	3747
135	細石刃	上牛鼻黒曜石	B30	VI	中間部	0.80	0.4	0.1	0.05	3776
136	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.80	0.6	0.1	0.07	3851
137	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	1.60	0.5	0.2	0.17	3889
138	細石刃	上牛鼻黒曜石	B32	VI	中間部	0.70	0.4	0.2	0.07	3923
139	細石刃	上牛鼻黒曜石	B30	VI	中間部	0.90	0.4	0.1	0.04	4117
140	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.80	0.5	0.1	0.10	4241
141	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.40	0.3	0.1	0.01	4243
142	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.80	0.8	0.2	0.10	4382
143	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	1.00	0.4	0.1	0.05	4388
144	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	1.00	0.4	0.2	0.09	4419
145	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	1.30	0.8	0.2	0.23	4699
146	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.50	0.5	0.1	0.03	4706
147	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	1.00	0.7	0.2	0.13	4708
148	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.80	0.4	0.1	0.04	4793
149	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	1.00	0.6	0.2	0.10	4835
150	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.50	0.4	0.1	0.03	4864
151	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VI	中間部	0.50	0.5	0.1	0.03	4928
152	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VI	中間部	0.90	0.9	0.3	0.18	5117
153	細石刃	上牛鼻黒曜石	B31	VI	中間部	0.70	0.6	0.2	0.09	5237
154	細石刃	上牛鼻黒曜石	B31	VI	中間部	1.40	0.8	0.2	0.30	5263
155	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.80	0.6	0.1	0.07	5348
156	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	1.00	0.7	0.1	0.10	5367
157	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.80	0.5	0.2	0.08	5384
158	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	1.00	0.5	0.2	0.08	5465
159	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	1.00	0.7	0.2	0.13	5467
160	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.80	0.6	0.2	0.09	5688
161	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VI	中間部	1.00	0.6	0.2	0.16	5897
162	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	1.00	0.8	0.2	0.09	6017
163	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	1.10	0.6	0.2	0.12	6305
164	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.50	0.5	0.1	0.04	6340
165	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.40	0.4	0.1	0.01	6352

第6表 細石刃観察表 (3)

番号	器種	石材	区	層	部首	長さ	幅	厚さ	重量	注記番号
166	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.50	0.6	0.1	0.03	6386
167	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	1.20	0.5	0.2	0.11	6424
168	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.60	0.5	0.1	0.04	6517
169	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VI	中間部	1.70	0.5	0.2	0.20	6571
170	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VI	中間部	1.40	0.7	0.3	0.27	6647
171	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VI	中間部	1.10	0.7	0.2	0.14	6657
172	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VI	中間部	0.50	0.4	0.1	0.03	6676
173	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VII	中間部	1.10	0.5	0.1	0.08	6751
174	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VI	中間部	0.70	0.4	0.1	0.03	6762
175	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	1.10	0.7	0.2	0.16	6878
176	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VII	中間部	0.90	0.5	0.1	0.07	7233
177	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VII	中間部	0.50	0.7	0.1	0.05	7283
178	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VII	中間部	0.70	0.4	0.1	0.03	7299
179	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.90	0.4	0.2	0.08	7333
180	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.60	0.6	0.2	0.07	7466
181	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VII	中間部	0.70	0.5	0.1	0.03	7472
182	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.70	0.4	0.2	0.06	7596
183	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.40	0.4	0.1	0.02	7619
184	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VII	中間部	0.90	0.6	0.2	0.08	7682
185	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.70	0.5	0.2	0.04	7811
186	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.80	0.8	0.2	0.08	7814
187	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	1.00	0.5	0.1	0.07	7831
188	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.90	0.6	0.1	0.07	7958
189	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	1.30	0.6	0.2	0.12	8036
190	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.70	0.5	0.1	0.05	8037
191	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.50	0.4	0.1	0.02	8069
192	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.90	0.4	0.2	0.07	8203
193	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.70	0.5	0.1	0.03	8434
194	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VII	中間部	0.80	0.5	0.1	0.05	8493
195	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.90	0.3	0.1	0.04	8516
196	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中間部	0.60	0.6	0.1	0.05	8642
197	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VII	中間部	0.50	0.5	0.1	0.04	8951
198	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中尾部	0.90	0.6	0.1	0.08	2818
199	細石刃	上牛鼻黒曜石	B32	VI	中尾部	0.90	0.6	0.1	0.07	4012
200	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中尾部	1.20	0.5	0.3	0.21	4229
201	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中尾部	1.00	0.4	0.1	0.05	4237
202	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中尾部	0.60	0.4	0.2	0.04	4267
203	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中尾部	1.50	0.5	0.3	0.24	4364
204	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中尾部	1.00	0.8	0.2	0.17	4688
205	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中尾部	1.70	0.6	0.2	0.17	4772
206	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中尾部	1.00	0.5	0.2	0.12	4884
207	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中尾部	0.90	0.4	0.2	0.04	4907
208	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VI	中尾部	0.90	0.4	0.1	0.05	4991
209	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中尾部	0.90	0.6	0.2	0.07	5610
210	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VI	中尾部	1.30	0.8	0.2	0.20	5933
211	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中尾部	1.00	0.7	0.2	0.10	6153
212	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中尾部	0.70	0.5	0.2	0.07	6468
213	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中尾部	0.80	0.5	0.2	0.06	7148

第7表 細石刃観察表(4)

番号	器種	石材	区	層	部首	長さ	幅	厚さ	重量	注記番号
214	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中尾部	0.90	0.4	0.1	0.05	7157
215	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VII	中尾部	1.00	0.3	0.1	0.03	7237
216	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中尾部	0.70	0.3	0.1	0.02	7360
217	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中尾部	0.70	0.5	0.1	0.02	7570
218	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中尾部	1.50	0.5	0.2	0.19	7573
219	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中尾部	1.30	0.6	0.2	0.08	7626
220	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VI	中尾部	0.90	0.6	0.1	0.06	7654
221	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中尾部	1.50	0.4	0.2	0.13	7816
222	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	中尾部	1.00	0.6	0.1	0.08	8420
223	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VII	中尾部	1.20	0.5	0.1	0.07	8791
224	細石刃	上牛鼻黒曜石	C31	VII	中尾部	0.90	0.4	0.2	0.06	8868
225	細石刃	上牛鼻黒曜石	B30	VI	尾部	0.60	0.5	0.2	0.03	4518
226	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	尾部	0.70	0.6	0.1	0.04	5645
227	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	尾部	0.60	0.6	0.1	0.03	6221
228	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	尾部	0.60	0.4	0.1	0.01	6942
229	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	尾部	0.90	0.6	0.2	0.11	6960
230	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	尾部	0.90	0.5	0.2	0.05	7060
231	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VI	尾部	0.70	0.5	0.1	0.03	7061
232	細石刃	上牛鼻黒曜石	C30	VII	尾部	0.80	0.6	0.1	0.04	30040
233	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VI	頭部	0.60	0.4	0.1	0.03	8147
234	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VII	頭部	0.80	0.5	0.2	0.06	8314
235	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VI	頭中部	0.70	0.4	0.1	0.02	2755
236	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VI	頭中部	0.70	0.6	0.2	0.10	3053
237	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VI	頭中部	1.10	0.5	0.1	0.07	3154
238	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VI	頭中部	1.00	0.5	0.1	0.06	3187
239	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VI	頭中部	1.20	0.7	0.3	0.23	3247
240	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VI	頭中部	1.50	0.5	0.1	0.09	3884
241	細石刃	腰岳黒曜石	B32	VI	頭中部	1.70	0.6	0.2	0.23	3984
242	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VI	頭中部	0.60	0.5	0.1	0.01	4251
243	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VI	頭中部	0.80	0.5	0.1	0.03	4288
244	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VI	頭中部	0.80	0.5	0.1	0.05	4437
245	細石刃	腰岳黒曜石	B30	VI	頭中部	1.20	0.6	0.2	0.12	4670
246	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VI	頭中部	0.60	0.4	0.1	0.02	4696
247	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VI	頭中部	0.80	0.4	0.1	0.04	4816
248	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VI	頭中部	1.10	0.5	0.2	0.09	5341
249	細石刃	腰岳黒曜石	C31	VI	頭中部	1.50	0.5	0.3	0.15	5904
250	細石刃	腰岳黒曜石	C31	VI	頭中部	0.80	0.5	0.1	0.05	5924
251	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VII	頭中部	1.20	0.5	0.1	0.07	6051
252	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VI	頭中部	1.00	0.6	0.1	0.07	6069
253	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VI	頭中部	1.50	0.6	0.2	0.15	6070
254	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VI	頭中部	0.80	0.5	0.2	0.05	6300
255	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VI	頭中部	1.10	0.6	0.3	0.19	6479
256	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VII	頭中部	0.90	0.5	0.1	0.06	6846
257	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VI	頭中部	0.90	0.5	0.2	0.07	7411
258	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VI	頭中部	1.30	0.7	0.2	0.15	7414
259	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VI	頭中部	1.00	0.6	0.1	0.07	7455
260	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VI	頭中部	1.20	0.6	0.2	0.10	7545
261	細石刃	腰岳黒曜石	C30	VI	頭中部	8.00	0.3	0.1	0.04	7617

第8表 細石刃観察表(5)



番号	器種	石材	区	層	部首	長さ	幅	厚さ	重量	注記番号
262	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅶ	頭中部	0.60	0.4	0.1	0.02	7777
263	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅵ	頭中部	0.70	0.5	0.1	0.04	7870
264	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅵ	頭中部	0.80	0.4	0.1	0.03	8414
265	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅵ	中間部	1.20	0.6	0.1	0.09	3875
266	細石刃	腰岳黒曜石	B30	Ⅵ	中間部	0.50	0.6	0.1	0.02	4658
267	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅵ	中間部	0.90	0.7	0.1	0.10	4698
268	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅵ	中間部	0.70	0.4	0.1	0.01	5595
269	細石刃	腰岳黒曜石	C31	Ⅵ	中間部	0.80	0.5	0.1	0.05	5729
270	細石刃	腰岳黒曜石	C31	Ⅵ	中間部	0.80	0.6	0.1	0.04	5862
271	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅵ	中間部	0.60	0.5	0.1	0.03	6193
272	細石刃	腰岳黒曜石	C31	Ⅵ	中間部	1.00	0.6	0.2	0.12	6815
273	細石刃	腰岳黒曜石	C31	Ⅵ	中間部	1.00	0.6	0.1	0.07	7217
274	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅶ	中間部	0.60	0.5	0.1	0.04	7798
275	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅶ	中間部	1.00	0.5	0.1	0.07	7801
276	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅵ	中間部	0.60	0.4	0.1	0.04	8518
277	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅵ	中間部	0.80	0.5	0.1	0.04	8810
278	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅶ	中間部	1.20	0.6	0.2	0.14	8848
279	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅵ	中尾部	0.90	0.5	0.1	0.05	3002
280	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅵ	中尾部	1.00	0.5	0.1	0.07	3274
281	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅵ	中尾部	0.80	0.5	0.1	0.04	4482
282	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅵ	中尾部	1.10	0.5	0.2	0.07	5548
283	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅵ	中尾部	0.80	0.4	0.1	0.04	6124
284	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅵ	中尾部	0.90	0.4	0.1	0.03	6901
285	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅵ	中尾部	0.70	0.4	0.1	0.02	7146
286	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅵ	中尾部	1.10	0.4	0.2	0.08	7356
287	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅵ	中尾部	0.90	0.4	0.1	0.04	7556
288	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅵ	中尾部	1.40	0.5	0.2	0.13	7853
289	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅵ	中尾部	0.90	0.6	0.1	0.06	7860
290	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅵ	中尾部	0.80	0.6	0.1	0.06	8074
291	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅵ	尾部	0.40	0.6	0.1	0.02	7164
292	細石刃	腰岳黒曜石	C30	Ⅵ	尾部	0.60	0.4	0.1	0.02	8337
293	細石刃	針尾島黒曜石	C30	Ⅵ	頭中部	1.00	0.6	0.1	0.10	3094
294	細石刃	針尾島黒曜石	C30	Ⅵ	頭中部	0.90	0.8	0.1	0.08	3902
295	細石刃	針尾島黒曜石	C30	Ⅵ	頭中部	0.80	0.5	0.1	0.04	3903
296	細石刃	針尾島黒曜石	C30	Ⅵ	頭中部	1.10	0.8	0.2	0.21	4352
297	細石刃	針尾島黒曜石	C30	Ⅵ	頭中部	0.90	0.5	0.1	0.05	5515
298	細石刃	針尾島黒曜石	C30	Ⅵ	頭中部	1.20	0.6	0.1	0.12	5677
299	細石刃	針尾島黒曜石	C30	Ⅵ	頭中部	1.20	0.6	0.1	0.16	6213
300	細石刃	針尾島黒曜石	C30	Ⅵ	頭中部	0.80	0.4	0.1	0.04	6337
301	細石刃	針尾島黒曜石	C31	Ⅵ	頭中部	0.90	0.5	0.1	0.04	6588
302	細石刃	針尾島黒曜石	C30	Ⅵ	頭中部	1.70	0.6	0.1	0.20	7405
303	細石刃	針尾島黒曜石	C30	Ⅵ	頭中部	0.80	0.4	0.1	0.05	8167
304	細石刃	針尾島黒曜石	C30	Ⅵ	頭中部	0.70	0.4	0.1	0.04	8533
305	細石刃	針尾島黒曜石	C30	Ⅵ	中間部	1.20	0.8	0.1	0.17	4736
306	細石刃	針尾島黒曜石	C31	Ⅵ	中間部	0.90	0.6	0.2	0.11	5178
307	細石刃	針尾島黒曜石	C30	Ⅵ	中間部	1.20	0.4	0.1	0.10	5635
308	細石刃	針尾島黒曜石	C30	Ⅵ	中間部	1.20	0.4	0.2	0.11	6327
309	細石刃	針尾島黒曜石	C30	Ⅵ	中間部	1.00	0.6	0.1	0.10	7040

第9表 細石刃観察表(6)

番号	器種	石材	区	層	部首	長さ	幅	厚さ	重量	注記番号
310	細石刃	針尾島黒曜石	C30	VI	中間部	1.20	0.5	0.2	0.10	8029
311	細石刃	針尾島黒曜石	C30	VI	中間部	1.40	0.5	0.2	0.20	8808
312	細石刃	針尾島黒曜石	C30	VI	中間部	0.80	0.5	0.1	0.03	4427
313	細石刃	針尾島黒曜石	C30	VI	中間部	1.10	0.6	0.2	0.15	7593
314	細石刃	針尾島黒曜石	C30	VI	中間部	1.30	0.7	0.2	0.18	8051
315	細石刃	桑ノ木津留黒曜石	C30	VI	完形品	1.90	0.5	0.2	0.16	6915
316	細石刃	桑ノ木津留黒曜石	B31	VI	頭部	0.80	0.7	0.2	0.10	3672
317	細石刃	桑ノ木津留黒曜石	C30	VI	頭部	0.70	0.7	0.1	0.06	8057
318	細石刃	桑ノ木津留黒曜石	C30	VI	頭中部	0.80	0.5	0.2	0.06	3504
319	細石刃	桑ノ木津留黒曜石	C30	VI	頭中部	0.90	0.6	0.2	0.13	3901
320	細石刃	桑ノ木津留黒曜石	B32	VI	頭中部	1.10	0.7	0.1	0.12	4060
321	細石刃	桑ノ木津留黒曜石	C31	VI	頭中部	1.00	0.6	0.2	0.10	4931
322	細石刃	桑ノ木津留黒曜石	C30	VI	頭中部	0.80	0.5	0.1	0.06	5579
323	細石刃	桑ノ木津留黒曜石	C30	VI	頭中部	0.60	0.4	0.1	0.03	5986
324	細石刃	桑ノ木津留黒曜石	C30	VI	頭中部	1.00	0.6	0.1	0.09	6432
325	細石刃	桑ノ木津留黒曜石	C30	VI	頭中部	1.30	0.5	0.2	0.13	6905
326	細石刃	桑ノ木津留黒曜石	C30	VI	頭中部	1.50	0.6	0.2	0.15	6997
327	細石刃	桑ノ木津留黒曜石	C30	VI	頭中部	0.80	0.4	0.1	0.03	7033
328	細石刃	桑ノ木津留黒曜石	C30	VI	頭中部	1.40	0.5	0.2	0.14	7059
329	細石刃	桑ノ木津留黒曜石	C30	VI	頭中部	0.80	0.4	0.2	0.07	7417
330	細石刃	桑ノ木津留黒曜石	C31	VI	頭中部	1.50	0.6	0.2	0.15	20631
331	細石刃	桑ノ木津留黒曜石	C30	VI	中間部	0.70	0.6	0.1	0.04	2833
332	細石刃	桑ノ木津留黒曜石	B32	VI	中間部	0.50	0.4	0.1	0.02	4022
333	細石刃	桑ノ木津留黒曜石	C30	VI	中間部	1.10	0.5	0.1	0.09	8538
334	細石刃	桑ノ木津留黒曜石	C30	VI	中尾部	1.30	0.5	0.1	0.07	3173
335	細石刃	桑ノ木津留黒曜石	C30	VI	中尾部	1.00	0.6	0.1	0.05	4253
336	細石刃	三船黒曜石	C30	VI	頭部	0.30	0.5	0.1	0.01	7365
337	細石刃	三船黒曜石	C31	VI	頭中部	1.40	0.8	0.3	0.34	5758
338	細石刃	三船黒曜石	C31	VI	頭中部	1.40	0.7	0.3	0.24	6618
339	細石刃	三船黒曜石	C30	VI	中間部	0.90	0.4	0.1	0.04	7421
340	細石刃	安山岩	B32	VI	中間部	1.80	0.8	0.2	0.45	4034
341	細石刃	安山岩	B32	VI	中間部	0.80	0.5	0.1	0.05	4062
342	細石刃	安山岩	C31	VII	中間部	0.70	0.8	0.2	0.10	6635
343	細石刃	安山岩	C30	VI	中間部	0.60	0.4	0.1	0.03	7376
344	細石刃	安山岩	C31	VI	中間部	0.70	0.4	0.1	0.04	7501
345	細石刃	安山岩	C30	VI	中間部	1.10	0.7	0.2	0.17	8024
346	細石刃	安山岩	C30	VI	中間部	0.80	0.5	0.1	0.06	8109

第 10 表 細石刃観察表 (7)

### (3) 細石刃核

今里遺跡では 6 層を中心に欠損を伴うもの及び破片を含め細石刃核 101 点が出土している。このうち 91 点を図示した。細石刃文化期の出土遺物についてはブロックの設定がないので、形態及び技術的特徴に基づく分類に従い資料提示をおこなった。分類にあたって、作業面長・作業面幅・打面長・有効打面長・打面角・有効打面角・下縁角・重量の計測(注 1)と作業面長幅比・打面長幅比の算出(注 2)、および石材・打面端部再調整の有無・打面の横打調整の有無・下縁調整の有無について観察(注 3)し、計測表に示した。

#### ① A 類 (第 34・35 図 360～373)

打面幅(作業面幅)に対し、上面観の厚みが薄い扁平形の細石刃核。

A 1 類(360～365)はやや幅広の正面観に対し打面、側面が著しく薄い扁平形細石刃核である。打面は作業面側からの打面端細調整もしくは作業面側からの剥離と打面端細調整によって形成され、打面長幅比が 0.3～0.6 と著しく打面長が短い。背面は側面側からの剥離によって作りだされ、両側面もしくは左右いずれかの側面に背面調整に先立ち、背面方向からの剥離が施される。打面の幅・長さは 360～363 が 2.0cm 前後であるのに対し、364・365 は 1.5cm 前後とやや小型である。また、363 の側面下端の剥離は背面側からのものであり、A 2 類にみられる下縁調整とは異なる。

A 2 類(366～370)は逆三角形の正面観をもち、側面下端部からの剥離調整により鋭角に作り出された短い下縁を有する点に特徴がある。左右の側面は下端で交わり下縁をなし、作業面に対しと 90° 前後の下縁角をなす。打面は A 1 類と同様に作業面側からの剥離と打面端細調整により作り出される短い打面を有する。370 を除き背面はやや上方からの大きな剥離で、背面側及び下縁からの側面への剥離調整に先行し、A 1 類とは石核の整形手順の上でも違いがある。

A 3 類(371・372)は正面観が逆三角形を呈し下端部に調整剥離がみられるが、A 2 類と異なり下縁を形成せず、左右側面が背部で交わり、その稜線が作業面と打面を直接つなぐ背縁となっている。背縁は一方の側面に著しく偏った位置にあり、背縁上には細かい調整がみられる。A 1 類と関連し、細石刃剥出作業の進行に伴い、背面が側面及び打面に取り込まれた結果生じた形状とも考えられる。373 は扁平形の細石刃核であるが、下部を欠損するため細分はしなかった。

#### ② B 類 (第 35・36・37 図 374～382 387～397)

主として礫もしくは分割礫を素材とし、角柱状、半円柱状、半円錐形など多様な概観形状をもつ。正面(作業面)・打面・左右側面・底面からなる 6 面体を基本形とし、背面方向からの剥離による側面調整、側面方向からの背面調整が施されるが、これらの工程が省略され礫面・分割剥離面が残置される場合がある。打面は作業面側からの剥離により形成され、打面端細調整が施される。打面は一般に作業面側から見て後方に傾斜する傾斜打面で、細石刃剥離作業面が側面へ拡張された場合、半円柱状、半円錐形状を呈する。石核整形の手法において前記 A 1 類と同じであるが、打面に厚みがあり長幅比の値が比較的大きく、上面観が扁平形とならない点で区分される。石核再生には打面再生が一般的とされるが、本遺跡ではこれを証する打面再生剥片は出土していない。また、しばしば打面転移・作業面転移がおこなわれるが、これも一種の石核再生とみなしうる。打面転移の有無により 2 類に細分した。

B 1 類 (374 ~ 381) は打面転移を伴う細石刃核である。374 は上下に打面をもち同一作業面 (図正面) で上下 2 方向からの細石刃剥離作業がおこなわれる。背面には側面方向からの調整が加えられるが一部礫面を残置する。375・376 は上下に打面があり、底面を打面とし背面を作業面とする細石刃剥離の後、打面を上面に転移し正面を作業面とする。375 は最終打面からの剥離作業が左側に及んだ結果表裏の作業面が接しやや丸みを帯びた形状となっている。377 は打面を底面→上面→左側面に移動し、これに応じて裏面及び左側面→正面→上面を作業面として細石刃を剥離する。378 は打面と作業面を入れ替える打面転移がおこなわれ、打面転移に際し背面に側面方向から調整剥離を加えている。379 は当初平坦な剥離面である背面を打面とし、底面を作業面として細石刃剥離をおこなった後、打面を上面に移動して正面を作業面とする。380 は左側面及び正面で細石刃剥離を試みるが、いずれもステップし作業は進行していない。381 は左側面下半及び上半で下・上方向からそれぞれ細石刃を剥離した後、上面の打面として調整し正面に作業面を置く。

B 2 類 (382・387 ~ 397・402) は B 類のうち打面転移をおこなわないものである。382 は背面に礫面を有する半円錐形の細石刃核で、打面周縁からの打面調整後、細石刃を剥離する。387 ~ 389 は側面調整背面調整がおこなわれ、打面端細調整による短い打面をもつなど A 1 類と同様の石核整形技術が用いられるが、作業面幅が狭く打面長幅比では 1.4 ~ 1.6 とやや縦長の形状をもつ。また、387 が作業面長で 2.4cm とやや大型であるのに対し、388・389 は 2.1cm 及び 1.8cm と小型である。390 ~ 392 は比較的大型の半円柱状及び角柱状の細石刃核である。390 は背面の礫面からの底面を剥離した後、底面から左側面を調整する。391 は安山岩製で打面部を欠くが、背面及び側面の調整により B 類とした。393 ~ 397 は作業面長が 1.7 ~ 1.9cm、幅 1.3 ~ 1.7 と前記に比べやや小型で、角柱状ないし下部でやや窄まる角錐状を呈する。402 は背面調整後、打面調整をおこない細石刃剥離作業に向かうが、作業面が不純物のある節理にかかったため作業継続を断念したものとみられる。

### ③ C 類 (第 36 図 383 ~ 385)

単一の打面で細石刃剥離作業面を相対する前後 2 面にもつもので、泉福寺 10 層 (豆粒文土器段階) などに出土例がある。打面は側方からの横打剥離により形成され、打面端細調整により剥離角が調整される。打面形成と打面調整は相対する作業面上での剥離作業の進行に応じて繰り返し行われるものとみられるが、いわゆる円錐形・半円錐形細石刃核と異なり、作業面は側面方向に移動せず、両側面が残置される。また作業面の転移に際し、打面転移を伴わないことから、B 1 類と区別される。出土した 3 点は作業面長・幅、打面長とも 1.5 ~ 1.9cm、打面・作業面の長幅比はともに 1.0 ~ 1.2 と近似値をもつ。383 は背面 (下面図) の細石刃剥離作業後、左側面から剥離を加え、ついで打面端を調整し細石刃剥離作業をおこなっている。385 の背面側の細石刃剥離作業は作業面が内側に大きくステップした状態で終了している。

### ④ D 類 (第 37・38 図 398 ~ 401)

礫・分割礫もしくは礫皮面を有する厚みのある剥片を素材とし、上面観が角丸三角形もしくは半円状、側面形が半月状を呈する。打面は作業面側からの剥離によって形成され、打面端細調整が施される。一方の側面から背面側にかけては礫皮面が残り、背面調整はみられない。これに対し、他方の側面は背部周縁から側面上に鱗状の剥離調整が加えられる点に特徴がある。また、398・399

・401 では下端部にも石核調整が加えられており、下縁が意識されているとも受け取れる。作業面の長幅比は1.4ないし1.6、打面長幅比は0.8ないし0.9とB2類の上位値・E類の下限值に近い。有効打面角は68°～80°で打面角との差は20°程度である。原礫面の被覆範囲が大きく概観的には榎崎B遺跡などにみられる分割礫に打面調整のみを施す資料に似ているが、前述した側面周縁部の調整、下縁調整の存在から長崎県城ヶ岳平子遺跡出土資料との関連が伺われる。

#### ⑤ E類 (第38・39・40図 404～410・412～428)

主に剥片素材で小口面を作業面に設定し、正面形が楔形ないし逆三角形状を呈し下縁調整を有する。模式図に示した打面の剥離構成と側面形状は相互に置き換わりがある。打面は(a)側方からの(連続する)横打剥離により形成されるもの、(b)側方に打点もしくは打点方向がある一回の剥離(横長削片の剥離もしくは剥片の分割・切断)で打面を形成するもの、作業面側方向からの剥離(作業面側からの打面形成剥離もしくは縦長削片の剥離)で打面を形成するものがあるが、(a)・(b)ともほとんどその後に作業面側からの調整剥離ないし打面端細調整が加えられる。側面形は一般に扇形とされるが、尾縁の有無によって四角形状と三角形状を呈するものに区分できる。一般に作業面と打面が60°未満の急傾斜打面となる資料では、横打調整もしくは作業面側からの剥離調整により打面角度が調整されることが多く、この場合作業面上端に接する一角が切断された形状となる。この結果、残存する剥離角は65°以上90°未満、平均で約77°となり、直接・間接打法と横圧剥離の境界とされる80°に近似する。

打面を除く細石刃核への調整は下縁及び尾縁のみに集中するケースが多いが、厚手の剥片もしくは礫・分割礫を素材とする418・424・429では、打面から側面への調整剥離が顕著にみられる。下縁(及び尾縁)の調整は剥離を加えることにより縁辺を鋭角に仕上げるとともに、その強化を図る目的でおこなわれるとされるが、本遺跡出土E類では表裏に連続的かつ精緻に鱗状の剥離を加えるものはなく、片面のみに部分的かつ非連続的に調整を加えるにとどまるもの・微細な剥離痕のみとどめるものが多い。また作業面幅(打面幅)は415(1.6cm)・424(1.9cm)をのぞくと1.0～1.4cmまでのきわめて近似した値に集中し斉一性が高い。また、作業面と下縁の交わる角度から80°～110°の直角に近い下縁角をもつもの(E1類)と50°～70°の比較的鋭角をなすもの(E2類)に区分した(注4)。

E1a類(404～410・412・413) E1b類(414～419) E2a類(420～424)

E2b類(425～427) その他のE類(428～430)

E1a類では連続する横打剥離により打面を形成するものが多く、E1b類は419を除きいずれも側面方向に打点のある剥離面を打面とする。416・417は切断により打面が獲得された可能性もある。その他、429は作業面を切る左側面から剥離後、上面上の左側面側から作業面側にかけて細かい剥離調整が施されており、搔器への転用が考えられる。430は下部を欠損するが打面に連続する横打調整が施されることからここに分類した。

#### ⑥ F類(第38・40・41・42図 431～541) その他の細石刃核

F1類(431・432) いずれも正面観が逆三角形状で、打面端細調整を施す短い打面をもち、作業面と直交する短い下縁がある。上面観が扁平とならず、背面側からの側面調整が施されない点を除きA2類と類似する。

F 2類 (433 ~ 438) 不定形な小型の細石刃核で、石核整形及び石核調整上の類型性は少ないが分割小礫もしくは分割剥片を素材として用いる。433・434 は正面観が逆三角形を呈し、素材形状に由来する形態上の下縁を有する。433 が打面調整・下縁調整をおこなっているのに対し、434 はわずかに打面端細調整を施すのみで、ほとんど素材形状のまま細石刃剥離をおこなう。436 は礫面を有する分割小礫で、作業面側から礫皮面を剥離し打面とする。438・437・438 は作業面側から端部調整に先行し、側面から調整が行われている。

F 3類 (411・439 ~ 444) 板状剥片を素材とする細石刃核で、左右側面がほぼ平行し、背面もしくは底面をもち、下縁は形成されない。打面は側面側からの横打調整後に端部再調整を加えるもの(411・439 ~ 441)と、作業面側からの剥離調整後に端部再調整を加えるもの(442 ~ 444)とがある。作業面長は 1.1 ~ 2.1cm と変異幅が大きいが、作業面幅は 0.9 ~ 1.2cm までと比較的集中した値をもつ。打面傾斜角は 45° ~ 83° までの変異幅をもつが、鋭角なものでは端部細調整により 60° ~ 83° までの有効打面角となる。439・441 は極限まで作業が進行し類別が困難であるが、わずかに側面部分が残存する。444 は両側面に礫面をもち、背面は切断面とみなされる。板状の扁平な自然礫を折り取り打面形成後細石刃剥離作業を行ったものであるが、板状素材の共通性からここで扱った。

その他のF類 (386・403・445 ~ 450) 403 (第 38 図) は背面に礫面を持つ分割円礫もしくは剥片素材の細石刃核で、打面の調整のみを施す。446 ~ 449 は一部を欠損するため分類できなかった細石刃核である。あえて分類すれば 447 はA類、448・449 はF 3類、450 はE類に分類することになる。386 (第 36 図) は比較的大型のブランクで相対する 2 方向から打面調整がおこなわれ、また比較的入念に下縁調整が施されている。

#### ⑦スポール (第 42 図 452・453)

452 は長さ 2.8cm・幅 1.3cm で背面に稜をもち、稜上から右側面に連続した剥離がある縦長剥片である。453 は長さ 1.3cm・幅 2.4cm の横長剥片で背面稜上からの連続する剥離があり、細石刃核側面から削出されたものとみられる。本遺跡では細石刃核との接合関係は不明であるが、F 類に分類した楔形細石刃核の打面形成もしくは打面再生を目的として削出されたとみられる。いずれも腰岳産とみられる黒色の良質な黒曜石である。

#### ⑧石核 (第 42 図 454・455)

454 は出土層位がV層であり、縄文時代の石核である可能性が高い。左面を打面とし石核長軸方向に作業面を移動しながら剥片の剥離をおこなう一方、剥離面を打面とし、端軸方向での横長剥片の剥離が組み合う。

455 はVI層の出土ではあるが、本遺跡ではメノウ素材の細石刃核・細石刃の出土はなく、地点的にも離れた場所での単独の出土であったことから、他の文化期に属すべき資料である可能性が高い。90° 単位の打面転移を伴い石核の短軸方向への剥片剥離をおこなっている。

(注1)

**各面の呼称** 細石刃核の各面の呼称については、なるべく打面(上面)、作業面(正面)、左右側面、背面、底面で統一したが、B1類については打面転移の説明の便宜上から上面・正面・左右側面・裏面・下面と呼んでいる。

**作業面長** 細石刃剥離作業面(正面図)の縦の長さ。実測図面から小数点以下第二位については目分量で計測し、四捨五入した。単位はcmである。

**作業面幅(打面幅)** 作業面長と同様の方法で実測図面から計測した作業面の幅(=打面の幅)の値。

**打面長** 打面の長さを表す。傾斜打面の細石刃核では上面図からの測りだしでは実際上よりも小さな値となるため、ノギズを用いた遺物から直接計測した。

**有効打面長(有効加撃面長)** 細石刃剥離角を調整する目的で打面端部の端細調整により調整された部分の長さ。計測方法は打面長と同じ。打面端部再調整がおこなわれる場合でも、打面角と有効打面角が有為な差を持つ場合のみ計測した。(橋本 1983の有効加撃面長)

**打面角** 作業面と打面のなす角度。遺物から分度器を用いて直接計測した。計測位置は細石刃剥離作業面の中間に近い位置でかつ剥離角の遺存状況のよい場所を任意で定め、打面・作業面上に湾曲がある場合は上下端が計測用具と等間隔になる位置で計測した。複数回の測定を行った場合でも一定の計測誤差が生ずる。

**有効打面角(有効加撃面角)** 有効打面と作業面のなす角度。打面角の計測に準じて遺物から直接計測した値。計測表中で記載のない場合は打面角と有為な差がないことを示す。

**下縁角** 作業面と下縁の交わる角度。下縁を有する細石刃核のみについて計測を行った。計測方法は打面角の計測法に準じた。

(注2)

**作業面長幅比** 作業面長を作業面幅で割った値。南九州では時期的に新しいほど長幅比の数値が大きくなるとされるが、細石刃核の型式間差が、比較的明瞭に現れる。

**打面長幅比** 打面長を打面幅(=作業面幅)で割った値。

(注3)

**石材** 石材については肉眼により原産地資料との対比から判別したもので、科学的分析はおこなっていない。

**打面端細調整** 細石刃剥離作業途上における細調整と見なされる打面縁端部・作業面に接する部分に見られる作業面側からの小剥離。(織笠 1991)本遺跡では極めて高い確率ですべての分類形式に普遍的にみられる。

**横打調整** 打面形成・打面調整を細石刃核側面方向からの剥離調整によっておこなうもの。

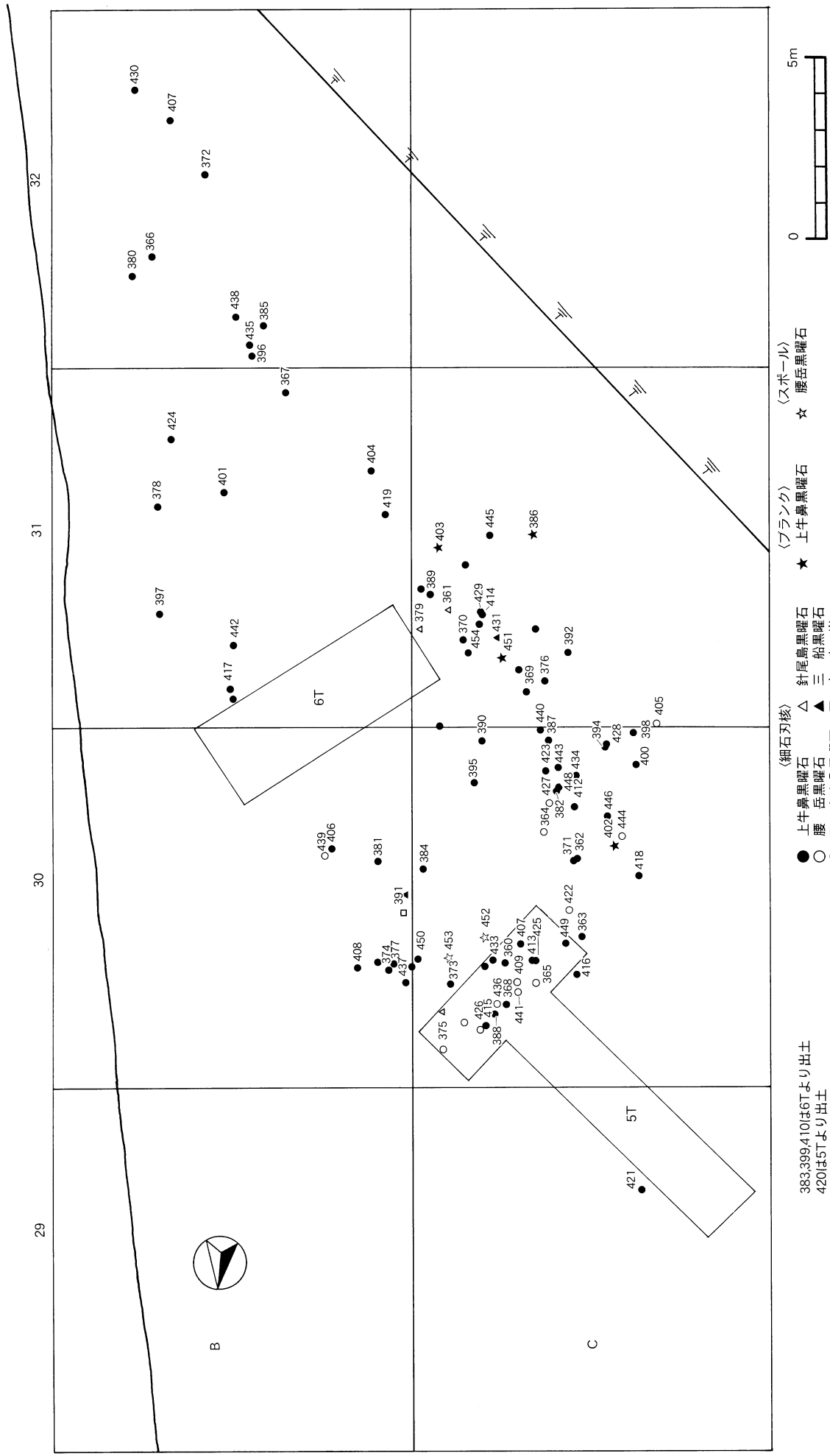
**下縁調整** 左右側面下端部から細石刃核下端部に加えられた調整剥離。

(注4)

打面が細石刃剥離作業の過程で再生・再調整作業を受け、作業面が作業の進行に伴い後退・移動するのに対し、細石刃核下縁部は打面転移がおこなわれる場合を除きblank形成後は形状の変更を受けにくい。また、下縁角の差異は細石刃剥離作業に用いられた固定具の形態・形状の違いにより生じている可能性を考え、下縁角を分類指標に取り入れた。打面調整・打面再生による剥離の進入角度の変化の範囲で下縁角も変化し得ることを考慮し、さらに検討の必要がある。

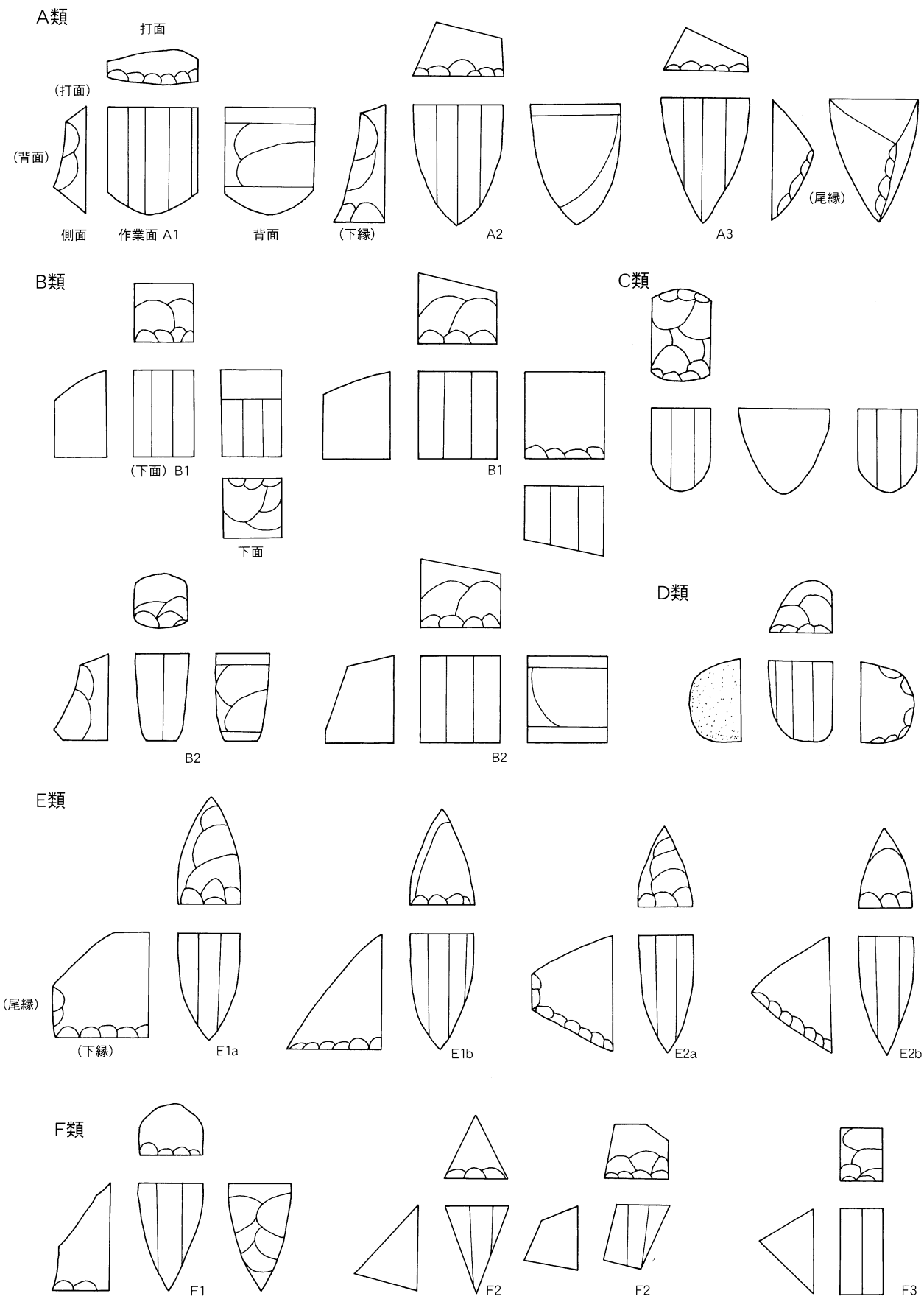
#### 参考文献

- 雨宮瑞生 1992 「南九州における細石刃核の正面形高幅比度数分布—細石刃文化期・新段階資料の抽出を目指して—」『旧石器考古学』45
- 牛ノ濱修 1985 「九州における細石刃研究—分類と編年研究のあゆみ」『考古学ジャーナル』243
- 小畑弘己 1983 「九州の細石刃文化」『物質文化』No.4-1
- 小畑弘己 1987 「西南日本の楔形石核とその系譜について」『東アジアの考古と歴史』岡崎敬先生退官記念論集
- 織笠 昭 1991 「西海技法の研究」『東海大学紀要文学部』第54
- 川道 寛 1997 「長崎県の細石器編年」『九州の細石刃文化—細石刃文化の開始と編年研究—』
- 川道 寛 1998 『茶園遺跡』岐宿町文化財調査報告書 第3集
- 桑波田武志 1997 「鹿児島県の細石刃石器群編年」『九州の細石刃文化—細石刃文化の開始と編年研究—』
- 桑波田武志・宮田栄二 1997 「鹿児島県における旧石器時代研究の現状と課題」『鹿児島考古』31号
- 桑波田武志 1998 「九州の細石刃核の製作技術・形態」『九州の細石器文化—九州島における細石器文化の石器と技術—』
- 下川達也 1982 「旧石器時代の長崎」『森貞次郎博士古希記念古文化論集』
- 下川達也・萩原博文 1983 「西北九州における旧石器石器群の編年(上・下)」『古代文化』35
- 鈴木忠司 1971 「野岳遺跡の細石刃核と西南日本における細石刃文化」『古代文化』第23巻8号
- 橋 昌信 1975 「九州地方の細石刃文化」『駿台史学』第47号
- 長野眞一 2000 「旧石器時代の人体型石製品—耳取遺跡—」『考古学ジャーナル』No.467
- 橋本勝雄 1983 「長崎県福井洞穴の細石刃生産技術について」『考古学論叢』I
- 宮田栄二 1988 「南九州の文化細石刃—福井型細石刃核の波及について」『鹿児島考古』第22号
- 宮田栄二 1993 「九州地方の細石刃文化」『細石刃文化の新たなる展開』I
- 宮田栄二 1996 「南九州における細石人文化終末期の様相」『坂詰秀一先生還暦記念論文集』
- 宮田栄二 1998 「細石刃の製作技術—細石刃核の固定方法からの視点」『九州の細石器文化—九州島における細石器文化の石器と技術—』

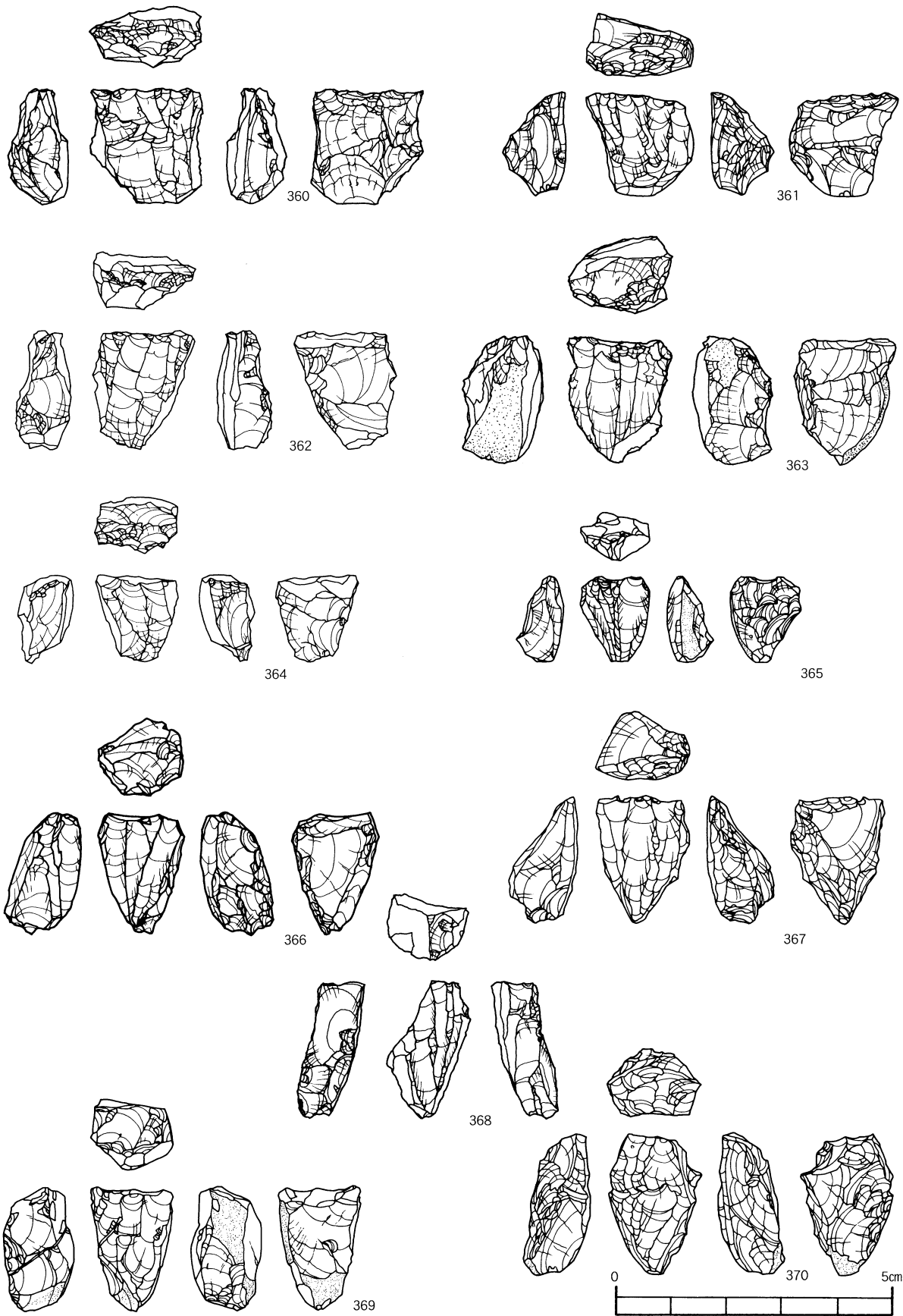


第32図 旧石器時代遺物出土状況④ (細石刃核)

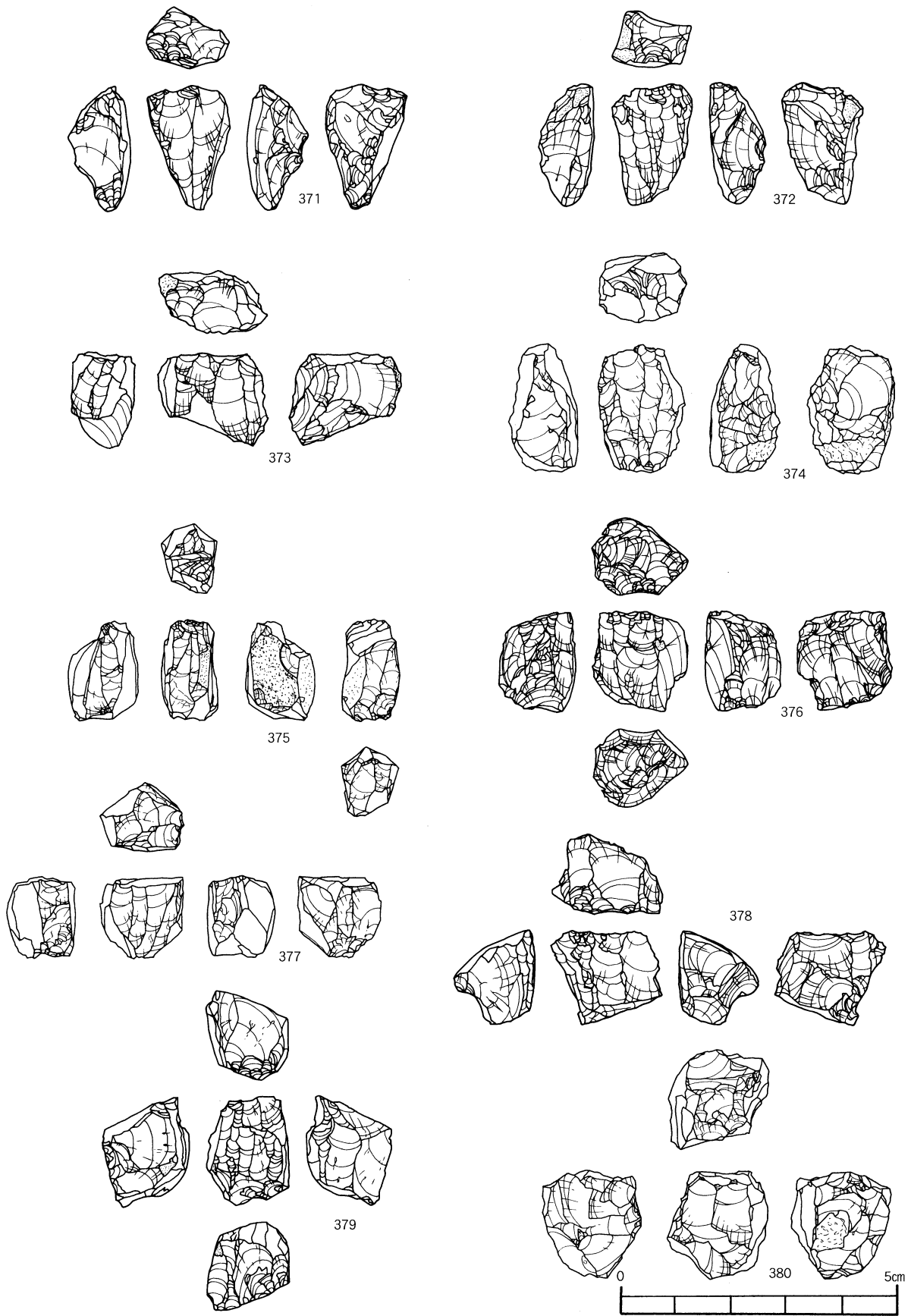




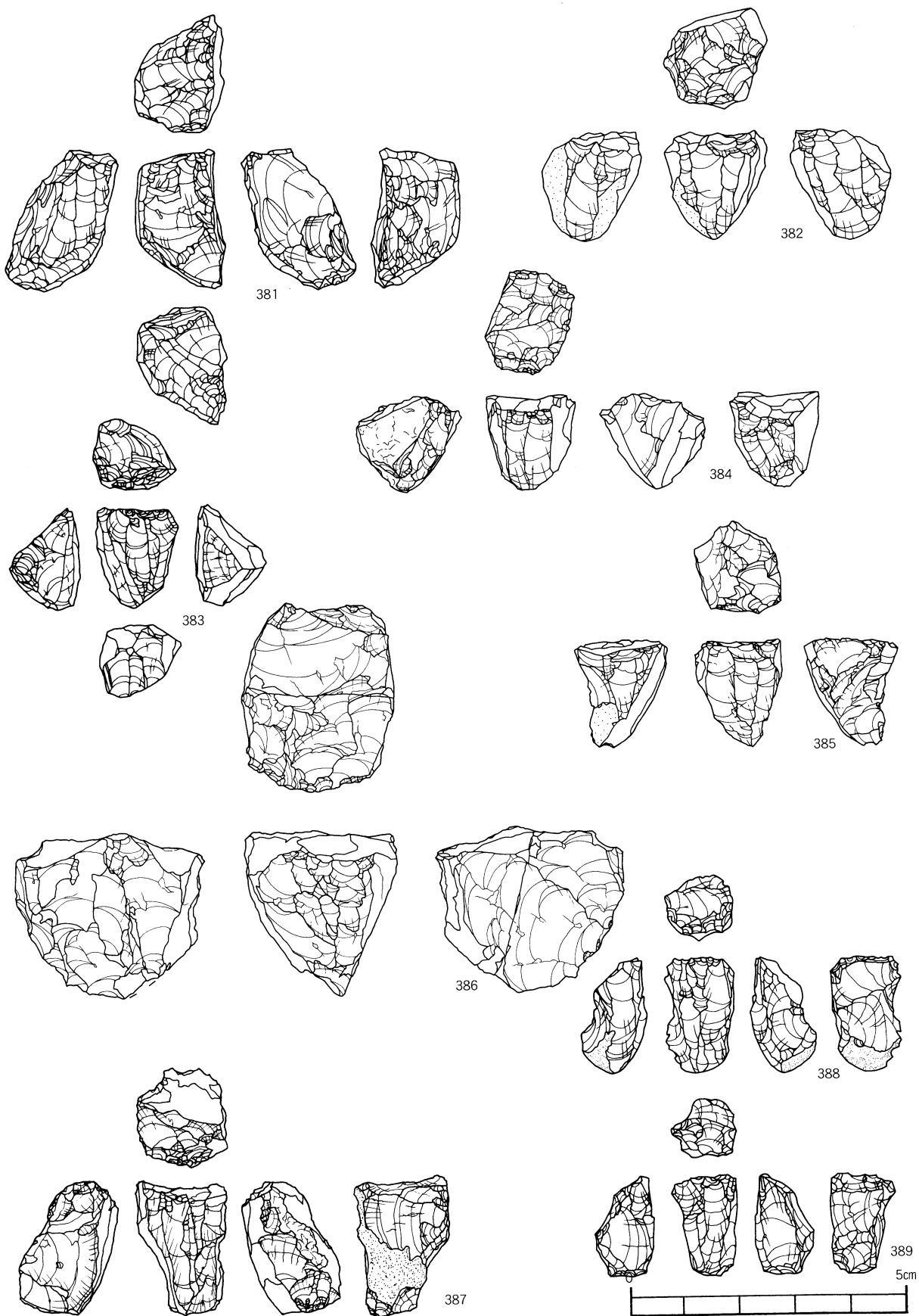
第33図 細石刃核 分類模式図



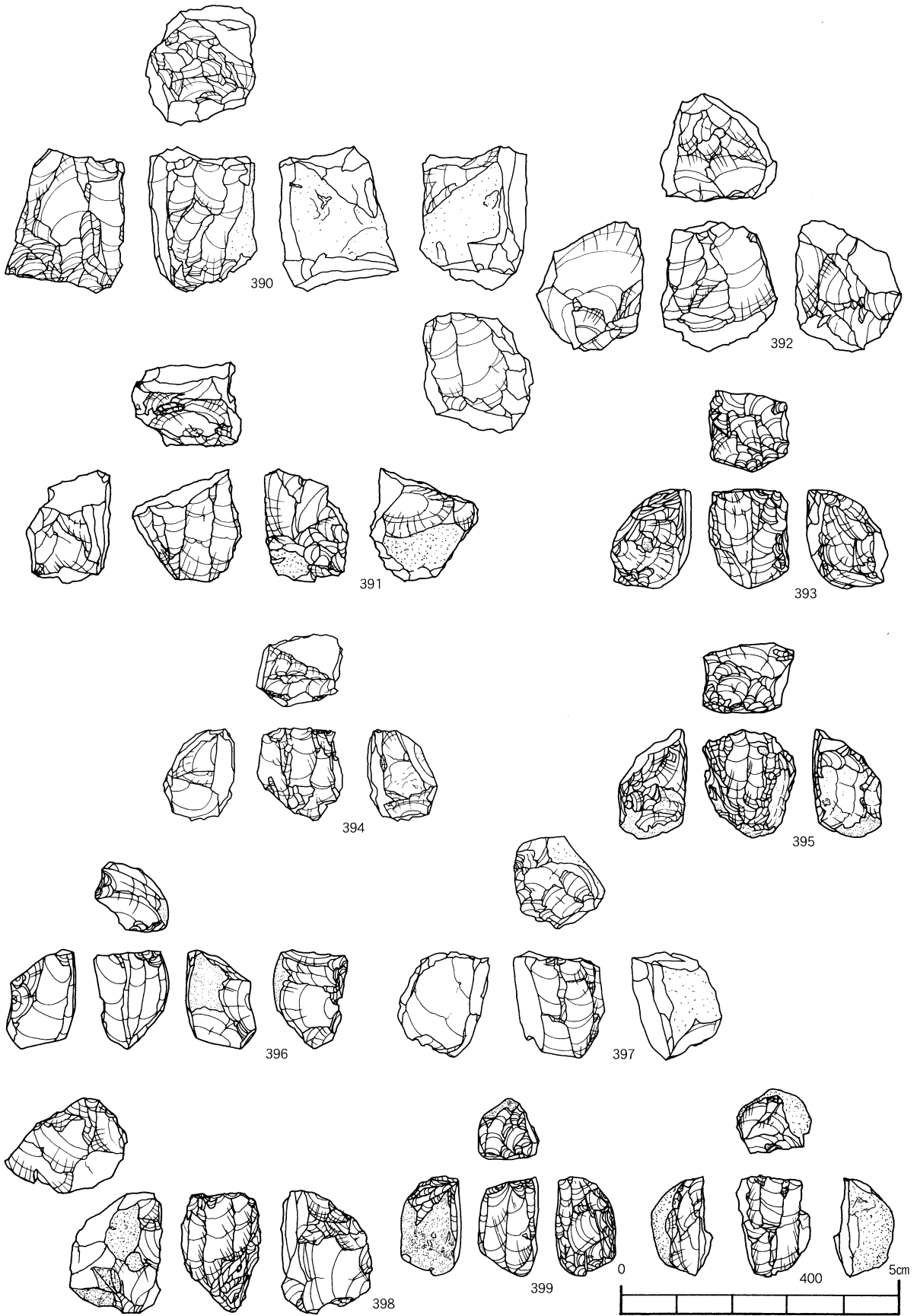
第34図 細石刃核 (1)



第35図 細石刃核 (2)



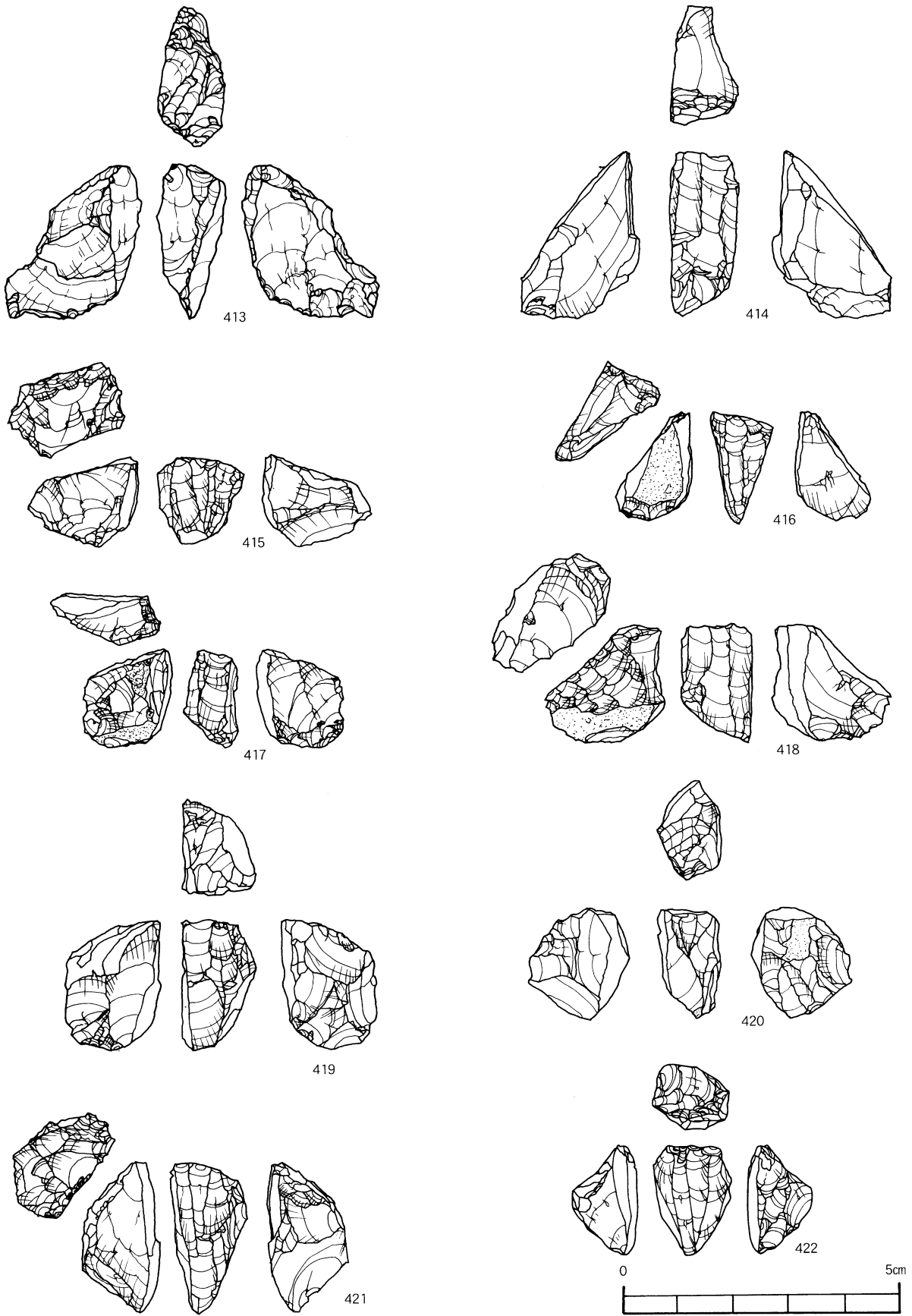
第36図 細石刃核 (3)



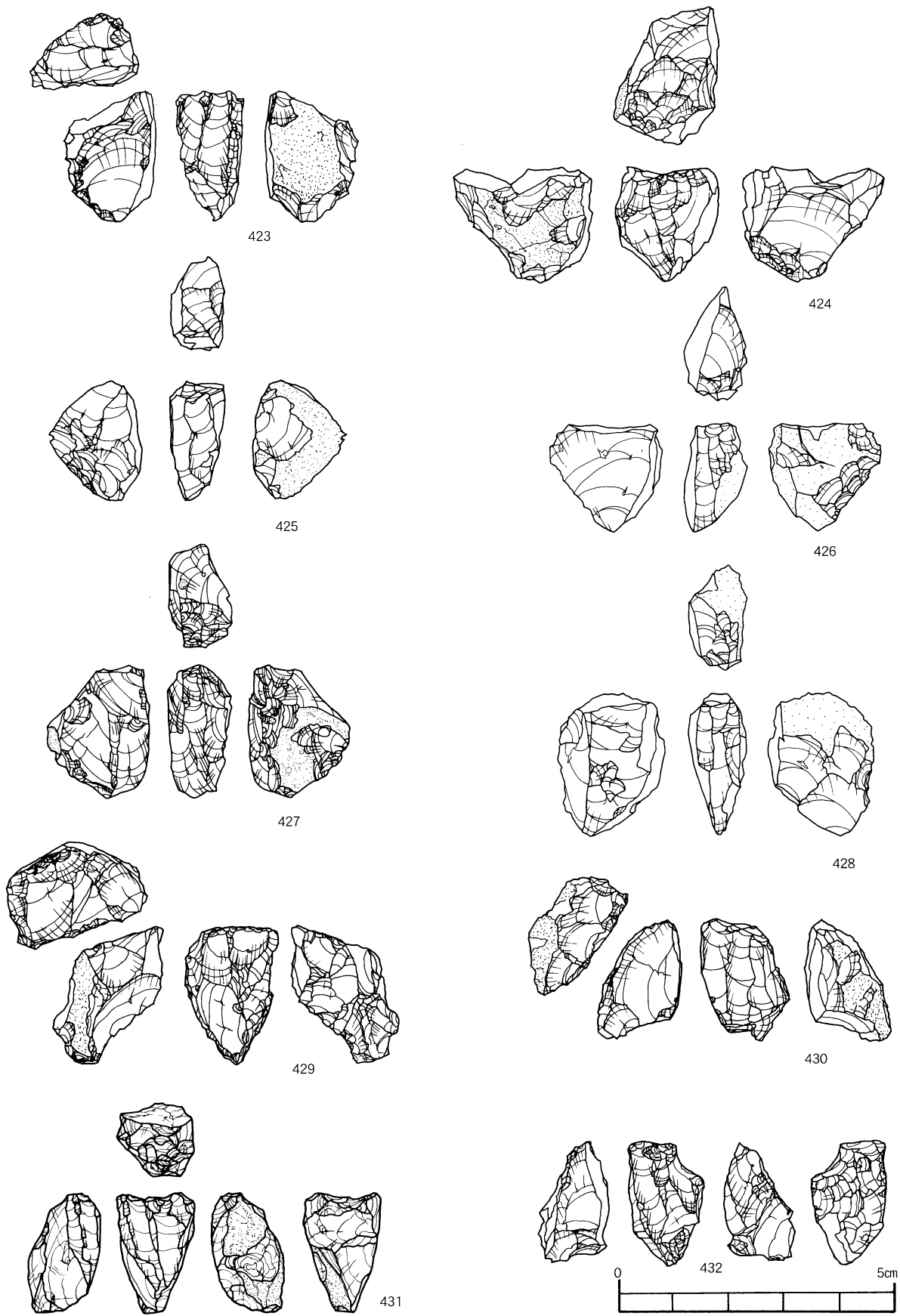
第37図 細石刃核 (4)



第38図 細石刃核 (5)



第39図 細石刃核 (6)

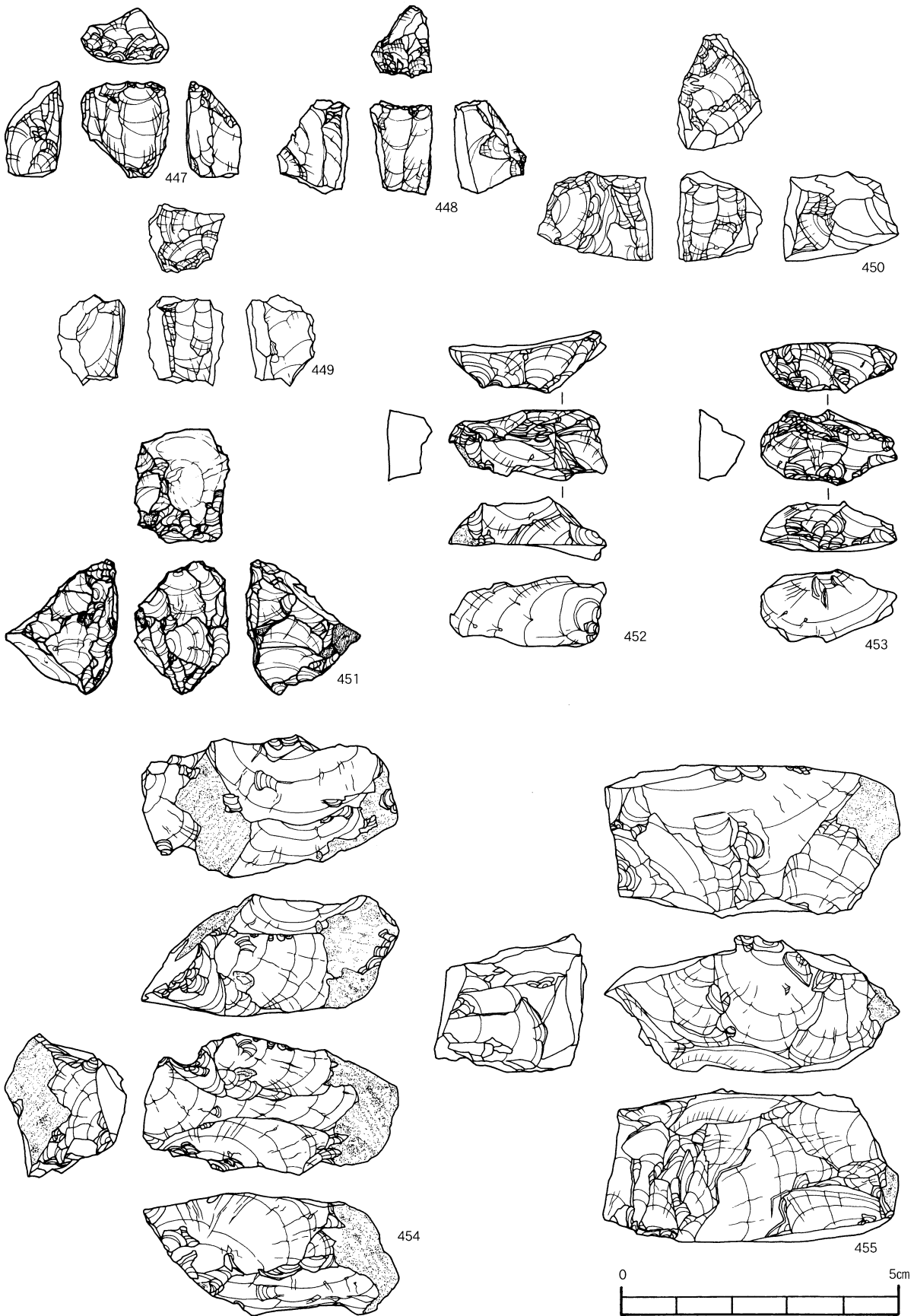


第40図 細石刃核 (7)





第41図 細石刃核 (8)



第42図 細石刃核・削片・石核 (9)

番号	区	層	標高 (m)	器種	分類	作業 面長 (cm)	作業 面幅 (cm)	打面 長 (cm)	有効 打面 長 (cm)	打面 角 (度)	有効 打面 角 (度)	下縁 角 (度)	重量 (g)	作業 面長 幅比	打面 長幅 比	石材*	打面 端細 調整	横打 調整	下縁 調整	備考	注記 番号
360	C30	VI	84.06	MC	A1	2.1	2.0	0.6		75			4.5	1.1	0.3	上牛鼻	○			左右側面背面側からの剥離	7599
361	C31	VI	83.59	MC	A1	1.9	1.9	0.6		62			3.2	1.0	0.3	針尾島	○			左右側面背面側から調整#105	5146
362	C30	VI	84.30	MC	A1	2.1	1.9	0.5		75			3.6	1.1	0.3	上牛鼻	○				3840
363	C30	VI	84.09	MC	A1	2.3	1.9	0.8		76			6.4	1.2	0.4	上牛鼻	○			赤褐色風化面	7902
364	C30	IV	84.38	MC	A1	1.6	1.5	0.9	0.6	50	80		2.3	1.1	0.6	腰岳	○				2605
365	C30	VI	84.17	MC	A1	1.5	1.3	0.7	0.2	45	75		1.15	1.2	0.5	腰岳	○				7075
366	B32	VI	82.82	MC	A2	2.2	1.6	0.9	0.6	45	65	112	3.95	1.4	0.6	上牛鼻	○		○		3967
367	B31	VI	83.13	MC	A2	2.3	1.7	0.4		55		102	3.8	1.4	0.2	上牛鼻	○		○		4618
368	C30	VI	84.16	MC	A2	2.5	(1.5)	(0.9)		72		119	3.3			上牛鼻	○		○	左肩部欠損	7113
369	C31	VI	83.73	MC	A2	2.2	1.5	1.0		72		100	4.1	1.5	0.7	上牛鼻	○		○		5866
370	C31	V	83.85	MC	A2	2.5	(1.7)	0.9	0.6	55	72	110	4.7			上牛鼻	○		○	右肩部欠損	2585
371	C30	VI	84.06	MC	A3	2.2	1.5	1.2	0.7	40	63	26	2.9	1.5	0.8	上牛鼻	○	○	○		7804
372	B32	VI	83.30	MC	A3	2.2	1.5	1.6	0.5	55	72	35	3.3	1.5	1.1	上牛鼻	○	○	○		3927
373	C30	VI	84.25	MC	A		2.0	1.0		85			3.6		0.5	上牛鼻	○			下部欠損	4746
374	B30	VI	84.26	MC	B1	2.3	1.6			90			5.2	1.4		上牛鼻	○			打面A欠損打面B(前)長0.9cm(前)0°	4152
375	C30	VI	84.28	MC	B1	1.8	1	0.9	0.7	50	55		2.5	1.8	0.9	桑ノ木	○			打面B(下面)長1.1cm打角80°	8154
376	C31	VI	83.92	MC	B1	1.8	1.8	1.3		75			4.7	1.0	0.7	上牛鼻	○	○		打面B(下面)長1.1cm打角85°	4943
377	B30	VI	84.14	MC	B1	1.5	1.5	1.1					3.35	1.0	0.7	上牛鼻	○			打面A(上面)長0.9cm打角82°	4516
378	B31	III	84.10	MC	B1	1.7	2.0	1.7		65			4.4	0.9	0.9	上牛鼻	○			打面・作業面の交代	1951
379	C31	VI	83.44	MC	B1	2.0	1.5	1.3		76			4.3	1.3	0.9	針尾島	○			打面B(裏面)長1.3cm打角81°	6826
380	B32	V	83.15	MC	B1	2.0	1.8	1.6		90			6.9	1.1	0.9	上牛鼻	○			打面B(左側面)長1.5cm打角70°	4067
381	B30	VI	83.94	MC	B1	2.5	1.7	2.6		52			7.5	1.5	1.5	上牛鼻	○	○		打面B長1.23比0.72角103°(打面B)0.000°	3755
382	C30	VI	84.25	MC	B2	2.0	1.9	1.6	1.1	57	70		6.1	1.1	0.8	上牛鼻	○	○		半円錐形	3372
383	B31	III		MC	C	1.8	1.5	1.5	0.3	42	64		2.75	1.2	1.0	上牛鼻	○	○		作業面B後専の打面調整より残らず	30030
384	C30	VI	83.94	MC	C	1.7	1.6	1.9	0.7	53	77		5.1	1.1	1.2	上牛鼻	○	○		作業面B 打角80°	8099
385	B32	VI	83.12	MC	C	1.9	1.6	1.6		65			4.35	1.2	1.0	上牛鼻	○	○		作業面B 打角80°	4579
386	C31	VI	84.10	ブランク		3.0	2.8	3.4	1.5	70	85	105	28.2	1.1	1.2	上牛鼻	○				5712
387	C30	VIII	83.85	MC	B2	2.4	1.7	0.9	0.5	73	90		6.55	1.4	0.5	上牛鼻	○				8851
388	C30	VI	84.37	MC	B2	2.1	1.3	0.4		65			2.9	1.6	0.3	上牛鼻	○				2846
389	C31	V	83.76	MC	B2	1.8	1.2	0.7		60			2.1	1.5	0.6	上牛鼻	○				2678
390	C30	IV	84.11	MC	B2	2.6	1.9	1.3		90			11.7	1.4	0.7	上牛鼻	○				2588
391	B30	VI	84.00	MC	B2	(2.0)	(2.0)						6.4			安山岩				打面欠損	4669
392	C31	VI	84.11	MC	B2	2.3	2.1	1.6	0.9	63	85		9.0	1.1	0.8	上牛鼻	○			左側面欠損	5030
393		VI		MC	B2	1.8	1.4	0.9	0.4	52	70	95	4.05	1.3	0.6	上牛鼻	○			背部欠損	30028
394	C30	VI	84.52	MC	B2	1.7	1.5	1.5	1.0	40	74	94	3.35	1.1	1.0	上牛鼻	○			左下部欠損	4476
395	C30	III	84.42	MC	B2	1.9	1.7	1.6	0.6	40	60	0	3.8	1.1	0.9	上牛鼻	○				2404
396	B32	VI	83.00	MC	B2	1.7	1.3	1.2	0.7	43	71	115	2.8	1.3	0.9	上牛鼻	○	○			4592
397	B31	III	82.98	MC	B2	1.9	1.7	1.2	0.7	55	70	0	4.7	1.1	0.7	上牛鼻	○				2117
398	C30	VI	84.57	MC	D	2.2	1.4	1.3	0.6	60	78	80	5.7	1.6	0.9	上牛鼻	○		○		5685
399	B31	III		MC	D	1.8	1.1	0.9	0.6	47	68	70	2.2	1.6	0.8	腰岳	○		○		30029
400	C30	VI	84.58	MC	D	1.8	1.3	1.1	0.6	53	73	0	2.2	1.4	0.9	上牛鼻	○				3514
401	B31	VI	83.32	MC	D	2.0	1.4	1.3	0.5	65	80	60	4.0	1.4	0.9	上牛鼻	○		○		3604
402	C30	VI	84.49	MC	B2	2.5	2.1	2.0	0.6	48	64	0	7.9	1.2	1.0	上牛鼻	○	○			3293
403	C31	VI	83.52	MC	F	2.3	1.9	1.3	0.8	50	73	0	6.7	1.2	0.7	上牛鼻	○				6602
404	B31	VII	83.46	MC	E1a	2.0	1.1	2.2	0.5	52	69	89	3.2	1.8	2.0	上牛鼻	○	○	○		5421
405	C31	VI	84.62	MC	E1a	2.0	1.4	2.5	1.0	46	67	110	4.6	1.4	1.8	腰岳	○	○	○		5827
406	B30	V	84.07	MC	E1a	1.9	1.3	1.9	1.0	55	85	85	4.9	1.5	1.5	上牛鼻	○	○	○		3780
407	C30	VI	83.99	MC	E1a	2.0	1.1	2.2	0.7	66	80	80	4.8	1.8	2.0	上牛鼻	○	○	○		8442
408	B30	VI	84.28	MC	E1a	2.0	1.3	2.3	1.0	48	73	95	5.5	1.5	1.8	上牛鼻	○	○	○		4146
409	C30	VI	84.13	MC	E1a	1.8	1.3	1.1	0.7	61	89	90	3.15	1.4	0.9	腰岳	○	○	○		7994
410	B30	VI		MC	E1a	1.7	1.3	2.2	0.9	40	75	85	3.8	1.3	1.7	上牛鼻		○	○		30039
411		VI		MC	F2	2.0	1.3	1.4	0.3	40	61	67	2.4	1.5	1.1	上牛鼻	○	○	○		30032
412	C30	VI	84.25	MC	E1a	2.1	1.2	1.5	0.6	40	72	92	2.8	1.8	1.3	上牛鼻	○	○	○		4866

第11表 細石刃核観察表(1)

番号	区	層	標高 (m)	器種	分類	作業 面長 (cm)	作業 面幅 (cm)	打面 長 (cm)	有効 打面 長 (cm)	打面 角 (度)	有効 打面 角 (度)	下縁 角 (度)	重量 (g)	作業 面長 幅比	打面 長幅 比	石材*	打面 端細 調整	横打 調整	下縁 調整	備考	注記番 号
413	C30	VI	84.17	MC	E1a	2.8	1.2	3.0	0.6	42	80	98	5.7	2.3	2.5	上牛鼻	○	○	○		7022
414	C31	V	83.61	MC	E1b	3.0	1.3	3.0	0.4	42	81	82	7	2.3	2.3	上牛鼻	○	○	○		6813
415	C30	VI	84.27	MC	E1b	1.6	1.6	2.2	0.4	72	75	80	4.35	1.0	1.4	上牛鼻	○	○	○		4289
416	C30	VI	84.30	MC	E1b	2.0	1.2	2.2	0.3	45	72	93	2.0	1.7	1.8	上牛鼻	○	○	○		4194
417	B31	III	83.80	MC	E1b	1.7	1.1	1.5	0.5	65	75	110	2.5	1.5	1.4	上牛鼻	○	○	○		2471
418	C30	VI	84.48	MC	E1b	2.1	1.3	2.4	0.9	50	85	105	5.3	1.6	1.9	上牛鼻	○	○	○		4763
419	B31	III	84.24	MC	E1b	2.3	1.3	2.1	0.6	55	72	80	4.8	1.8	1.6	上牛鼻	○	○	○		2386
420	C30	VI		MC	E2a	2.0	1.1	2.0	1.1	45	90	70	4.25	1.8	1.8	上牛鼻	○	○	○		30038
421	C30	VI	84.00	MC	E2a	2.7	1.4	2.2	0.6	40	75	65	5.0	1.9	1.6	上牛鼻	○	○	○		8668
422	C30	VI	84.07	MC	E2a	1.9	1.4	1.5	0.3	50	73	50	2.4	1.4	1.1	腰岳	○	○	○		8364
423	C30	VI	84.13	MC	E2a	2.4	1.3	2.1	0.4	62	75	55	4.6	1.8	1.6	上牛鼻	○	○	○		3383
424	B31	III	83.64	MC	E2a	2.1	1.9	2.5	0.8	75	85	62	8.2	1.1	1.3	上牛鼻	○	○	○		2555
425	C30	VI	84.08	MC	E2b	2.1	1.0	1.6		65		45	3.5	2.1	1.6	上牛鼻	○	○	○		7578
426	C30	VI	84.32	MC	E2b	1.9	1.2	1.7		80		60	3.1	1.6	1.4	腰岳	○	○	○		2734
427	C30	VI	84.16	MC	E2b	2.4	1.1	2.0	0.9	50	88	60	4.4	2.2	1.8	腰岳	○		○		4435
428	C30	VI	84.47	MC	E	2.5	1.1	1.4		80		50	4.7	2.3	1.3	上牛鼻	○		○		4806
429	C31	VI	83.55	MC	E	2.5	1.7	3.2	1.8	50	70	137	6.5	1.5	1.9	上牛鼻	○	○	○		7277
430	B32	VI	83.00	MC	E (2.2)	1.6	2.4	0.5	4.2	85			4.2			上牛鼻	○	○		下部欠損	4536
431	C31	VI	83.67	MC	F1	2.2	1.4	0.7		70		115	3.2	1.6	0.5	腰岳	○		○		5098
432		VI		MC	F1	2.3	1.4	0.5		65		97	3.35	1.6	0.4	上牛鼻	○		○		30031
433	C30	VI	84.24	MC	F2	1.8	1.3	1.8	0.8	35	80	79	2.5	1.4	1.4	上牛鼻	○	○	○		6428
434	C30	VI	84.26	MC	F2	1.8	1.5	1.7		55		50	2.45	1.2	1.1	上牛鼻	○				4459
435	B32	VI	83.12	MC	F2	1.9	1.7						3.2	1.1		上牛鼻	○	○		上端部欠損	4036
436	C30	VI	84.30	MC	F2	1.5	1.0	1.6	0.7	40	80		1.95	1.5	1.6	桑ノ木	○				4276
437	B30	VI	84.14	MC	F2	1.6	1.3	1.3		59			2.25	1.2	1.0	上牛鼻	○	○			4659
438	B32	VI	83.02	MC	F2	1.6	1.6	1.3	0.9	52	80		3.0	1.0	0.8	上牛鼻	○	○			4008
439	B30	VI	84.02	MC	F3	1.5	1.1	1.6	0.3	58	70	63	1.8	1.4	1.5	腰岳	○	○			3784
440	C30	V	84.17	MC	F3	2.1	0.9	1.4		65		43	3.0	2.3	1.6	上牛鼻	○	○			5701
441	C30	VI	84.23	MC	F3	1.1	1.2	1.0	0.2	45	60	37	0.9	0.9	0.8	腰岳					7107
442	B31	VI	83.25	MC	F3	1.7	1.1	1.4	0.5	55	85	55	2.3	1.5	1.3	上牛鼻	○				3705
443	C30	VI	84.09	MC	F3	2.4	1.3	1.0		83		32	4.45	1.8	0.8	上牛鼻	○				4466
444	C30	VI	84.44	MC	F3	2.6	1.1	0.9	0.6	65	80	26	2.9	2.4	0.8	桑ノ木	○			継素材	3813
445	C31	VI	83.77	MC	F	2.9	2.5	1.5		65			12.2	1.2	0.6	上牛鼻	○			打面転移 打面B長2.0幅1.7角80°	6632
446	C30	VI	84.43	MC	F	1.7	1.0					90	1.75	1.7		上牛鼻			○	上端部欠損	4408
447	B32	VI	83.06	MC	F (1.7)	1.6	1.3			50			2.4		0.8	上牛鼻	○			下部欠損	5206
448	C30	VI	84.17	MC	F (1.7)	1.1	1.6	0.5		43	82		2.4		1.5	上牛鼻	○			下部欠損	3882
449	C30	VI	84.33	MC	F (1.6)	1.4	1.2	0.5		48	69		2.6		0.9	上牛鼻	○			下部欠損	3028
450	C30	VI	84.14	MC	F (1.6)	1.5	1.6			90			4.8		1.1	上牛鼻	○	○		下半分欠損	4737
451	C31	VI	83.62	MC	F	2.4	1.7						6.9	1.4		上牛鼻	○			打面欠損	6792
452	C30	VI	83.97	スボール		2.8	1.3	0.9					2.6			腰岳					8473
453	C30	VI	84.30	スボール		2.4	1.3	0.9					2.3			腰岳黒					4725
454	C31	VI	80.77	石核		4.6	2.5	2.7		75			21.2			上牛鼻					2643
455	I30	VI	84.49	石核		2.5	5.3	2.4		75			37.1			めのう					20392

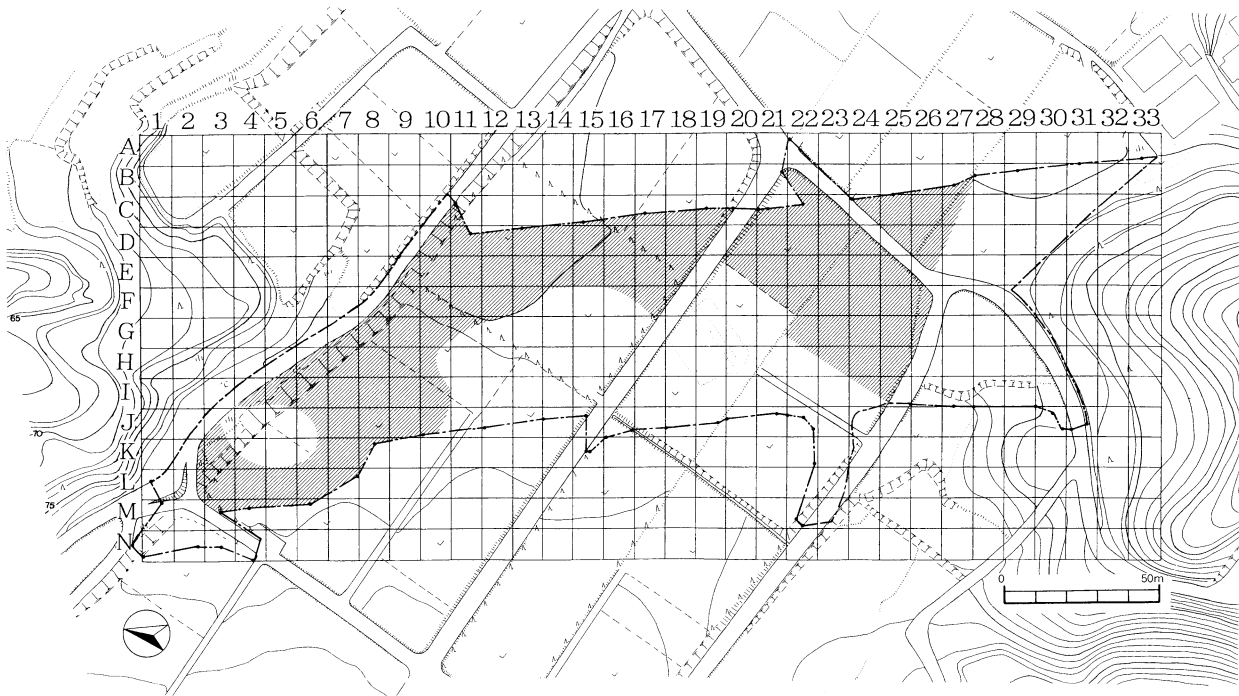
第12表 細石刃核観察表(2)

\*上牛鼻=上牛鼻産黒曜石, 針尾島=針尾島産黒曜石, 腰岳=腰岳産黒曜石, 桑ノ木=桑ノ木津留産黒曜石

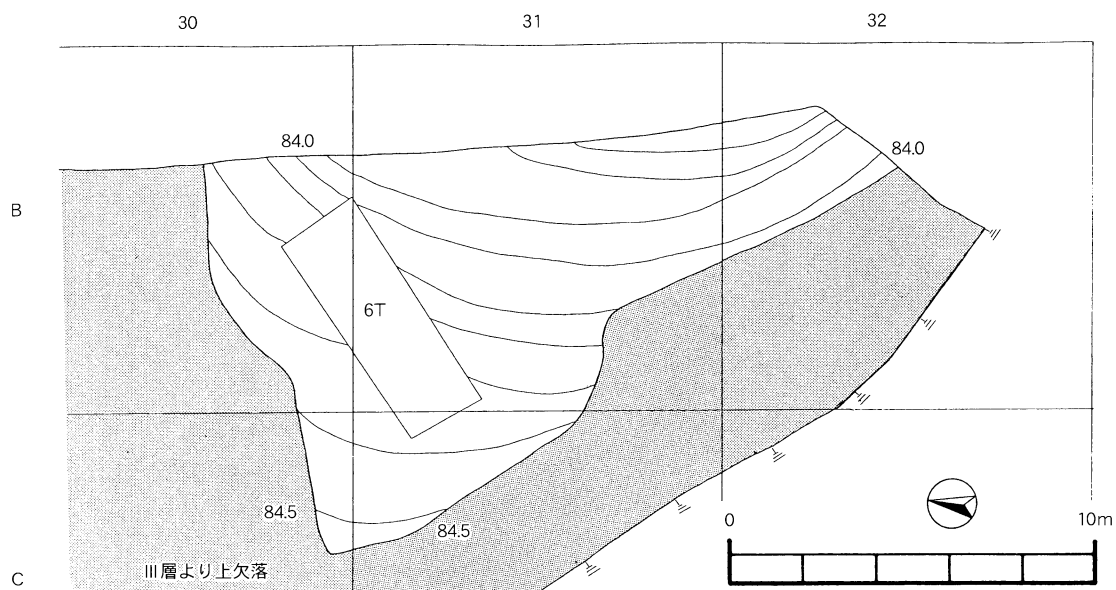
## 第2節 縄文時代の調査

### 1 調査の概要

本遺跡における縄文時代の遺物包含層はⅢ層及びⅣ層である。主としてⅢ層が縄文時代晩期、Ⅳ層が縄文時代早期の遺物包含層であるが、早期～晩期までの縄文時代各期の遺物が少量ではあるが各地点から出土しており、Ⅲ層からは古墳時代の遺物も出土している。縄文時代相当の遺物は土器・石器合わせて総計 244 点が出土した。



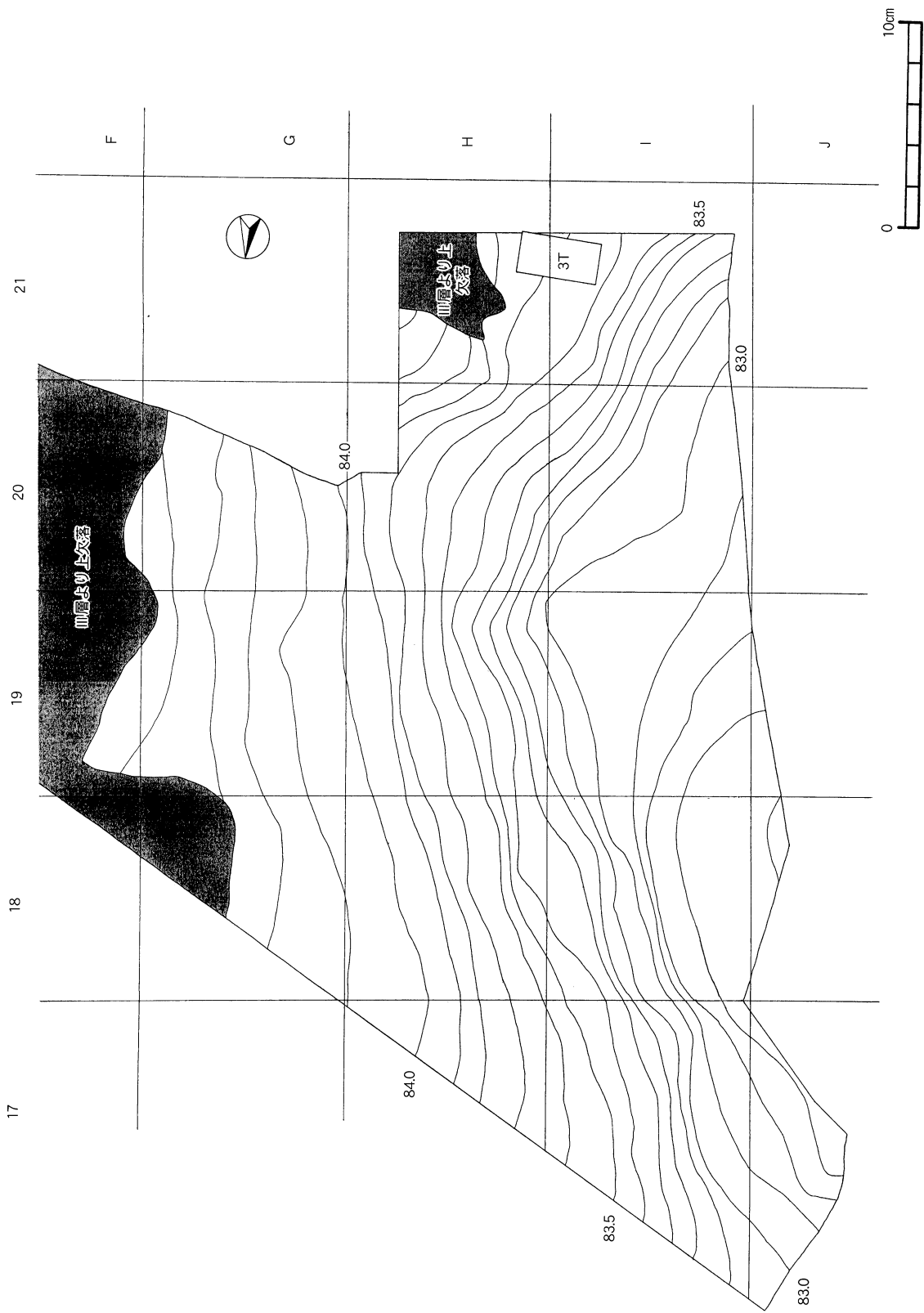
第43図 調査範囲内 表土直下シラス露出範囲



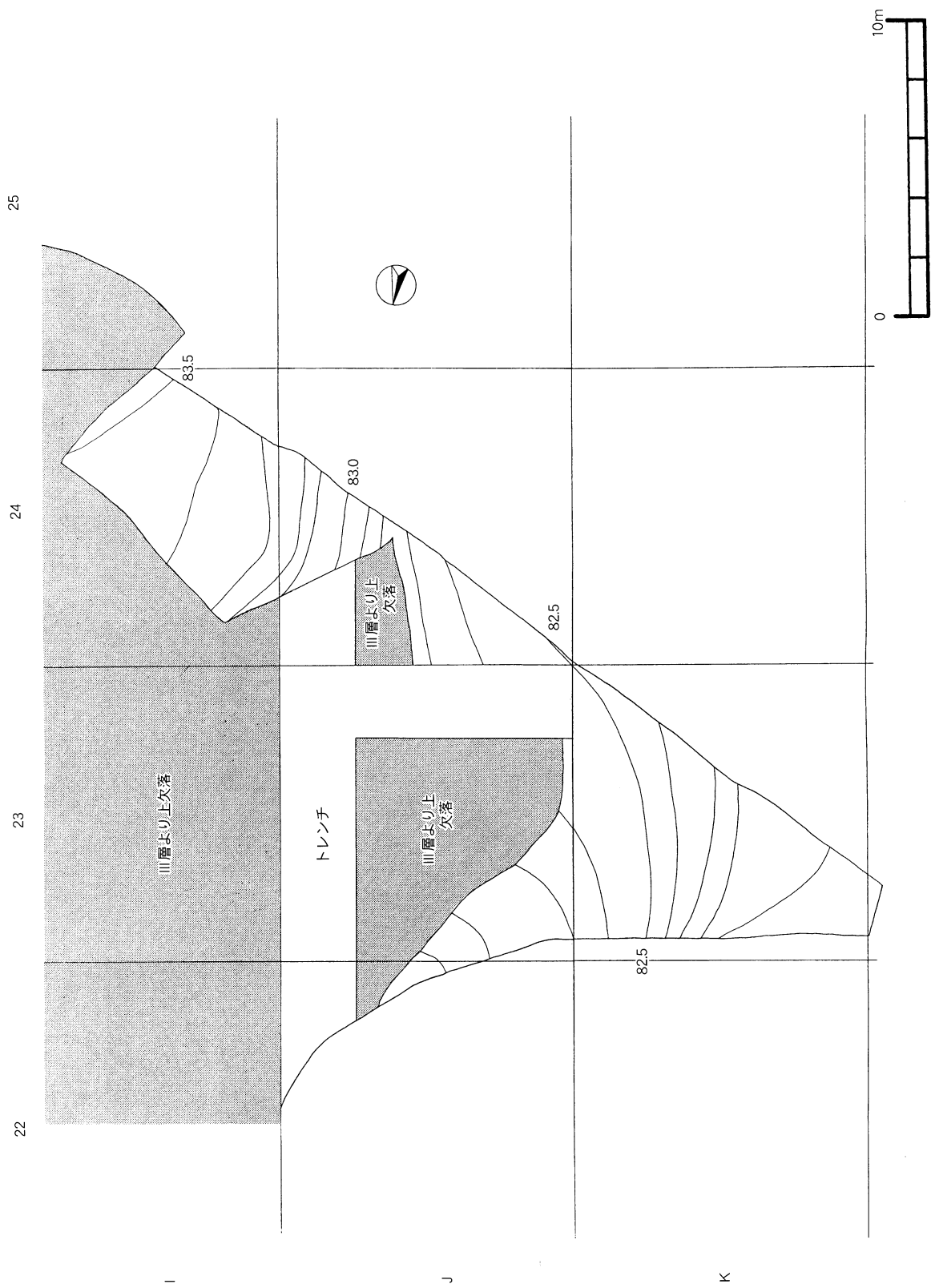
第44図 第0地点 Ⅲ層地形図



第45図 第1地点 IV層地形図

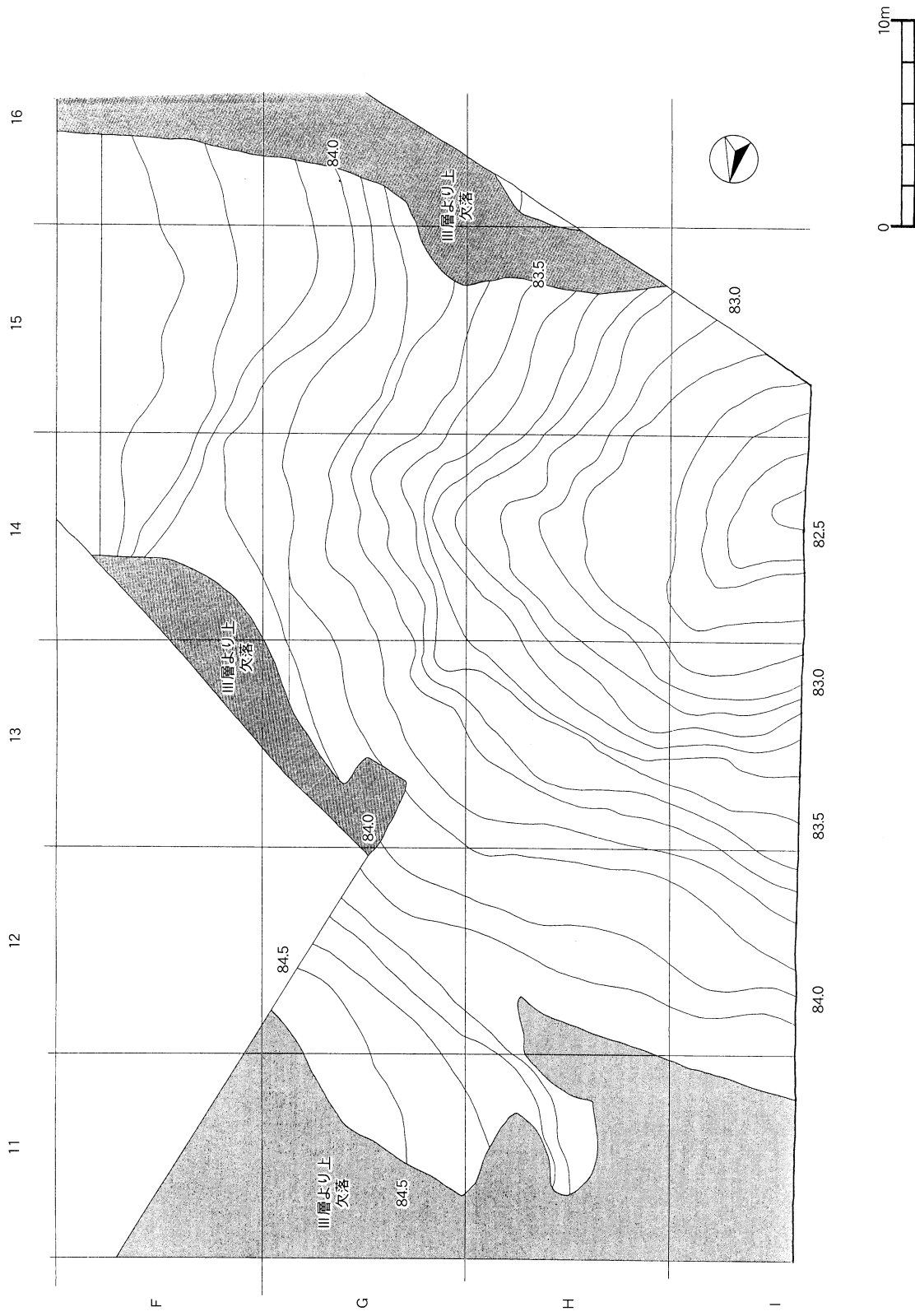


第46図 第2地点 III層地形図



第47図 第2地点 Ⅲ層地形図





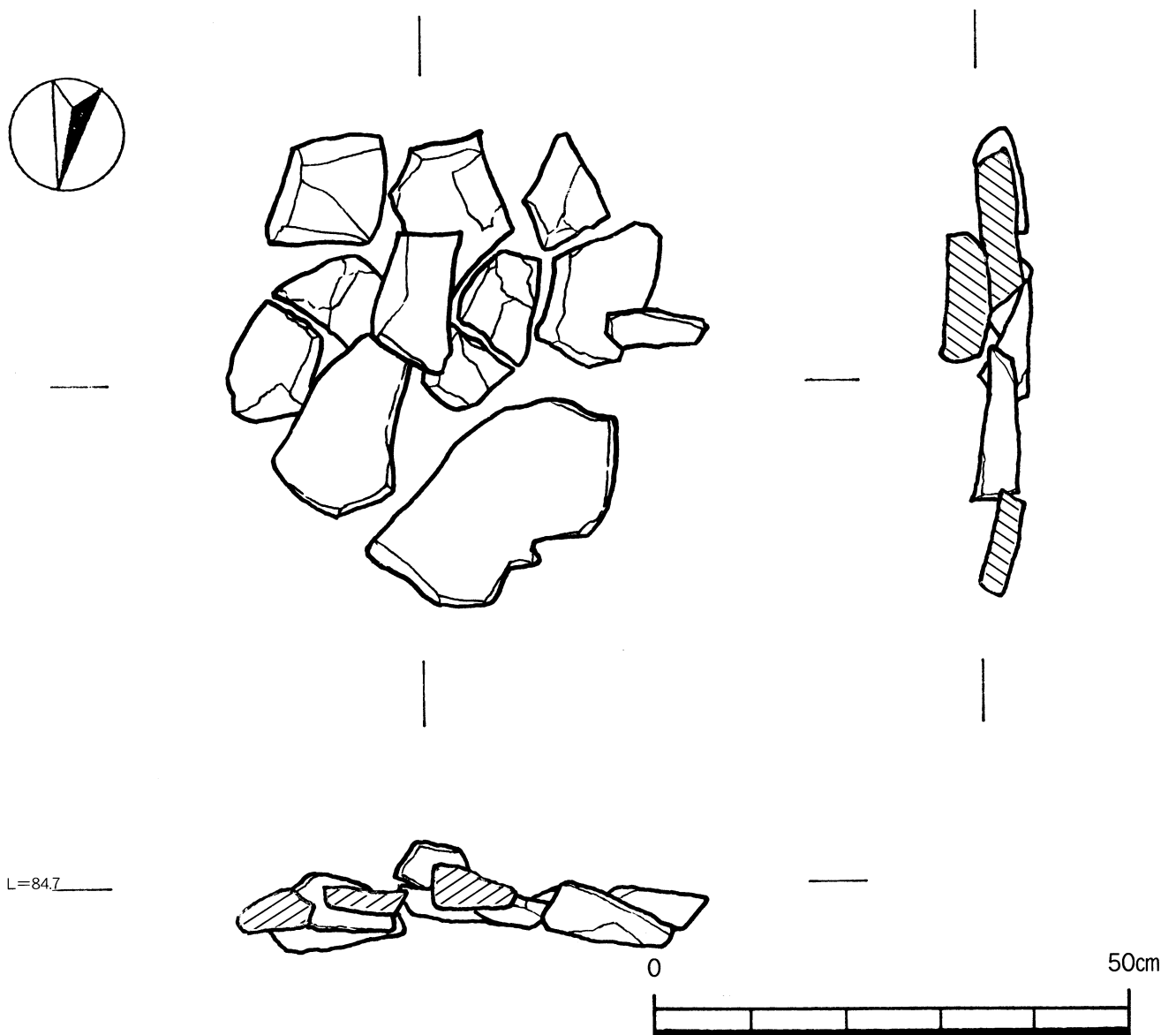
第48図 第3地点 Ⅲ層地形図

## 2 遺構

Ⅲ層から1基，Ⅴ層（縄文時代早期）から3基の集石を検出した。集石はいずれも掘り込みを検出することは出来なかったが，縄文時代早期相当の遺物の出土がⅣ層を中心にみられたことを考慮すれば，Ⅴ層検出の3基は，本来掘り込みを有していた可能性がある。また，集石の構成礫に被熱によると考えられる赤化やヒビ割れ及び破損は認められなかった。1号集石以外は第0地点から検出された。

### (1) 1号集石（第49図）

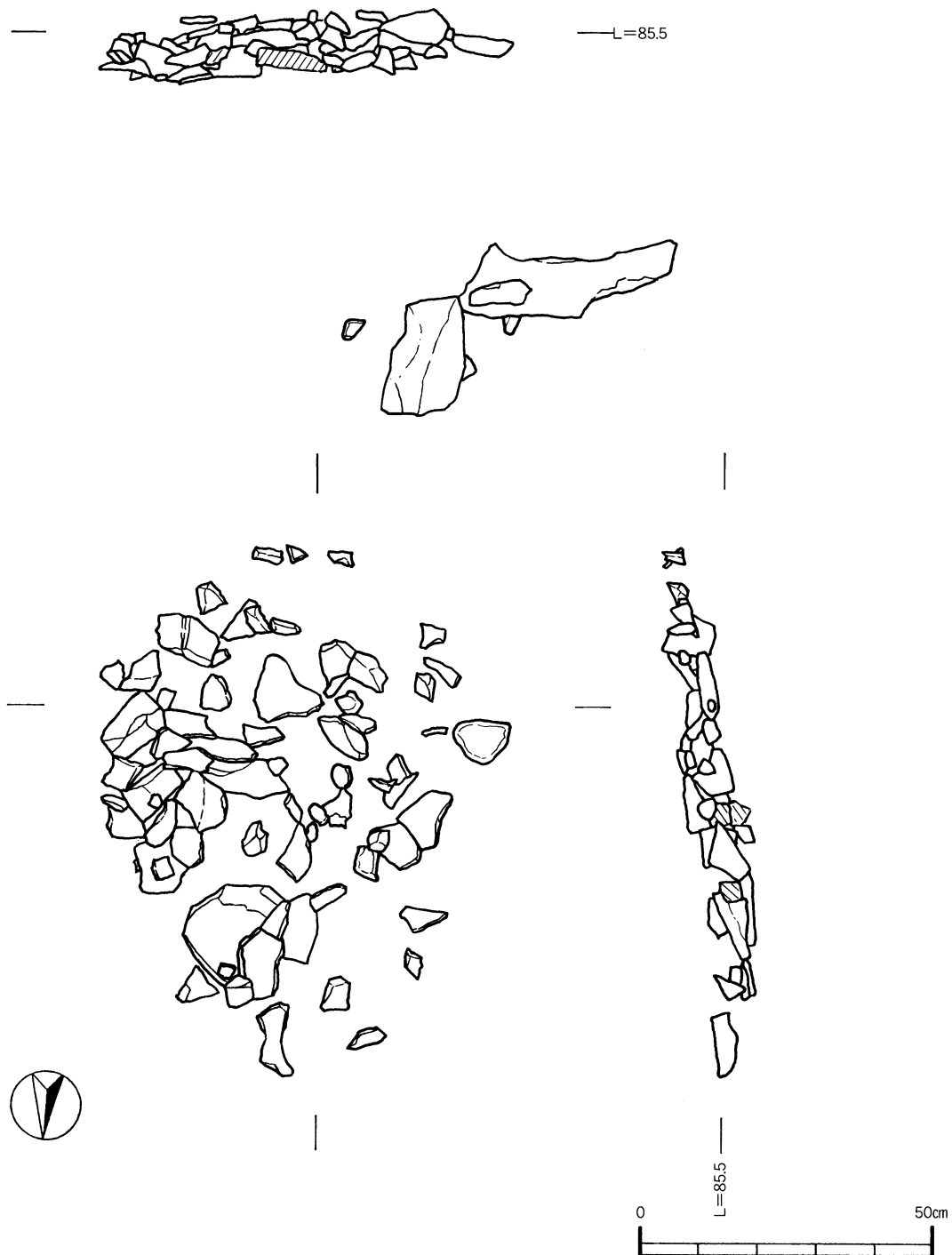
H-14区との境界に近いH-13区のⅢ層より検出された。長径60cm，短径50cmの中に計12点の礫がまとまったものである。明瞭な掘り込みは認められず，熱を受けたためと考えられる赤化やヒビ割れ及び破損したものも認められなかった。



第49図 1号集石検出状況

(2) 2号集石 (第 50 図)

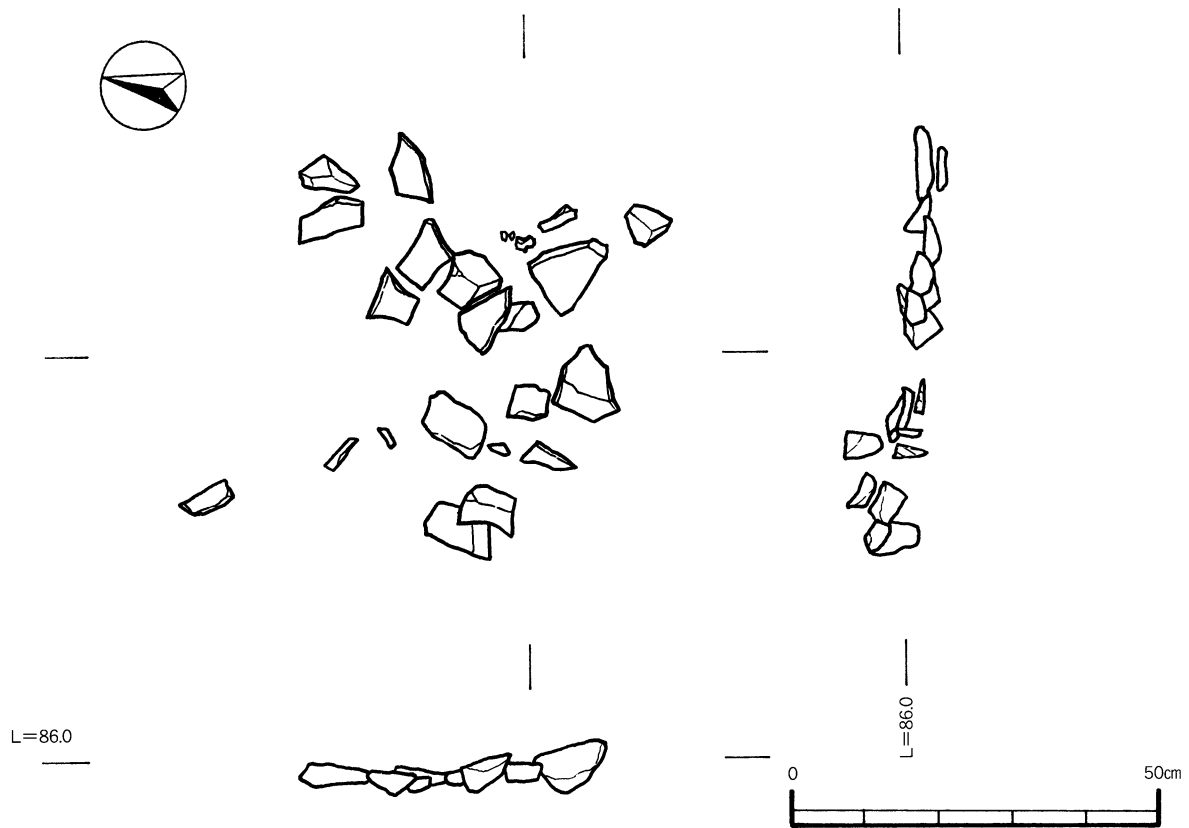
B-30 区のV層より検出された。長径 140cm, 短径 100cm の中に計 80 点の礫が散在している。掘り込みは認められず, 赤化や割れもほとんど認められなかった。



第50図 2号集石検出状況

(3) 3号集石 (第51図)

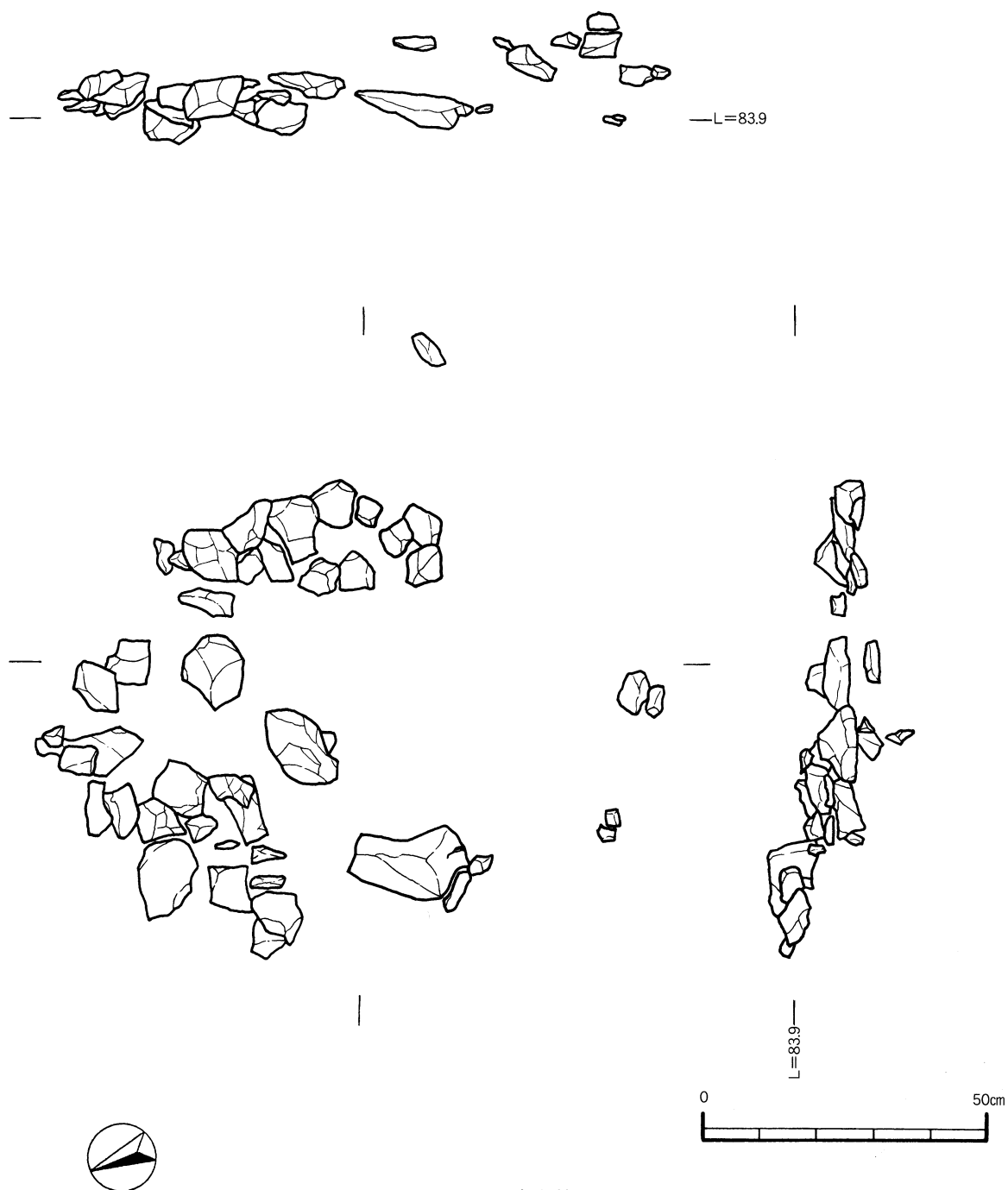
B-30区のV層より検出された。長径70cm、短径60cmの中に計22点の礫が散在している。掘り込みは認められず、赤化はほとんど認められなかった。礫は破碎したような礫が多く、10cm以下のものがほとんどであった。



第51図 3号集石検出状況

(4) 4号集石 (第52図)

VI層上面に近いV層下面から検出された。B-31区との境界に近いC-31区より検出された。当初、VI層への漸移する層から検出されたため礫群である可能性も検討した。しかし、周辺のVI層の遺物出土状況などから集石であると判断した。長径120cm、短径110cmの中に計44点の礫がまとまったものである。明瞭な掘り込みは認められず、熱を受けたためと考えられる赤化やヒビ割れ及び破損したものも認められなかった。



第52図 4号集石検出状況

### 3 遺物

#### (1) 土器

縄文時代の土器は総数 244 点出土し、そのうち 67 点を図化した。遺物は第 1 地点～第 3 地点まで広範囲にわたって出土した。Ⅲ層が縄文時代前期から晩期にかけての遺物包含層、Ⅳ層が縄文時代早期の遺物包含層として捉えられる。縄文時代早期の遺物がⅢ層からも出土したが、後世の攪乱により混入したものと判断される。遺物は小破片が多く、まとまって出土した遺物は少なかった。口縁部から底部まで接合でき、完形品として復元できた土器が 2 点出土している。

土器の出土量が少ないが、縄文時代の各期にわたって出土していることは特徴的である。

#### ①縄文時代早期 (第55図 456～467)

縄文時代早期の遺物は 39 点出土している。そのうち 12 点を図化した。縄文時代の土器片は小破片のものが多かったが、早期の岩本式段階と考えられる土器が第 3 地点から、前平式土器が第 0 地点からそれぞれ口縁部から底部まで出土し、完形品として復元できた。

456 は口縁部直下に横位・縦位・斜位の貝殻腹縁刺突文が不規則に廻らされている。内面は口唇部に近い部分は丁寧な調整を施しているが、口縁部より下は板状(?)の工具による横位の調整を行っている。外面は丁寧なナデ仕上げを行っている。底部は安定した平底で、底端部にはヘラによる縦位の短沈線文を施している。岩本式段階の土器であると思われる。

457 は平坦な口唇部に刻みを連続して施し、口縁部直下に縦位の貝殻腹縁刺突文を巡らしている。内面は板状(?)の工具による横位の調整を行っている。外面は横位の貝殻条痕を施している。底部は平底で胴部との境界にはヘラによる縦位の短沈線文を施している。前平式土器に分類できる。458 は前平式土器の口縁部片である。口唇部は縦に貝殻を利用した押引状の貝殻刺突文が施され、その下部には縦位の貝殻条痕文が施されている。459 の胴部片は、貝殻条痕を斜位に施したあと、貝殻腹縁部で縦位に刺突したものである。

460・461・462 は胎土・色調が類似しており、同一個体である可能性がある。460 は、口縁部片で楕円形の押型文が斜位に施されている。口唇部直下の内側にも横位に楕円形の押型文が施されている。461・462 は胴部の破片で、外面には斜位に楕円形の押型文が施されている。押型文の一部分をナデ消して無文の部分を作り出しているのが特徴的である。462 は外面の文様が切り合う部分が見られ、斜位を基本としながら不規則に文様を施している。461 の内面には粘土紐の接合痕が見られる。

463 は胴片で、楕円形の押型文が縦位に施されている。464 の胴部片は、緩やかに外反し、山形の押型文が縦位に施されている。僅かに外反していることから、口縁部に近い部位と考えられる。

465 は波状を呈する口縁部片である。内面は工具による丁寧な調整を施している。外面には微隆起突帯を貼り付けており、口唇部まで伸びているものもみられる。手向山式土器と考えられる。

466 は撚糸文が斜位に施された胴部片である。467 は縄文が斜位に施された胴部片である。

#### ②縄文時代前期 (第55図・56図 468～476)

縄文時代前期の土器片は 15 点出土している。そのうち 9 点を図化した。深浦式・轟式土器が第 2 地点より出土している。

468 は口縁部片で型式は不明である。外面の文様は摩耗していて判別しにくい。内面は工具を使

用した調整を施している。469 は口縁部の破片で、口唇部に刻目が施されている。内外面ともに連点文が施されている。470 は口縁部から縦位に細い粘土紐を貼り付けている。内面には横位の貝殻条痕がみられる。器壁が薄く轟式の荘タイプと考えられる。471 は口唇部に刻目を施しており、内外面ともに連点文を施している。472 の口縁部片は、外面に工具による調整、内面に貝殻条痕を施している。口唇部には二枚貝の背面によると考えられる押圧文が施されている。473・474 は細沈線と連点文が施されていることから、深浦式土器と考えられる。474 は胴部片であるが、内面にも連点文が施されていることから、口縁部に近い部分であることがわかる。

475 の胴部片は貝殻押引文が施されている。476 は細沈線と押引文が施されており、深浦式土器と考えられる。

### ③縄文時代中期（第56図 477～479）

縄文時代中期の土器片は 19 点出土している。そのうち同一個体と考えられる春日式土器 3 点を図示した。

477 が口縁部、478 が胴部の破片、479 が上げ底の底部である。478・479 の胎土には金雲母が含まれている。この 3 点はともに内外面に貝殻条痕文が施され器壁も薄く仕上げていることから、接合はできなかったが、同一個体であると考えられる。477 の口縁部片は口唇部に刻目、口縁部直下に沈線文と刺突連点文を組み合わせた文様を施し、キャリパー状に内弯する。

### ④縄文時代後期（第56図・57図 480～501）

縄文時代後期の土器片は 34 点出土している。そのうち 22 点を図化した。第 0 地点より市来式・出水式土器が、第 3 地点より出水式・西平式土器が出土した。

480 は口縁部から胴部にかけての破片で、出水式の深鉢形土器である。口縁部に文様が集約されており、凹線文が施されている。口縁部の文様は斜位の短沈線を基本とするが、口縁部の一部に隆起部をもうけ、その外面に 4 段の連続凹点文を施している。この隆起部は胴部の器壁よりもやや肥厚させており、文様としてアクセントをつけている。481 は口縁部の破片で 480 と胎土や色調が類似するので同一個体の可能性がある。口唇部には刺突連点文を施している。482 は口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部直下で若干屈曲させている。この屈曲した部分の内側に粘土を後から貼り付けて肥厚させ、口縁部の一部を高くしている。指でなでた痕が明確に残り、肥厚させた口唇部には連続刺突文を施している。外面は無文である。

483 は口縁部を部分的に高くしている。この隆起した口縁部に細沈線で不規則に文様を施しており、口唇部には刺突連点文がみられる。口唇部は粘土紐を後から貼り付けて作り出しており、特に高くしている口唇部は燃った粘土紐を貼り付けている。貼り付けた粘土紐の部分の器面の調整は不十分で、調整痕や指で押さえた痕の凹みもはっきりとわかる。色調や胎土が 480 と類似している。484 は粗製の深鉢の胴部の破片で、口縁部に近い部分に沈線がみられる。内面はナデによる調整を加えているが、焼成不良のため脆くなっている。485 は出水式土器の深鉢と考えられる。器形は胴部で緩やかな曲線を描き、口縁部付近で外反する。文様は口縁部周辺に集約されており、鋸歯状の短線をめぐらせている。短沈線には節目に刺突を施している部分もみられる。口唇部は指頭状の凹点が施され、小刻みな波状を呈している。486 は口縁部を境にして外側に若干屈折させており、口縁部に文様を集約させている。480 と比較すると文様帯の幅が狭い。短沈線による鋸歯文と、3 段

の横位沈線文により文様を構成している。487 は沈線文を斜位に施している。器面調整の際についてものなのか判別不可能であるが、内外面に1条の細沈線らしきものがみられる。口唇部には2.5cmの間隔で刺突文が施されている。488 は胴部の破片で縄文と沈線文が施されている。磨消縄文土器と考えられる。489 は口縁部を外側に屈曲させている。口縁部は断面三角形を呈し、2条の沈線を廻らしており、松山式土器段階のものと考えられる。490 も断面三角形を呈する口縁部片で、口縁部下に貝殻刺突文と連続した爪形文を施している。市来式土器と考えられる。491 は口縁部の破片で、口唇部に2条の沈線を施している。西平式土器と考えられる。492～499までは無文の口縁部片で、型式は不明であるが、縄文時代後期相当の土器と考えられる。492・493・494は粗製の深鉢の口縁部から胴部にかけての破片である。胴部から口縁部にかけて緩やかに内弯している。492は工具による調整痕がはっきりと残っている。494は口唇部を指で押さえつけている部分がみられ、波状の口縁部に仕上げている。495は口唇部が若干外反している。496は内面のナデは丁寧だが、外面には工具による調整痕が残っている。器形はほぼ直立しているが、口縁部周辺は指で押さえつけたため僅だが器壁が薄くなっている。497は無文でほぼ直立した器形である。498は口唇部を平坦に仕上げている。

500は口縁部直下に径3mm程度の刺突を廻らしている。縄文時代晩期に見られる孔列土器の手法に類似する。501は器面の凹凸が顕著な口縁部片である。古墳時代の手づくね土器の可能性も考えられる。

#### ⑤縄文時代晩期

縄文時代晩期の土器は71点出土している。縄文時代各期の中でもっとも多い出土点数であるが、完形品として復元できる遺物がなかった。縄文晩期の土器は古い順に、i) 上加世田式土器(第58図502～509)、ii) 入佐式土器(第58図510・511)、iii) 黒川式土器(第59図512～522)の3つに分けられる。

##### i) 上加世田式土器(第58図502～509)

502は上加世田式と思われる深鉢型土器で、屈折して内傾する短い口縁部をもつ。口縁部の文様帯には2条の横走沈線が廻らされている。胴部は鋭く「く」字形に屈折し、頸部は彎曲して外反する。器壁は全体的に薄く均一である。焼成は良好で、胎土も精選されている。503は深鉢型土器の胴部で、胴部は鈍く「く」字形に屈折し、頸部は彎曲して外反する。頸部外面の口縁部付近は研磨、頸部より下位の外面と内面はナデ仕上げである。504～507は深鉢型土器の口縁部で、器壁は薄く、外面には研磨が施されている。508・509は深鉢型土器の頸部で、頸部は彎曲して外反する。胴部の屈折部上部には2条の沈線が廻らされる。この沈線は屈折部より若干上部に位置する。屈折部より下部は2点とも欠落している。外面には研磨が施されている。

##### ii) 入佐式土器(第58図510・511)

510は粗製の深鉢型土器。胴部から口縁にかけての破片である。口縁部が外傾し、胴部は「く」字形に屈折する。511は粗製の深鉢型土器。口縁部から肩部にかけての破片である。口縁部が外傾し、屈折部分がL字状に外に突き出している。外面は工具で調整しているが、工具痕を消そうとした部分もみられる。



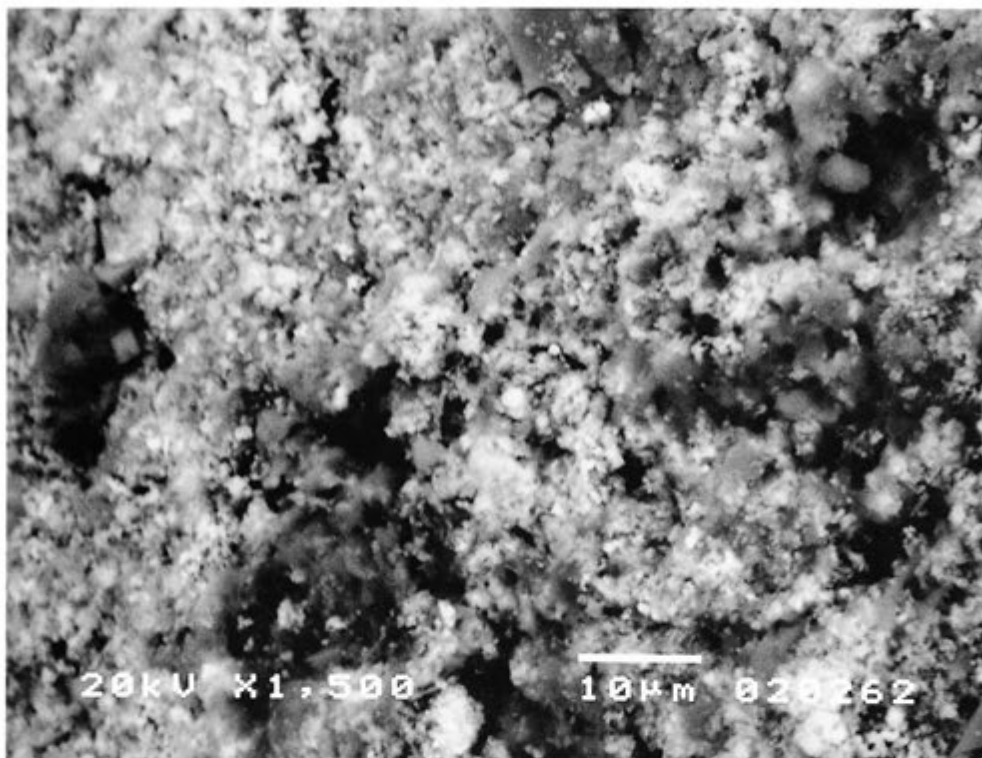
iii) 黒川式土器 (第 59 図 512 ~ 522)

512・513・514 は粗製の深鉢型土器の底部である。いずれも張り出しをもつ平底の底部である。

512・513 は焼成が良好だが、514 は焼成があまり良好ではない。513 のみは内面にヘラでミガキを施している。515・516・517・518 は精製の浅鉢型土器の口縁部である。516・517・518 は口唇部下に 1 条の横走沈線を施しており、内外面ともにミガキを施している。515 は特に内外面ともに丁寧な研磨仕上げである。口唇部直下に 1 条の横走沈線を施しており、これを境にしてやや外反する。

519 は精製の浅鉢型土器の破片で、沈線を横位に施し、沈線上に刺突を加えている。沈線の一部に赤色顔料が塗られていた。電子顕微鏡を使用して 1500 倍拡大で観察したところ、ベンガラ（水酸化鉄を焼いて得られた赤色粉末）であることが判明した。

520 は精製の浅鉢形土器の口縁部で、外面はヘラでミガキを施している。521 は精製の浅鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部に 1 条の横走沈線を施している。522 は粗製の鉢形土器の口縁部で、「く」字状に若干屈折している。



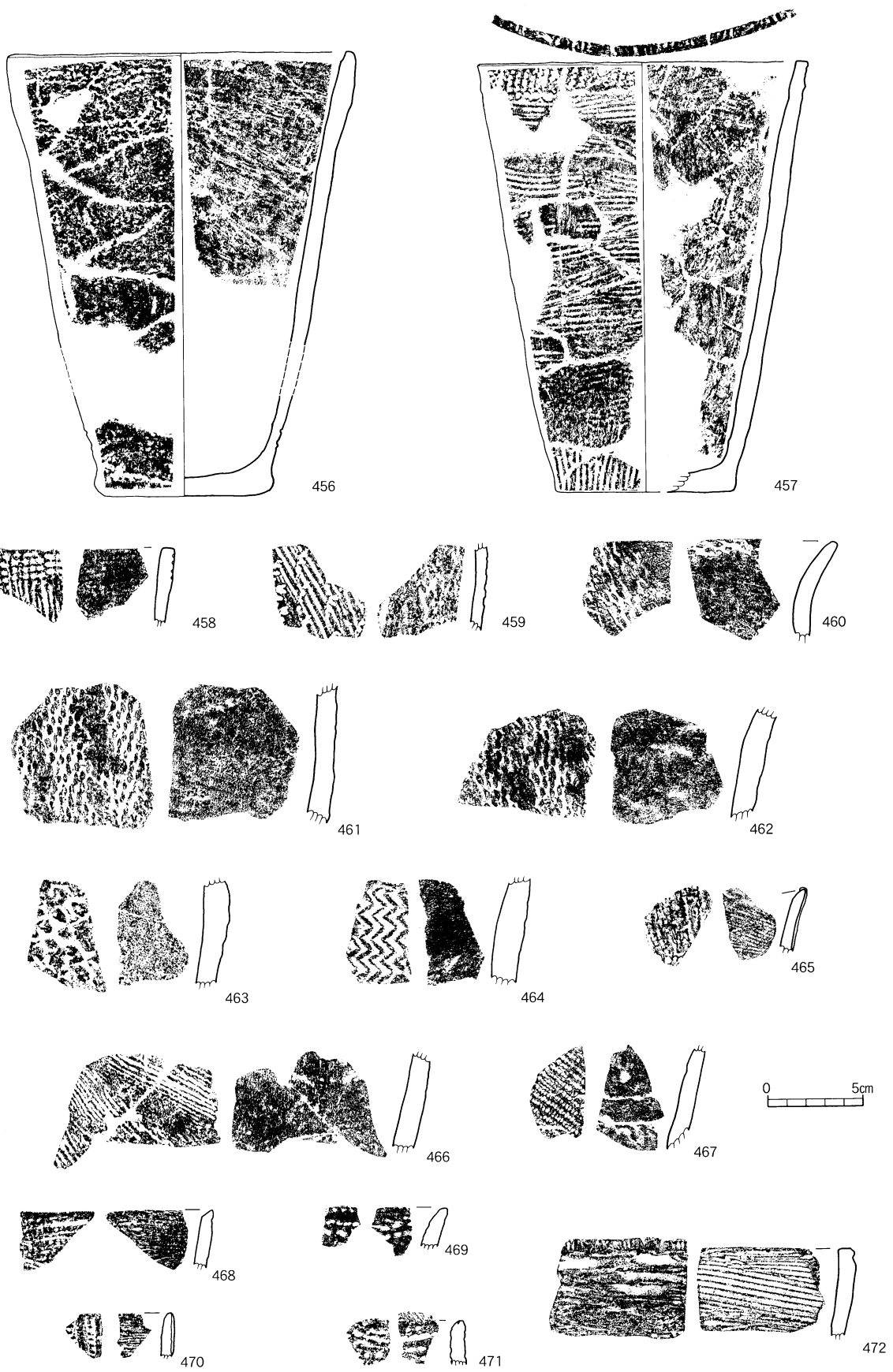
第53図 縄文晩期土器赤色顔料1500倍拡大写真  
(日本電子製 5300LV 電子顕微鏡使用)



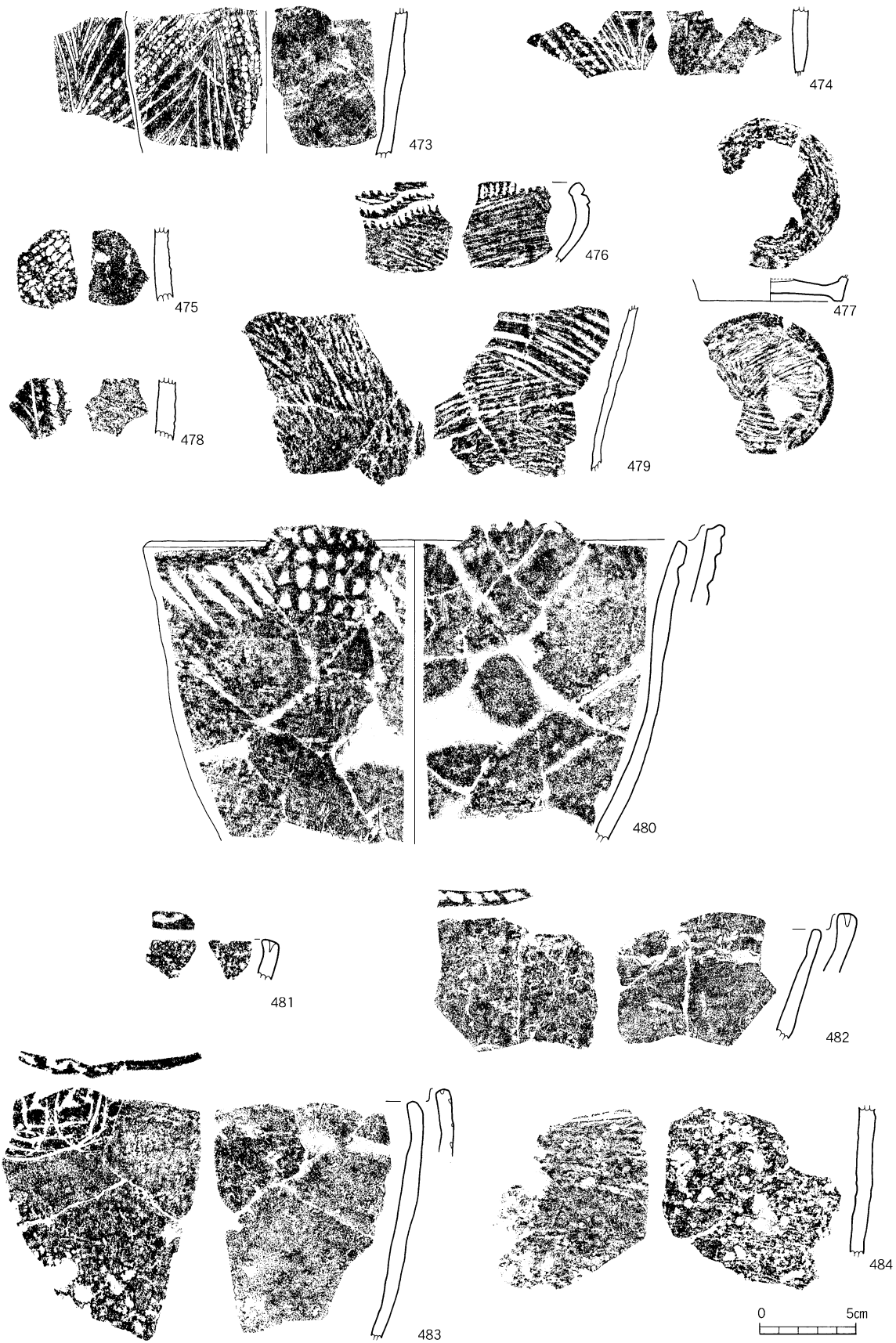
第54図 縄文土器出土状況



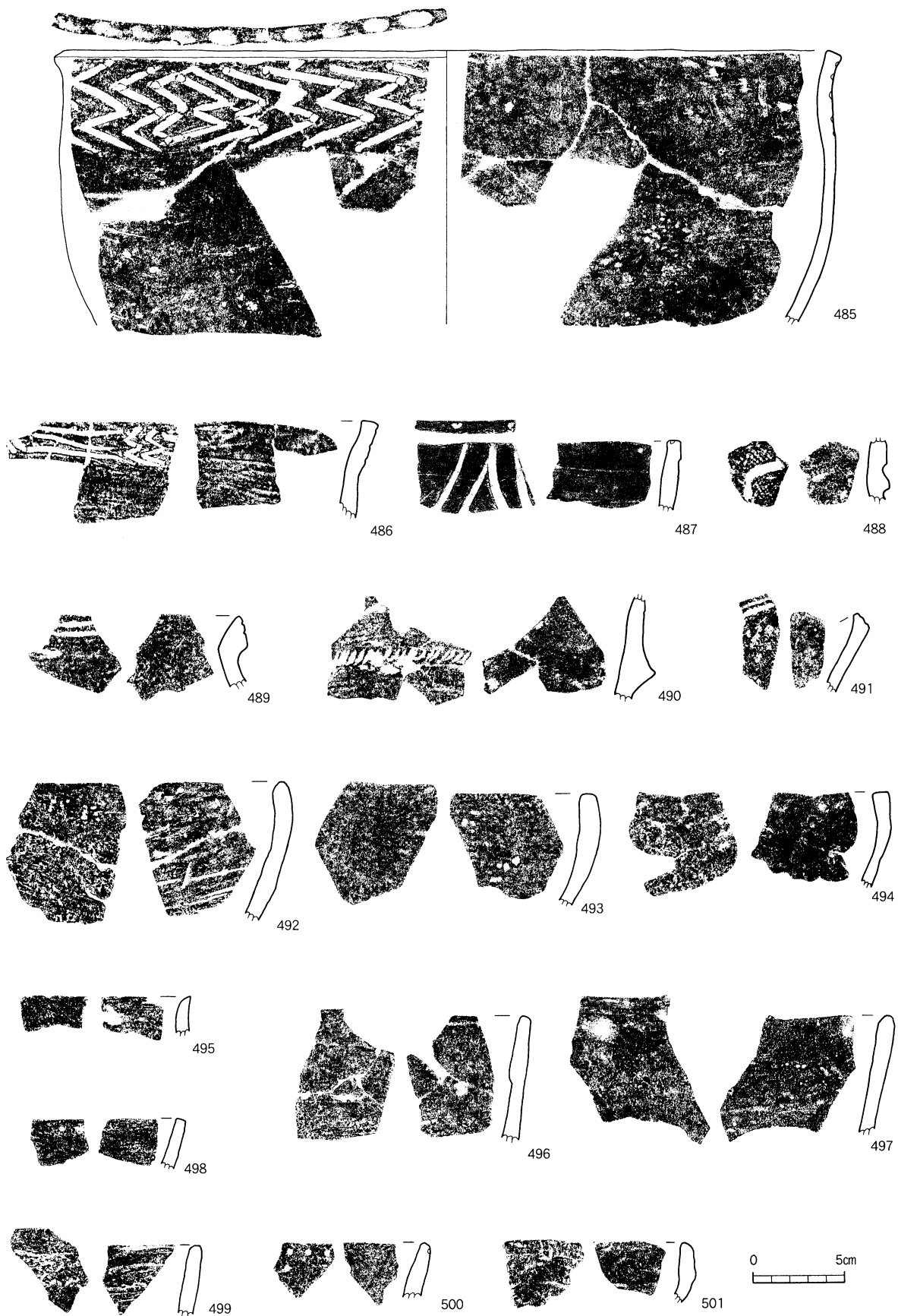
第54図 縄文土器出土状況



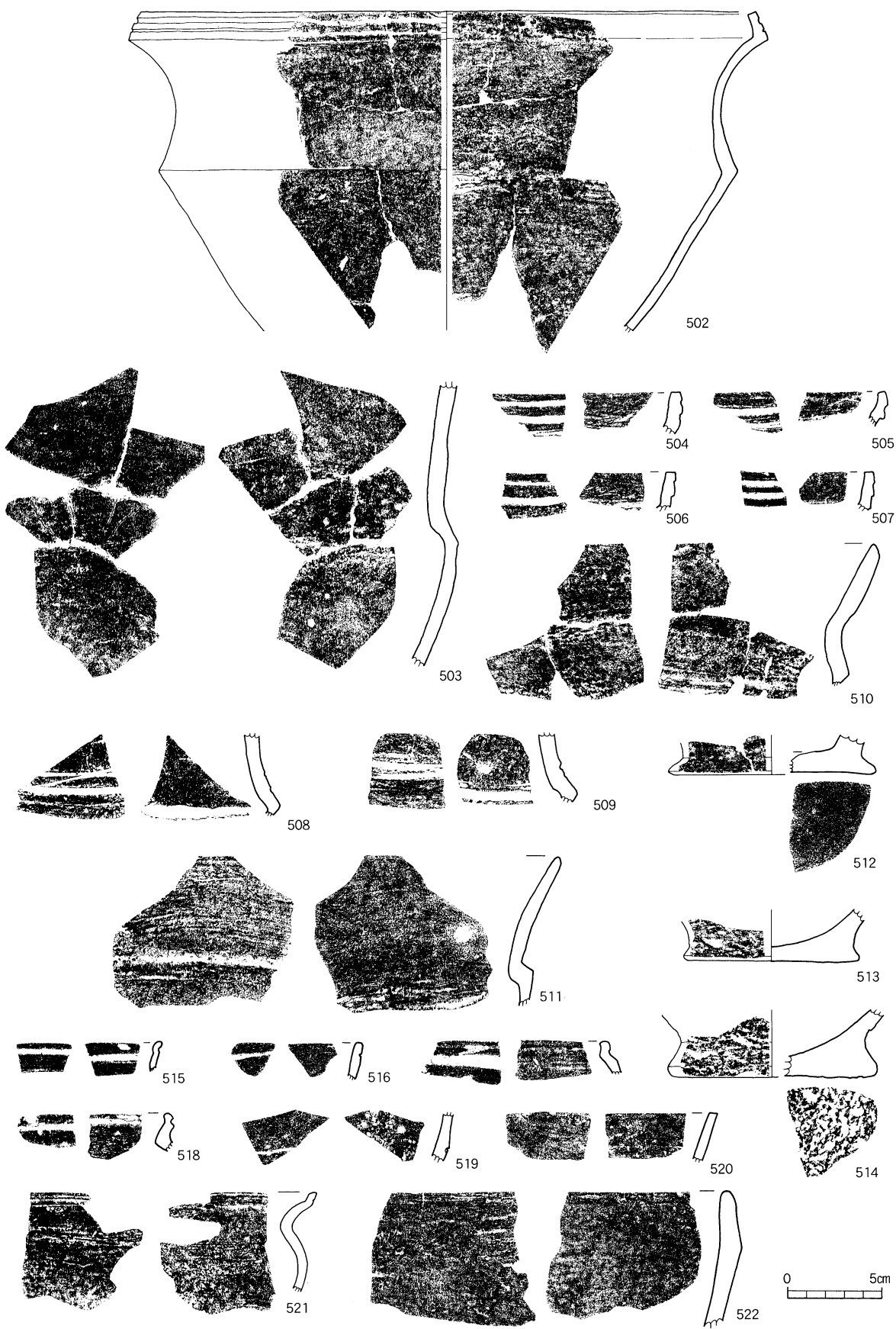
第55図 縄文土器 (1)



第56図 繩文土器 (2)



第57図 縄文土器 (3)



第58図 縄文土器 (4)

番号	区	層	部位	胎土	内面調整・文様	外面調整・文様	色調	焼成	備考	注記番号
456	G11	IV	口縁～底部	角閃石,長石,石英	ヘラケズリ	ナデ	暗黄褐色	普通	完形品	899
457	B32	V	口縁～底部	角閃石,長石,石英	ヘラケズリ,ナデ	貝殻条痕	赤褐色	普通	完形品	4532
458	G20	I	口縁部	角閃石,長石,石英	工具ナデ	貝殻条痕	赤褐色	良好	表面採集	30046
459	I19	IV	口縁部	角閃石,砂粒,長石,石英	ナデ	貝殻条痕	淡褐色	良好		806
460	I14	III	口縁部	輝石,石英,長石	ナデ,押型文	押型文	褐色	良好		1716
461	F14	III	胴部	角閃石,長石,石英	ナデ	ナデ,押型文	黄褐色	普通		1178
462	F14	III	胴部	角閃石,長石,石英	ナデ	ナデ,押型文,スス付着	黒褐色	普通		1172
463	B30	III	胴部	角閃石,砂粒,長石,石英	ナデ	押型文	淡褐色	不良		2420
464	C30	IV	胴部	角閃石,砂粒,長石,石英	ナデ	押型文	暗褐色	不良		2625
465	I17	III	口縁部	角閃石,長石,石英	工具ナデ	ナデ	淡褐色	良好		849
466	F14	III	胴部	輝石,石英,長石	ナデ	燃糸文,ナデ	褐色	良好	擬口縁	1174
467	F14	III	胴部	角閃石,長石,石英	ナデ	縄文,ナデ	暗褐色	良好		1436
468	B30	III	口縁部	角閃石,長石,石英	工具ナデ	条痕	暗茶褐色	良好		2415
469	I18	III	口縁部	長石,石英	連点文	連点文	灰褐色	良好		543
470	H19	III	口縁部	角閃石,砂粒,長石,石英	貝殻条痕	貝殻条痕,微隆帯	暗褐色	良好		596
471	I17	III	口縁部	長石	連点文	連点文	灰褐色	良好		848
472		I	口縁部	長石	貝殻条痕	工具ナデ	明褐色	良好	表面採集	30047
473	H18	III	胴部	輝石,角閃石,長石	ナデ,スス付着	連点文,細沈線,スス付着	淡褐色	良好		752
474	H18	III	胴部	輝石,長石	刺突,ナデ	連点文,細沈線文	黒褐色	良好		750
475	B31	III	胴部	輝石,石英,長石	ナデ	刺突文	淡褐色	良好		1904
476	B31	III	胴部	輝石,角閃石,長石	ナデ	沈線文,連点文	茶褐色	良好		2108
477	H20	III	底部	金雲母,長石,石英	条痕,ナデ	条痕	赤褐色	良好		649
478	H20	III	胴部	金雲母,長石,石英	条痕,ナデ	条痕,ナデ	赤褐色	良好		876
479	H18	III	口縁部	長石,石英	条痕,ナデ	条痕,ナデ,沈線文,刻目	赤褐色	良好		798
480	I17	III	口縁～胴部	角閃石,長石,石英	ナデ	ナデ,太沈線文	赤褐色	良好		838
481		I	口縁部	角閃石,長石,石英	ナデ	ナデ	赤褐色	良好	表面採集	30053
482	I13	III	口縁部	角閃石,長石,石英	ナデ	口縁肥厚,ナデ	赤褐色	良好		1976
483	I13	III	口縁部	角閃石,長石,石英	ナデ	口縁肥厚,沈線文,ヘラケズリ	赤褐色	良好		1680
484	B31	III	胴部	角閃石,砂粒,長石,石英	工具ナデ	沈線文,ナデ	赤褐色	普通		1946
485	F13	III	口縁～胴部	角閃石,長石	ナデ,スス付着	沈線文,ナデ,スス付着	淡褐色	良好		1177
486	B31	III	口唇部	角閃石,長石,石英	ナデ	沈線文,ナデ	暗褐色	良好		2226
487	I18	III	口縁部	角閃石,長石,石英	ナデ	沈線文,ナデ	灰褐色	良好		785
488		I	胴部	角閃石,長石,石英	ナデ	沈線文,磨消縄文	赤褐色	良好	表面採集	30045
489	B31	III	口縁部	角閃石,長石,石英	工具ナデ	ナデ	赤褐色	普通		2070
490	B31	III	胴部	角閃石,長石,石英	ナデ	突帯文,刻目,ナデ	褐色	普通		1960
491	I13	III	口縁部	角閃石,長石,石英	ナデ	沈線文,ナデ	暗褐色	普通		1652
492	B31	III	口縁部	角閃石,長石,石英	工具ナデ	工具ナデ	赤褐色	良好		2367
493		I	口縁～胴部	輝石,角閃石,石英,長石	ナデ	ナデ	褐色	良好	表面採集	30061
494	I12	III	口縁部	角閃石,長石,石英	ナデ	ナデ	褐色	良好		1517
495	H27	IV	口縁部	輝石,石英,長石	工具ナデ	ミガキ	淡褐色	良好		358

第13表 縄文土器観察表(1)



番号	区	層	部位	胎土	内面調整・文様	外面調整・文様	色調	焼成	備考	注記番号
496	H12	Ⅲ	口縁部	角閃石,長石,石英	工具ナデ	工具ケズリ	褐色	普通		1574
497	I18	Ⅲ	口縁~胴部	角閃石,長石,石英	ナデ	ナデ	赤褐色	良好		736
498	B31	Ⅲ	口縁部	輝石,角閃石,石英,長石	工具ナデ	工具ナデ	茶褐色	良好		2093
499		I	口縁部	輝石,長石	ナデ	ナデ	黒褐色	良好	表面採集	30058
500	H27	Ⅳ	口縁部	角閃石,砂粒,長石,石英	ナデ	刺突文,ナデ	赤褐色	普通		442
501	B31	Ⅲ	口縁部	角閃石,長石,石英	ナデ	ナデ	赤褐色	良好		2293
502	H27	Ⅳ	口縁~胴部	角閃石,長石,石英	弱いヘラ研磨	ヘラ研磨,スス付着	黄褐色	良好		360
503	B31	Ⅲ	胴部	角閃石,砂粒,長石,石英	弱いヘラ研磨	ヘラ研磨	黄褐色	良好		2048
504	B31	Ⅲ	口縁部	角閃石,長石	工具ナデ	沈線文,研磨	黄褐色	良好		1949
505	B31	Ⅲ	口縁部	角閃石,長石,石英	工具ナデ	沈線文,研磨	灰褐色	良好		1930
506	B31	Ⅳ	口縁部	角閃石,長石,石英	工具ナデ	沈線文,研磨	暗褐色	良好		2631
507	B31	Ⅲ	口縁部	輝石,角閃石,石英,長石	ナデ	沈線文,研磨		良好		1939
508	B31	Ⅲ	胴部	角閃石,長石,石英	ナデ	沈線文,ミガキ	明褐色	良好		2063
509	B31	Ⅲ	胴部	角閃石,長石,石英	ナデ	沈線文,ミガキ	明褐色	良好		2363
510	H13	Ⅲ	口縁~胴部	砂粒,角閃石,長石,石英	工具ナデ	工具ナデ	暗褐色	良好		1348
511	B31	Ⅲ	口縁部	角閃石,長石,石英	工具ナデ	工具ナデ	暗褐色	良好		1927
512	B31	Ⅲ	底部	輝石,長石	ナデ	ナデ	茶褐色	良好		2470
513	B31	Ⅲ	底部	角閃石,砂粒,長石,石英	ヘラ研磨	ナデ	赤褐色	良好		2142
514	H13	Ⅲ	底部	輝石,石英	ナデ	工具ナデ	淡褐色	良好		1399
515	C31	Ⅲ	口縁部	長石	ヘラ研磨	沈線文,ヘラ研磨	黒褐色	良好		30052
516	B31	Ⅲ	口縁部	長石	ナデ	ナデ,スス付着	黄褐色	良好		1902
517	H15	Ⅲ	口縁部	角閃石,長石,石英	ナデ	沈線文,ナデ	灰褐色)良好	良好		1161
518	B31	Ⅲ	口唇部	角閃石,長石	ナデ	沈線文,ナデ	赤褐色	良好		1909
519	I13	Ⅲ	胴部	角閃石,長石	研磨	細沈線文,刺突文,研磨	灰褐色	良好	沈線に赤色顔料	1530
520	G28	Ⅲ	口縁部	輝石,石英	研磨	研磨	黒褐色	良好		27
521	H19	Ⅲ	口縁部	角閃石,長石,石英	工具ナデ	沈線文,ヘラ研磨	黄褐色	良好		30054
522		I	口縁~胴部	輝石,角閃石,石英,長石	ナデ	ナデ	褐色	良好	表面採集	30060

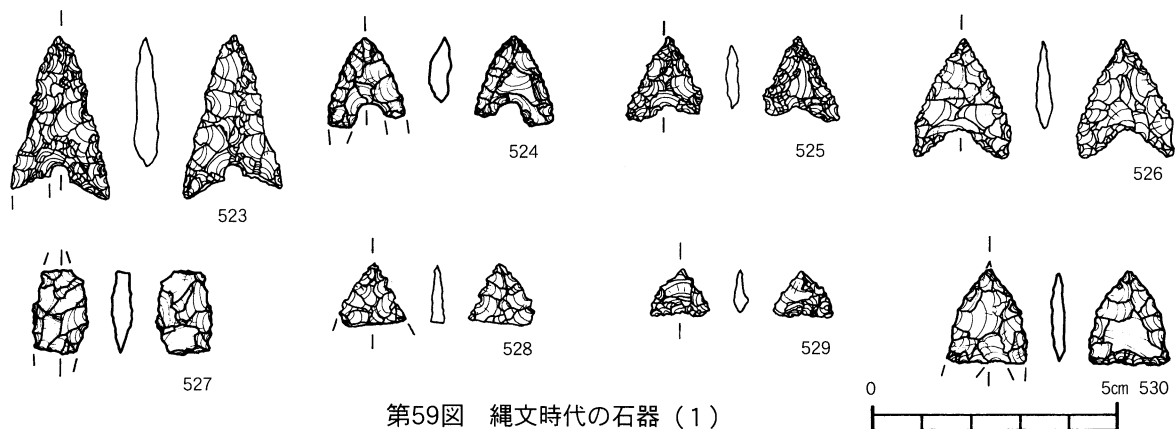
第14表 縄文土器観察表(2)

## (2)石器

### ①石鏃

#### i) IV層出土の石鏃 (第59図 523～530)

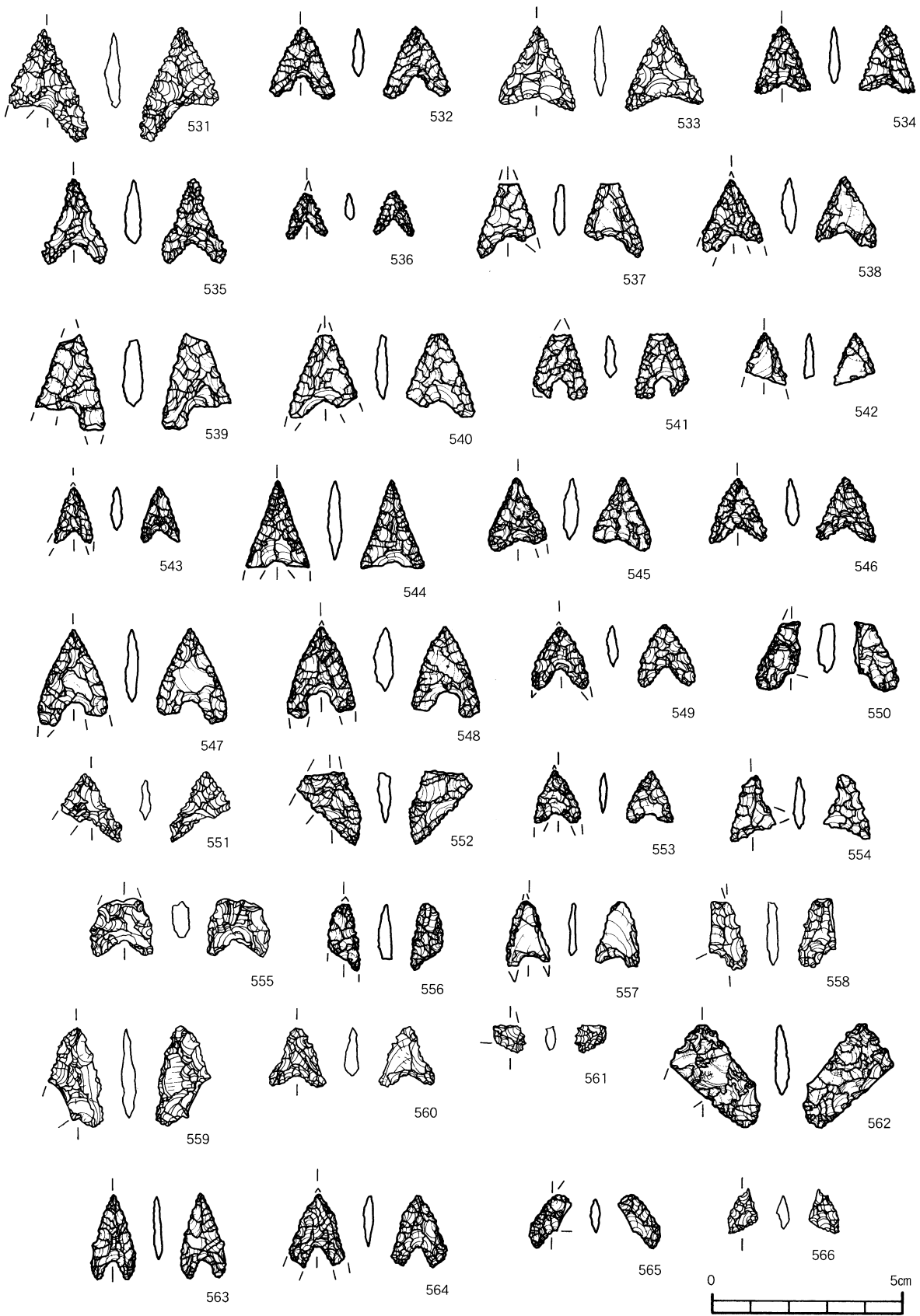
523 は腰岳産の黒曜石を用いたものである。先端は普通で、側辺部の側面は直線的で三角形を呈し、基部は逆刺が円く挟りが極めて深いが、両脚部先端は破損している。大型の石鏃である。524 は鉄石英を素材に用いたもので、先端は普通であるが側辺部の側面が外弯し、脚部は片脚が極端に違うが、逆刺が円く挟りが極めて深いものである。525 は腰岳産の黒曜石を用いたもので、先端は鋭く、側辺がまっすぐで三角形を呈し、基部は片脚が破損しているが、逆刺が鋭く挟りが深いものである。526 は頁岩を素材に用いたもので、先端は鋭く、側辺が外弯し、基部は逆刺が鋭く挟りが深いものである。527 はメノウを素材に用い、先端部は欠損しているが、側辺は外弯し基部は平基である。528 は安山岩を素材に用いたもので、先端部だけであるが、側辺がまっすぐで三角形を呈するものである。529 は三船産の黒曜石を用いたもので、先端部が破損しているが基部は逆刺が鈍く挟りが浅いものである。530 はハリ質安山岩を素材に用いたもので、先端は鋭く、側辺は側面が外弯し最大幅が下方にある。基部は平基である。



第59図 縄文時代の石器 (1)

#### ii) III層出土の石鏃 (第60図 531～566) (第61図 567～582) (第62図 583)

531 は上牛鼻産の黒曜石を用い、先端は鋭く側辺は側面が外弯している。基部は片脚が欠損しているが、逆刺が鈍く挟りが極めて深いものである。532 は佐賀県嬉野の椎葉川産の黒曜石を用いたもので、先端は鋭く、側辺はまっすぐで三角形を呈し、基部は逆刺が円く挟りは深いものである。533 は安山岩を素材に用いたもので、先端は鋭く、側辺は側面が外弯し、基部は逆刺が鋭く挟りが浅いものである。534 はチャートを素材に用いたもので、先端は鋭く、側辺はまっすぐで三角形を呈し、逆刺は鈍く挟りは浅いものである。535 は長崎県針尾島産の黒曜石を用いたもので、先端部は欠損している。側辺部の側面はやや内弯し基部は逆刺が円く挟りは深いものである。調整剥離はやや粗い。536 は椎葉川産の黒曜石を用いた小型のもので、先端部は欠損しているが、側辺はまっすぐで鋸歯状を呈している。基部は逆刺が円く挟りが極めて深いものである。537 は頁岩を素材に用いたもので、先端部と片脚が欠損している。側辺はまっすぐで三角形を呈し、基部は逆刺が鈍く挟りは深いものである。538 は三船産の黒曜石を用いたもので、先端は鋭く、側辺はまっすぐで三角形を呈し、基部は逆刺が鈍く挟りは深い。片脚が欠損している。539 は針尾島産の黒曜石を用いたもの



第60図 縄文時代の石器（2）

で、先端部と片脚が欠損している。側辺はまっすぐで三角形を呈し、基部は逆刺が直線的で挟りが深いものである。

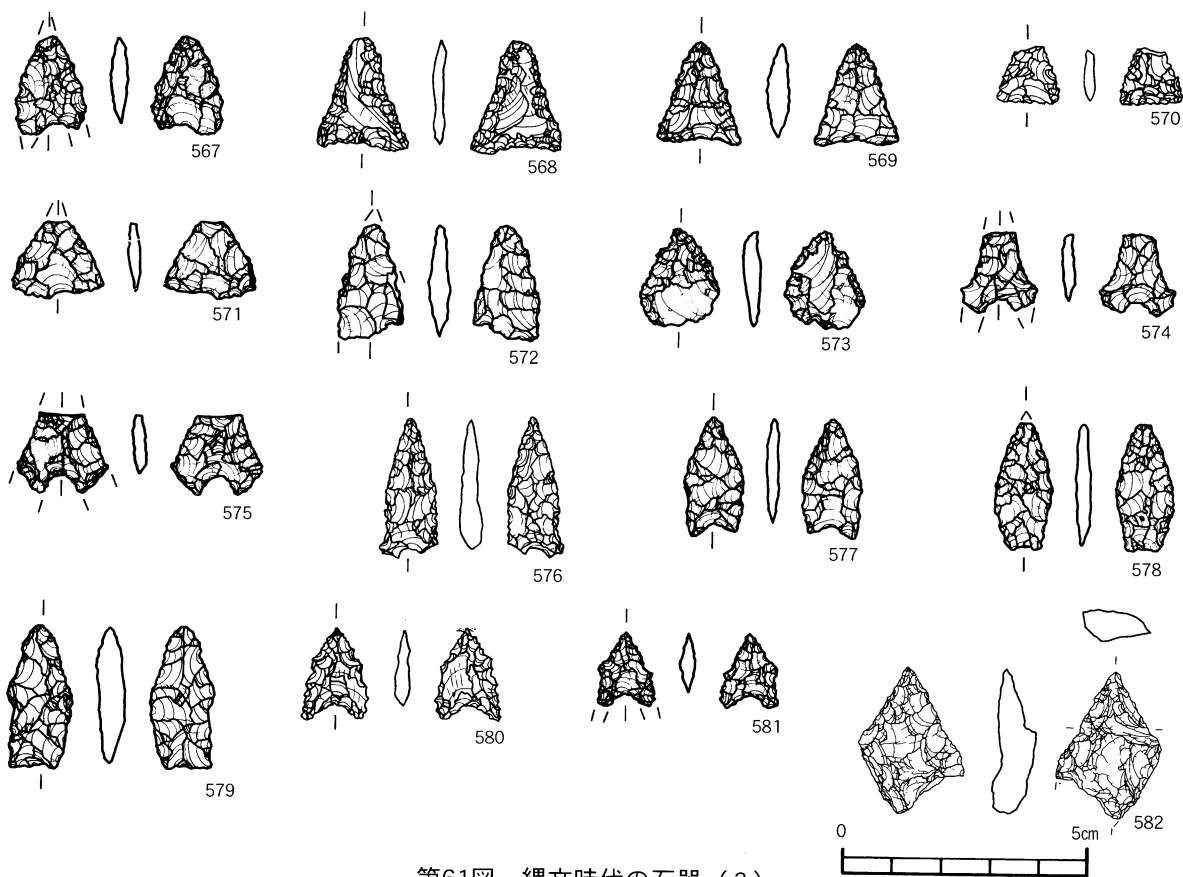
540 は安山岩を素材に用いたもので、先端部と片脚が欠損している。側辺はまっすぐで三角形を呈し、基部は逆刺が円く挟りはやや深くなっている。541 はチャート素材に用いたもので、やはり先端部と片脚が欠損している。側辺はまっすぐで三角形を呈し、基部は逆刺が直線的で挟りは極めて深いものである。542 は上牛鼻産の黒曜石を用いたもので、先端部は鋭いもので、基部は破損している。543 は佐賀県腰岳産の黒曜石を用いた小型の石鏃である。先端は普通で、側辺はまっすぐで三角形を呈し、基部は逆刺が鋭く挟りはやや深いものである。544 は針尾島産の黒曜石を用い、先端は鋭く、側辺は側面がやや内弯し基部は両脚とも破損している。調整剥離が細かく丁寧に施されている。545 は腰岳産の黒曜石を用いたもので、先端は鋭く、側辺のまっすぐで三角形を呈し、基部は片脚が欠損しているが逆刺が円く挟りはやや深いものである。546 は上牛鼻産の黒曜石を用い、先端は普通で、側辺はまっすぐで三角形を呈し、基部は片脚が違い逆刺は鋭く挟りは深いものである。547 は腰岳産の黒曜石を用い、先端は鋭く、側辺は側面が外反し下方部に最大幅をもつもので、基部は両脚とも欠損しているが挟りは深いものである。側辺部の調整剥離は細かく丁寧に行われている。548 は上牛鼻産の黒曜石を用い、先端は鋭く、側辺は側面が外弯し下方部に最大幅をもつもので、基部は逆刺がやや円く挟りは極めて深いものである。549 も上牛鼻産の黒曜石を用い、先端は普通で、側辺は側面が外弯し下方部に最大幅をもつもので、基部は逆刺が円く挟りは深いものである。550 は針尾島の黒曜石を用いたもので、片側辺部と片脚のみである。側辺はまっすぐで基部の逆刺は円く挟りは深い。551 は安山岩を素材に用いたもので、先端は普通で、側辺はまっすぐで三角形を呈し、基部は逆刺が鋭く挟りは極めて深い。片脚が欠損し、あらいタッチの調整剥離が施されている。552 は上牛鼻産の黒曜石を用いたもので、片側辺部と片脚のみである。側辺は側面が外弯し下方部に最大幅をもつもので、基部は逆刺が鋭く挟りが極めて深いものである。553 は上牛鼻産の黒曜石を用いた小型の石鏃である。先端は普通で、側辺は側面が外弯し下方部に最大幅をもつもので、基部は逆刺が円く挟りはやや深い。554 は安山岩を素材に用いたもので、片側辺部と片脚が欠損している。先端は普通で、側辺はまっすぐで三角形を呈し、基部は逆刺が鋭く挟りは深いものである。

555 は上牛鼻産の黒曜石を用い、先端部は破損している。側辺部の側面は外弯し、基部は逆刺が鋭く挟りはやや深いもので、粗い調整剥離を施している。556 は腰岳産の黒曜石を用いた片脚のみの石鏃である。基部の逆刺はやや円く挟りは極めて深い。557 は安山岩を素材に用いた、調整剥離の粗い剥片鏃である。先端は鈍く、側辺部の側面はやや外弯し、基部は逆刺が鈍く挟りはやや深い。558 は安山岩を素材に用い、先端部と片脚部が破損している。側辺はまっすぐで三角形を呈し、基部は逆刺が円く挟りが深いものである。559 は上牛鼻産の黒曜石を用い、先端は普通で、側辺部はまっすぐで三角形を呈し、基部の逆刺は円く挟りは浅いものである。調整剥離は荒く施されている。

560 は針尾島産の黒曜石を用いた剥片鏃である。先端は円く、側辺が片側面は交互剥離で他面は片面だけの調整剥離を施している。基部は逆刺が円く挟りはやや深いものである。561 は上牛鼻産の黒曜石を用いた片脚のみの石鏃である。基部の逆刺は円く挟りは深い。562 は腰岳産の黒曜石を用い、先端は鈍く、側辺はまっすぐで三角形を呈し、基部の逆刺は円く挟りは深いものである。横

幅の広い石鏃である。563 は椎葉川産の黒曜石を用いたもので、先端は鋭く、側辺部の側面は外弯し最大幅が下方にある。基部は逆刺が鋭く抉りは深いものである。564 は腰岳産の黒曜石を用い、先端は普通で、側辺はまっすぐで三角形を呈し、基部は逆刺が直線的で抉りは深いものである。565 は上牛鼻産の黒曜石を用いた片脚のみの石鏃である。基部の逆刺は鋭く抉りは極めて深い。566 も片脚のみの石鏃である。石材は頁岩で、基部の逆刺は鋭く抉りはやや深いものである。

567 は上牛鼻産の黒曜石を用い、先端は欠損しているが、側辺部の側面は外弯し最大幅が下方にある。基部は逆刺が円く抉りは浅いものである。片脚が極端に違い調整剥離が粗いものである。568 は腰岳の黒曜石を用い、先端は欠損しているが、側辺部は側面が内弯し、基部は逆刺が鋭く抉りが浅いものである。表裏面とも剥離面がみられ、側辺部周辺にだけ調整剥離が施されている。569 は安山岩を素材に用い、先端は普通で、側辺はまっすぐで三角形を呈し、基部は逆刺が鋭く抉りは浅い。570 は先端部が欠損した安山岩を素材にしたものである。側辺はまっすぐで三角形を呈し、基部は平基である。571 はハリ質安山岩を素材に用いたもので、先端は欠損しているが、側辺はまっすぐで三角形を呈し、基部は逆刺が欠損しているが抉りは浅いものである。幅広の石鏃である。572 はメノウを素材に用いたもので、先端は円く、側辺部の側面は外弯し、基部は逆刺が鈍く抉りは浅いものである。573 は上牛鼻産の黒曜石を用いたもので、整形途中の石鏃と思われる。先端部から側辺にかけて調整剥離が施されているが、一側面は両面加工と片面加工であり、基部調整は施されていない。574 はハリ質安山岩を素材に用いたもので、先端部及び両逆刺が欠損している。側辺部



第61図 縄文時代の石器 (3)

の側面は内湾するもので、基部の抉りは深い。575 は腰岳産の黒曜石を用いたもので、先端部が欠損している。側辺はまっすぐで三角形を呈し、基部の逆刺は直線的で抉りは深いものである。

576 は安山岩を素材に用いたもので、先端は鋭く、側辺の側面は外湾し中央部から直線的に基部に至る。基部は両逆刺が欠損しているが抉りは深いものである。

577 ～ 579 は縦長の二等辺三角形を呈し、先端部は普通で側辺は側面が外湾し、最大幅がほぼ中央にあり、基部にわずかに抉りがみられるものである。

喜入町帖地遺跡の縄文早期に大量にみられ「帖地型石鏃」と分類されたものに類似する（永野達郎 1999）。石材はたんぱく石、珪質シルト岩、チャートを素材に用いている。

580 ～ 581 は五角形鏃で上牛鼻産の黒曜石を素材にしたものである。先端部は鋭く、凸部が 580 は上片に 581 は中央部にあるもので、基部は逆刺が鈍く抉りが深いものである。

582 は基部調整のない制作途中の石鏃として分類した。メノウのやや厚みのある剥片を素材にしたもので、先端部は鋭く、側辺はまっすぐで三角形を呈するものである。ていねいな剥離を施しているが、基部を整形することなく途中で止めているものである。

583 は長さ 2.7 cm を測る長崎県の針尾島産の黒曜石を素材にしたもので、先端部は鋭く、側辺はまっすぐで三角形を呈し、基部は逆刺が円く抉りが極めて深いものである。

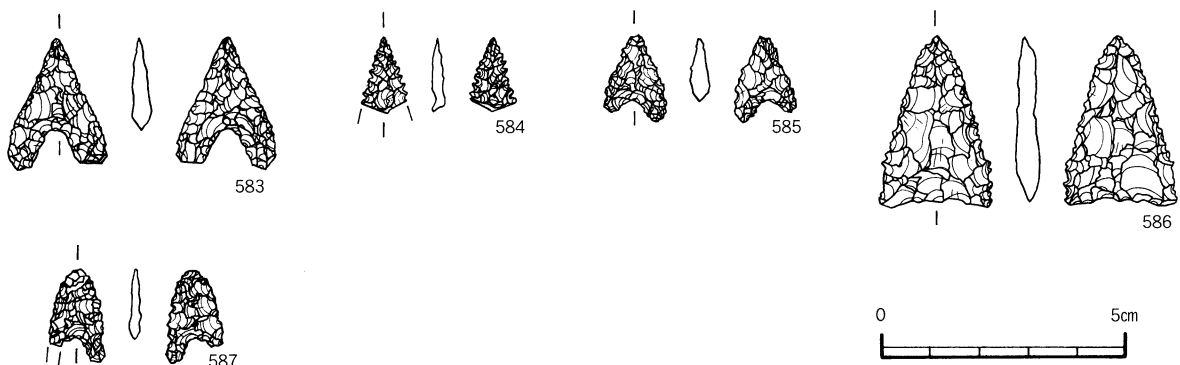
### iii) I ～ II 層出土（第 62 図 584 ～ 587）

584 は腰岳産の黒曜石を素材にした先端部が鋭く側辺部が鋸歯状を呈する石鏃である。基部は欠損している。

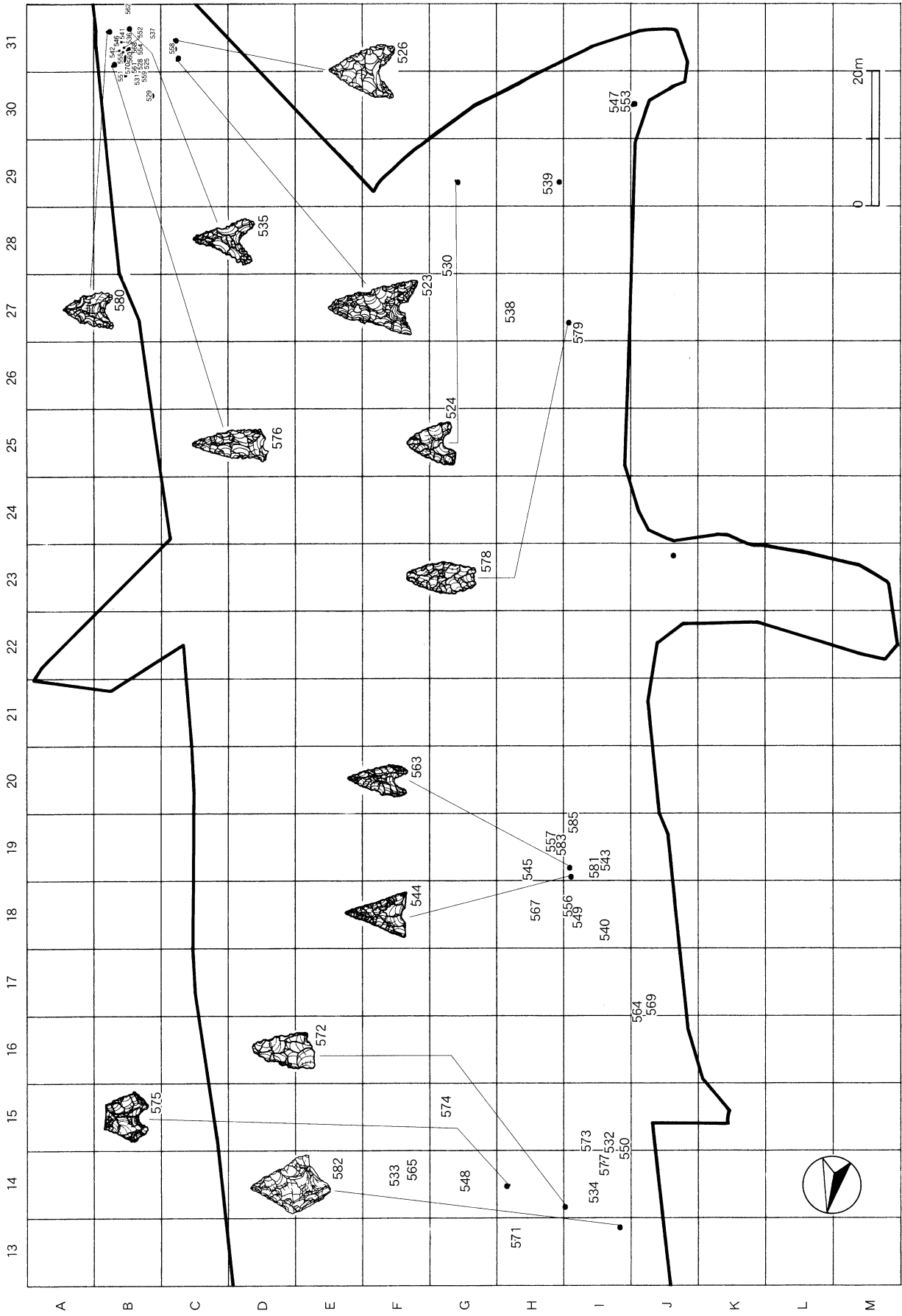
585 も同様の石材で、確認のトレンチ調査で II 層から出土したものである。先端部は欠損していて、側辺は側面が外湾し最大幅が下方にある。基部は逆刺がやや鈍いく抉り深い。

586 は長さ 3.5 cm を測る本遺跡で一番大きな石鏃である。ハリ質安山岩を素材に用い、先端は鋭く、側辺はまっすぐで三角形を呈する。基部は平基に近く、逆刺が鈍く抉りが浅い。表層からの出土である。

587 は佐賀県腰岳産の黒曜石を用いたもので、先端は円く、側辺は側面が外湾し最大幅が下方にあるものである。基部は一部欠損しているが、逆刺が円く抉りが極めて深いものである。やはり表層からの出土である。



第62図 縄文時代の石器（4）



第63図 縄文時代石器出土状況① (石鏃)

番号	器種	石材	区	層	長さ	幅	厚さ	重量	注記番号
523	石鏝	腰岳黒曜石	C31	Ⅳ	3.30	2.00	0.50	2.1	2697
524	石鏝	鉄石英	G29	Ⅳ	1.80	1.60	0.40	1.0	82
525	石鏝	腰岳黒曜石	B31	Ⅳ	1.70	1.50	0.20	0.6	30009
526	石鏝	玻璃質安山岩	C31	Ⅳ	2.00	2.00	0.30	1.1	2670
527	石鏝	メノウ	J23	Ⅳ	1.20	1.10	0.40	0.8	879
528	石鏝	安山岩	B31	Ⅳ	1.30	1.30	0.20	0.4	30010
529	石鏝	不明黒曜石A	B30	Ⅳ	1.00	1.20	0.20	0.2	2464
530	石鏝	針尾島黒曜石	G28	Ⅳ	1.90	1.60	0.20	0.8	65
531	石鏝	腰岳黒曜石	B30	Ⅲ	3.00	2.00	0.40	1.5	30005
532	石鏝	上牛鼻黒曜石	I15	Ⅲ	1.90	1.80	0.20	0.6	1800
533	石鏝	針尾島黒曜石	F14	Ⅲ	2.20	2.00	0.30	0.9	30008
534	石鏝	チャート	I14	Ⅲ	1.75	1.45	0.20	0.4	1824
535	石鏝	針尾島黒曜石	B31	Ⅲ	2.20	1.70	0.40	0.9	1958
536	石鏝	針尾島黒曜石	B31	Ⅲ	1.20	1.10	0.20	0.2	2200
537	石鏝	頁岩？	B31	Ⅲ	1.95	1.50	0.25	0.6	2207
538	石鏝	三船黒曜石	H27	Ⅲ	1.90	1.60	0.40	0.7	384
539	石鏝	針尾島黒曜石	H29	Ⅲ	2.50	1.80	0.50	1.4	50
540	石鏝	玻璃質安山岩	I18	Ⅲ	2.15	1.80	0.35	0.9	735
541	石鏝	チャート	B31	Ⅲ	1.70	1.40	0.30	0.6	1941
542	石鏝	腰岳黒曜石	B31	Ⅲ	1.40	1.10	0.25	0.3	2298
543	石鏝	三船黒曜石？	H20	Ⅲ	1.50	1.05	0.25	0.3	655
544	石鏝	針尾島黒曜石	I19	Ⅲ	2.30	1.70	0.30	0.8	788
545	石鏝	桑ノ木津留黒曜石	H19	Ⅲ	1.95	1.60	0.40	0.7	770
546	石鏝	上牛鼻黒曜石	B31	Ⅲ	1.70	1.50	0.35	0.6	1945
547	石鏝	針尾島黒曜石	J30	Ⅲ	2.50	1.80	0.30	1.1	60
548	石鏝	上牛鼻黒曜石	G14	Ⅲ	2.50	1.80	0.50	1.5	955
549	石鏝	上牛鼻黒曜石	I18	Ⅲ	2.15	1.50	0.30	0.4	538
550	石鏝	針尾島黒曜石	I15	Ⅲ	1.75	1.10	0.40	0.5	1799
551	石鏝	針尾島黒曜石	B30	Ⅲ	1.80	1.60	0.25	0.4	30016
552	石鏝	針尾島黒曜石	B31	Ⅲ	2.00	1.70	0.30	0.9	2282
553	石鏝	上牛鼻黒曜石	J30	Ⅲ	1.45	1.20	0.15	0.3	61
554	石鏝	玻璃質安山岩	B31	Ⅲ	1.75	1.20	0.20	0.4	2081

第15表 石鏝観察表(1)



番号	器種	石材	区	層	長さ	幅	厚さ	重量	注記番号
555	石鏃石	針尾島黒曜石	B31	Ⅲ	1.50	1.65	0.25	0.9	2655
556	鏃	上牛鼻黒曜石	I18	Ⅲ	1.75	0.85	0.30	0.4	777
557	石鏃	安山岩	H19	Ⅲ	1.65	1.10	0.15	0.5	775
558	石鏃	頁岩	C31	Ⅲ	1.75	1.00	0.30	0.6	2400
559	石鏃	針尾島黒曜石	B30	Ⅲ	2.60	1.95	0.40	1.3	30011
560	石鏃	針尾島黒曜石	B31	Ⅲ	1.65	1.50	0.40	0.5	2362
561	石鏃	上牛鼻黒曜石	B31	Ⅲ	0.70	0.80	0.22	0.2	30015
562	石鏃	腰岳黒曜石	B31	Ⅲ	2.70	2.30	0.30	1.4	2216
563	石鏃	不明黒曜石	I19	Ⅲ	2.25	1.20	0.20	0.5	790
564	石鏃	三船黒曜石	J17	Ⅲ	1.90	1.50	0.25	0.5	470
565	石鏃	上牛鼻黒曜石	F14	Ⅲ	1.40	1.10	0.20	0.2	1443
566	石鏃	シルト質頁岩？	B30	Ⅲ	1.20	0.80	0.30	0.2	30012
567	石鏃	上牛鼻黒曜石	H18	Ⅲ	2.00	1.50	0.30	1.0	755
568	石鏃	三船黒曜石	B31	Ⅲ	2.35	1.90	0.20	0.8	2365
569	石鏃	不明黒曜石 郡山産？	J17	Ⅲ	2.10	1.70	0.50	1.1	680
570	石鏃	不明 西北九州黒曜石？	B31	Ⅲ	1.15	1.30	0.20	0.4	30013
571	石鏃	安山岩	H13	Ⅲ	1.60	1.90	0.25	0.7	1390
572	石鏃	メノウ	I14	Ⅲ	2.35	1.40	0.40	1.1	1332
573	石鏃	針尾島黒曜石	I15	Ⅲ	2.05	1.65	0.40	1.1	1291
574	石鏃	玻璃質安山岩	G15	Ⅲ	1.65	1.60	0.25	0.6	1163
575	石鏃	腰岳黒曜石	H14	Ⅲ	1.60	1.90	0.20	0.8	985
576	石鏃	針尾島黒曜石	B31	Ⅲ	2.30	1.20	0.50	1.2	2467
577	石鏃	たんぱく石	I14	Ⅲ	2.45	1.20	0.20	0.7	1700
578	石鏃	珪質シルト岩	I27	Ⅲ	2.60	1.20	0.30	0.9	434
579	石鏃	針尾島黒曜石	I27	Ⅲ	2.95	1.40	0.50	2.2	457
580	石鏃	上牛鼻黒曜石？	B31	Ⅲ	1.80	1.35	0.30	0.6	2370
581	石鏃	上牛鼻黒曜石	H20	Ⅲ	1.60	1.20	0.30	0.4	652
582	石鏃	珪岩	I13	Ⅲ	2.95	2.10	0.65	4.2	1587
583	石鏃	針尾島黒曜石	I19	Ⅲ	2.70	2.10	0.40	1.6	30027
584	石鏃	腰岳黒曜石		I	1.60	0.90	0.20	0.3	30014
585	石鏃	腰岳黒曜石	I19	Ⅱ	1.80	1.30	0.40	0.6	30001
586	石鏃	堆積岩	J17	I	3.50	2.30	0.45	3.6	30006
587	石鏃	腰岳黒曜石	I24	I	1.90	1.20	0.20	0.4	30007

第16表 石鏃観察表(2)

## ②石斧・スクレイパー・石匙（第 65 図～第 67 図 588～600）

588 は頁岩を素材にしたもので、体部が平坦で軽く弯曲し、一部敲打痕がみられるものの全体的によく研磨されていて、くびれ部等は欠損の為みられないが、形態により独鈷状石器と考えられるものである。先端に敲打痕がみられ、2ヶ所に剥離していた。欠損しているが全長 9.0 m、断面形は長楕円を呈し、最大幅 5.3 cm、重量 5.3 g を測る。

589～591 はスクレイパーである。589 はハリ質安山岩を素材にしたもので、横長剥片のバルブを切断し、側縁の一部を両面から加工して刃部としている。刃部以外は側縁部にブランディングがみられるのみで、身部のほとんどに調整前の剥離面が残る。590 は扁平な安山岩礫を素材にしたもので、二面に分割し、側縁部に交互剥離による調整を施している。使用により刃部には磨耗痕がみられる。591 は安山岩の扁平礫を素材にしたものである。頂部の 5 cm 内外を除き全周縁に交互剥離による刃部を形成している。

592～595 は磨製石斧である。592 は頁岩を素材にしたもので、刃部を欠損しているが蛤刃をもつ磨製石斧と思われる。側縁部に敲打痕が残っているが、表裏面及び刃部は丁寧な研磨が施されている。593 はやはり頁岩を素材にしているが、剥離調整により整形し、その上から研磨を施しているものである。刃部は欠損している。594 はVI層の粘質土から出土した研磨痕のある石器で分類上、石斧にいたが、検討する必要がある石器である。石材は砂岩である。595 は頁岩を素材に用いたもので、敲打による整形の後研磨が施された磨製石斧である。刃部は欠損しているが、基部は乳房状を呈す。596 は頁岩の厚手の川原石を素材にしたもので、刃部は欠損しているが、剥離調整で石斧状に整形しているものである。

597 はハリ質安山岩を素材にした石匙である。両面から剥離によって抉り部を形成し、側面は丁寧な交互剥離によって刃部を形成している。刃部は直線的である。

598 は佐賀県の腰岳産の黒曜石を素材にした使用痕のある剥片である。縦長剥片で方側縁部に使用痕が見られる。599 は上牛鼻産の黒曜石を素材にしたもので、側縁部にやはり使用痕が見られる。600 は三船産の黒曜石を素材にした剥片でやはり使用痕が認められる。

## ③磨石・敲石類（第 68 図・第 69 図 601～622）

601 は安山岩の円礫を素材にした磨石で、研磨痕が若干認められる。重量は 1,110 g を測る。

602 は花崗岩の円礫を素材にした磨石で、全面に研磨痕が見られ光沢を発している部分もある。片面は平坦をなすものである。重量は 1,210 g を測る。

603 は安山岩の円礫を素材にした磨石で、全面に研磨痕が見られる。290 g を測る。

604 は砂岩の扁平礫を素材にした磨石で、全面に研磨痕がみられる。重量は 298 g を測る。

605 はVI層から出土した安山岩の円礫を素材にした磨石で、旧石器時代のもと考えられる。全面に研磨痕が見られ、熱を受けたのか表面が剥脱している部分もある。重量は 550 g を測る。

606 は安山岩の扁平礫を素材にした磨石で、全面に研磨痕がみられる。表裏面とも使用によるものなのか弯曲している。重量は 450 g を測る。

607 は安山岩の小型扁平礫を素材にした磨石で、研磨痕がみられる。重量は 76 g を測る。

608 は砂岩の円礫を素材にした磨石で、欠損しているが重量は 215 g を測る。

609 は安山岩の円礫を素材にした凹部である。片面の中央部に径 2 cm、深さ 0.8 cm の凹みをもつ

ものであり、2か所平坦な研磨痕がみられる。

610 は砂岩の円礫を素材にした凹石である。両平坦面の中央部に径 2 cm 強の凹みを施している。全面に研磨痕がみられ、側縁部には敲打痕が認められる。重量は 250 g を測る。

611 は安山岩の平坦な円礫を素材にした凹石である。片面の中央部に径 2 cm 内外の敲打による凹みを施している。全面に研磨痕がみられる。重量は 325 g を測る。

612 はVI層から出土した安山岩の円礫を素材にした敲石で、旧石器時代のものと考えられる。欠損しているが全面に研磨痕がみられ、頂部には敲打による平坦面がみられる。重量は 256 g を測る。

613 は砂岩の棒状礫を素材にした敲石である。欠損しているが上端部中央に敲打痕が認められる。熱を受けたと思われるヒビ割れを生じている。重量は 112 g を測る。

614 はVII層から出土した安山岩の円礫を素材にした敲石で、旧石器時代のものと考えられる。両端を欠損しているが、全面に研磨痕がみられ、周縁部には敲打痕がみられる。重量は 520 g を測る。

615 は安山岩の棒状礫を素材にした敲石である。両端部に敲打痕がみられ、研磨痕は認められない。重量は 460 g を測る。

616 は砂岩の円礫を素材にした敲石であるが欠損している。研磨痕がみられ、上端部に敲打痕がみられる。

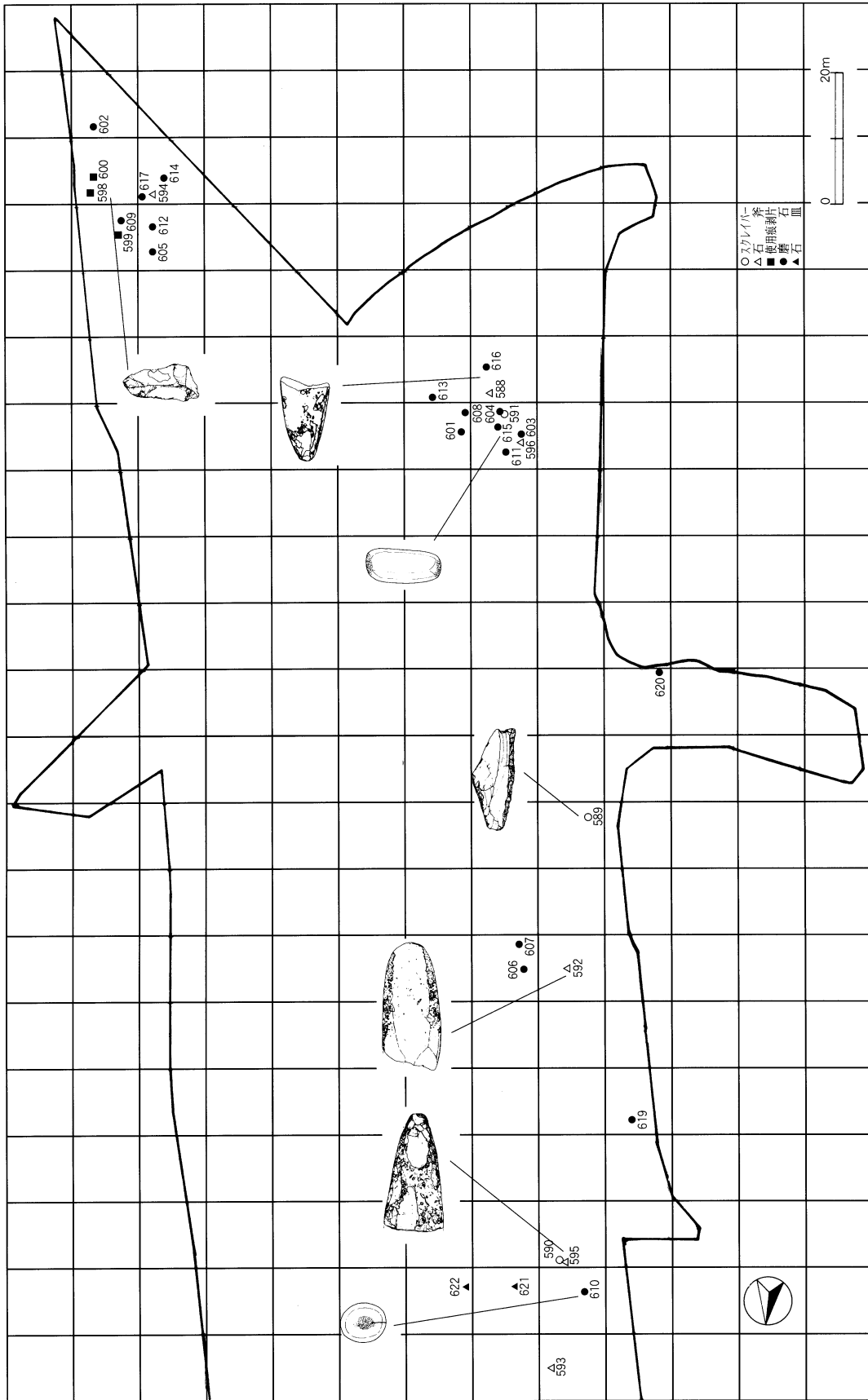
617 は安山岩の棒状礫を素材にした敲石である。上下端部に敲打痕がみられ、全面には研磨痕がみられる。重量は 216 g を測る。

618 は安山岩の円礫を素材にした敲石である。欠損しているが側縁部に敲打痕がみられ、全面には研磨痕がみられる。重量は 175 g を測る。

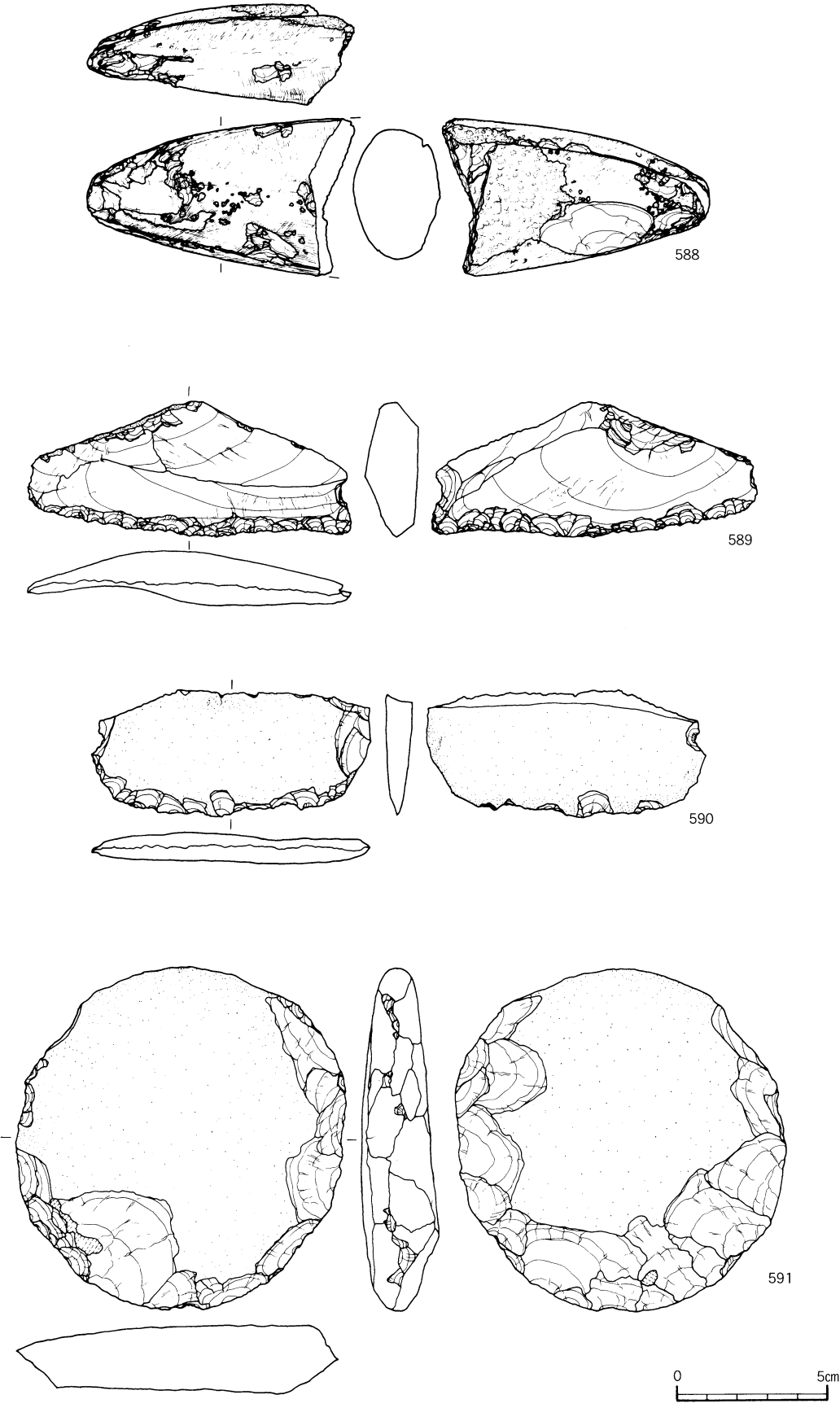
619・620 は砂岩の扁平礫を素材にした敲石である。全面に研磨痕がみられ、周縁部に敲打痕がみられる。重量は 40 g, 20 g を測る。

621 は安山岩の大型扁平礫を素材にした石皿である。凹みはみられないが表裏とも使用によると思われる研磨痕がみられる。欠損しているが重量は 480 g を測る。

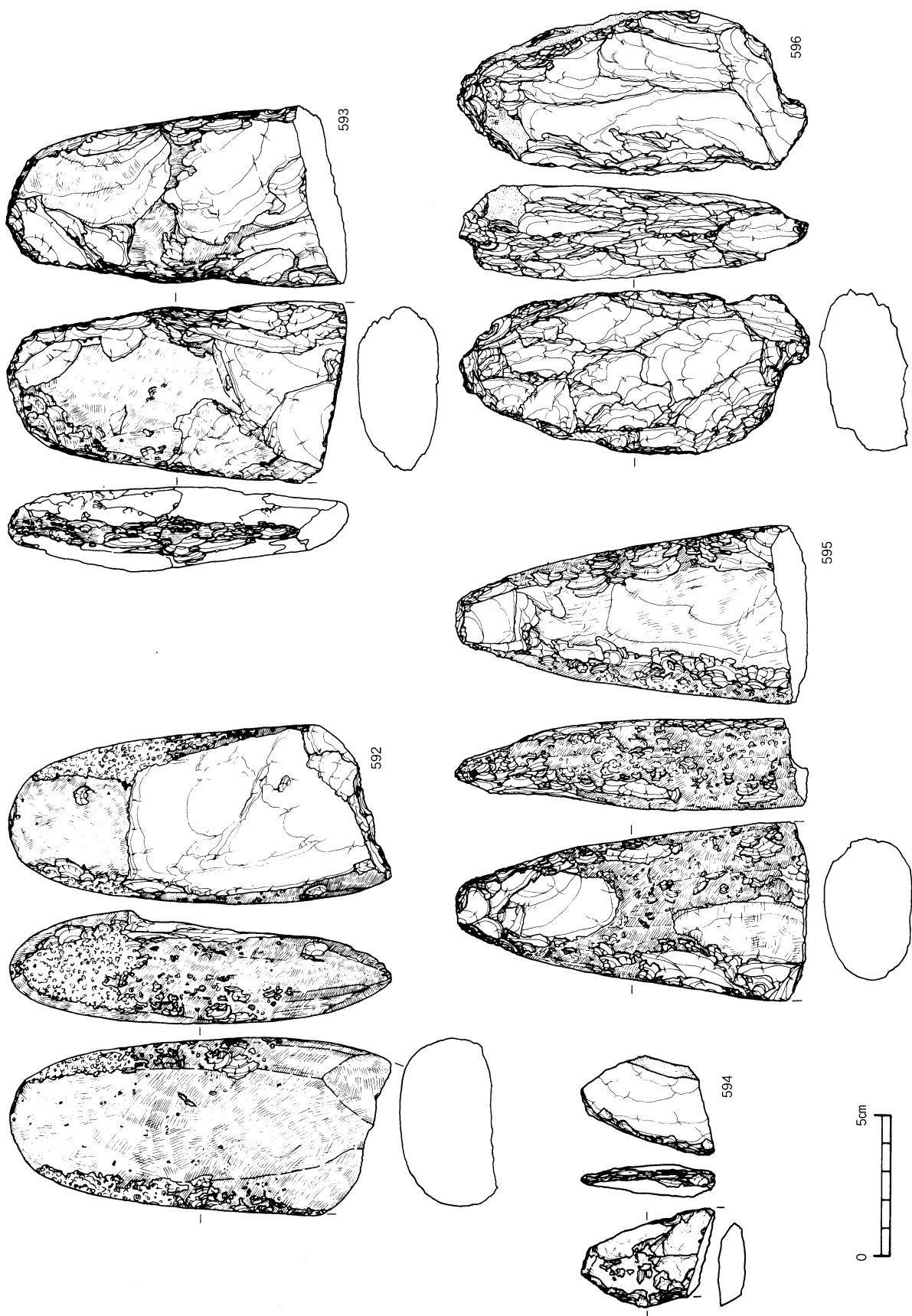
622 も安山岩の大型扁平礫を素材にした石皿である。欠損しているが表裏とも研磨痕がみられ、一部には光沢がみられる所もある。中央部に凹みをもたないもので、重量は 476 g を測る。



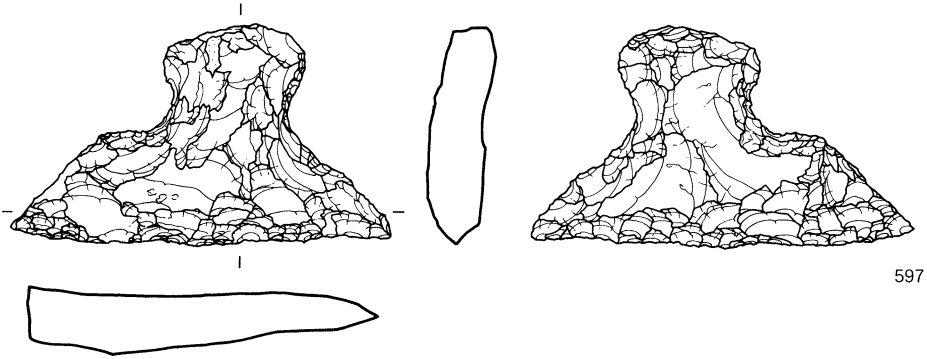
第64図 縄文時代石器出土状況② (石斧・石匙・磨石・敲石)



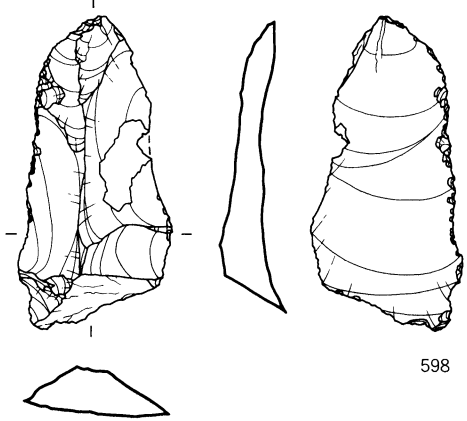
第65図 縄文時代の石器 (5)



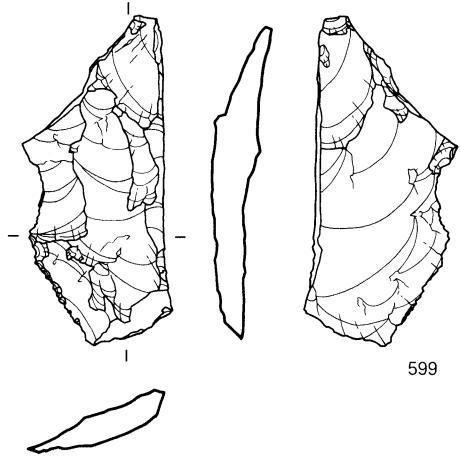
第66図 縄文時代の石器 (6)



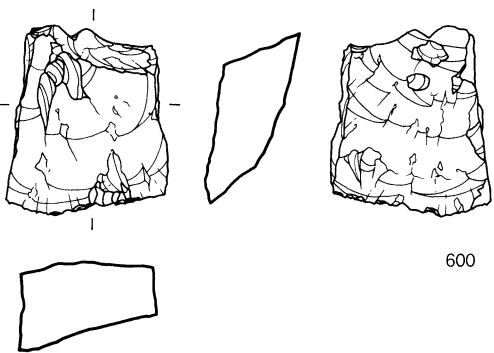
597



598



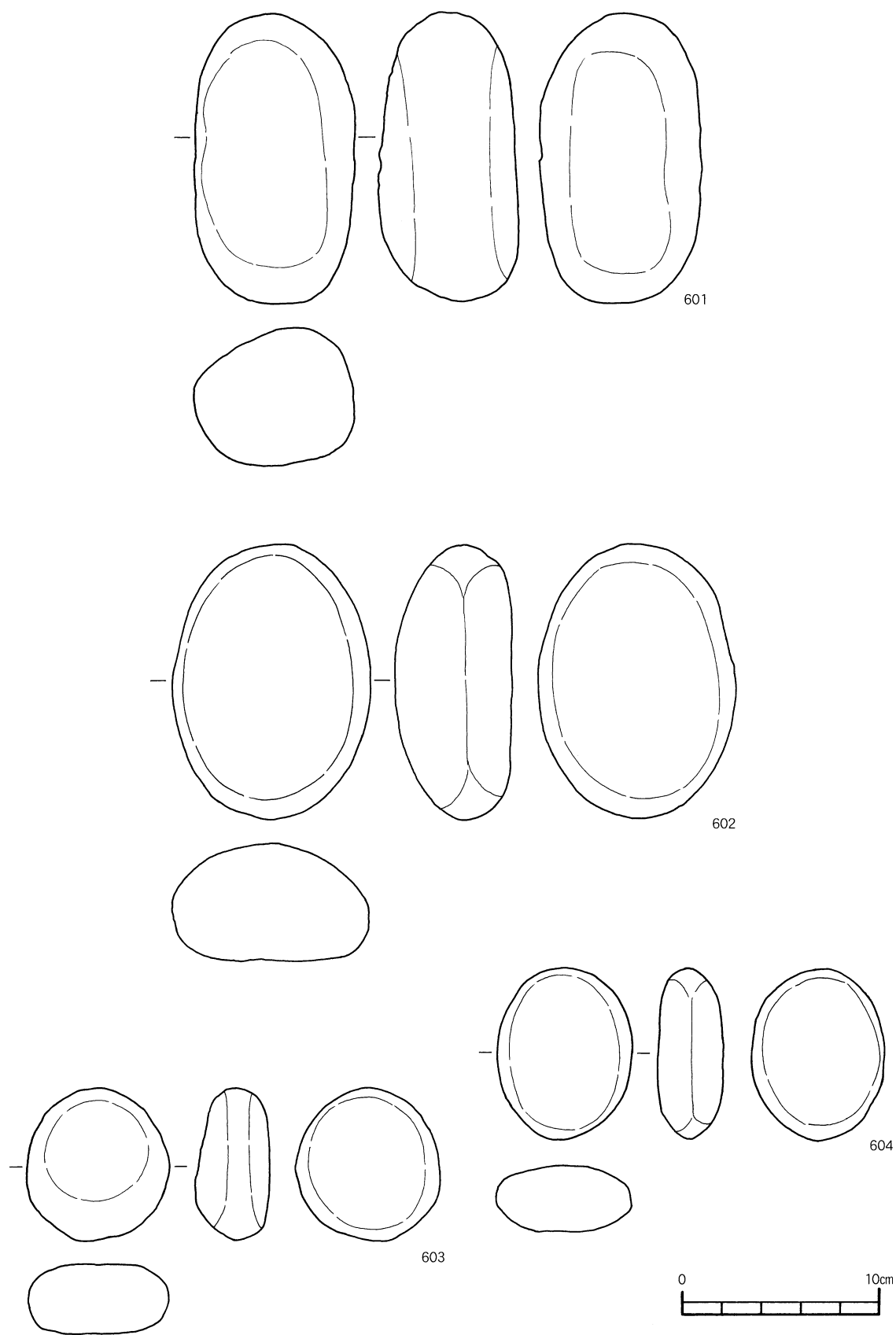
599



600

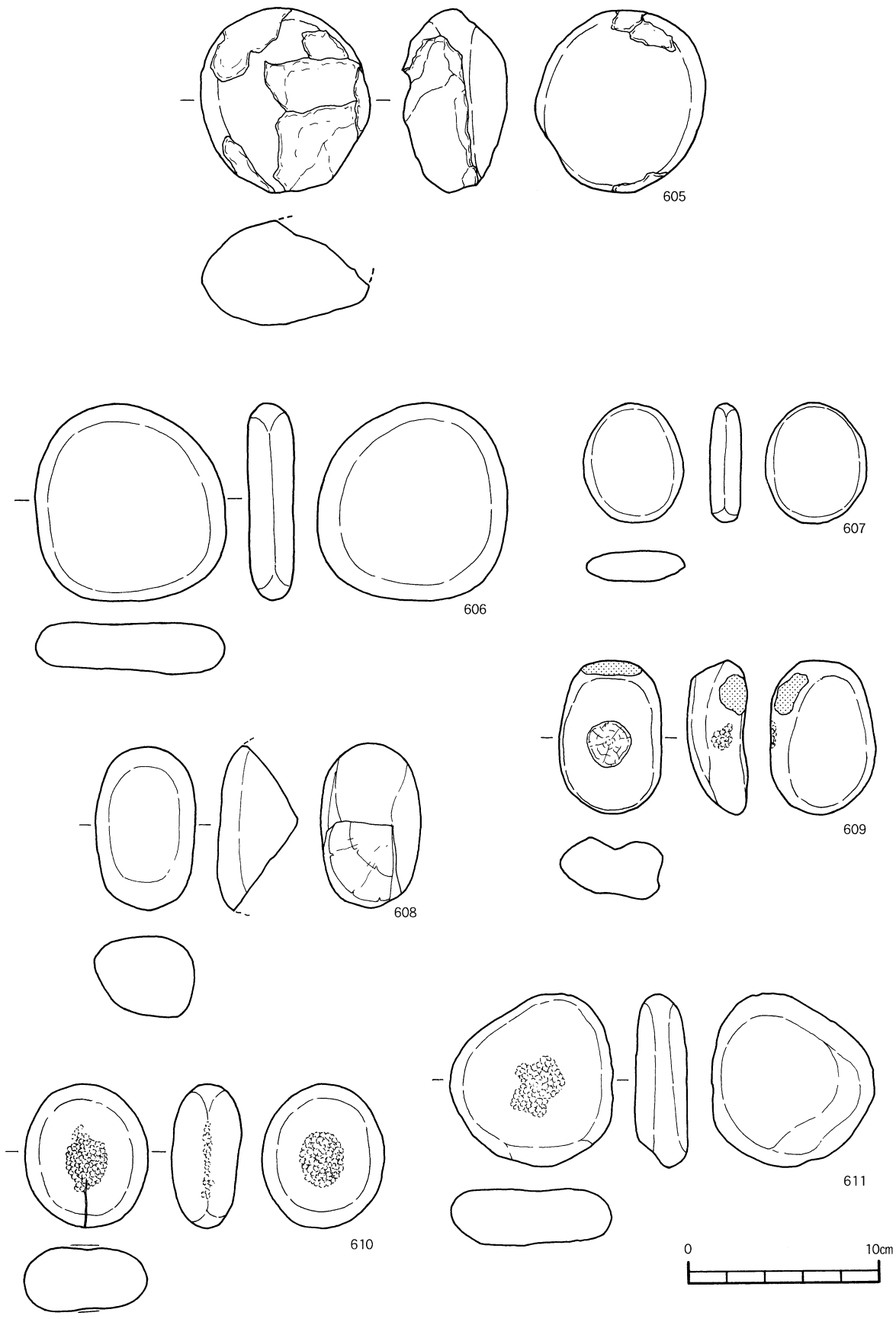


第67図 縄文時代の石器（7）

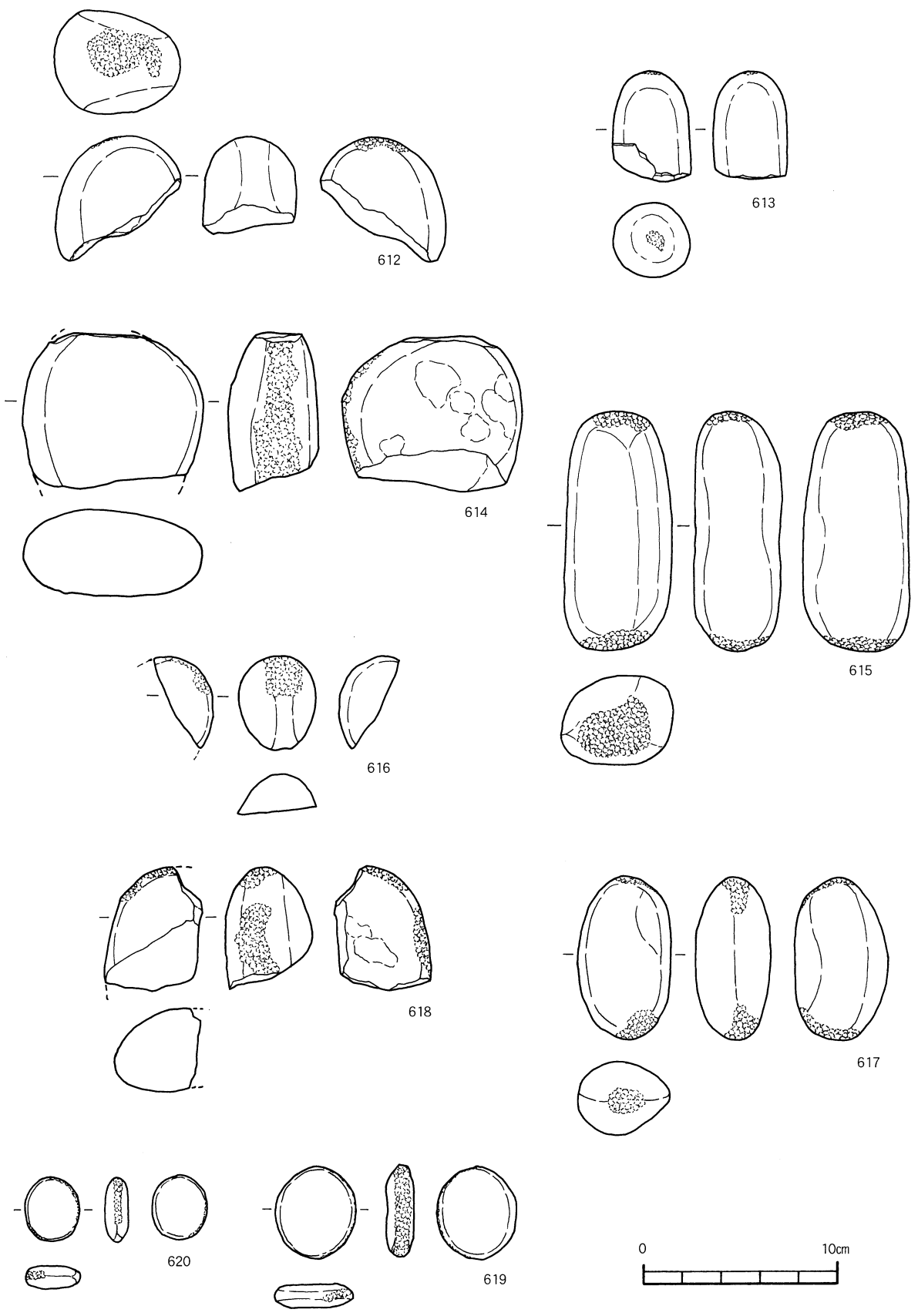


第68図 縄文時代の石器（8）

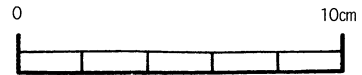
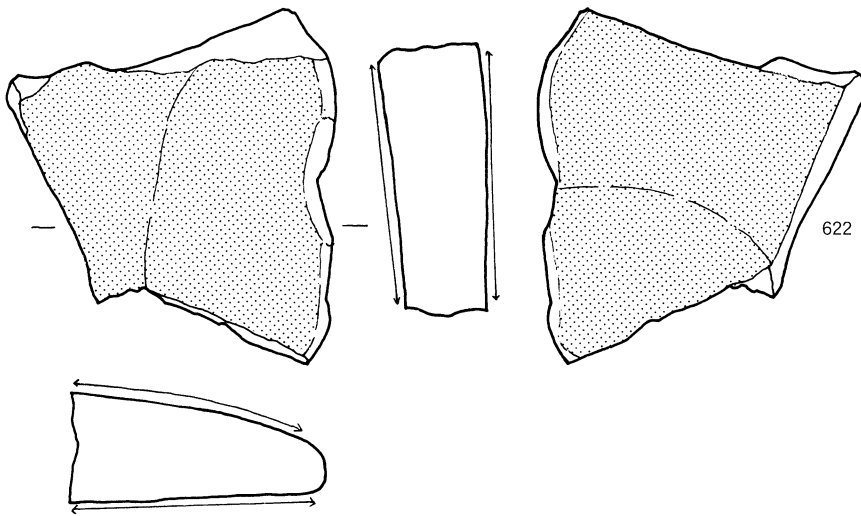
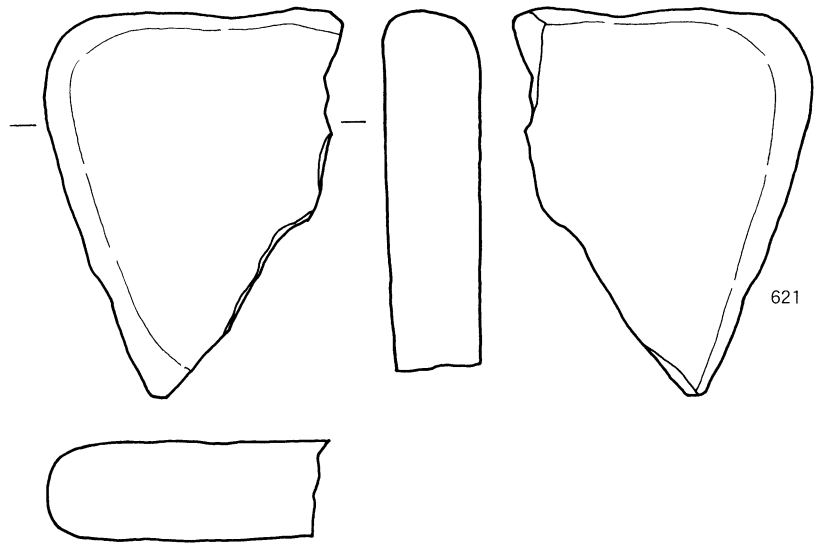




第69図 縄文時代の石器（9）



第70図 縄文時代の石器 (10)



第71図 縄文時代の石器 (11)

番号	器種	石材	区	層	長さ	幅	厚さ	重量	注記番号
588	独鈷状石器	頁岩	H28	Ⅲ	5.30	9.00	2.90	165.0	40
589	スクレイパー	ハリ質安山岩	I21	Ⅲ	4.40	10.80	1.80	59.5	872
590	スクレイパー	安山岩	I15	Ⅲ	4.10	9.50	0.90	41.6	1802
591	スクレイパー	安山岩	H27	Ⅳ	11.30	10.90	2.50	377.5	355
592	磨製石斧	硬質頁岩	H20	Ⅲ	13.50	6.30	3.20	465.0	661
593	打製石斧	頁岩	I13	Ⅲ	12.00	6.50	2.90	27.0	1667
594	石斧	砂岩	C31	Ⅵ	3.10	4.70	1.10	15.7	5878
595	磨製石斧	頁岩	I15	Ⅲ	12.50	6.30	3.10	330.0	1803
596	打製石斧	頁岩	H27	Ⅳ	12.40	5.80	3.20	297.0	441
597	石匙	安山岩		I	2.95	5.50	1.40	9.8	30003
598	使用痕剥片	腰岳黒曜石	B31	Ⅳ	4.20	2.05	0.65	4.2	2652
599	使用痕剥片	上牛鼻黒曜石	B30	V	4.40	2.05	0.85	5.8	3731
600	使用痕剥片	三船黒曜石	B31	Ⅳ	2.55	2.15	1.20	6.8	2533
601	磨石	安山岩	G27	Ⅳ	14.70	8.20	7.20	1110.0	351
602	磨石	花崗岩	B32	Ⅲ	14.10	10.00	5.90	1210.0	1980
603	磨石	安山岩	H27	Ⅲ	7.80	7.30	3.60	290.0	397
604	磨石	砂岩	H27	Ⅲ	8.80	6.90	3.30	298.0	81
605	磨石	安山岩	C30	Ⅵ	9.70	8.90	5.40	550.5	7605
606	磨石	安山岩	H19	Ⅲ	10.40	10.00	2.30	451.0	793
607	磨石	安山岩	H19	Ⅲ	6.20	5.20	1.60	76.0	799
608	磨石	砂岩	G27	Ⅳ	8.70	5.30	4.10	215.0	352
609	凹石	安山岩	B30	Ⅳ	8.00	5.40	2.90	199.0	2457
610	凹石	砂岩	I14	Ⅲ	7.50	6.50	3.60	250.0	1637
611	凹石	安山岩	H27	Ⅲ	9.10	8.50	2.70	325.0	392
612	敲石	安山岩	C30	Ⅵ	6.40	6.60	4.90	256.0	3443
613	敲石	砂岩	G27	Ⅳ	5.70	4.10	3.90	112.0	343
614	敲石	安山岩	C31	Ⅶ	8.20	9.40	4.60	519.0	7282
615	敲石	安山岩	H27	Ⅲ	12.50	5.60	4.40	461.0	389
616	敲石	砂岩	H28	Ⅳ	4.70	3.00	4.00	49.5	43
617	敲石	安山岩	C31	Ⅲ	8.40	4.80	3.90	216.0	2406
618	敲石	安山岩		I	6.20	4.80	4.60	175.0	30070
619	敲石	砂岩	J17	Ⅲ	4.80	4.20	1.50	40.0	467
620	敲石	砂岩	J23	Ⅲ	3.30	2.90	1.50	20.0	881
621	石皿	安山岩	H14	Ⅲ	11.80	8.60	3.00	477.5	1230
622	石皿	安山岩	G14	Ⅲ	10.90	10.10	3.20	476.0	1180

第17表 石斧・石匙・磨石・敲石観察表

### 第3節 弥生時代～古墳時代の調査

#### 1 調査の概要

Ⅲ層からは確認調査において、古墳時代・平安時代・中世の土器や石器が出土した。これをうけ、全面調査では広い範囲で調査を行った。

第0地点では、任意に確認トレンチを設定した結果、比較的包含層の残存状況が良好であった。

第1地点では、確認調査をもとに全面にわたってⅢ層の調査を行った。

第2地点は面積が広大だったためにトレンチを任意に設定し調査を進めた。

第3地点は、予想外に遺物包含層が削平されており、表土を剥ぐとシラスがすぐに露出する部分が多かった。結果として全面調査の対象面積が少なくなった。

各地点とも弥生時代と古墳時代の遺構を検出することはできなかった。

#### 2 遺物

弥生時代の土器は1点のみの出土だったが、古墳時代の土器は多数出土している。弥生・古墳時代の遺物は総数1280点出土している。この土器の出土状況は第72図・第73図に示す通りである。

第0地点では旧石器時代の遺物が多数出土したが、古墳時代の遺物の出土は少なかった。これと逆に旧石器時代の遺物がほとんど出土しなかった第3地点で多くの古墳時代の遺物が出土している。

1280点の遺物の中で特徴的な56点を図示した。器種は甕形土器、鉢形土器、高坏形土器の3種に分けられる。

##### (1) 甕形土器

甕形土器は、以下の4類に分けられる。

I類：口縁部がくの字状に外反するもの（第74～76図623～653）

II類：口縁部がまっすぐに立ち上がるもの（第76図654～661）

III類：口縁部がまっすぐに立ち上がり胴部に突帯が貼り付けられるもの（第76図662・663）

IV類：内面を薄く削る調整を施しているもの（第77図667～675）

##### ① I類（第74～76図623～653）

甕形土器の口縁部がくの字状に外反するものが多数出土した。緩やかにくの字に屈折する破片がほとんどで、屈折する部分に明確な稜線がみられるものも僅かにあった。内外面ともにハケナデによる調整が多く、数点だが頸部に突帯を貼り付けたものもみられた。

623は脚部の一部を欠くが、ほぼ完形のものである。口縁直径が29.8cm、高さが31.7cm（推定）で、肩部に最大径があり30.5cmである。器壁の薄い土器で、胎土が粗く焼成も不良で脆くなっている。外面はハケの縦ナデで仕上げているが、胴部下面にヘラケズリの痕がみられる。口縁部に近い部分になるとヘラナデによる調整が施されている。頸部から口縁にかけては、縦方向のヘラナデである。内面は底部周辺に下から上へ縦方向のヘラナデによって調整がなされ、口縁部に近づくにつれてさらにナデで仕上げている。数本だが、ヘラケズリらしき痕跡もみられる。頸部内面の屈曲は割合しっかりとしている。

624・625 は共に胎土が密で、焼成も良好であり、こまかいハケナデの痕が明瞭に残っている。接合はできなかったが、色調や調整・胎土などから同一個体の可能性が高いといえる。内外共に緩やかにくの字に屈折する部分の上下でハケナデの方向が異なる。外面は口縁部については縦方向、胴部については斜方向、内面は口縁部・胴部ともに横方向のハケナデで仕上げられている。625 の底部周辺はハケナデの後にナデを加えて仕上げている。

626 は口縁直径が 31.9cm で、やや長胴の器形を呈している。内面の屈曲が割合にはつきりし、胴部はやや丸みをおびている。屈折する部分を境にして器面調整を施す方向が異なる。外面の口縁部は縦位、胴部は斜め右方向のハケナデで仕上げている。内面は口縁部周辺は横方向、胴部は斜位にハケナデを施している。内面はハケナデを施した後で指頭でナデながら丁寧な調整を加えているのがわかる。

627～630 は内外面共にハケナデを施した後にナデを加え仕上げている。特に 630 は外面にミガキを施しており丁寧な調整である。

631・632 は調整・胎土・色調などから接合はしなかったものの同一個体であると推定される。内面はハケナデの後にナデを施して調整痕を消そうとしている。外面はハケナデを斜方向に加えており、明瞭に調整痕が残っている。口縁部がくの字状に屈折する部分に明確な稜線を作り出している。

633～637 は口縁部がくの字状に屈折するのが明瞭に分かる破片である。5点とも内面はハケナデを施した後にナデで丁寧に仕上げている。外面は 633・635・636 は縦方向に、634 は横方向にハケナデを施している。637 は内外面ともかなり丁寧なナデによる仕上げである。

638・639・640 は内外面ともにハケナデによる調整を施している。638 は他のハケナデよりも太い調整痕である。

641～653 の内面はハケナデを施した後にナデで仕上げている。外面は 649～651 がハケナデによる調整痕が残っているが、その他はナデによって消している。特に 644・645・653 は丁寧な器面に仕上がっている。652 は小片ではあるが、口縁が小刻みな波状を呈している。653 はくの字状に屈折する部分に台形状の突帯を貼り付けている。

## ②Ⅱ類 (第 76 図 654～661)

Ⅱ類のように口縁部がくの字状に屈折せず直行するものは、くの字状に曲がるものより新しい時期のものであると推定される。

654・655 は内外面共にハケナデによる調整を施している。外面に刻目が入る断面が矩形の突帯が貼り付けられている。656 は内外面共にハケナデで丁寧に仕上げられており、器壁も比較的薄い。外面に突帯かどうか不明だが器壁が厚くなる部分が見られる。657・658・659 は内面は横方向、外面は縦方向のハケナデが施されている。外面にはススが付着している。660 は内外面共に横方向のハケナデによる調整を加えており、外面にはススが付着している。661 はハケナデを施した後にナデで仕上げられており、口縁部に近い部分には指頭による「押さえ」がみられる。

## ③Ⅲ類 (第 76 図 662・663)

Ⅲ類は口縁部がまっすぐに立ち上がり胴部に突帯が貼り付けられるものである。

662 と 663 はⅠ類 (口縁部がくの字状に外反するもの)、Ⅱ類 (口縁部がまっすぐに立ち上がる

もの) よりも新しい時期のものであると推定される。

662 は内外面ともにハケナデの後ナデを加えて仕上げている。内面には積み上げた粘土痕が消されずに残っているのがみられる。663 は内外面ともにハケナデの後に丁寧なナデを加えて仕上げている。外面には突帯が貼り付けられており、突帯より上の部分に鋸歯状に沈線が施されている。この簡描の鋸歯文と突帯の組み合わせは、鹿児島県内では甑島<sup>(1)</sup>と種子島などに類例がみられる。突帯は破片の左端部分が垂れ下がっている。

#### ④脚部 (第 76 図 664 ~ 666)

この 3 点の土器片については時期の詳細を判別することができなかつたので別に紹介することとした。Ⅰ類・Ⅱ類・Ⅲ類のいずれかに付くものである。

664 は底から脚部にかけての破片であるが、土が粗く焼成も不良でもろいため調整痕がわかりにくい。内面にススが付着している。665・666 は内外面ともにハケナデによる調整を施している。底径は 665、666 がともに 10cm である。

#### ⑤Ⅳ類 (第 77 図 667 ~ 675)

Ⅳ類は内面を薄く削る調整を施しているものである。

667・668 は脚付きの器形で、残りの 669 ~ 675 は丸底の器形だと思われる。

667・668 は脚付きの甕である。667 の直径は 24.5cm で頸部は強く外反し内面に稜が見られる。器形・色調・胎土などから 2 つは同一個体の可能性がある。内外面共にハケあるいはヘラの丁寧なナデで仕上げている。外面の底部に近い部分にヘラケズリの痕がみられる。内面についてはヘラケズリの痕が僅かにみられるが、丁寧なナデによってほとんどが消されている。

669 以下は丸底の器形であると推定される。669 は口縁直径が 16cm で、口縁部は横方向のハケナデで、くの字状に強く屈折する部分から下はヘラケズリによる調整を加えている。

670 は口縁部から胴部にかけて比較的まとまって出土している。内外面共にハケナデによる調整を施している。口縁部は横方向、胴部は縦方向の調整である。内面は下から「ヘラ」でかき上げており、土師器甕を模倣して製作している。かき上げを施す際にかき上げる部分に「ヘラ」を打ち込んでいる。通常は打ち込んだ痕をナデ消すのだが消されていない。仕上げが雑である。

671 は口縁部がやや内側に屈折している。頸部の屈折する内の部分には明確な稜線が認められ、器面調整の向きが稜を境にして異なる。外面の調整は口縁部は横方向に、胴部は斜方向にハケナデを施している。内面は口縁部が横方向のハケナデで、胴部はヘラケズリが施されている。

672 はくの字に屈折する部分に段差をつけている。内外面共にハケナデによる調整を施した後にナデによって丁寧な仕上げをしている。

673 は他の破片とは色調が異なり、胎土も密である。調整もハケナデによる調整の後にナデを施している。

674 は内外面共にハケナデによる調整を施している。内面にはヘラケズリの痕が残っている。

675 は底部周辺の破片。外面はハケナデで、内面は底部から上方向へのヘラケズリによるかき上げを施している。

4 世紀の西日本では内面をヘラで削ることによって器壁を薄くした。丸底を基調とする甕形土器が流行している。Ⅳ類の内面を薄く削る調整を施しているものは近畿地方を中心に広い範囲で出土

している布留式土器の作成技術の影響を受けているものと思われる。内面頸部以下にヘラケズリを施しているものもあったが、器壁は在地の甕形土器よりも若干薄いくらいで、ヘラケズリの効果が顕著ではない。器形は布留式土器によく類似するが、模倣品であるとも考えられる。胎土も他の在地のものと同様で、肉眼観察ではあまり変わりはない。器形も布留式では丸くなるものの、今里遺跡出土のものには変容していて、なで肩の器形となっている。

## (2) 鉢形土器 (第78図676・677)

676 と 677 は鉢形土器である。

676 は口縁部が外反する鉢部に脚台が付く器形である。胴部から脚部までは接合できたが、口縁部が欠けている。残存の高さが 17cm、脚台径が 12cm である。鉢部は頸部で強く外反し、脚台は裾が広がり、薄い。外面は胴部に斜位のハケナデ、脚部には縦位のハケナデによる調整が施されている。脚部と底部の接合部分周辺には数か所指紋痕がみられる。内面は口縁部付近はハケナデ、脚部に近い部分にはケズリに類似したハケナデより太い調整痕が残っている。また、内面には1か所藁痕ではないかと推定される痕もみられる。

677 は古墳時代の土器の中で唯一、口縁部から胴部までの破片が出土した遺物で、完形品として復元することができた。口径 15.5cm、高さ 14cm、脚台径が 8.6cm である。口縁部が外反する鉢部に脚台が付く器形である。外面にはヘラケズリに近いようなハケナデでやや斜めに調整が施されている。内面も目の粗いハケでやや斜めに調整を加えているが、底部に近い部分はナデによって丁寧に仕上げている。胴部の外面には黒斑がみられる。

## (3) 高坏形土器 (第78図678)

高坏形土器が 1 点出土した。

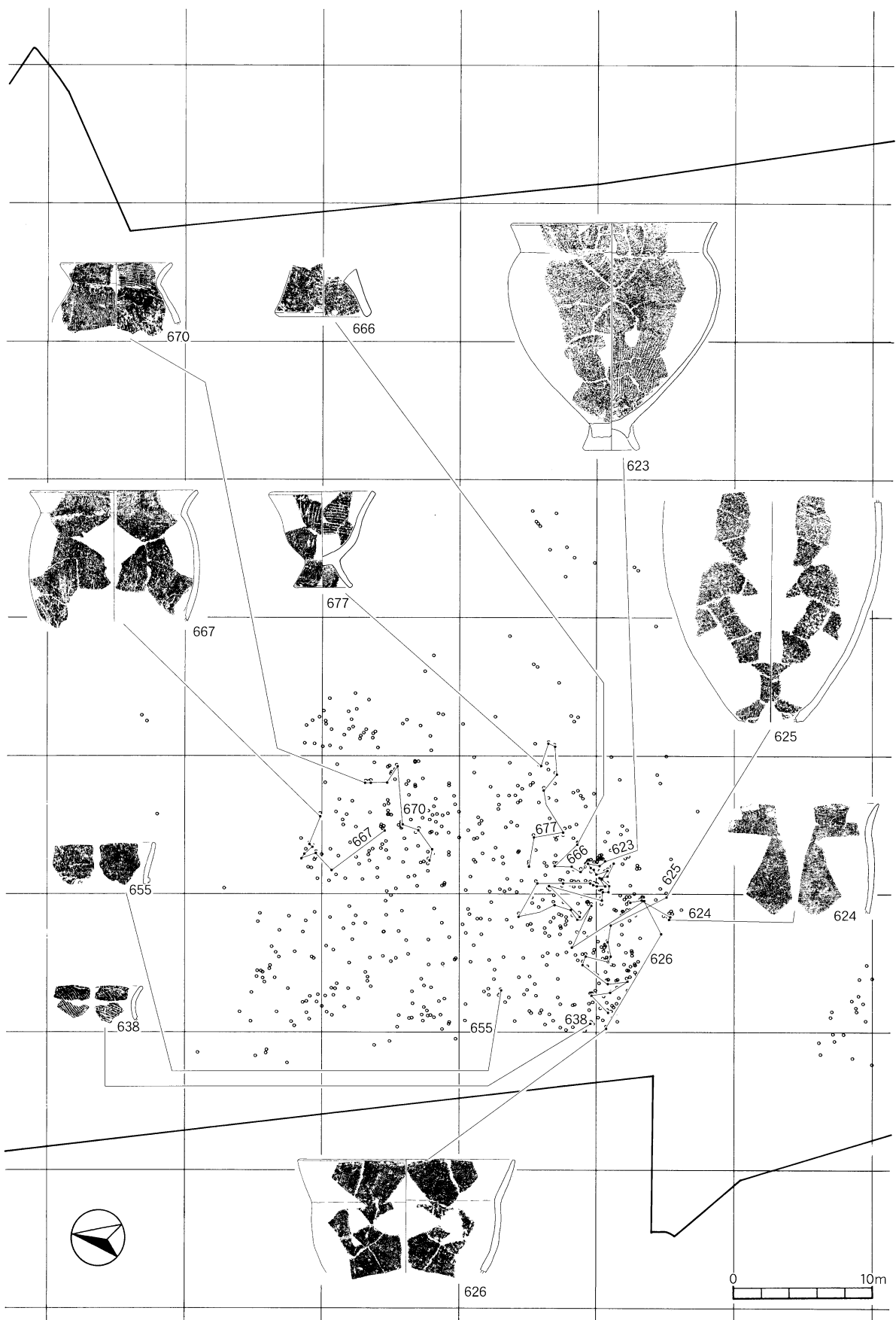
裾部が欠落しているため脚部の形状は不明である。裾部がゆるやかに外開きするもの、裾部が屈曲し弱い稜線を施し直行するもの、裾部が屈曲し内彎する形状などが想定できる<sup>(2)</sup>。脚部の真ん中くらいに円形の透孔が 2 孔穿たれているのがみられる。透孔から裾部にかけての部分欠落しているため 2 孔しか確認できないが、間隔からみて 4 孔あったものと推定できる。外面はヘラでミガキを施しており、指頭で押さえつけた痕もみられ指紋も残っている。これは成川式土器のなかでも古いタイプのものである。

## 参考文献

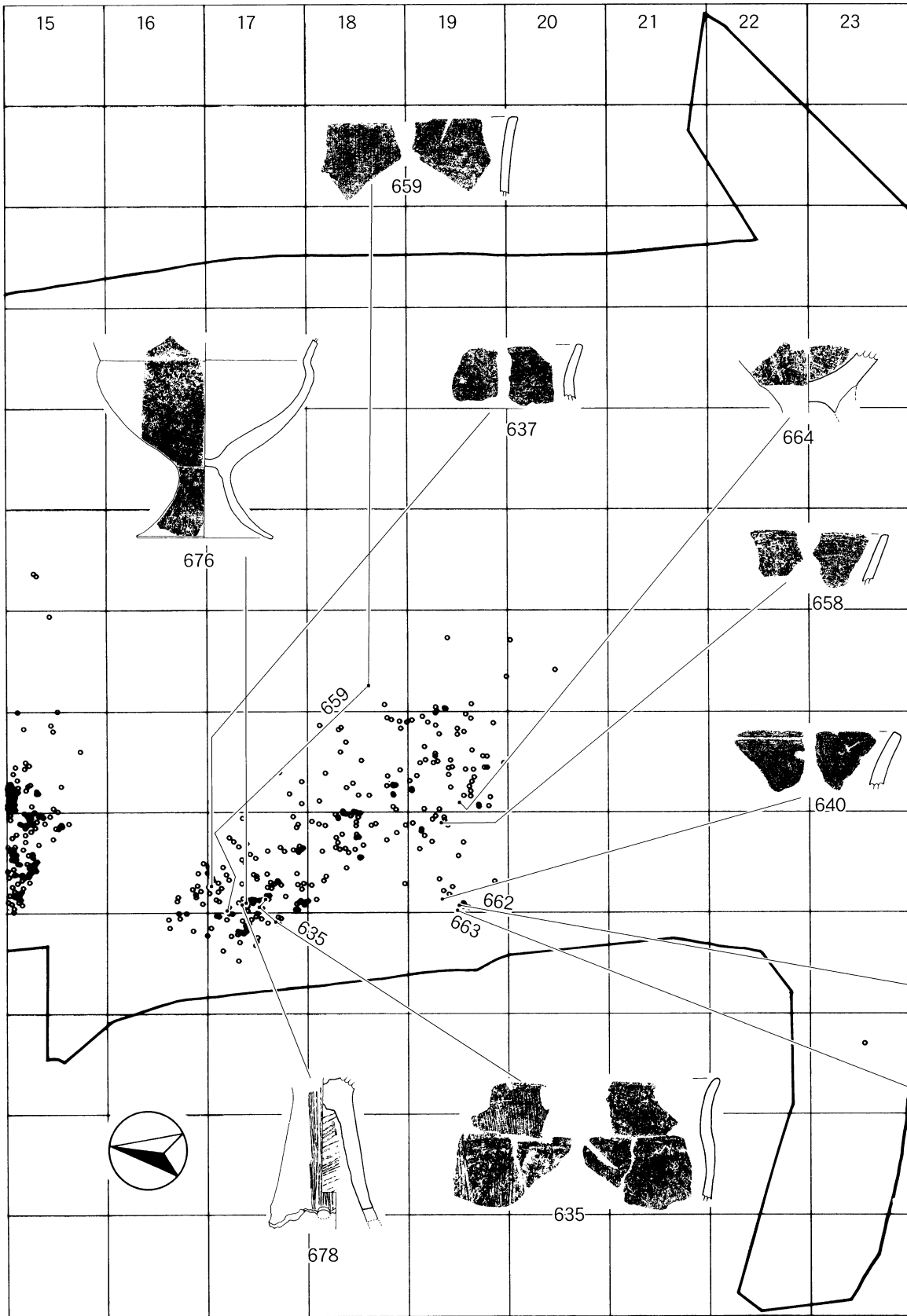
(1) 下飯村教育委員会 『大原・宮園遺跡』下飯村埋蔵文化財発掘調査報告書 1974

(2) 鹿児島県教育委員会『外川江遺跡・横岡古墳』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(30) 1984

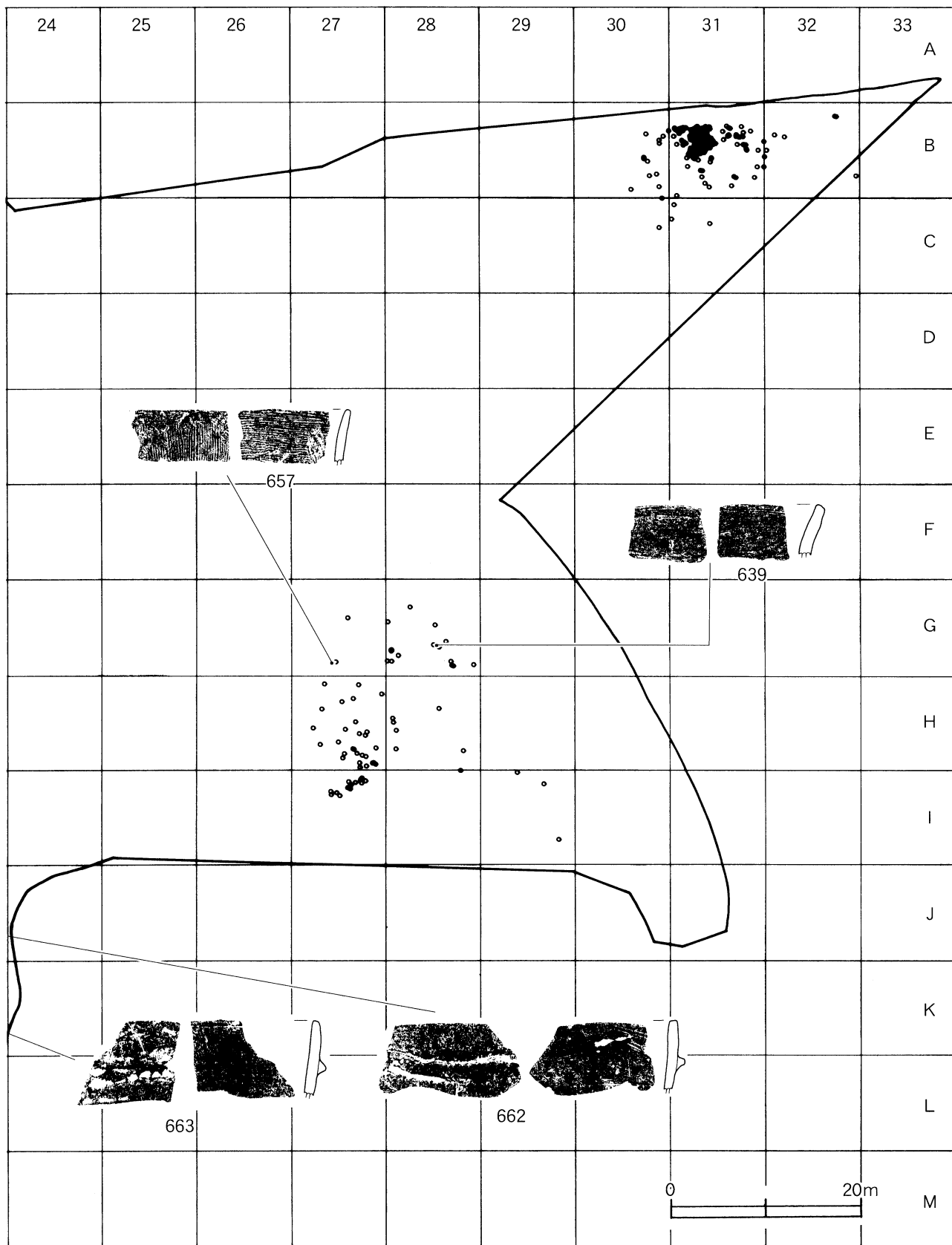




第72図 古墳時代の土器出土状況①



第73図 古墳時代の土器出土状況②



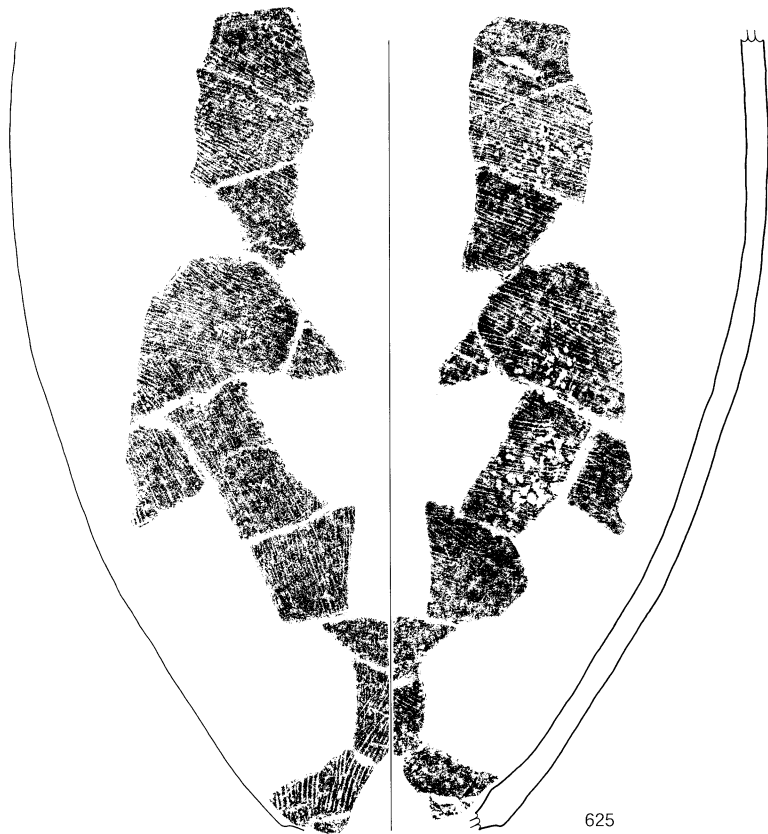
第73図 古墳時代の土器出土状況②



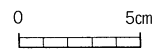
623



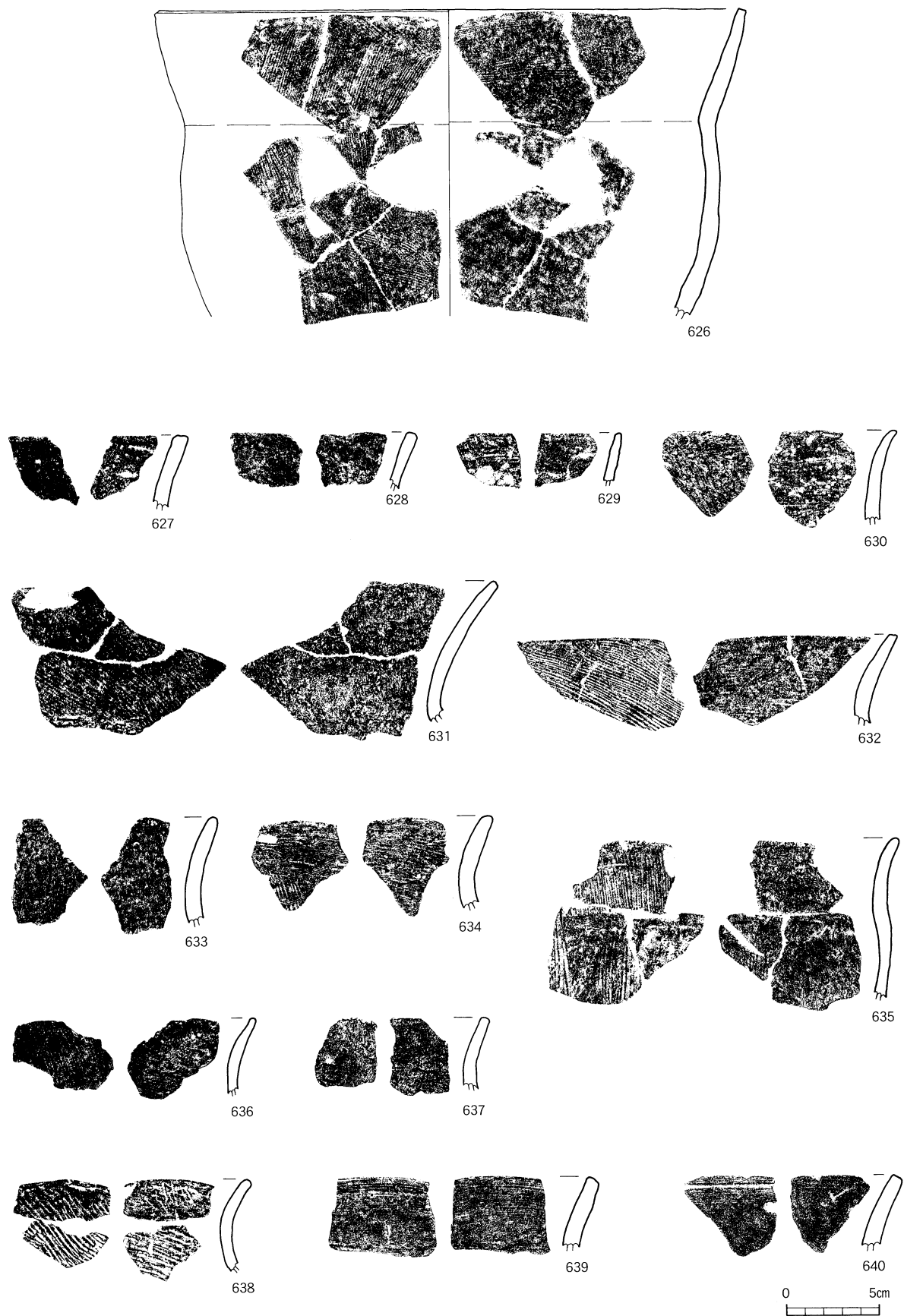
624



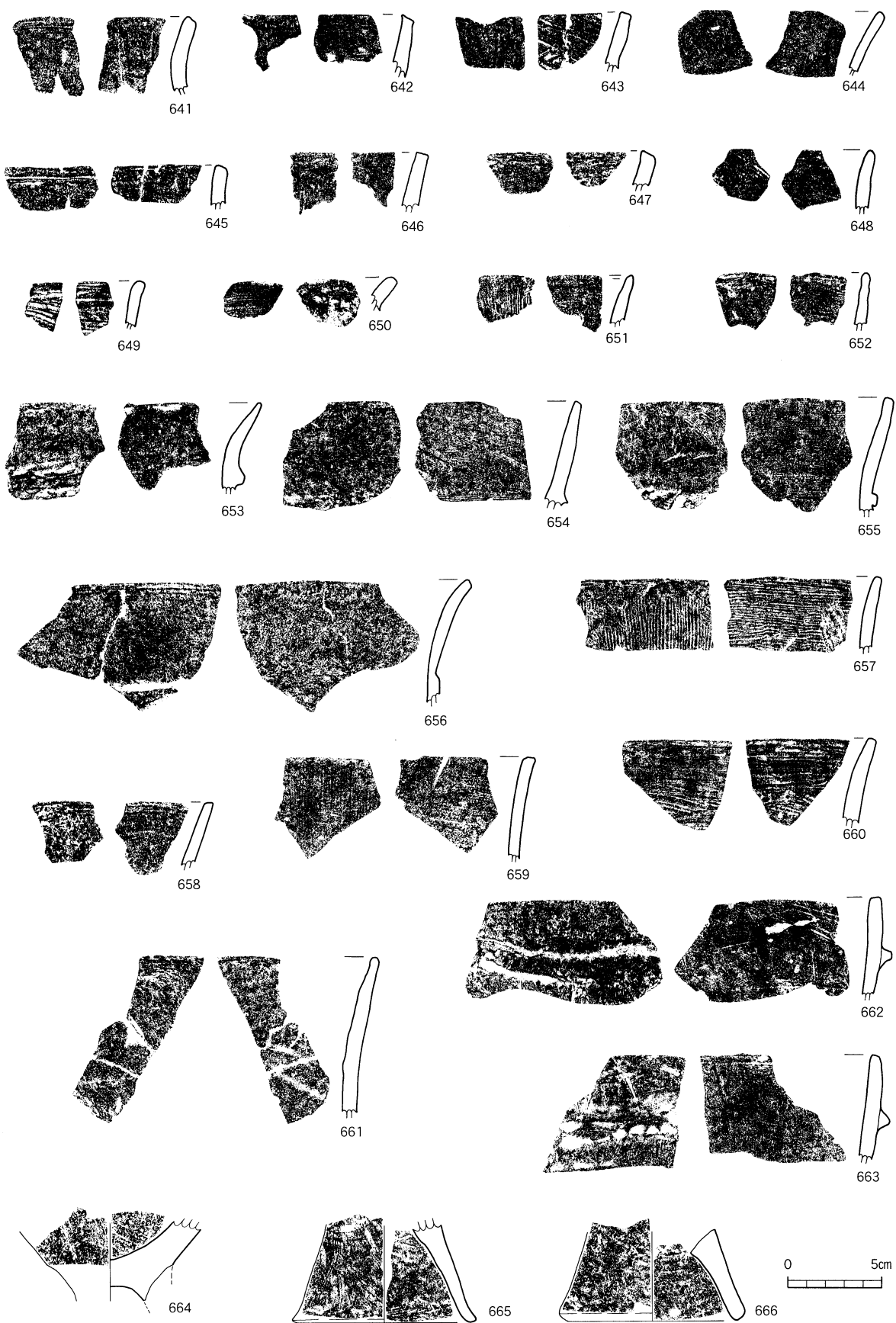
625



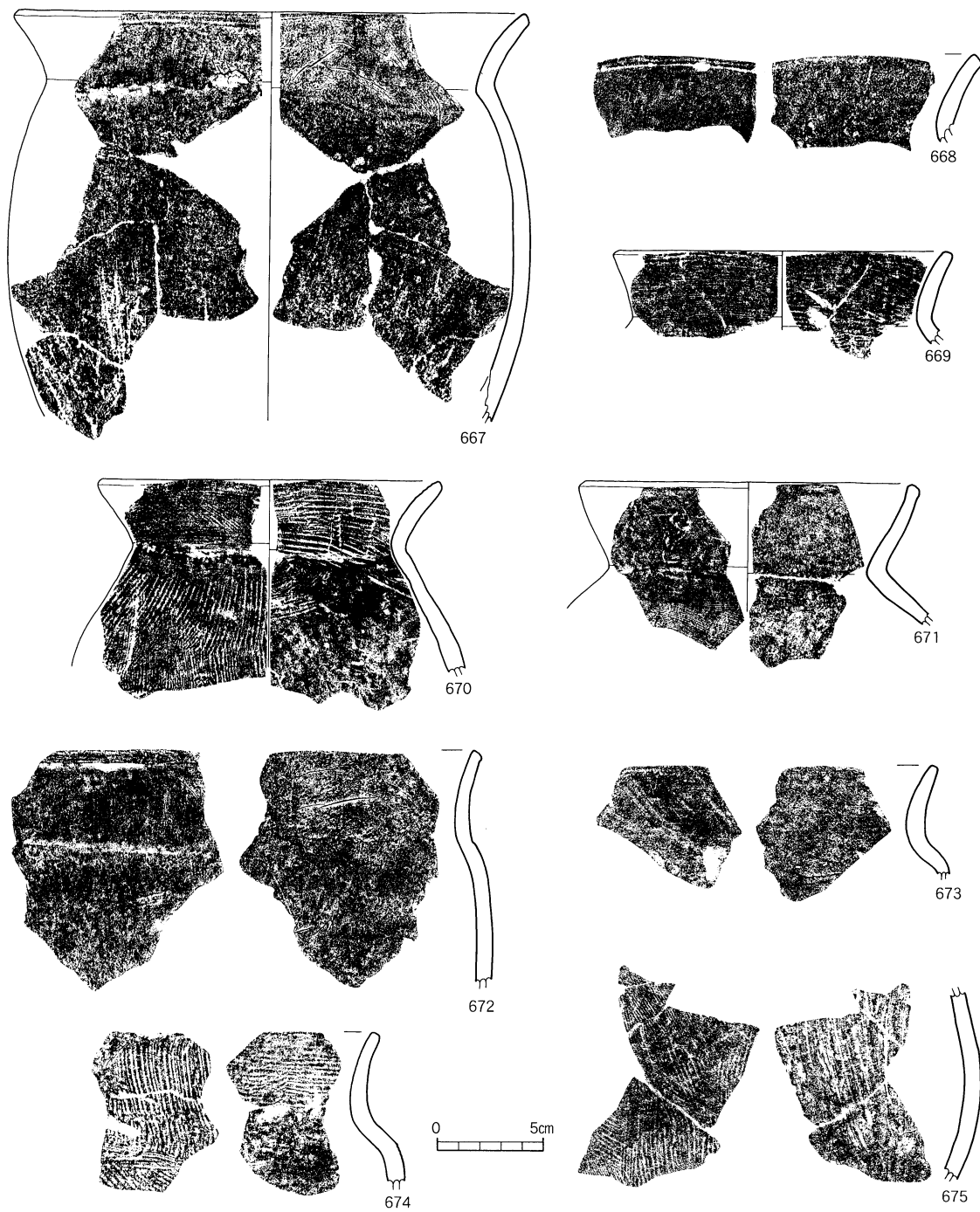
第74図 古墳時代の土器（1）



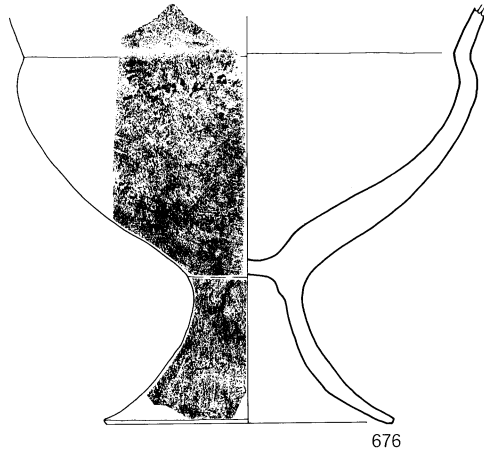
第75図 古墳時代の土器（2）



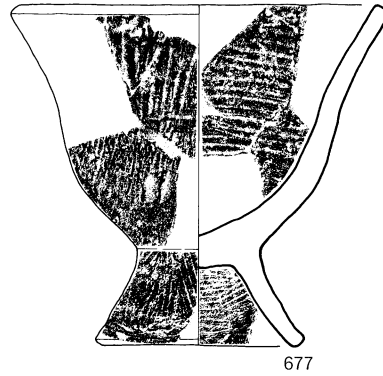
第76図 古墳時代の土器（3）



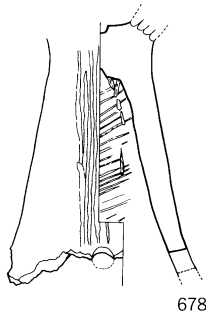
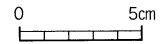
第77図 古墳時代の土器（4）



676



677



678

第78図 古墳時代の土器（5）

番号	区	層	部位	胎土	内面調整	外面調整	色調	焼成	備考	注記番号
623	H14	Ⅲ	口縁～胴部	角閃石,長石,石英	ハケナデ	ハケかきあげ,ハケナデ	赤褐色	良好		1136
624	I15	Ⅲ	口縁～胴部	石英,長石	ハケナデ,スス付着	ハケナデ	淡褐色	良好		1106
625	H15	Ⅲ	口縁～胴部	輝石,長石	ハケナデ	ハケナデ,ナデ	赤褐色	良好	中九州系の技法	1113
626	I14	Ⅲ	口縁～胴部	角閃石,長石,石英	ハケナデ	ハケナデ	赤褐色	良好		1278
627	H15	Ⅲ	口縁部	角閃石,長石,石英	ナデ	ナデ	赤褐色	良好		1160
628		I	口縁部	角閃石,輝石,石英,長石	ナデ	ナデ	淡褐色	良好	表土採集	30056
629	H19	Ⅲ	口縁部	角閃石,石英,長石	ナデ	ハケナデ	淡褐色	普通		796
630	H21	Ⅲ	口縁部	角閃石,石英	ハケナデ	ハケナデ	明褐色	良好	3T一括	30044
631	I17	Ⅲ	口縁～胴部	角閃石,石英,長石	ナデ	ハケナデ	淡褐色	普通		812
632	H14	Ⅲ	口縁部	角閃石,石英,長石	ハケナデ	ハケナデ	黄褐色	良好		979
633	H13	Ⅲ	口縁部	角閃石,長石,石英	ハケナデ,スス付着	ナデ	灰褐色	良好		1385
634	I19	Ⅲ	口縁部	角閃石,石英,長石	ハケナデ	ハケナデ,スス付着	暗褐色	良好		867
635	J17	Ⅲ	口縁～胴部	角閃石,長石,石英	ハケナデ	ハケかきあげ,黒班あり	明黄褐色	良好		489
636	H19	Ⅲ	口縁部	輝石,角閃石,石英,長石	ヘラナデ	ハケナデ	赤褐色	良好		602
637	I17	Ⅲ	口縁部	角閃石,石英	ハケナデ	ナデ	淡褐色	良好		697
638	I14	Ⅲ	口縁部	角閃石,長石,石英	ハケナデ	ハケかきあげ	赤褐色	良好		1717
639	G28	Ⅲ	口縁部	石英,長石	ハケナデ	ハケナデ,スス付着	赤褐色	良好		62
640	H20	Ⅲ	口縁部	角閃石,石英	ハケナデ	ハケナデ	淡褐色	良好		658
641	I13	Ⅲ	口縁部	角閃石,長石	ナデ,スス付着	ハケナデ,黒班あり	黄褐色	良好		1662

第18表 古墳時代の土器観察表（1）



番号	区	層	部位	胎土	内面調整	外面調整	色調	焼成	備考	注記番
642	G28	Ⅲ	口縁部	長石	ハケナデ	ナデ	褐色	良好		22
643	K23	I	口縁部	輝石,長石	ハケナデ	ナデ	赤褐色	普通	表土採集	30059
644	I14	Ⅲ	口縁部	角閃石,長石	ナデ,スス付着	ハケナデ,スス付着	赤褐色	良好		1603
645	I27	Ⅲ	口縁部	角閃石,石英	ナデ		赤褐色	良好		413
646	H27	Ⅳ	口縁部	輝石,石英	ナデ	ナデ,スス付着	褐色	良好		373
647	B31	Ⅲ	口縁部	角閃石,長石,石英	ナデ	ナデ	茶褐色	普通		1997
648	I14	Ⅲ	口縁部	長石,石英	ハケナデ	ハケナデ	褐色	良好		1243
649	H19	Ⅲ	口縁部	輝石,石英,長石	工具ナデ	工具ナデ,スス付着	褐色	良好		833
650		I	口縁部	角閃石,輝石,石英,長石,	ナデ	ハケナデ	褐色	良好	表土採集	30055
651	I12	Ⅲ	口縁部	角閃石,長石,石英	ハケナデ	ハケナデ	褐色	良好		1488
652		I	口縁部	角閃石,長石	ハケナデ	ハケナデ	黒褐色	良	表土採集	30057
653		I	口縁部	角閃石,石英	ハケナデ	ハケナデ	淡茶褐色	良好	表土採集	30042
654	I14	Ⅲ	口縁部	角閃石,石英,長石	ハケナデ,スス付着	ハケナデ,	淡褐色	良好		1615
655	I14	Ⅲ	口縁部	角閃石,石英,長石	ハケナデ	ナデ,スス付着	暗褐色	良好		1703
656	I12	I	口縁部	白色石,石英	ハケナデ,スス付着	ハケナデ	淡褐色	良好	表土採集	30041
657	G27	Ⅳ	口縁部	石英,長石	ハケナデ	ハケナデ,スス付着	明褐色	良好		348
658	I19	Ⅲ	口縁部	角閃石,長石,石英	ハケナデ	ハケナデ	赤褐色	良好		791
659	I17	Ⅲ	口縁部	角閃石,石英	ハケナデ	ハケナデ,黒班あり	明黄褐色	良好		74
660	I13	Ⅲ	口縁部	石英,長石	ハケナデ,スス付着	ハケナデ,スス付着	黄褐色	良好		1578
661	H13	Ⅲ	口部	角閃石,長石,石英	ハケナデ	ハケナデ	赤色	良好		1371
662	I19	Ⅱ	口縁部	石英,長石	ナデ	ハケナデ,突帯	暗赤褐色	良好	積み上げ痕あり	869
663	I19	Ⅲ	口縁部	角閃石,長石	ハケナデ	ハケナデ,突帯,鋸歯状文	赤褐色	良好		87
664	H19	Ⅲ	底部	角閃石,長石,石英	ナデ,スス付着	ナデ	赤褐色	良好		588
665	H15	Ⅲ	脚部	角閃石,長石,石英	ハケナデ	ハケナデ	褐色	良好		1121
666	H14	Ⅲ	脚部	角閃石,長石,石英	ナデ	ナデ	淡褐色	良好		1042
667	H12	Ⅲ	口縁～胴部	長石,角閃石,石英	ハケナデ,スス付着	ナデ,磨き上げ,スス付着	淡褐色	良好	中九州系の技法	1406
668	H12	Ⅲ	口縁部	角閃石,長石	ハケナデ	ハケナデ,スス付着	黄褐色	良好	中九州系の技法	1387
669	H14	Ⅲ	口縁部	輝石,角閃石,長石,石英	ハケナデ,ヘラ削り	ハケナデ	赤褐色	良好	中九州系の技法	1062
670	H13	Ⅲ	口縁～胴部	角閃石,石英,長石	ハケナデ,ヘラ削り	ハケナデ	淡褐色	良好	中九州系の技法	1361
671	G13	Ⅲ	口縁～胴部	角閃石,石英,長石	ハケナデ,ヘラ削り	ハケナデ	黄褐色	良好	中九州系の技法	912
672	I14	Ⅲ	口縁部	角閃石,石英,長石	ハケナデ,ナデ	ハケナデ,ナデ	褐色	良好	中九州系の技法	2
673		I	口縁部	輝石,石英	ハケナデ	ハケナデ	明褐色	良好	表土採集 中九州系の技法	30043
674	G13	Ⅲ	口縁～胴部	角閃石,石英	ハケナデ	ハケナデ	赤褐色	良好	中九州系の技法	917
675	G13	Ⅲ	口縁	輝石,角閃石,長石,石英	ヘラ削り	ハケナデ	赤褐色	良好	中九州系の技法	929
676	I17	Ⅲ	胴部～底部	金雲母,白色石,角閃石,石英	ハケナデ	ハケナデ,黒班あり	淡褐色	良好		815
677	H14	Ⅲ	口縁～底部	輝石,長石,石英	ハケナデ	磨き上げ,黒班あり	褐色	良好	完形	988
678	I17	Ⅲ	脚部	角閃石,長石,石英	ヘラ削り	ナデ	黄褐色	良好		819

第19表 古墳時代の土器観察表(2)

## 第4節 古代～近世の調査

### 1 調査の概要

古代～近世の遺物の包含層はⅡ層である。しかし、Ⅱ層は遺跡の範囲内ではほとんど残存していなかった。かろうじて第3地点の G・H-13 区周辺に部分的に残存しているだけであった。そのごく僅かなⅡ層残存部分から古代～近世の遺物が出土している。表土採集で青磁や薩摩焼等が見つかっていることを考えると、Ⅱ層の遺物包含層が削平を受けていなければもっと多くの遺物が発見されたものと推測される。

### 2 遺物

#### (1) 古代

古代の遺物は、9世紀から10世紀を中心として、土師器、須恵器が出土している。

#### ① 土師器(第79図679～689)

土師器はそのほとんどが第3地点の H・I-13~16 区で出土しており、計 66 点みつまっている。器形によって分類すると、A) 坏(第79図680・681・683～685)、B) 埴(第79図679・682)、C) 甕(第79図686～688)、D) 黒色土器(第79図689)の4種類に大別できる。

##### A) 坏(第79図680・681・683～685)

基本的に平底の土師器を「坏」として分類した。

680は一見須恵器を連想させるような青灰色を呈し、他の土器片と色調が異なる。681は焼成が不良で脆い。683は底部直径(以下底径とよぶ)6.1cm、高台の高さ(以下高台高とよぶ)2.2cmの充実した高台である。焼成が不良で脆い。684は底径が5.5cmの底部である。底部下端中央に指で押さえた痕がみられる。685は底部のみの破片である。底部外面にはヘラ切りの痕が残っている。

底部下端には工具によるケズリの痕と思われる段差がついている。恐らくヘラ切りの後に、仕上げをきれいにするためにヘラ状の工具によるケズリを加えたものと思われる。このケズリの後でさらにナデで仕上げている。この調整法は大隅地方で特徴的なものであり、今後比較検討する必要がある。

##### B) 埴(第79図679・682)

高台のついている土師器を「埴」として分類した。679は口縁部から底部までの破片が出土し、完形品として復元することができた。器形は底部より直線的に立ち上がり、口唇部で舌状にすばまる。口縁直径(以下口径とよぶ)が12.7cm、底直径が6.5cm、高台の高さが1.1cmとなる。器高は高い部分が6.0cm、低い部分が5.1cmと歪んだ器形をしている。内面はていねいなナデによる仕上げを施しているが、外面は雑である。内面をみると茶色の粒が混入しており、この粒が右から左に流れていることから時計回りに成形したことがわかる。高台と埴部との境にはヘラで削った段差がみられ、接合痕を消そうとしたことがわかる。

682は底部の破片で、高台は外側に開いている。内外面ともにていねいな仕上げであり、胎土・焼成ともに良好である。底部内面中心に指で押さえた痕もみられる。

##### C) 甕(第79図686～688)

686～688は口縁部の破片である。口縁部がくの字状に外反し、長胴形の胴部をもち、底部は不明である。3点とも胎土は砂粒を含み粗い。686は口縁部を外側に張り出している。687・688は胎土

・色調・調整などから同一個体であると思われ、口唇部は舌状にすぼまる。686～688は3点とも横位のハケメを施している。686の内面は口縁部はていねいなハケメだが、胴部は粗いへら仕上げである。

## ②黒色土器(第79図689)

689は口縁直径が19.8cmの口縁部の破片であり、器形は不明。内外面ともにへらミガキされ、特に内面はていねいなへらミガキが施され、光沢のある黒色を呈する。黒色部は外面の口縁部から肩部までのびている。

## ③須恵器(第79図690)

須恵器は H-13・14 区で5点出土している。そのうち口縁部から底部まで接合できた1点を図示した。

690 は坏であり、口縁部から底部までの破片が揃っていたので完形品として復元できた。口縁直径は 12.7cm、器高は 4.3cm、底径が 8.6cm、高台の高さが 0.45cm である。器形は高台から弯曲して立ち上がり、緩やかな外開きになる。わずかに外反する低い付け高台をもつ。色調は灰色で内外面ともヨコナデ調整している。

## ④その他(第79図691・692)

691 は瓦器質土器壺の口縁部の破片である。復元した口径は 14.6cm で灰色を呈する。外面にはスタンプ痕ではないかと思われる小さな円の文様が施されている。内外面ともにハケメが施されている。

692 は口縁部の破片であり、時期については詳細不明である。外面にススが付着している。

### (2)中世(第79図693～698)

12世紀から16世紀にかけての青磁の破片6点が出土した。第3地点の北側でかろうじて残存していたⅡ層から出土した。

693・694は12世紀後半～13世紀前半の中国宋代の青磁碗である。693は復元口径16.5cmで内面に劃花文が描かれた龍泉窯系の青磁碗である。細かい貫入が内外面にみられる。694は復元口径が14cmである。色調が灰白色を呈しているが、同安窯系と思われる青磁皿である。体部と底部の間に段がついており、外面には釉薬がかけられていない部分がみられる。

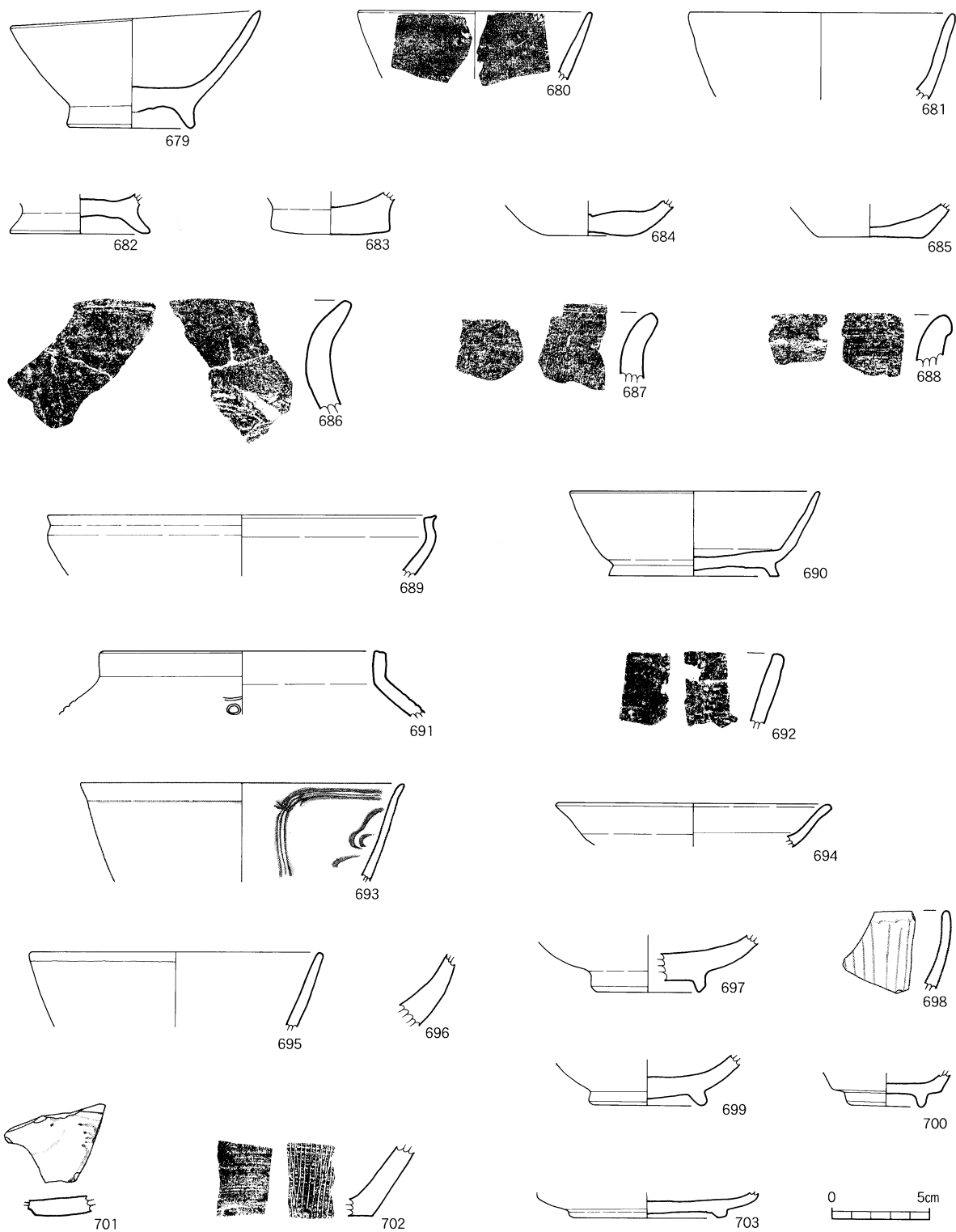
695～697は14世紀～15世紀の中国明代の龍泉窯系青磁である。695は復元口径が15cmで、内外面共に粗い貫入が入っている。696は厚い器壁であり、器形は不明。697は碗の底部で、復元底径は5.8cmである。698は16世紀前半の細蓮弁文碗である。

### (3)近世(第79図699～703)

近世の遺物が5点出土しているが、そのうち4点が表面採集となっている。

699は器形・時期等が不明である。700・701は肥前系の陶器である。701は外面に高台と間違えそうな粘土紐が付着している。窯で陶器を重ねた際に付いたものと考えられる。

702・703は薩摩焼である。702は播鉢の破片である。703は皿の底部片であり、底径が8cmである。貝目痕が外面に1か所認められる。窯詰の際に付いたと思われるものである。



第79図 古代～近世の遺物

番号	区	層	時代	型式	部位	胎土	内面調整	外面調整	色調	焼成	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	高台高 (cm)	備考	注記番号
679	I14	Ⅲ	古代	土師器	完形	角閃石,長石	ナデ	ナデ	淡褐色	良好	12.7	6.00	6.50	1.10	完形品	1083
680	H14	Ⅲ	古代	土師器	口縁部	角閃石,	ハケナデ	ハケナデ	青灰色	良好	12.0					1015
681		I	古代	土師器	口縁部	長石	ナデ	ナデ	淡褐色	不良	13.3				表土採集	30063
682	G20	Ⅱ	古代	土師器	底部	角閃石,長石	ヘラナデ	ナデ	黄褐色	良好			7.15	0.90	表土採集	30048
683		I	古代	土師器	底部	輝石,長石	ナデ	ナデ	淡褐色	不良			6.10	2.20	表土採集	30062
684	J13	Ⅲ	古代	土師器	底部	角閃石,長石		ナデ	淡褐色	良好			5.60			1648
685	G14	Ⅱ	古代	土師器	底部	角閃石,石英,長石	ナデ	ヘラケズリ	淡褐色	良好			5.50			1175
686	I17	Ⅲ	古代	土師器	口縁部	石英	ハケナデ	ハケナデ,スス付着	明褐色	良好						555
687	I17	Ⅲ	古代	土師器	口縁部	白色粒,角閃石,石英,長石	ハケナデ	ハケナデ	黒褐色	良好						506
688	H14	Ⅲ	古代	土師器	口縁部	角閃石,石英,長石	ハケナデ	ハケナデ	赤褐色	良好						1064
689	I17	I	古代	土師器	底部	角閃石,長石	研磨(内黒)	研磨	淡褐色	良好	19.8				表土採集	30049
690	H13	Ⅱ	古代	須恵器	完形		ナデ	ナデ	灰褐色	良好	12.7	4.30	8.60	0.45	完形品	1191
691		I	古代	瓦器質土器	口縁部	長石	ヘラナデ	ハケナデ,沈線	灰褐色	良好	14.6				表土採集	30050
692	I17	Ⅲ	古代		口縁部		ナデ	ミガキ,スス付着	黄褐色	良好					白粘土	692
693	H14	Ⅲ	中世	青磁	口縁部				灰白		16.5				龍泉窯系	968
694	I12	I	中世	白磁	口縁部				灰白		14.0				表土採集龍泉窯系	30068
695	I14	Ⅱ	中世	青磁	口縁部				オリーブ灰		15.0				龍泉窯系	1084
696	H21	I	中世	青磁	胴部				灰白						表土採集龍泉窯系	30067
697	I12	Ⅱ	中世	青磁	底部				灰白				5.80	0.60	龍泉窯系	30064
698		I	中世	青磁	口縁部				オリーブ灰			3.90			表土採集龍泉窯系	30066
699		I	近世	不明	底部				灰オリーブ				6.00	0.55	表土採集肥前系	30072
700	H13	I	近世	肥前系陶器	底部				浅黄				4.20	0.70	表土採集	30071
701		I	近世	肥前系陶器	底部				明黄褐						表土採集	30069
702	H20	Ⅲ	近世	薩摩焼	胴部				暗赤褐							666
703	I12	I	近世	薩摩焼	底部				灰オリーブ				8.00	0.30	表土採集	30065

第20表 古代～近世の遺物観察表

## 第Ⅵ章 まとめ

### 旧石器時代ナイフ形文化期

南九州のナイフ形石器文化期後半段階の編年については木崎（木崎康弘 1988 ほか）、宮田（宮田栄二 1995 ほか）、桑波田（桑波田武志 1997）などがあり、最近の発掘調査の成果から、さらに詳細な検討も可能になりつつある。今里遺跡における、編年上の指標としうる出土石器としては剥片尖頭器、三稜尖頭器、狸谷型を含む切り出し型ナイフ形石器、台形石器などがあり、その形態的特長から概括的にはほぼナイフ形石器文化期後半段階、一般に約 24,000 年前とされる AT 降灰以降の様相とみなされるが、出土遺物相互の時期的一括性が不明確であり、遺物組成に基づく編年上の時期比定は行えなかった。出土石器の中で注視すべき資料として 1 の剥片尖頭器が上げられる。その特徴は吉留（吉留秀敏 1997）が剥片尖頭器の機能・用法・装着法等について検討した中で、基部形態から『Type-B』と分類した、やや尖り気味細身でかつ打面の残存面が狭小となる基部を持つことで、九州内で一定の出土例がみられるものの、南九州ではあまり多くはみられない。また 14 は当該期の南九州にはまれな黒色良質な腰岳産とみられる黒曜石を素材とする切り出し型のナイフ形石器で、石材交流の面からも注目される資料である。

### 旧石器時代細石刃文化期

今里遺跡では比較的小規模な調査にもかかわらず、全体で 101 点と比較的多くの細石刃核が出土している。石材は約 8 割が樋脇町上半鼻・市来町平木場産に比定される風化の著しい漆黒色の黒曜石で、残存する礫皮面から円礫素材を推定できるものが含まれる。次いで 13 点が佐賀県腰岳産に類する黒色良質の黒曜石で、他に針尾島産とみられる灰黒色不透明の黒曜石、桑ノ木津留産などが数点ずつあるが、形態及び技術に基づく分類形式ごととの明確な相関は認めがたい。

出土した細石刃核には技術・形態的には明らかな差異が認められるが、一部上位の縄文時代等の遺物包含層から出土したものを除き大半の資料がⅥ層出土であり、層位あるいはブロック単位での検討に代えて、出土資料の形態及び技術的特徴に基づき分類した。今回、細石刃核残核における素材や整形技法・打面調整に加え、新たに下縁・背面の調整に注目しておこなった分類に従い、編年の位置づけにふれてみたい。

A 1 類は位牌塔型（下川 1982 下川・荻原 1983）に比定されるもので、西北九州では単独に組成する場合、編年上細石刃文化の最古段階に位置づける見解（川道 1997）がある。長崎県茶園遺跡の層位的出土例からも土器出現期以前のものと考えられており、県内においても最古段階に位置づけられる西丸尾遺跡出土資料に関連資料が存するほか、近年、後期旧石器時代の重層的出土例で注目されている財部町耳取遺跡（長野 2000）でも細石刃文化期下層の X II 層から纏まった出土例があり、本遺跡出土資料の位置づけを考える上で重要である。

B 類は従来 A 1 類を含めほぼ狭義の野岳・休場型とされてきたものであり、B 類の一部に細石刃核整形技法上 A 1 類と関連性をもつものが含まれていることから、今里遺跡出土細石刃核の一部は位牌塔型を含む野岳・休場型の古段階〔南九州 I 期〕（宮田 1996 桑波田 1997 ほか）の様相を示すものとする。

E類については形態、打面及び下縁調整の技術的特長、各1点ずつではあるが縦長スポール・横長スポールが出土していることから、いわゆる西海技法の波及後の段階に位置づけられ、泉福寺10層類型とされる相対する作業面をもつC類の出土を含め、泉福寺洞穴豆粒文土器段階との関係が伺われる。また、分割礫素材のD類及び板状剥片を素材のF3類についても下縁調整ならびに打面調整に西海技法との関連が伺われるものが含まれており、これらを含め土器出現期以降の新規の様相に位置づけることができ、今里遺跡における細石刃文化は少なくとも異なる2段階の所産であるとみられる。

また、従来南九州Ⅱ期に出現するとされる船野型細石刃核、Ⅲ期の地域的特長とされる加治屋園型がみられないことも特筆すべき点であり、今後南九州の豊富な資料とあわせさらに検討をすすめる必要がある。

### 縄文時代

縄文時代早期の土器としては、ほぼ完形に復元される岩本式段階と考えられる土器、前平式土器がそれぞれ単独に出土したほか、手向式とみられる土器片が出土した。そのほか、前期の轟式土器、深浦式土器、中期の春日式土器、後期の出水式土器、市来式土器、西平式土器の土器片が各少量ずつ出土している。この中で出水式土器は複数の地点で出土しており、九州西岸を中心に分布する特徴的な分布に包括される資料である。また縄文時代晩期相当の土器は上加世田式土器、入佐式土器、黒川式土器の土器片の出土が見られたが、縄文時代の各期を通じて、少量の土器が出土することは、遺跡形成および遺跡利用の観点からも興味深いあり方といえよう。

縄文時代の石器においては、石鏃が土器量に対しやや多く出土した点が上げられるが、土器との共伴関係については不明確であり、時期的比定や組成について検討するに至らなかった。

### 古墳時代

今里遺跡の古墳時代の出土土器を見ると、壺形土器と推定される破片が1点もない。口縁部等の特徴ある土器片を再検討してみたが、壺形土器の器形と思える土器片は見つけられなかった。甕形土器と壺形土器は共伴することが多く、周辺遺跡の出土土器の組成をみても甕形土器の次に壺形土器の出土が多い。今里遺跡から直線距離で約2.9km離れた場所にある池之頭遺跡では古墳時代の土器が多数出土しているが、甕形土器と同様に壺形土器も多数出土している。また、少量出土した布留式土器の影響を受けたと考えられる土器は、形態や製作技術において類似する点があるものの、器壁が厚いという特徴を持っている。これは県内の多くの類例に認められる傾向である。

今里遺跡では古墳時代の日常使用される土器が多量に出土しているが、それに伴う遺構が検出されていない。今里遺跡は圃場整備事業により、遺物包含層が広範囲に削られていた。特に第3地点においてはかろうじて削平を免れた部分から多数の土器片が出土しており、削平された部分に住居域があった可能性もある。

(下記以外の参考文献については、本文中を参照)

### 参考文献

- 木崎康弘 1988 「九州ナイフ形石器文化の研究—その編年と展開—」『旧石器考古学』第37号
- 桑波田武志・宮田栄二 1997 「鹿児島県における旧石器研究の現状と課題」『鹿児島考古』第31号
- 宮田栄二 1995 「始良火山噴火後のナイフ形石器文化—南九州の石器文化—」『第20回九州旧石器文化研究会資料』
- 吉留秀敏 1997 『—AT降灰後の九州ナイフ形石器文化に観る尖頭器的様相—剥片尖頭器』『九州旧石器』第3号

# 版 圖





遺跡遠景  
(遠見番山より)



第0地点全景



第1地点全景



第1地点  
H-29区  
東壁土層断面



第0地点 B-31区 土層断面



第1地点 H-29区 土層断面



第3地点 H-10・11区 土層断面



第2地点 H-18区 土層断面



第3地点 H-13区  
1号集石検出状況



第0地点 B-30区  
2号集石検出状況



第0地点 B-30区  
3号集石検出状況



第0地点 C-31区  
4号集石検出状況



第0地点 C-30区  
尖頭器出土状況



第3地点 G-11区  
岩本式土器出土状況



第0地点 B-31区  
石鏃出土状況



第2地点 I-17区  
成川式土器出土状況



第0地点  
発掘作業状況



第1地点 H・G-29区  
発掘作業状況



第0地点  
トータルステーションシステムによる  
遺物出土状況実測



第0地点 C-30区  
旧石器時代遺物出土状況



第0地点 B-31区周辺  
縄文時代遺物出土状況



第1地点 H・G-29区  
旧石器時代遺物出土状況



第1地点 G-28区  
縄文時代遺物出土状況



第2地点  
縄文時代遺物出土状況

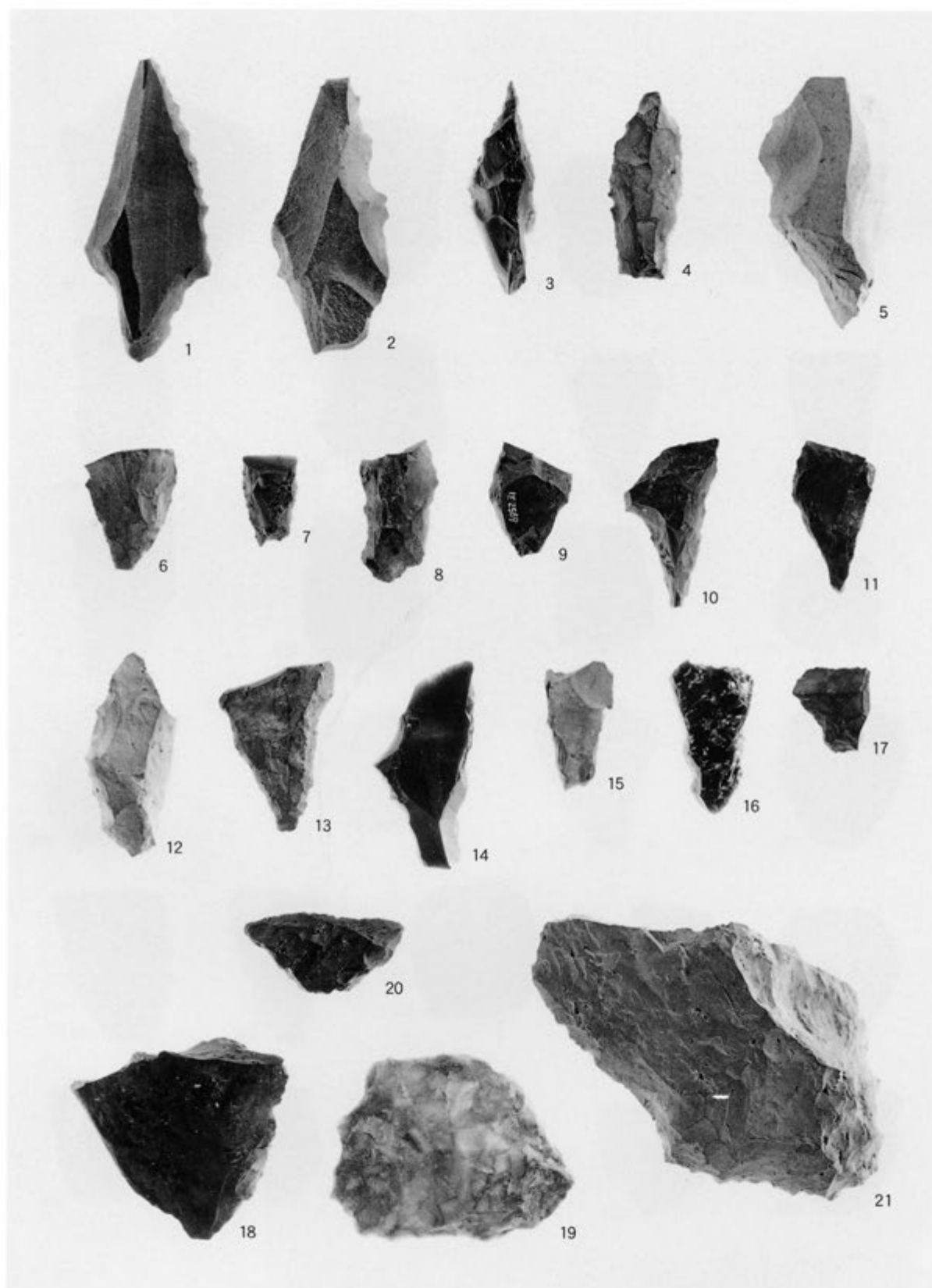


第3地点  
Ⅱ層遺物出土状況

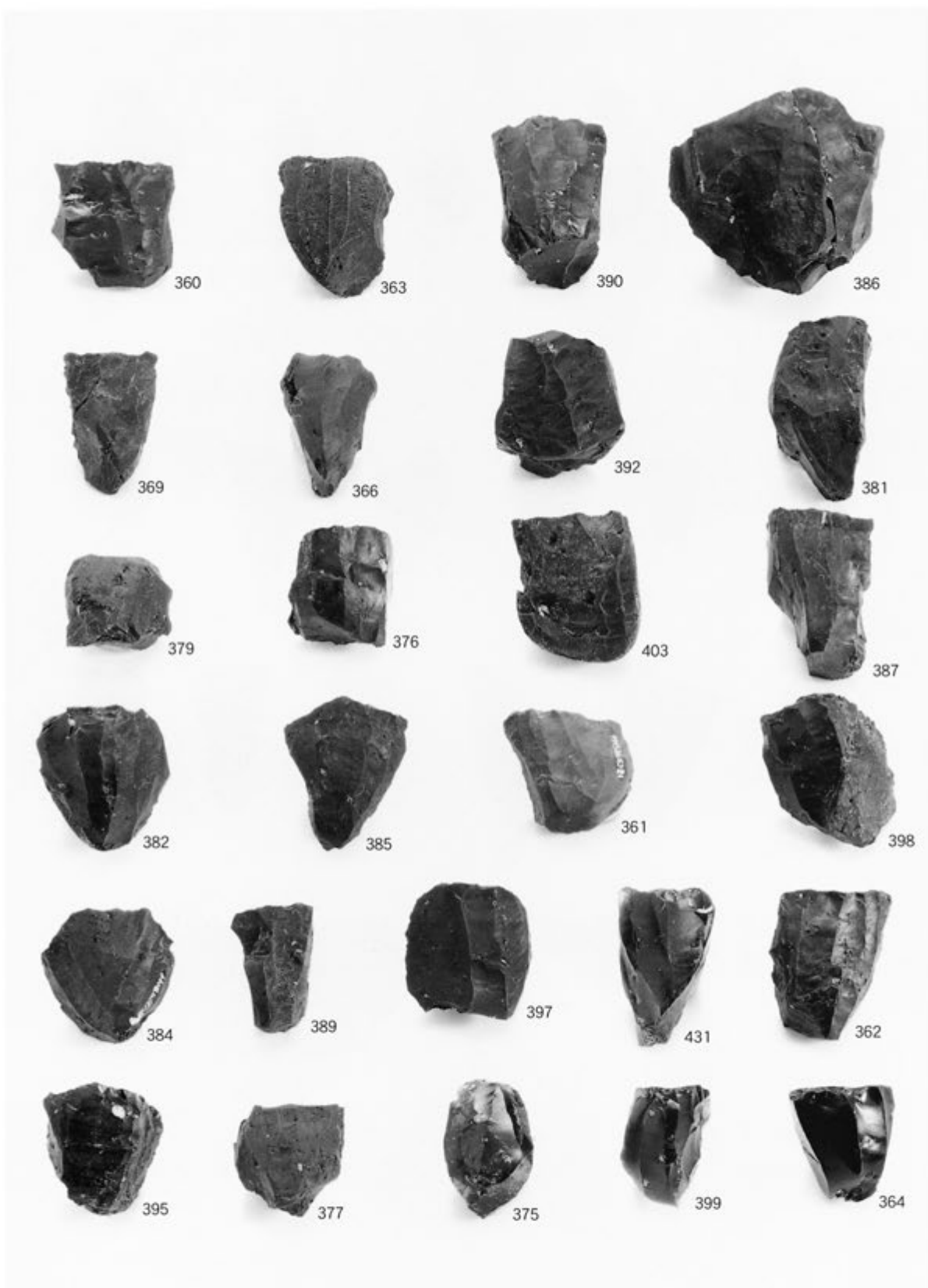


第3地点 H-14・15区  
シラス露出状況

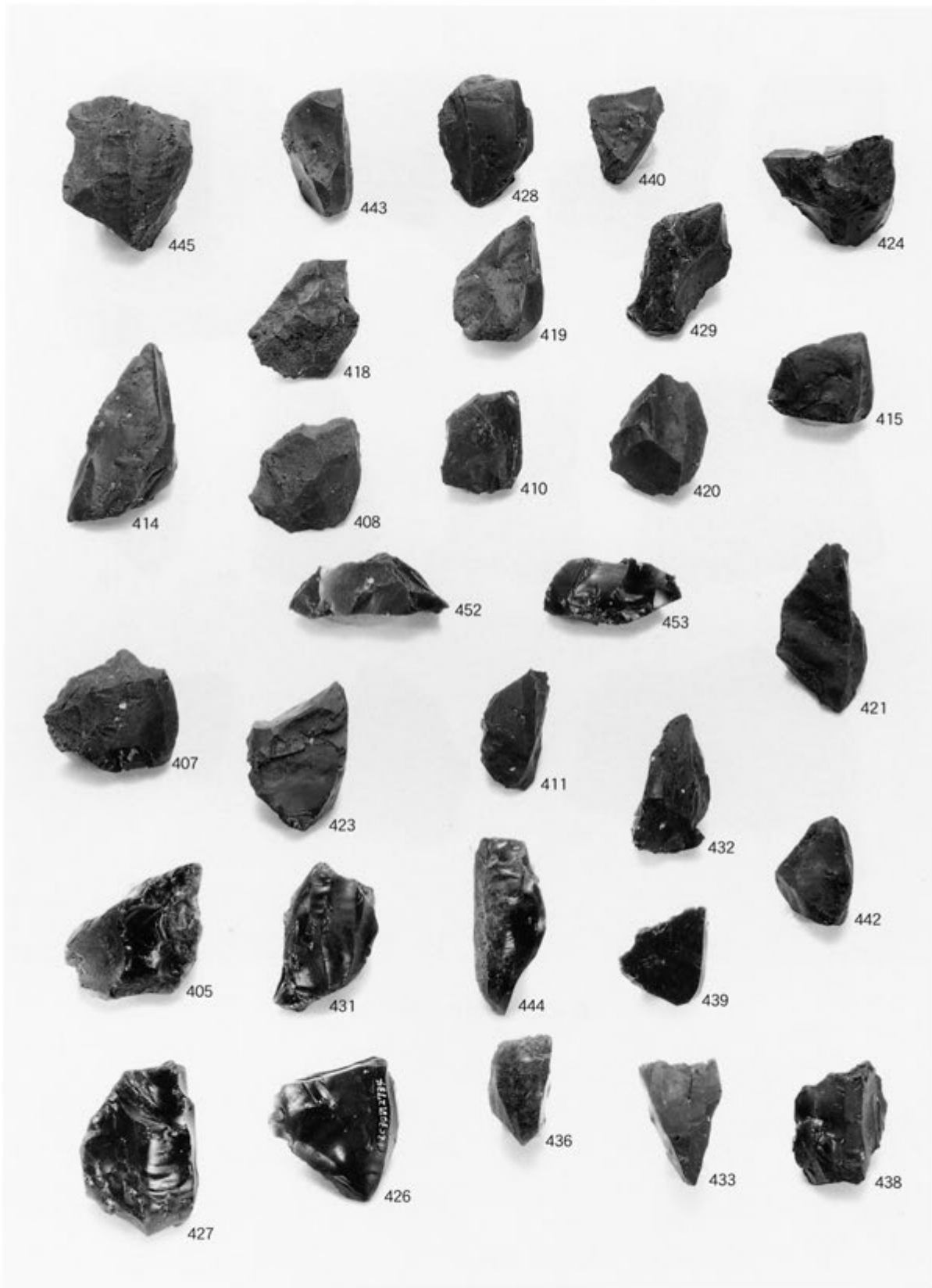




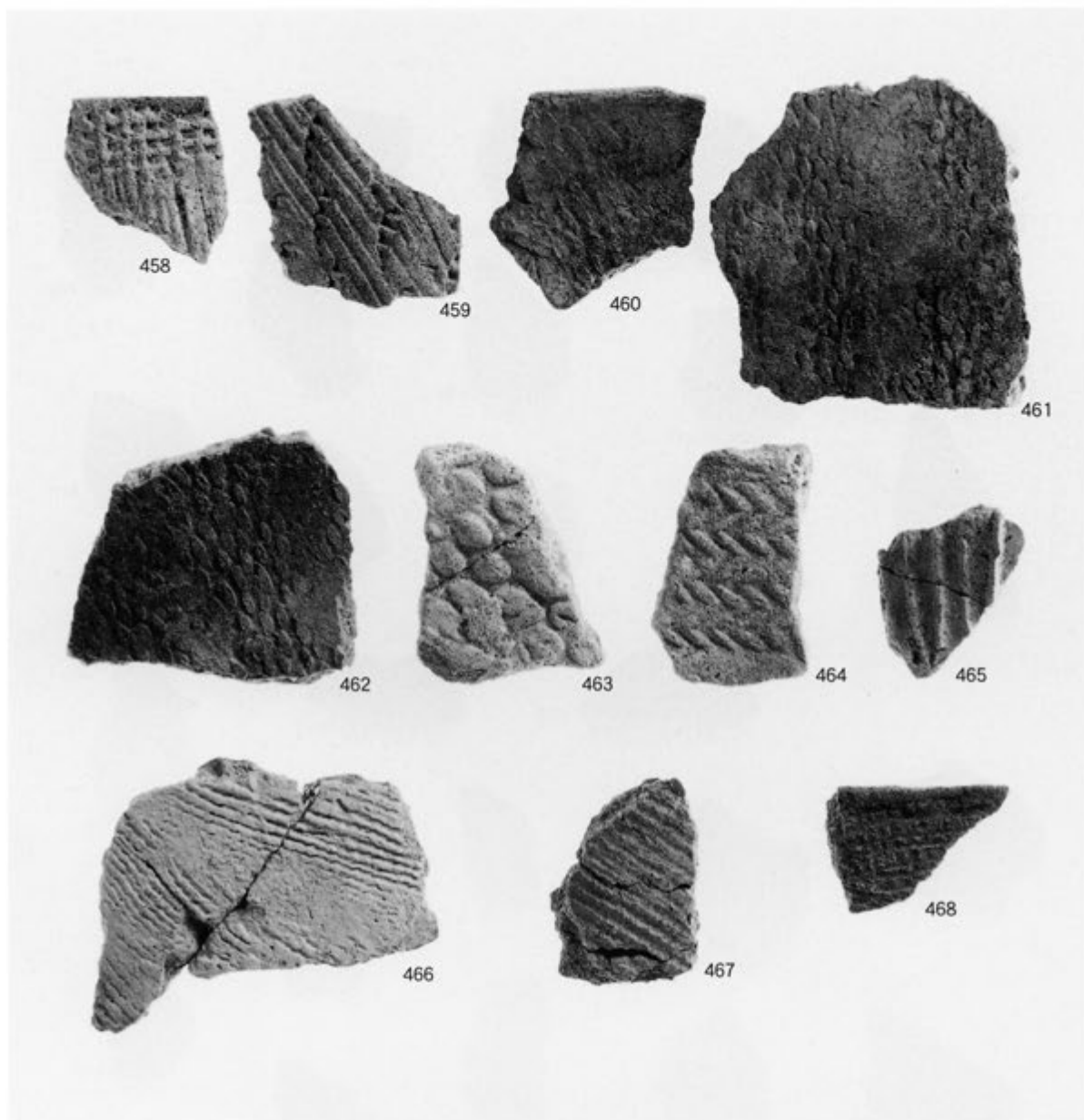
旧石器時代の石器（尖頭器・ナイフ形石器・台形石器・スクレイパー）



細石刃核 (1)



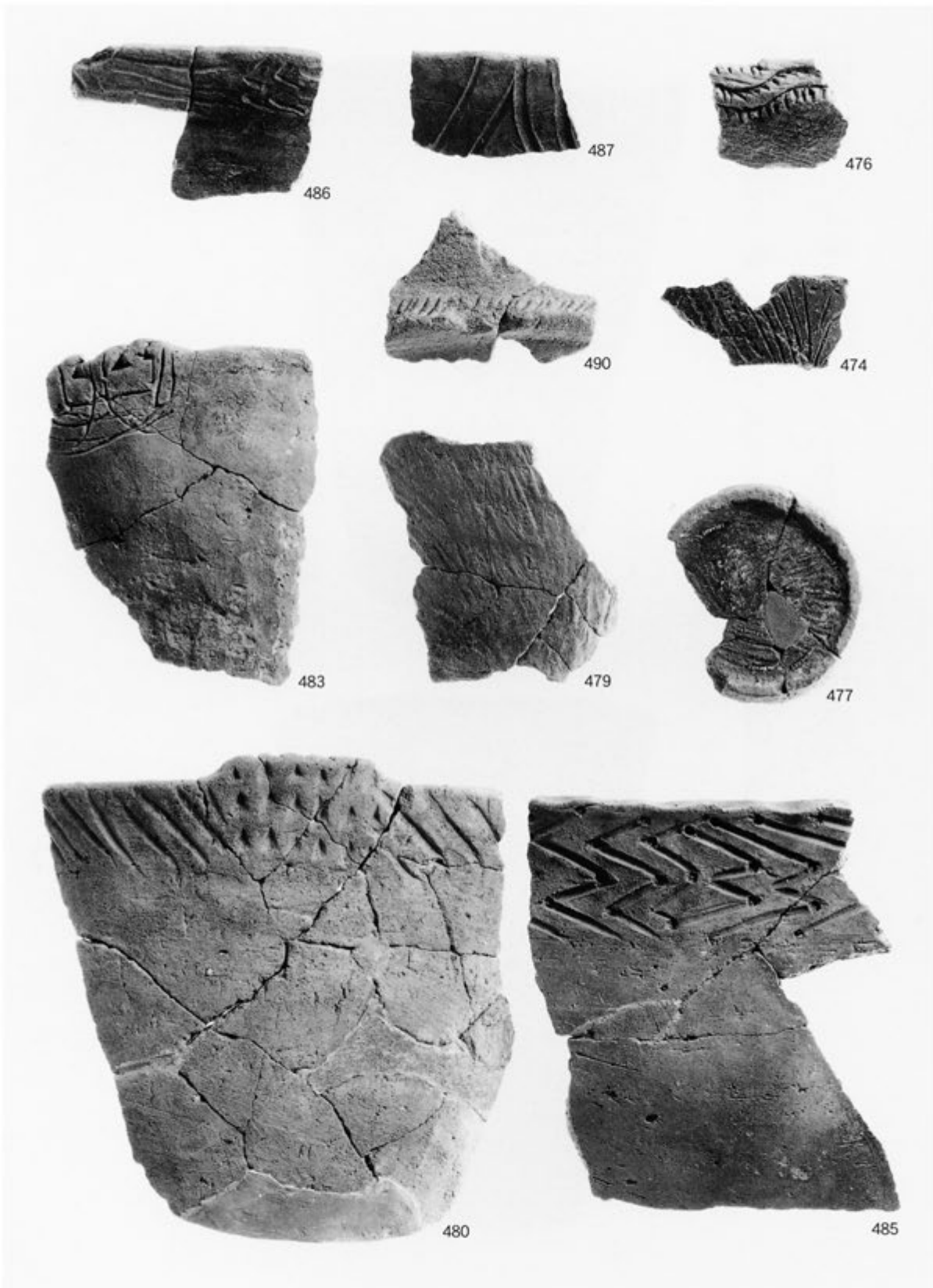
細石刃核 (2)



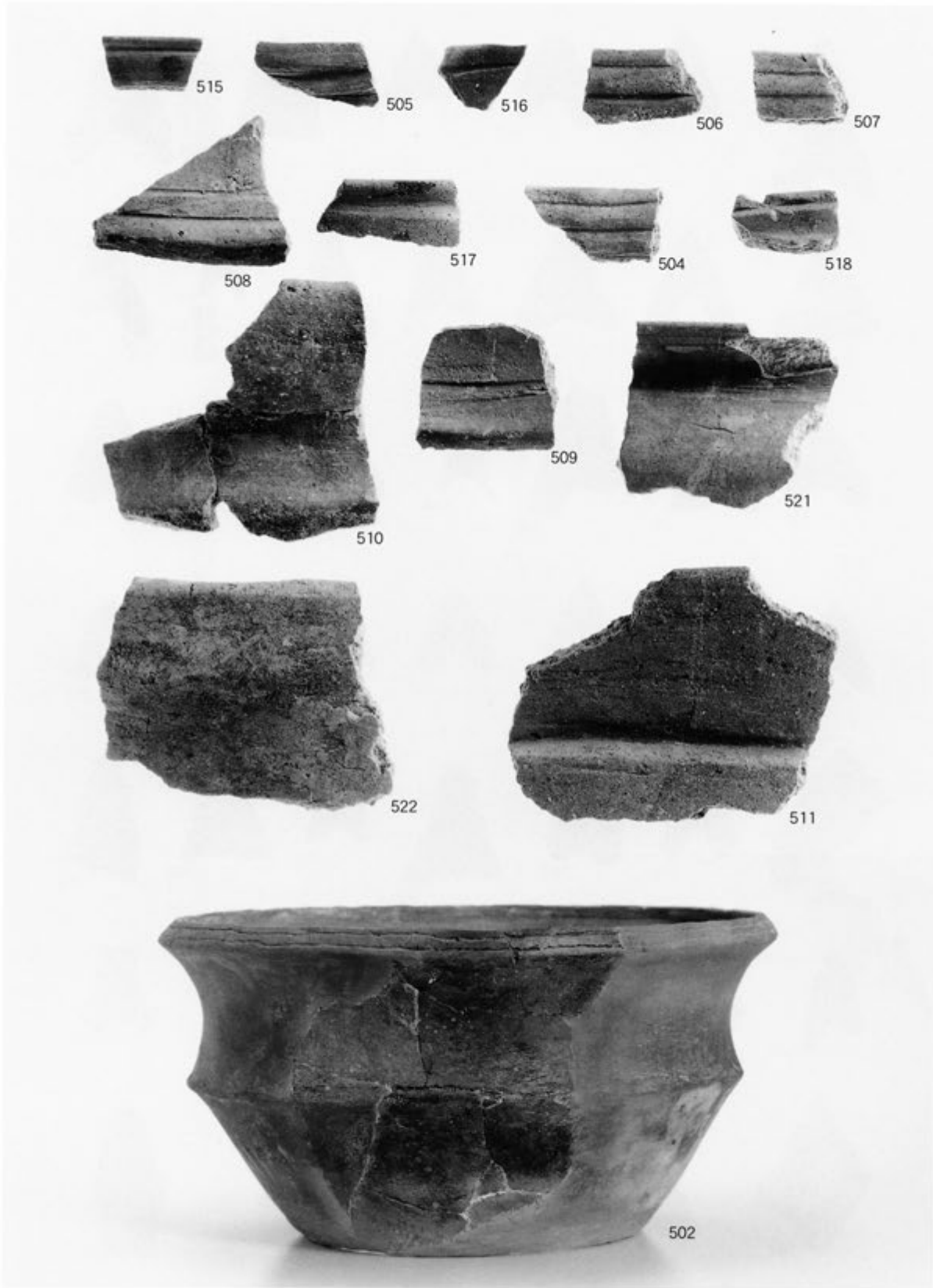
縄文時代早期の土器（1）



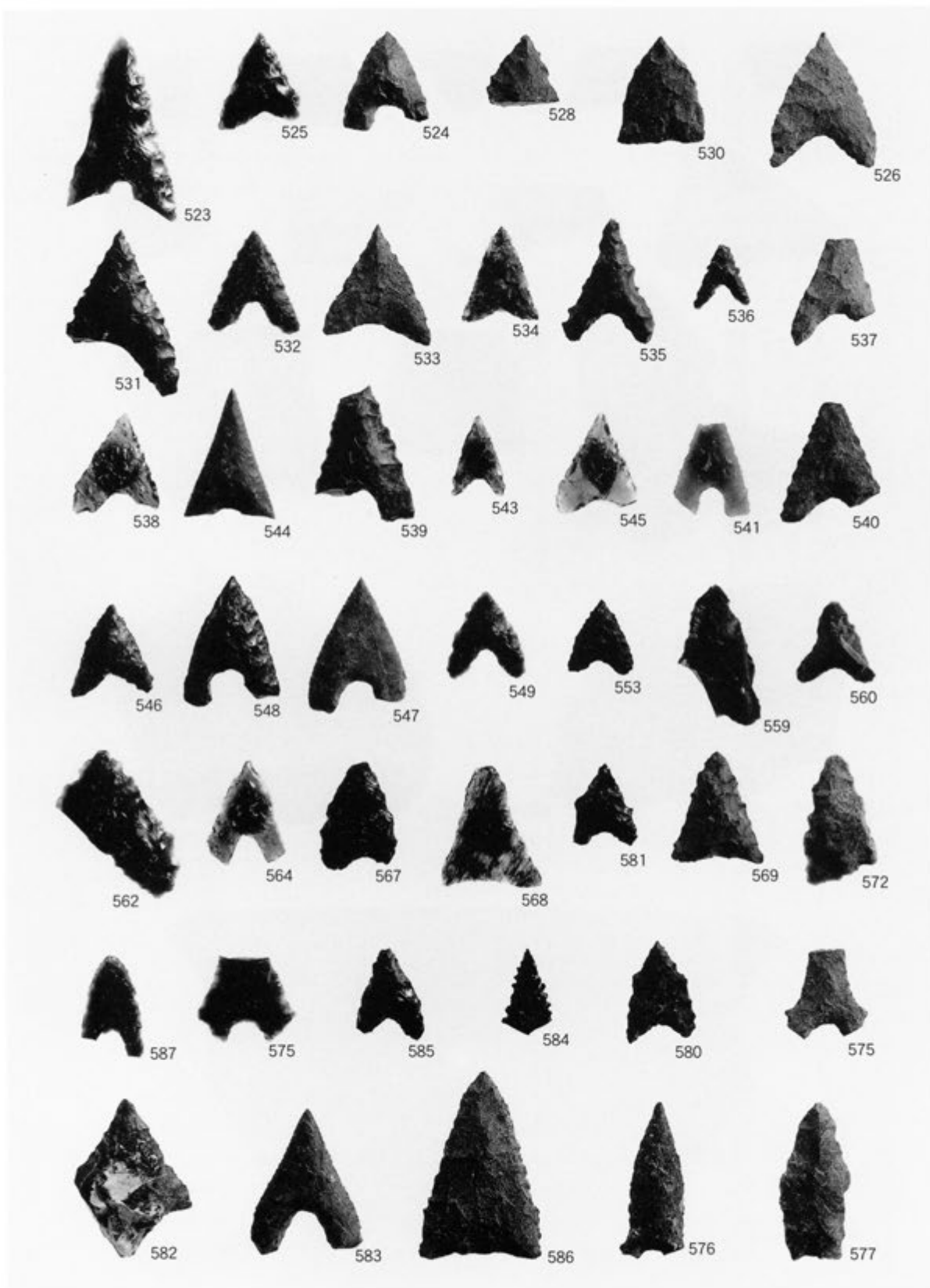
縄文時代早期の土器（2）



縄文時代中期・後期の土器

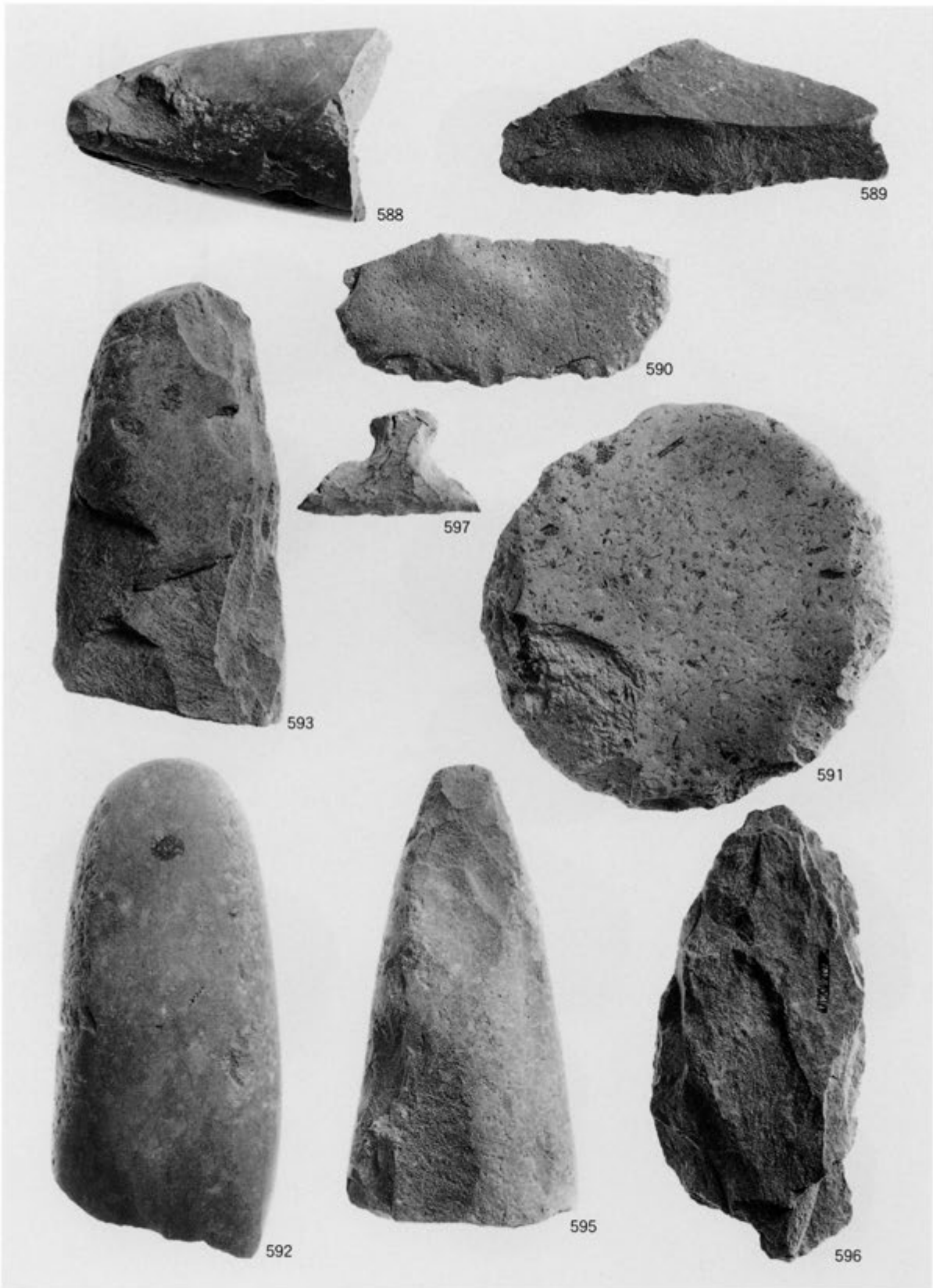


縄文時代晩期の土器



縄文時代の石鏃

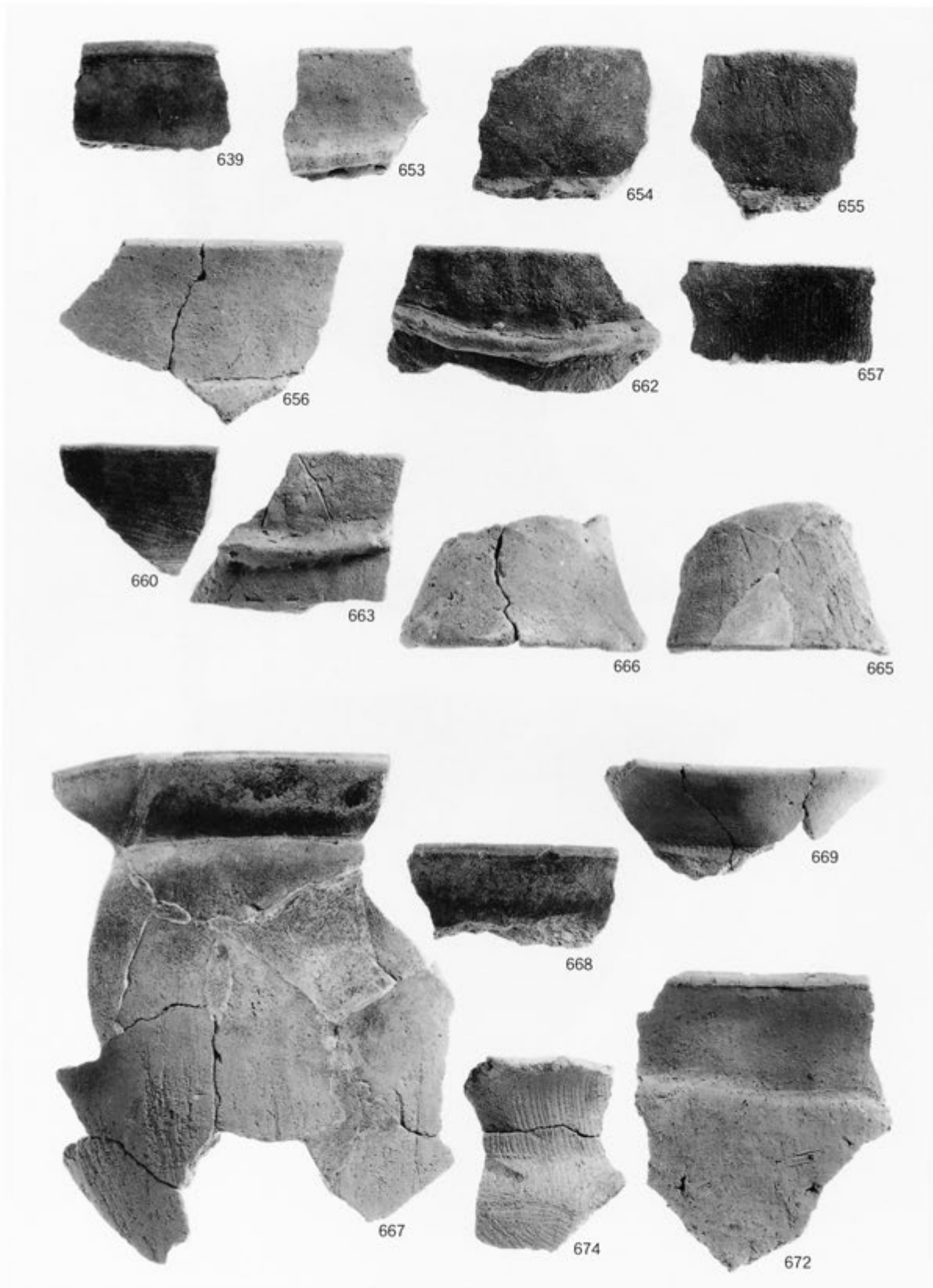




縄文時代の石器 (石斧・スクレイパー・石匙)



縄文時代の石器（磨石・敲石・凹石・石皿）



古墳時代の土器（1）



古墳時代の土器（2）



鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(33)

いま ざと  
今 里 遺 跡

発 行 2002年9月

編 集 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒 899-4461 鹿児島県国分市上之段 1175 番地 1

TEL (0995) 48-5811

印 刷 株式会社 トライ社

〒 892-0834 鹿児島市南林寺町 12-16

TEL (099) 226-0815